

仙台高等専門学校
Change 100
Future

高専制度創設50周年記念誌

仙台高等専門学校 Change 100 + Future

仙台高等専門学校
Change 100
Future

高専制度創設50周年記念誌

宮城工業高等専門学校

1963年（昭和38年）開校

【学 科】（入学定員200名）

- 機械工学科
- 電気工学科
- 建築学科
- 材料工学科
- 情報デザイン学科

【専攻科】（入学定員20名）

- 生産システム工学専攻
- 建築・情報デザイン学専攻

● 地域共同テクノセンター

仙台電波工業高等専門学校

1971年（昭和46年）開校

【学 科】（入学定員160名）

- 情報通信工学科
- 電子工学科
- 電子制御工学科
- 情報工学科

【専攻科】（入学定員16名）

- 電子システム工学専攻
- 情報システム工学専攻

● 地域連携テクノセンター

高度化再編

仙台高等専門学校

2009年（平成21年）開校

【学 科】（入学定員280名）

- 機械システム工学科
- 電気システム工学科
- マテリアル環境工学科
- 建築デザイン学科
- 知能エレクトロニクス工学科
- 情報システム工学科
- 情報ネットワーク工学科

【専攻科】（入学定員70名）

- 生産システムデザイン工学専攻
生産システム工学コース
建築デザイン学コース
情報デザイン学コース
- 情報電子システム工学専攻
情報電子システム工学コース

● 地域人材開発本部

- 地域イノベーションセンター
- CO-OP教育センター
- ICT先端開発センター

理 念

高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担う実践的・創造的な能力を有し、次世代のものづくり技術者として国際的に通用する、人間性豊かな人材の養成を通じて、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する。

目 的

仙台高等専門学校は、教育基本法及び学校教育法に基づき、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。

目 標

1. 主体性と協調性をもつ人間性豊かな人材の養成
2. 創造的で高度な実践的技術者の養成
3. 国際的視野で社会に貢献できる技術者の養成

特 長

● 2キャンパス・7学科の豊富な学科構成

名取キャンパスの生産システムデザイン工学系4学科と、広瀬キャンパスの情報電子システム工学系3学科とによる豊富な学科構成となっており、工学基礎力と融合複合領域への技術的・学問的素養を兼ね備えた、幅広い場で活躍する実践的・創造的技術者を養成します。

● 入学定員を大幅に拡張した専攻科

科学技術の進展が急速な社会で、国際的に活躍できる高度な実践的技術者を養成するために、高等専門学校の5年間の準学士課程の上に、入学定員70名の専攻科が設置されています。2年間の専攻科課程を修了後は、大学卒と同等の学士（工学）を取得することができます。

● 地域と社会に貢献する3つのセンター

地域社会との連携・地域貢献の核となる3つのセンターを設置し、地域の産業界との共同研究や技術相談、企業人材教育への協力、企業技術者と連携した高専教育の推進、地域の理科教育支援を強化し、地域と社会の発展に貢献します。

名取キャンパス



広瀬キャンパス



電波高専



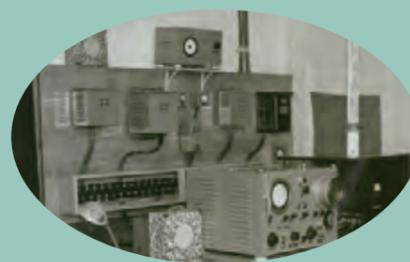
東北無線電信講習所 特科1期生



無線法規の授業



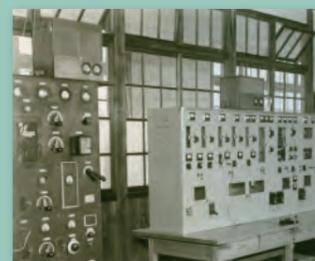
通信術の実習



レーダー室



八木山校舎全景



TG8XA実験用無線局



製図の授業風景



官立無線電信講習所仙台支所



仙台電波高等学校 中江校舎校門



本科1期生 (3年の教育課程が始まる)



150W送信機



教室



中江校舎 (陸軍造兵廠の跡)



学校新聞「でんぱ」創刊号 (1949年11月10日)



八木山校舎



松韻寮全景



松韻寮玄関前

電波高専

1943

昭和18年

1943年1月 財団法人東北無線電信講習所設立

1943年11月 官立無線電信講習所仙台支所となる

1945年4月 官立仙台無線電信講習所として独立

1949年5月 国立仙台電波高等学校発足

1952年3月 仙台市八木山に移転

1970

昭和45年

*校景今昔 写真で見る歴史年表の見出しに使用している学校名の表示は、高等専門学校以降の学校名とし次のとおり略した。
【電波高専】：仙台電波工業高等専門学校 【宮城高専】：宮城工業高等専門学校 【仙台高専】：仙台高等専門学校

*財団法人東北無線電信講習所、官立無線電信講習所仙台支所、官立仙台無線電信講習所、国立仙台電波高等学校は、共に仙台電波工業高等専門学校の前身であるため、電波高専の校景今昔として記載した。

宮城高専



仙台市富沢仮校舎



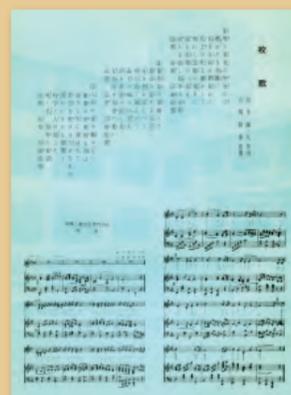
高専祭



学校入口



校舎全景



校歌



「愛島通信」第1号(1964年3月刊行)



弁論大会



新入生オリエンテーション



教室棟



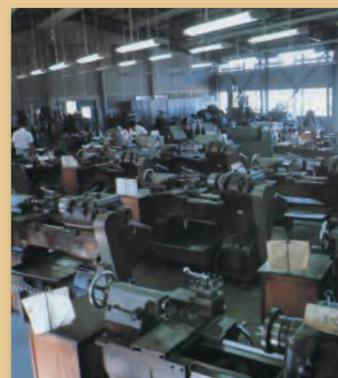
第1回卒業式(1973年3月)



第4回全国高専体育大会



各専門棟



実習工場



X線解析実験



金属加工実験



電気工学実験



学寮全景

宮城高専

1963

昭和38年

1963年4月
国立宮城工業高等専門学校開校
黒川利雄初代校長就任
鈴木康三九代校長就任

1963年11月
学生会発足
第1回高専祭

1964年3月
「愛島通信」創刊
1964年4月
名取市愛島の新校舎に移転

1965年4月
校歌制定

1966年3月
専門学科棟と機械実習工場の完成

1966年11月
新校舎落成式

1968年3月
第1回卒業式

1968年4月
金属工学科設置

1969年3月
西寮開設

1969年4月
女子寮開設
第1回新入生
合宿オリエン
テーション

1969年8月
全国高専体育
大会主管

1970

昭和45年

宮城高専



10周年記念式典



10周年記念誌



汎用コンピューター NEAC-3200-50



視聴覚教室



図書館



電子計算機室



福利施設 (秋工会館)



食堂



グラウンド・テニスコート

電波高専



開校記念式 校長式辞



校舎全景



北寮と竣工まもない南寮



汎用コンピューター FACOM230-28



汎用コンピューター MELCOM COSMO 7005



開校当時の教職員



八木山校舎最後の入学式



TSS 端末室



創立10周年記念式典



創立10周年記念誌



第17回全国高等専門学校体育大会
開会式直前 (東北大学記念講堂前)



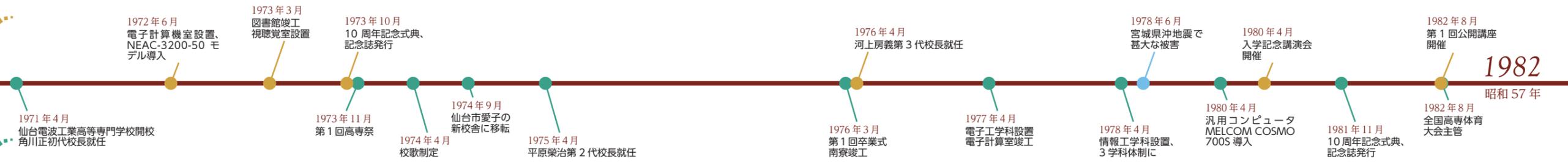
電子工学科1期生 (1981年度卒業)

宮城高専

1971

昭和46年

電波高専



1982

昭和57年

宮城高専



20周年記念式典



記念碑 (昭和 58 年 3 月)



留学生



校歌歌碑 (昭和 59 年 3 月)



電子顕微鏡室の 200KV 透過型電子顕微鏡



30周年記念式典



30周年記念誌



電子材料実験室のスパッタ装置



女子寮 (個室 18 室、2 人部屋 9 室)



情報デザイン棟

電波高専



仙台を離れる留学生 1 期生



女子寮



第 19 回全国高等専門学校サッカー選手権大会 開会式



女子寮生



電子制御棟竣工後の学校全景



20 周年記念誌



留学生 2 期生



モニュメント「空へ」除幕式



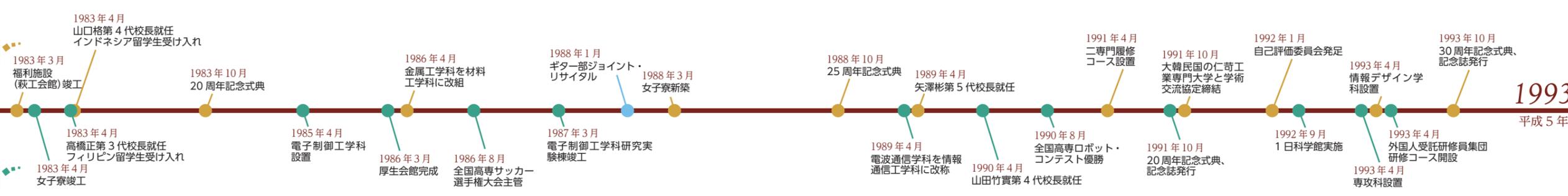
第 1 回専攻科入学式

宮城高専

1983

昭和 58 年

電波高専



1993

平成 5 年

宮城高専



専攻科棟



わくわく体験教室



情報デザイン学科第1期卒業生



地域共同テクノセンター棟



総合科学教育棟



3連覇の喜びに沸く宮城高専ラグビー部フィフティーン



全国ロボット・コンテスト'99全国大会初優勝



初のブックハンティング



40周年記念誌



全国高専プログラミングコンテスト競技部門優勝

電波高専



技術開発研究センター



外国人受託研修員集団研修コース閉講式



公開講座「中学生のための手作り部品によるラジオの実験」



E.V.Ecorun in SUGOで1位、2位独占



60周年記念誌



60周年記念式典



60周年祝賀会

宮城高専

1994

平成6年

電波高専

1995年2月
情報デザイン棟竣工

1995年4月
斉藤正三郎第6代校長就任

1996年3月
校内LAN完成

1996年1月
専攻科研究実験棟竣工

1997年4月
渡辺英夫第5代校長就任

1997年8月
わくわく体験教室開催

1997年8月
中学生のための公開講座開始

1998年4月
専攻科設置

1999年6月
専攻科棟竣工

1999年11月
全国高専ロボット・コンテスト優勝

1999年10月
全国高専プログラミングコンテスト優勝

2000年3月
総合科学教育棟新築

2000年4月
四ツ柳隆夫第7代校長就任

2000年5月
地域共同テクノセンター設置

2000年11月
第1回産学交流フォーラム参加

2001年1月
ラグビー部、全国大会3連覇達成

2001年10月
全国高専プログラミングコンテスト優勝

2002年3月
フィンランドのメトロポリア応用科学大学と学術交流協定締結

2003年3月
ドイツのフェリックス・フェヒエンバッハ・ペルニウスコレクと学術交流協定締結

2002年8月
エコラン1位、2位独占

2003年4月
専攻科、高専として初めてJABEE認定

2003年4月
短期留学生交換事業実施
教育研究技術支援室設置

2003年7月
第1回外部評価委員会開催

2003年10月
40周年記念式典、記念誌発行

2003年10月
60周年記念式典、記念誌発行

2003

平成15年

宮城高専



ドイツ FFB 校訪問



リカレンジャーのサイエンスショー



リカレンジャー



創造教育センター機械仕上工房



がんセンターとの協定調印式

宮城高専

2004

平成 16 年

電波高専

2004年4月
独立行政法人国立
高等専門学校機構発足

2004年4月
移動科学実験車
リカレンジャー
の活動開始

2004年5月
ドイツ FFB
校訪問

2004年4月
東北大学工学部・宮城高専・
電波高専、単位互換協定締結

2004年2月
創造教育棟竣工



JABEE 認定証 (宮城高専)



機関別認証評価 (宮城高専)



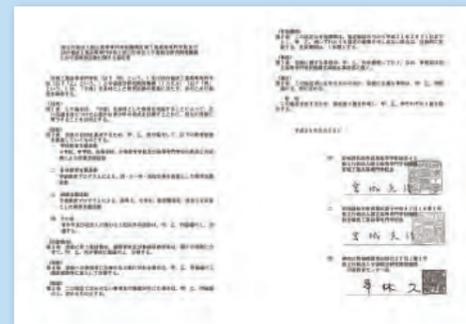
東北大学工学部・宮城高専・電波
高専 単位互換協定



JABEE 認定証 (電波高専)



機関別認証評価 (電波高専)



宇宙航空研究開発機構 (JAXA)・宮城高専・電波高専
宇宙教育活動に関する協定

電波高専



創造教育棟



タイ王国モンクット王カラバン工科大学と協定締結



フィンランドへの長期インターンシップ

2008

平成 20 年

2006年3月
高等専門学校機関
別認証評価認定

2005年4月
宮城光信第6代
校長就任

2006年3月
タイ王国キングモン
クット工科大学ラカバ
ンと学術交流協定締結

2006年9月
フィンランドのメトロ
ポリア応用科学大学と
学術交流協定締結

2007年4月
宮城光信第8代
校長就任

2007年4月
野田山プロジェクトスタート
創造教育センター創設 (実習・材料工場を改称)

2007年4月
宮城電波高専
事務部統合・宮城地区事務
部設置

2007年7月
宮城県立がんセン
ターと協定

2007年11月
タイ研修旅行開始

2007年10月
タイへの長期インター
ンシップ開始

2008年9月
宮城高専・電波高専、JAXA との
宇宙教育活動に関する協定締結

2008年6月
フランスのリアル A 技
術短期大学と学術交流
協定締結

仙台高専



名取キャンパス



広瀬キャンパス



祝賀会



第1回入学式



除幕式 (名取キャンパス)



除幕式 (広瀬キャンパス)



開校記念式典



仙台高専1周年記念式典



高専制度創設50周年記念シンポジウム



ホームカミングデー展示 (名取キャンパス)



ホームカミングデー展示 (広瀬キャンパス)



第1回卒業証書・修了証書授与式



仙台高専

2009

平成21年

2009年1月
大韓民国の青雲大学校と
学術交流協定締結

2009年8月
ニュージーランドの
ワイカト工科大学と
学術交流協定締結

2009年10月
スーパー高専「仙台
高等専門学校」誕生

2009年10月
宮城光信初代校長就任
校歌・校章承認

2009年10月
開校記念式典
銘板除幕式

2010年3月
第1回卒業証書・修了証
書授与式

2010年4月
第1期生入学式

2010年4月
内田龍男第2代校長
就任

2011年3月
東日本大震災で被災
卒業証書・修了証書授
与式中止

2011年4月
入学式中止

2011年5月
始業式

2011年8月
野球部(名取)、全国
高専体育大会優勝
柔道部(名取)、全国
高専体育大会優勝

2011年10月
2010年度卒業会・
修了会開催

2011年11月
全国高専ロボット・コンテ
スト優勝・ロボコン大賞の
ダブル受賞

2011年10月
ホームカミングデー
開催

2011

平成23年



地割れ



図書落下



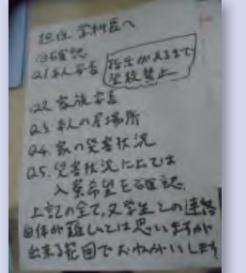
帰宅困難者を保護



損壊



ボランティア活動



通電まで伝達事項は紙に記入



地盤沈下



震災を乗り越え1カ月遅れの始業式



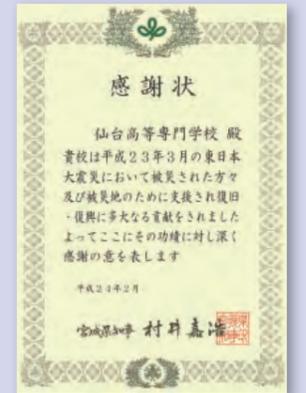
震災復興プロジェクト-伝統芸能の継承



復興①野球部(名取)全国高専体育大会優勝



復興②柔道部(名取)全国高専体育大会優勝



感謝状 (宮城県)



復興③ロボコン(名取)ダブル受賞



震災復興高専プロジェクト-東北6高専連携

仙台高専



国際交流 (タイ)



研究発表



授業



実習



授業



国際交流 (フィンランド)



国際交流 (フランス・フィンランド)



部活動



国際交流 (ドイツ)



国際交流 (フランス)



地域貢献



部活動



仙台高専

2012

平成 24 年

2012年4月
武道場設置
(震災復旧による改築)

2012年6月
フランスのアルトワ大学
と学術交流協定締結(東北
地区・函館高専包括協定)

2012年10月
ホームカミングデー開催

2012年11月
第2回 ISTS2012 in
バンコク開催

2013年1月
第18回高専シンポジウム in
仙台開催

2013年5月
高専制度創設50周年記念仙
台高専シンポジウム開催

2013年8月
全国高専体育大会主管

2013年10月
高専制度創設50周年記念事業開催
・ホームカミングデー
・記念講演・祝賀会
・記念誌発刊

2013

平成 25 年

■現在の仙台高専

校歌

作詞：保岡直樹 作曲：江村玲子

新たな時代を切り開く高専の夢と意気込み、
そして未来へ躍進する姿を明るく、力強く、格調高く表現

- | | | |
|--|---|--|
| 1. 仰ぐ秀麗 蔵王の峰よ
萌ゆる若葉に 心も踊る
自治の旗風 あざやかに
たゆまぬ努力で 叡智を磨く
友よ究めん 科学の真理
ああ 仙台高専 夢呼ぶ我ら | 2. 名取・広瀬の ふたつの川も
ひとつになりて 大海原へ
友愛を奏でる 波の音
溢れる情熱は 世界をめぐる
友よ語らん 我らの使命
ああ 仙台高専 漲る力 | 3. 高き理想と 鍛えし技で
宮城を要に 花咲く文化
新たな息吹 頬にうけ
豊かな創造 時代を拓く
友よ学ばん 希望に燃えて
ああ 仙台高専 輝く未来 |
|--|---|--|

校章

心のある技術者、そして、心に訴えるものづくりができる人材を
育ててほしいという思いを込めて「心」を図案化



■デザイン

宮城高専・情報デザイン学科 平成21年3月卒業生
齋 明日美

校旗



入学式



入寮式



創造実習



スポーツ大会



オープンキャンパス



寮避難訓練



出前授業



体育大会



名取



名取

春



広瀬



広瀬



TeX講習会



ETロボコン



ロボコン東北大会



タグラグビー教室



寮でのクリスマス会



予餞会



地域との交流



エコラン



高専祭



吹奏楽部



卒業証書授与式会場



研修旅行



立会演説会



研究発表会



模擬面接

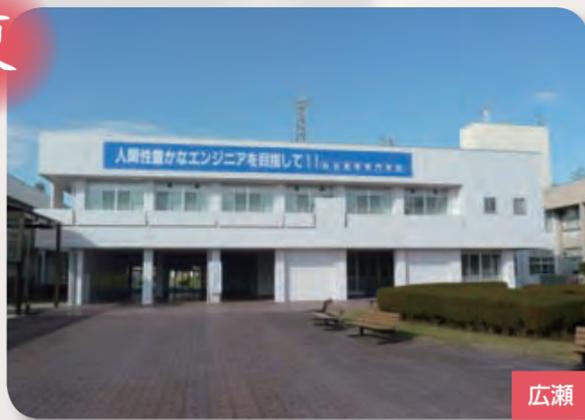


卒業式

夏



名取



広瀬

秋



広瀬



広瀬

秋



名取



名取

冬



名取



広瀬

記念誌発刊にあたって

高専は1961（昭和36）年に制度が創設され、翌1962年より順次全国に設立されていきました。まだ戦後の荒廃した状況を色濃く残していましたが、高度成長期が始まり、貧困から少し明るさが見え始めてきた時代でした。この頃から日本は世界の奇跡とも言われる経済発展を遂げるのですが、それには数々の要因があったといわれています。その一つに優れた教育システムがあり、高専はその代表的存在の一つです。経済成長を担い、かつ科学技術の発展に寄与できる中堅技術者の育成を目的とするものでした。これに基づいて、中学を卒業した優秀な若者を受入れ、5年一貫教育で一般教養から順次くさび形に高度な専門教育を行うと共に、実験・実習を強化した実践力を修得させることに力が注がれました。このような教育が大きく実を結び、その後、各所で多くの卒業生が活躍し、高い評価を得ていることは広く知られているところです。

仙台高等専門学校（以下、仙台高専）は、1963年に高専の第2期校として設置された宮城工業高等専門学校（以下、宮城高専）と1971年に設置された仙台電波工業高等専門学校（以下、仙台電波高専）を2009（平成21）年10月に高度化統合して設置された学校です。仙台電波高専は、その前身に国立仙台電波高等学校（1949年設立）や東北無線電信講習所（1943年設立）を擁しており、仙台高専は、高専の黎明期から現代に至るまで、時代の流れとともに進化を遂げてきました。2009年の統合までの卒業生は、東北無線電信講習所902名、国立仙台電波高等学校4,098名、仙台電波高専・本科4,066名、専攻科314名、宮城高専・本科6,414名、専攻科248名を数えます。また、統合後の卒業生・本科1,355名、専攻科283名を加えると、これまでの卒業生は合わせて17,680名のほります。日本や世界で広く活躍するこれらの卒業生を輩出し続けて、今日を迎えることができたのも、本校卒業生、教職員、後援会、地域や産業界の方々のお陰です。改めて深く御礼申し上げます。統合された仙台高専としては今年が4年目ですが、上述のように宮城高専設立50年、仙台電波高専設立40年、東北無線電信講習所設立70年、と重要な節目が重なることから、高専制度創設50周年記念の一環として記念行事を挙げることに致しました。

高専がこれまで歩んできた50年を振り返ってみると、まさに激動の時代でした。設立初期の長い模索の時代があったことはもちろんですが、その後、オイルショックを乗り越え、1991年のバブル崩壊後から社会が大きく変化していく中で、高専に対する期待や要望も徐々に変化していきました。具体的には、創造的・実践的技術者の育成に重点が置かれるようになり、より高度な幅広い能力を涵養するために1991年に専攻科制度が創設され、仙台電波高専には1993年、宮城高専には1998年に専攻科が設置されました。これに伴って学位授与機構（現在の大学評価・学位授与機構）から学士の称号が授与されることになり、名実共に高等教育機関としての体制が整えられていきました。さらに2001年にプログラム認定が開始されたJABEEに対して高専が積極的に取り組み、中でも宮城高専と仙台電波高専は早くも2002年に東北の大学や全国の高専の中で最初の認定校に指定され



校長
内田 龍男

ました。これまで、高専独自の教育制度が、高等教育の国際標準とずれていたために高等教育機関として国際的に認められなかったという問題が、JABEE認定により次第に解消されていくことになりました。その後、大学をはじめとする高等教育機関に法人化の波が押し寄せ、高専も2004年に全国55高専が国立高等専門学校機構の下に一法人化されることになりました。その目標は創造的な人材の育成、高等教育の水準の向上などです。これを踏まえて、その後さらに高度化を目指し、その具体化の代表として、全国4地区の高専の高度化統合が行われ、仙台、富山、香川、熊本の4つのスーパー高専が誕生しました。その目的は地域社会のニーズに沿った多様な学科構成、専攻科の拡充をとおした教育の質の向上、共同利用型センターの設置などによる地域ニーズへの対応、産学連携の強化、広域連携の核などです。また、これら4高専以外の全高専にも、地域・産業界と連携した実践的教育を一層深化させると共に、社会経済のグローバル化に対応して国際的に活躍できる技術者の育成が求められ、時代に対応する学科の再編、コース制などによる柔軟な新分野への対応、専門性と幅広い視野を涵養する専攻科の充実、地域産業界との連携、国際性の涵養などが進められています。

このように全国高専の高度化の先鋒として再編統合された仙台高専ですが、スタートして1年半後（新入生受入から11ヵ月後）の2011年3月に東日本大震災の直撃を受けました。学生の死者2名（うち1名は入学予定者）、家族を失った学生や教職員20名、家が津波で流されたり、全壊あるいは半壊した学生や教職員は170人以上にもものほります。また名取キャンパスでは建物やグラウンド等に大きな被害を受けました。これによって、体育館、武道館、グラウンドの大部分が半年から1年ほど使えない状況となりました。それにもかかわらず、学生達は近隣の施設をお借りして課外活動に努め、ロボコンの全国優勝とロボコン大賞のダブル受賞、野球と柔道の全国大会優勝などの快挙を成し遂げ、学生達のたくましい底力を見せてくれました。苦しい中での感動的出来事でした。

この50周年記念誌には、これらを取りまとめ、仙台高専の黎明期（1943年の東北無線電信講習所設立）から現在までの軌跡を振り返るとともに、将来に向かって更に進化を続けようとする仙台高専の姿を写真とともに綴っています。

仙台高専は今後、これまで以上に優れた人材を育成するために、基礎学力とその実践的応用力、責任感と人間力、そして国際性の養成を強化した教育を推進します。また、今後、産業界も大きく変化していくものと考えられますので、それに対応できる幅広い学力と柔軟な思考力を養うことも重要です。具体的な仕組みや方法については現在検討を進めていますが、50年後も仙台高専が重要な位置と意義を保ち、さらにはそれを発展させるよう努めていきたいと思えます。

同窓生や関係機関、産業界や地域の方々には、今後ともご支援、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

高専制度 創設50周年記念に寄せて

独立行政法人国立高等専門学校機構 理事長

小畑 秀文



仙台高等専門学校は、旧宮城工業高等専門学校と旧仙台電波工業高等専門学校の2高専の統合により生まれました。その狙いは重要性を増しつつある複合技術分野の学科の設置と専攻科の拡充にあり、2工学系7学科、専攻科2専攻および3センターから構成される東北地区の中心的機能を果たす高度化した高専として、2009（平成21）年10月に設置されました。旧宮城工業高等専門学校は、高等専門学校の第二期校として昭和38年に設置されたことから、このたび50周年を迎えたわけです。その教育研究上の理念は、「高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担う実践的・創造的な能力を有し、次世代のものづくり技術者として国際的に通用する、人間性豊かな人材の養成を通じて、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する」です。これまでの50年に及ぶ仙台高等専門学校の活動は、この理念に示す通りの高度な教育研究活動であったといえ、深く敬意の意を表したいと思います。

2011年3月に起きた東日本大震災では、東北地方が被害に見舞われ、仙台高等専門学校においても甚大な被害を受けました。震災後、教職員、学生が一丸となり、その苦難を乗り越えてきました。現在では、仙台高等専門学校が中心となり東北6高専が連携して東北地域の震災復興、発展にも尽力しています。

さて、高等専門学校の特徴ある課外活動として各種コンテストの全国大会があります。これに参加することは、学生の発想力、技術力、チャレンジ精神、自律性などの総合的な技術者力・人間力の育成に大きな役割を果たしております。なかでもロボコンコンテストはテレビ放映もされ、国民の注視する催しの一つですが、仙台高等専門学校は強豪校の一つで、過去にロボコン大賞2回、優勝3回を数え、その実績はぬきんでているものがあります。特に震災に見舞われた年の2011年度の全国大会では、十分な設備が使えないなかでの活動で、見事にロボコン大賞と優勝のダブル受賞に輝きました。さらに、ロボコン大賞においては、2010年度に続く連続受賞というロボコン史上初の快挙でした。これは学生のたくましさ、発想力・創造力の豊かさを如実に示すもので、仙台高等専門学校における教育指導のレベルの高さを明確に示すものといえます。

国立高等専門学校機構としては、「進化する高専」をキーワードにさらなる飛躍を目指し、イノベーションの創出、地域連携およびグローバル化を視野に入れ、科学技術創造立国の一翼を担う感性と創造性豊かな実践的技術者を育成しつつ、文化の香り高い豊かな社会の発展に大きく寄与していきたいと思っております。仙台高等専門学校の教職員ならびに学生の皆さんにおいても、この50周年を機に、これまでに築いた伝統を継承発展するとともに、その成果を宮城の地から世界に向けて発信していくことを期待しております。

結びに、高専制度50周年の節目に当たり、ここに改めてお祝いを申し上げますとともに、関係の皆様のご尽力に対して心より御礼を申し上げます。

記念誌発刊によせて

初代仙台高等専門学校 校長
第8代宮城工業高等専門学校 校長
第6代仙台電波工業高等専門学校 校長

宮城 光信



宮城高専が2013（平成25）年に50周年を迎える、というのを初めて耳にしたのは、私が仙台電波高専の校長のままで宮城高専の校長として赴任した2007年の間もない頃であった。そろそろ準備を始めないと、というのが長年主事を務め、宮城高専の運営に大きな働きをされたある教授の提言であった。ただ、私にとっては、だいたいの話でもあるし、仙台電波高専と宮城高専の統合問題が決定とは言わないまでもかなり煮詰まってきた状況だったので、その準備に追われ、50周年記念事業に備えるというお話にはすぐには応じる気持ちになれないまま5年の任期を終えた。

歴史の流れを小さな世界から見ている自分にとっても、半世紀の間に、世界情勢は驚くばかりに変化し、科学技術の進展によって、我々を取り巻く自然、社会環境は大きく変化してきている。人間自身が物事を考える基盤も根本的な変化をもたらしている。高専もそのような大きな流れの中にあるのは当然のことである。初期の高専が標榜していた「中堅技術者の養成」はまさにそのことを表しているように思われる。

高専は大学と異なって主として教育を行う機関であると外から言われ、高専に籍を置く内部からもそのように認識していることも耳にする。教育は勿論、高専にとって最も重要視され、大切にされなければならないことは明々白々である。しかし後期中等教育の部分を担っているとはいえ、高専は高等教育機関である。その根本の思想を忘れず、教育、研究、社会貢献の任務を果たしていかなければならないであろう。

50年というのは確かに大きな節目である。宮城高専設立当初の理念と設立当初の気運に思いを馳せ、50年の歩みを振り返り、記念し、高専が果たしていかなければならない現代的な課題を問い直すことは大きな意味がある。愛おしい気持ちで過去を思い起こし、現在を真剣に生き、そして未来に大きな夢をもって信頼するという基本的な立場である。その意味でも記念誌発刊はこれからの歩みの上に礎石となることを信じている。そしてまた、このような機会に恵まれた教職員にとっては思い出深いものになるであろう。

初心恐るべからず

同窓会 会長
同窓会萩朋会 会長
新山 敏彦



高専制度創設 50 周年おめでとうございます。

学校の長い歴史のなかで、僭越ながらこの時期に同窓会長としての重責を担うこととなりました。萩朋会（宮城高専同窓会）と松韻会（仙台電波高専同窓会）は、学校の高度化再編に合わせて統合を図り、2009（平成 21）年 10 月に仙台高専同窓会として発足いたしました。同窓会統合は全国でもまれに見る快挙であり、これは今後とも両同窓会が学校と共に歩もうという決意の賜物と考えております。

私事では、電気工学科第 9 回生として 1976（昭和 51）年 3 月に宮城高専を卒業し、プラント系計装工事会社で、国産共同開発の原子炉 ATR ふげんや LNG 基地など、当時の最先端技術に関わることができました。その後、家庭の都合で地元へ帰ることになりましたが、支店経済の商都仙台で電気技術者の入る余地が少ないなか、丁度その時期に地下鉄建設のため採用枠のあった仙台市に入ることができて、現在に至っております。

当時、1976 年に廃止された市電の技術者は一部残っていたものの、地下鉄に関してはほとんど素人の組織が、土木着工から約 6 年の 1987 年に南北線を開業させることができました。その時の自分の所属課の平均年齢は、なんと 24 歳でした。

今考えると、右も左も分からない若者たちが、よく短期間で先端技術を駆使した最新鋭地下鉄を建設できたものだと思います。これは、当初の新鮮な気持ちで取り組むことが、結果的に良いものを残せることもあるという一例と言え、まさに「初心恐るべからず」であり、これから社会へ出られる方へ贈る言葉として好適と考えます。

何よりも 50 周年を迎えられた高専が、これからも上記のメッセージを携えた活気あふれる優秀な技術者を世に送り出されることを切に願い、お祝いいたします。

発刊によせて ～高専制度に思うもの～

同窓会 副会長
同窓会松韻会 会長
大江 章



本日ここに、高専制度創設 50 周年記念誌の発刊、誠におめでとうございます。

2009（平成 21）年 10 月に母校がスーパー高専として高度化再編され、両校の同窓会も会員各位のご理解と斟酌により、2011 年 2 月に「仙台高専同窓会」として統合・船出しました。このことは全国 4 地区のスーパー高専で初のケースとなりました。

この記念誌の発刊により統合同窓会の会員同士あるいは母校との絆が益々深まることを期待するものでもあります。

本校が終戦前に創基した東北無線電信講習所からスタートし、逡巡省から文部省へ、高校から高専へそして国立から独立行政法人へと、無線電信の黎明期より ICT が社会の重要な生活基盤となる今日まで、多くの方々のご尽力とご支持を頂き、弛みなく成長してきたこと、また、これまでの間、輝かしい伝統を築き上げてこられた多くの先輩諸氏に感謝と敬意を表するものでもあります。

私事ではありますが 40 年前、当時国立仙台電波高専に入学し「将来は通信士になる」という夢を叶えるため勉学に励み、その時に挑戦した国家試験が自分にとっての大学受験であったような思い出があります。

社会に出て感じますのは、このユニークな高専制度が高いポテンシャルを持った数多くの優秀な人材を輩出してきた実績に対して、同じ高等教育機関である大学と比較してみると大学入試時の偏差値がないためか評価が曖昧で、常にアイデアと行動力を示すことで自分たちの評価を築き上げてきたと自負しています。

そのことは、逆に言えば、同窓である我々の実績で後輩が評価されるという過酷な制度でもあり、これまでも増して気を引き締めて参りたいと思っている次第です。

中学卒業後の若くして大きな志を持った理系の人材が、社会から高い評価を得て成長するとすれば、大学・研究機関とボーダレスに繋がる仕組みが必要であり、発掘と処遇が「技術立国日本」の将来を担うことにもなると考えています。

ダーウィンの進化論ではありませんが、決して力の強いものでなく、環境に柔軟に対応できるものこそが生き残るとすれば、この高専制度も未来に向けて進化し、常に時代を先取りした制度として益々発展することを強く祈念申し上げ、挨拶と致します。

進化する高専

後援会 会長
名取キャンパス後援会 会長
上田 佳子



「高専制度創設 50 周年」を迎えるに当たり、輝かしい歴史を記録する記念誌が刊行されますこと、心よりお祝い申し上げます。

1962（昭和 37）年 4 月より第一期校が開校されて以来、現在では国公私立合わせて 57 校もの高専が設置されておりますが、この高専制度創設 50 周年という大きな節目の時に、我が子が仙台高等専門学校で学生生活を送ることができ、大変嬉しく誇りに思っております。また、後援会を代表いたしましてこのような挨拶の機会を頂きましたこと、あらためてお礼申し上げます。

仙台高専は旧宮城高専・旧仙台電波高専の長い歴史を引き継ぎ、新たな道を歩みはじめたところです。これまでの輝かしい歴史は、教職員の指導や卒業した先輩方の社会での活躍はもとより、保護者からの教育への期待、言い換えれば高専教育に対する情熱抜きには語ることはできません。現代社会において実践力と創造力を兼ね備えた豊かな技術者が育つためには、自らが信念と希望を持ち続けるとともに、グローバルな視点を的確に捉える力が必要であると考えておりますが、そのためには教員の皆様の熱き指導とともに、諸先輩方の薫香に触れながら、日々の学生生活をいかに恵まれた環境のなかで過ごすことができるかが重要ではないかと、高専で成長する我が子の姿を見て感じております。

私ども保護者で構成する後援会としても、微力ながら子供たちの学習環境整備の一助として、また仙台高専の発展のため精一杯の手伝いをしたいと思っております。

さらなる挑戦の 50 年を踏まえ、将来 100 周年を迎える時の高専の姿に思いを馳せつつ、これからも「進化する高専」を保護者の皆様と見守り続けたいと思っております。

現在・過去・未来 明日ある今を生きる

後援会 副会長
広瀬キャンパス後援会 会長
伊藤 智



『高専制度 50 周年記念誌』が発行されましたことに、心よりお喜び申し上げます。また日頃より後援会活動にはご理解とご協力を頂きありがとうございます。

今年度は、仙台高等専門学校の大きな節目となる年であると聞いております。今年度の事業の中に、高専制度 50 周年記念事業が計画されています。遡ると（財）東北無線電信講習所から始まり、広瀬キャンパスの前身である仙台電波高等学校からの歴史、そして再編統合した仙台高等専門学校としての現在があります。

学校の評価は、在校生の評価のみならず、卒業生の活躍はもちろんのこと、指導頂いた先生方の活躍、そして学校組織運営に携わってきた多くの方々のサポートの積み重ねがあつてのことと思います。

仙台高等専門学校に至る今までの歴史を振り返ると、高専のさまざまな方面からの評価が高まっていることも、これまで高専に関わってきた諸先輩の活躍と支援があつてのことと、改めて実感しています。

今年の流行語の中に「今でしょ!」という言葉があります。私なりに奥の深い言葉と受けとめています。過去があつて「今」があります。そして日々過ごしている「今」が未来を創ります。その未来には「夢」のあること、あるいは「期待」できることがあつて、「今」を頑張ることができるのではないのでしょうか。

後援会会則に後援会の目的が次のように記載されています。

「本会は、仙台高等専門学校の教育事業を援助し、学生の福祉を増進し、学校教育に寄与することを目的とする。」（仙台高等専門学校後援会会則第 2 条）

過去の諸先輩が築いてきた高専の歴史をさらに輝きのあるものとするために、そして仙台高専が未来に向かってさらに進化し、益々社会に貢献できる存在になることを期待して、「今」、後援会としてできることは何かをしっかりと考え、サポートしていきたいと思っております。

日本とモンゴルの教育交流と 相互の教育発展について

モンゴル国 教育科学省大臣
仙台電波工業高等専門学校 情報通信工学科 1996年3月卒業
仙台高等専門学校 Honorary Professor

ロブサンニヤム・ガントゥムル



モンゴル教育科学省大臣ロブサンニヤム・ガントゥムルです。大臣として就任し、早くも1年が過ぎようとしています。

昨年（2012年2月24日）、両国は外交関係樹立40周年を迎え、日本とモンゴルの関係、共通外交目標である「戦略的パートナーシップ」の実現に向け、極めて良好に発展しており、日本の文部科学省元留学生として大変嬉しく思います。

日本とモンゴルは異なった歴史と文化を有しております。それにも関わらず、両国民の交流が年を追うごとにより緊密になっているように感じます。多くの元留学生が卒業後、政治、経済、ビジネスといった分野のみならず、学問研究分野においても素晴らしい発展を遂げています。このような発展により、モンゴルの人々は、日本についてはすばらしい国だという印象をもつようになり、日本の教育制度や内容がすばらしいものであるということが証明されることになるわけです。日本の教育は、世界に誇るものであり、専門技術勉強だけでなく、生きていくうえで直面するさまざまな問題を乗り越える力、物事に関して正しく分析する力、互いのことを尊重し思いやる心、目標に向かって達成できる力など、多くのことを育ててくれたように思えます。日本の熱心な教師ややさしい心の人々のおかげで、今の私がいると言っても過言ではありません。私は幸運にも日本に留学できました。日本でお世話になった方々に心から感謝したいと思います。

また、両国の人的交流については、国民同士の相互理解・相互信頼を更に深め、二国間関係を新たな段階に引き上げるための基盤をつくりたいと思います。特に、モンゴルは人口の約70%が35歳以下という若い国であり、両国関係の将来を担う青少年の交流を重視していくつもりです。このなかで、できるだけ多くの学生を日本に留学させ、私が体験したような価値ある明るい日本の生活を送ることにより、モンゴル国の発展にもっと貢献することと期待しております。

日本とモンゴルの交流は、相撲だけではありません。モンゴルの文化、モンゴル人の持つ潜在的力をもっと日本の皆様にお見せすることができればと思っています。特に遊牧民の文化や才能は、まだ十分知られておらず、日本人の皆様にもいろいろな形で紹介できればと思っています。そのためにも、日本の皆様にぜひ、もっとモンゴルに来てもらい、相互の交流をさらに強めてもらえればと思っています。

最後に、モンゴル教育科学省大臣として、モンゴルの子ども一人ひとりの個性と才能を花開かせて頂きますよう、日本の皆様の教育の力をお借りできればと思っています。モンゴルの教育が一層拡大発展するよう、ぜひ、皆様のご支援・ご協力をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。

(2013年6月)

仙台高等専門学校
Change 100
Future

目次

記念誌発刊にあたって	校長 内田 龍男	24
高専制度創設50周年記念に寄せて		
独立行政法人国立高等専門学校機構	理事長 小畑 秀文	26
記念誌発刊に寄せて	前校長 宮城 光信	27
初心恐るべからず	同窓会長 新山 敏彦	28
発刊に寄せて～高専制度に思うもの～	同窓会副会長 大江 章	29
進化する高専	後援会会長 上田 佳子	30
現在・過去・未来 明日ある今を生きる	後援会副会長 伊藤 智	31
日本とモンゴルの教育交流と相互の教育発展について		
モンゴル国教育科学省大臣	ロブサンニヤム・ガントゥムル	32

第1部 仙台高専 Change 100 100の転換点 37

第2部 仙台高専 Memories 輝かしい軌跡 97

第1章 旧学科等の歩み 98

機械工学科	98
電気工学科	100
建築学科	102
金属工学科/材料工学科	104
情報デザイン科	106
情報通信工学科	108
電子工学科	110
電子制御工学科	112
情報工学科	114
生産システム工学専攻・建築・情報デザイン学専攻	116
電子システム工学専攻・情報システム工学専攻	118

第2章 回想 120

四ツ柳隆夫/渡辺英夫/豊田俊一/伊藤友樹/師岡麻理子/佐藤絢香/
西井上優希/伊東恭聖/鈴木尚之/石川 力/熊坂萌絵/松本若菜/
加藤 匠/湯澤哲雄/大沼定美/木皿正志/佐々木正明/三方雅仁/
會田裕矢/宮城 篤/千葉正昭/高村 潔/逢坂雄美/丹野 顯/
藁科秀男/山崎良治/及川洋輝/手代木雅子/大川友子/菅野孝志/
岡 義次/菅生美季子/松浦美代子

第3部 仙台高専 Future 未来への道標 139

第1章 新学科等の現在と未来 140

総合科学系文科・理数科	140
総合科学系	142
機械システム工学科	144
電気システム工学科	146
マテリアル環境工学科	148
建築デザイン学科	150
知能エレクトロニクス工学科	152
情報システム工学科	154
情報ネットワーク工学科	156
生産システムデザイン工学専攻	158
情報電子システム工学専攻	160
地域イノベーションセンター	162
CO-OP教育センター	163
ICT先端開発センター	164

第2章 高専への期待 165

新原皓一/榊 佳之/Ruttikorn Varakulsiripunth / Arto Haapaniemi /
大崎博之/佐藤正道/木島美智子/四ツ柳隆夫/

高専制度創設50周年記念・仙台高専シンポジウム 173

資料編 180

1 歴代役職者名簿	180
①宮城高等専門学校/ 180 ②仙台電波工業高等専門学校/ 182	
③仙台高等専門学校/ 184	
2 卒業生・修了生の進路状況	187
①進学先一覧(平成21年度～平成24年度)/ 187	
②就職先一覧(平成20年度～平成24年度)/ 188	
3 入学者数(中学校別)	191
4 仙台高専設置の趣旨・必要性を記載した書類	193

編集後記

第 1 部

仙台高専 Change100
100 の転換点

1943 (昭和18)年 ■ 財団法人東北無線電信講習所設立

1943 (昭和18)年、仙台電波工業高等専門学校の前身である財団法人東北無線電信講習所が設立された。日本における無線通信士の養成は、1918 (大正7)年、東京市麻布区飯倉町 (現：東京都港区) に社団法人電信協会管理無線電信講習所 (現：電気通信大学) が創設されたことに始まる。1942年に通信省に移管され、官立無線電信講習所となった。前年に太平洋戦争に突入、無線通信士の需要が逼迫したことから、国家体制として本格的に無線通信士養成を行うこととなったものである。

地方においても第三級無線通信士の養成が急務となり、1942年5月

に開かれた東北六県知事会議において、伊藤敏行仙台通信局長により「無線電信講習所設立計画案要綱」が示された。同年8月には、同通信局長と東北六県の知事を発起人として、同要綱を下敷きとした「財団法人東北無線電信講習所設立趣意書及び計画書」が出されるに至った。

東北無線電信講習所は、1943年1月22日に設立が許可され、仙台市木ノ下41番地 (現：仙台市若林区木ノ下) に開所した。同年4月1日、修業年限1年の特科 (入学資格：国民学校高等科卒業者、第三級無線通信士の養成) を設置し、1期生100名を迎えて開所式と入学式を行った。

東北無線電信講習所は、無試験で漁業用三級無線通信士の資格を付与する特典をもつ全国唯一の私立の養成機関であった。全国的な反響が大きく、志願者が殺到し、東北六県の県庁所在地と東京・札幌の8試験会場で入学試験を行った。

開所間もない1943年11月1日、官立に移管され、通信省所管の官立無線電信講習所仙台支所となった。さらに1945年4月の管制の改正により、官立仙台無線電信講習所として独立した。同年7月1日には、本科甲類・乙類 (入学資格：旧制中学校卒業者、修業年限は2年、第二級無線通信士・第二級無線技術士の養成) を設置した。



東北無線電信講習所 特科1期生



無線法規の授業



通信術の実習



無線電信講習所仙台支所

1946 (昭和21)年 ■ 仙台市中江町に移転

1946 (昭和21)年6月1日、東北無線電信講習所は仙台市原町小田原中江町30番地 (現：仙台市青葉区) に移転した。中江町の校舎は、戦時中東京第一陸軍造兵廠仙台製造所が作業員のための宿舎として使ってい

た建物であった。一時使用許可され、1949年に土地・建物の無償所管換えを受けた。校舎として使用するために改造はしたものの、教室は板張りで仕切っただけ、敷地も狭くて体育館もグラウンドもなかった。



中江校舎時代の昼食風景



中江校舎 (陸軍造兵廠の跡)

1949 (昭和24)年 ■ 国立仙台電波高等学校発足

1948 (昭和23)年8月1日、通信職員訓練法が施行され、仙台無線電信講習所は文部省に移管された。移管に先立ち同年4月1日、学則を改正、本科を改め選科とし特科と別科を設置した。

1949年5月31日、国立学校設置法の施行により、国立仙台電波高等学校が誕生した。電波高等学校の発足に当たり、学則の制定と教育課程

の編成が急ぎ行われた。同年4月1日には、選科を本科 (入学資格：新制中学校卒業者、修業年限3年、第二級無線通信士の養成) に、特科を第一別科 (入学資格：新制中学校卒業者、修業年限1年、第三級無線通信士の養成) に、別科を第二別科 (入学資格：第三級無線通信士有資格者、修業年限は1年、第二級無線通信士の養成) に改組した。

1951年4月1日、入学資格を高等学校卒業者とし、修業年限1年で第二級無線通信士以上を養成するこ

とを目的として専攻科を設置した。高等学校になった頃より本科・別科ともに志願者が増え、1955年度には本科の競争倍率が134倍、別科が9.3倍という高倍率を記録した。



本科1期生 (3年の教育課程が始まる)



仙台電波高等学校 中江校舎校門



運動会



学内新聞「でんば」創刊号 (1949年11月10日)

1952 (昭和27)年 ■ 仙台市八木山に移転

1952 (昭和27)年3月30日、仙台市長町字越路3番地(現：仙台市太白区八木山緑町1番1号)の東北大学第三教養部跡地に移転した。八木山は学都仙台を眼下に見下ろす高台にあり、四囲は美しい林であった。1934年に旧宮城県女子専門学校がこの地に移転しており、東北大学に併合され1951年3月に閉校した後、校舎は旧東北大学第三教養部として継承されていた。

1952年10月27日、講堂において移転記念祝賀式を挙行了した。

仙台電波高等学校は東北無線電信講習所として発足以来、10年足らずで所管と名称と場所のいずれもが

3度変更されたことになる。その都度、設備も内容も改善されていったが、一貫して無線従事者の養成、特に無線通信士の育成に努めてきた。八木山移転後は教室のみならず、実験実習室などの各施設も急ピッチで整備されて、高等学校としての体裁が整えられていった。国立高校として世間からも一目置かれる存在となり、仙台市内のどこからでもよく見えた八木山の鉄塔は、電波高等学校の象徴であり、誇りともなった。

翌1953年4月、創立10周年記念事業の一環として、漁業無線通信士養成課程(講習科)を開設した。東北無線電信講習所設立の経緯を考慮

し、地域社会の要望に応えたもので、同窓会が主催し学校側も全面的に協力した。

八木山の新校舎に移転した後も、電波高校の寮生は中江町の「健風寮」から通学していた。その後1954年3月、東北大学より「松韻寮」の移管を受け、1958年にはモルタル2階建ての新寮を増設した。

1964年末、本校の校庭に接して鉄筋造り4階建ての新しい寮が竣工した。建築面積880㎡、2名一室の88部屋でスチーム暖房を完備していた。寮の名前は「松韻寮」をそのまま受け継いだ。寮生間では「電波マンション」と呼ばれた。



八木山校舎(校庭での人文字)



八木山校舎前の桜並木



新しくなった松韻寮(1965年)



1952年頃の木製アンテナ柱



八木山校舎時代の正面玄関

2/100

1963 (昭和38)年

宮城工業高等専門学校開校



仙台市富沢仮校舎

1960年代、高度の産業の発展と生産性の飛躍的向上に伴い、科学技術の活用とそれを実践する工業技術者の不足が痛感され、科学技術者の育成が産業界から強く要請されてきた。これに応じて、実践的技術者を養成する工業高等専門学校の創設が企画され、1961(昭和36)年、学校教育法の改正により、中学校卒業者を入学資格とする5年制の高等教育機関として工業に関する高等専門学校を制度化した。

これにより、1962年には国立学校設置法の一部を改正した法律が施行され、最初の国立工業高等専門学校12校(函館・旭川・福島・群馬・長岡・沼津・鈴鹿・明石・宇部・高松・新居浜・

佐世保)が設置された。東北地方においては、ただ1校福島県に平工業高等専門学校(現：福島工業高等専門学校)が設置されたのみであった。宮城県も敷地を確保していた名取市とともに精力的に誘致活動を進めた。設置地区決定の最終段階において開設一期校としての選に漏れた。

翌1963年、さらに12校が設置され、宮城工業高等専門学校(宮城高専)が開校した。設置学科は、機械工学科・電気工学科・建築学科の3学科であった。そのうち機械・電気工学科は全国の高専に共通の設置学科であったが、建築学科は全国で3校にしか設置されず、宮城高専の大きな特色ともなった。宮城高専の開校は新しい技術者の教育

機関として非常な期待をもって迎えられ、最初の入学試験の志願者は、定員120名のほぼ11倍にも達した。

1963年4月22日、東北大学川内記念講堂付設の松下会館において、開校式と第1回入学式が挙行了された。来賓として、文部大臣代理の犬丸直技術教育課長と黒川利雄東北大学学長、三浦義男宮城県知事をはじめとする諸名士が列席し、宮城県教育史上初の工業高等専門学校の誕生を祝した。式後、川内会館で開校記念祝賀会が催された。

同4月22日、早くも保護者を中心として後援会結成総会がもたれ、出席者全員の賛同を得て正式に発足した。5月18日には初めての後援会役員会が開かれ、予算を決定した。

本校舎の建設は当初より1年後と約束されており、1963年5月に建設地の整地工事が起工、校舎等建物の1期工事が竣工したのは翌年3月であった。それまでの1年間は、仙台市の南郊にある東北大学の旧第一教養部富沢分校の仮校舎(三神峯校舎)で過ごした。以前は仙台地方陸軍幼年学校として使われていた木造2階建ての古い建物であったが、4月24日には授業を開始した。



開校式ならびに入学式場(東北大学記念講堂松下会館)



第1回入学式(1963年4月)

3 1963 (昭和38)年 宮城高専、学生会発足、第1回高専祭

Change of 

開校初年度の1963(昭和38)年、1学期が終わる頃、学生会設立への気運が高まり、各学科から9名の設立準備委員が選ばれ、準備委員会が結成された。同委員会は夏休みを通して学生会規約案作成の準備を進め、2学期が始まると直ちに各学科

2名から成る選挙管理委員会が構成され、学生会会長選挙が行われた。同年10月10日、学生会設立総会が開かれた。学生会発足後、最初に手掛けた最大の行事は学校祭であった。11月8日・9日の2日間にわたって、第

1回の高専祭を開催した。第1日の午前中は学生による劇・音楽が、午後は各種の球技大会が開かれた。夜は、グラウンドでファイヤー・ストームを楽しみ、第2日は103名の学生が参加してマラソン大会が行われた。



高専祭



弁論大会

4 1964 (昭和39)年 宮城高専、「愛島通信」創刊

Change of 

1964(昭和39)年3月1日、宮城高専は「愛島通信」を創刊した。当初は学校と学生会との共同編集による広報誌として出発した。創刊号では「発刊のことば」に続けて、「学校のあゆみ」と「学生会のうごき」の二つのテーマに分けられており、学生の詩や短歌・俳句などの文芸作品も掲載された。表紙は、仙台市富沢の仮校舎の写真が使われている。開校当時は3学期制であったことから、「愛島通信」も年に3回、学期ごとに発行された。

学校の広報誌となった。学校と保護者との連絡・通信の場として、学校を中心とした「通信」にふさわしい内容に改められ、各期末の9月と3月の年2回発行された。

「愛島通信」は、宮城高専の歩みとともに号を重ね、2000(平成12)年には第90号が文部大臣奨励賞を受賞、2003年3月、記念すべき第100号を発行した。



「愛島通信」第1号(1964年3月発行)

時代を読む

東京オリンピック開催

1964年4月、OECDに正式加盟し「先進国」に仲間入りした日本にとって、オリンピックの開催は国力を世界に示す絶好の機会となった。大会直前の10月1日、東海道新幹線(東京・新大阪間)が開通した。

この大会は初めてテレビで世界に中継されたオリンピックであった。開会式など、大会の一部はカラー放送され、多くの国民はテレビに釘付けとなった。テレビはこの頃で多くの家庭に入っていたが、残された家庭もこれを機会にテレビを購入した。この大会で日本は、「東洋の魔女」と呼ばれた女子バレーなどで16個の金メダルを獲得した。

5 1964 (昭和39)年 宮城高専、名取市愛島の新校舎に移転

Change of 

宮城高専の新校舎建設の敷地は、東北本線名取駅の西方約2.5kmに位置する名取市愛島塩手字野田山48番地に所在する丘陵の畑地・山林であった。面積は約3万坪(9万9,000㎡)、その標高40mを27mに削り、低地を土盛整地した。整地は宮城工業高等専門学校設置期成同盟会の負担工事として実施され、1963(昭和38)年5月6日、整地工事起工式、7月4日、陸上自衛隊船岡駐屯103建設大隊の協力により5,100坪(1万6,830㎡)の整地が完了した。さらに、8月10日より大陸建設株式会社の請負により第2回の整地工事が始ま

り、10月31日に完了した。野田山は仮校舎のある三神峯の丘から、遮るものない広い沖積平野を隔てて直接望見することができ、遠くからも敷地造成作業の様子が見られた。

新校舎等の建設は文部省の直営工事として行われた。管理棟および教室の第1期工事の校舎ならびに寄宿舎(株式会社竹中工務店施工)は1963年9月27日に起工式を行い、翌年3月30日に竣工した。校舎は鉄筋コンクリート造り3階建てに塔屋が付設され、大気条件により色調が変化する白色塗装が施された近代的な建物であった。1階には合併教室をはじめ

め学生控室・庶務会計室などが配され、2階は教室・図書室・化学教室など、3階は物理教室・製図室・教官室・会議室などとなっていた。寄宿舎も校舎同様鉄筋コンクリート造り3階建てで定員は120名、1・2年生が入寮し「萩花寮」と命名された。

1964年4月1日、開校以来1年間を過ごした仙台市富沢の三神峯仮校舎から名取市愛島の新校舎への移転が行われた。また、寄宿舎の移転は4月10日に行われ、全ての移転が完了した。

同日14日、新校舎の合併教室で第2回の入学式を挙行了した。



校舎全景(1971年)



教室棟



入口

6 1965 (昭和40)年 宮城高専、校歌制定

Change of 

宮城高専開校3年目を迎えた1965(昭和40)年4月、校歌を制定した。作詞は、鈴木廉三九初代校長、作曲は東北出身の作曲家古関裕而である。4月21日午後、全校教職員と学生出席の下に披露式が行われた。その席において、作詞者・鈴木は次のように述べている。

「本校創設と共に120名の学生を迎へ新しい学校創設の意欲は、仮校舎の内外に充満しておのずから醗酵し来る青年の意気は何か叫ばずには居

られない気持ちをそゝるものがあった。此時校歌制定の要望が強く打出されその作詞を課せられた」(『宮城高専創立十周年記念誌』より引用)。

1984年3月30日、創立20周年記念として、早坂茂教授の揮毫による校歌歌碑を建立した。



上:宮城工業高等専門学校校歌
左:校歌歌碑(1984年3月30日創立20周年記念として建立、揮毫:早坂茂教授)

7/100

1966 (昭和41) 年

宮城高専、専門学科棟と機械実習工場の完成

Change of 

1964 (昭和39) 年8月25日、宮城高専では第2期工事として校舎と機械工場・寄宿舎の建設が始まり、翌年3月に完成した。

さらに1965年9月8日、第3期工事に着手、機械工学・電気工学・建築学の専門学科棟と実習工場、高学年寄宿舎、体育館（鉄骨造り平屋建て）の建設が始まり、1966年3月20日に竣工した。専門学科棟はそれぞれ鉄筋コンクリート造り3階建て、実習工場は鉄骨造り平屋建て217.5㎡の広さをもつ。これにより実習工場では、機械・手仕上げ・木型

（ casting ） ・ 溶接 ・ 鍛造 の 5 分 科 実 習 体 制 が 確 立 し た 。 ま た 、 学 生 の 工 作 実 習 の ほ か に 、 非 品 質 金 属 作 製 装 置 や 二 相 旋 回 流 実 験 装 置 な ど の 教 官 研 究 用 の 装 置 や 器 具 類 を 製 作 し 、 教 育 研 究 の 一 端 を 担 っ た 。



実習工場（当時の様子）



8/100

1966 (昭和41) 年

宮城高専、新校舎落成式

Change of 

宮城高専の校舎および寄宿舎などの建設は、第3期工事をもって3学科3学級の基準面積に達し、1966 (昭和41) 年11月4日、完成したばかりの体育館において校舎落成記念式を挙行了した。

来賓の数はおよそ二百数十名、教職員・学生を合わせて700名が参列した。校長式辞に続いて設置期成同盟会会長である高橋進太郎宮城県知事が挨拶、中山行雄仙台工事事務所所長が経過報告を行った。有田喜一文部大臣を皮切りに国会議員ら、遠藤金一宮城県議会議長、荘司庄九郎名取市長、本川弘一東北大学学長ら来賓の祝辞があり、その後校舎建築などの関係団体に感謝状が贈られた。学生全員で校歌を斉唱し、広根徳太郎東北大学金属研究所所長の音頭による万歳三唱で式を閉じた。式



校舎全景（1973年頃）

典終了後、来賓に対して校内見学を行い、午後から体育館において祝宴を開催した。

記念式典の翌5日・6日、学生会主催による高専祭が、初めて公開高専祭として開催された。



校舎落成記念式（1966年11月4日）

9/100

1968 (昭和43) 年

宮城高専、第1回卒業式

Change of 

1968 (昭和43) 年3月19日、宮城高専の第1回卒業式が体育館において挙行された。第1回の卒業生は、機械工学科36名・電気工学科37名・建築学科36名の109名。保護者・

来賓・教職員・在校生参列の下、卒業生一人ひとりに校長より卒業証書が授与された。次いで学校長式辞があり、灘尾弘吉文部大臣祝辞、本川東北大学学長、高橋宮城県知事、

司名取市長の祝辞、祝電披露と続いた。在校生代表の送辞と卒業生代表による答辞の後、校歌を斉唱して終了した。

引き続き、卒業生によるキンモクセイの記念植樹が前庭の噴水近くで行われ、再び体育館において卒業祝賀会がもたれた。

第1回の卒業生を社会に送り出すに当たり、学校では早くから就職対策委員会を設け、校長を中心に教職員が学校紹介や職場開拓などに努力した。その結果、関東地区の企業を中心とする560社から1,000名近い求人があり、就職率は100%であった。



第6回卒業式（1973年3月）

10/100

1968 (昭和43) 年

宮城高専、金属工学科設置

Change of 

1968 (昭和43) 年4月、宮城高専に金属工学科が新設された。定員は40名、宮城高専はこれにより4学科体制となった。金属工学科実験棟（鉄筋コンクリート造り3階建て）と実習工場（鉄筋コンクリート造り平屋建て一部中2階建て）は翌1969年3月に竣工した。

金属工学は材料工学の一分野であ

り、工業を支える根本のものであるが、金属関係技術者が各産業部門に不足しているという現状があった。宮城高専では工業における金属材料の重要性に鑑みて、金属の科学的・加工学的部門における技術者の養成を目的として、かねて設置を要望していた。金属工学科の開設は全国の高専で5番

目、関東以北では初めてであった。

1973年、オイルショックに陥ったことで第二次世界大戦後初めて実質マイナス成長を経験し、高度経済成長時代は終焉した。金属工学科第1回卒業生はこのような厳しい時期に社会に出ることになった。



X線回折実験



金属加工実験

11/100 1969 (昭和44)年 宮城高専、第1回新入生合宿オリエンテーション



宮城高専では、1969（昭和44）年より、新入生に対する合宿オリエンテーションが始まった。第1回



新入生オリエンテーション

は同年4月8日より、宮城県泉が岳青年の家研修所を会場にして2泊3日の日程で行われた。合宿オリエンテーションは、寝食を共にすることでお互いに親和感を高め、学生生活への円滑な導入とすることを目的とした。

第1回は新入生160名と校長をはじめとする教職員19名の総勢179が参

加、入学式終了後すぐ学校を出発し、開会式の後、1日目は夕べのつどいと学科別ミーティングが行われた。オリエンテーション合宿2日目は全体ミーティングを中心として、レクリエーションやキャンドルサービス、3日目は学科別ミーティングと全体ミーティングを行った後、昼食後に記念撮影を行って閉会、帰校した。宮城高専としては初めての校外行事であったが、以後、毎年行われた。

12/100 1969 (昭和44)年 宮城高専、西寮開設



宮城高専発足時に設けられた仮寄宿舍は三神峯山の中腹に建つ極めて古い建物であったが、36名が入寮していた。名取市愛島野田山に移る直前の1964（昭和39）年3月、寮生会規約が整い、執行部も選ばれて寮生会活動の基礎が固まった。同年4月の移転後はすぐに活発な寮生会活動が展開された。当初は2年生以下の低学年が入寮していたが、第3期工事において高学年寄宿舍も増築され、北寮（低学年）と南寮（高学年）が開設されるに至った。定員は寄宿舍全体で228名であった。

さらに1969年3月、西寮が開設された。西寮は鉄筋コンクリート造り4階建て、低学年寄宿舍として使用した。寄宿舍には、低学年の半数以上、高学年の3割が入寮することとなった。



学寮全景

時代を読む

人類初の月面着陸

1969年7月20日、アメリカのニール・アームストロング船長、エドウィン・オールドリン月着陸船操縦士を乗せたアポロ11号の月着陸船イーグルが、地球から約38万キロ離れた月面の「静かの海」に着陸した。アームストロング船長は人類で初めて月面に降り立ち、

「これは一人の人間にとっては小さな一歩だが、人類にとっては巨大な飛躍だ」との言葉を残した。月面着陸の様子は全世界にテレビやラジオで中継され、多くの子供達が宇宙飛行士に憧れるきっかけとなった。月面での活動を終えた後、アポロ11号は無事地球に帰還した。

13/100 1969 (昭和44)年 宮城高専、女子寮開設



1969（昭和44）年、西寮に続いて女子寮が開設された。女子寮開設については、教官にも寮生にも賛否両論があった。寮務主任が「寮内における行動一切については男女平

等、寮舎については、女子寮への男子の立ち入り、男子寮への女子の立ち入りを禁止する」という条件を出し、全寮生と女子寮入寮希望者が了解して、開設に至った。

女子寮は鉄筋コンクリート造り3階建て、同時に寮の浴室・食堂・厨房もそれぞれ建設され、各寮と浴室は渡り廊下でつながれた。

14/100 1969 (昭和44)年 宮城高専、全国高専体育大会主管



1969（昭和44）年8月、第4回全国高等専門学校体育大会が宮城高専を主管として行われた。日程は8月20日から22日間で、競技種目は陸上競技・バスケットボール・軟式庭球・柔道の4種目であった。

20日、宮城県営陸上競技場で開会式が開催され、宮城高専の柔道選

手富樫貞雄が選手宣誓を行った。21日から、陸上競技は県営陸上競技場、バスケットボールは宮城県スポーツセンター、軟式庭球は県営宮城庭球場、柔道は仙台商業高等学校の体育館の各会場において熱戦が繰り広げられた。

宮城高専は、7月に一関高等専門

学校で開かれた東北大会において団体優勝を遂げた軟式庭球部が出場、順当に勝ち上がり、決勝戦に進んだ。決勝戦では津山高等専門学校と対戦、0-3で敗北し準優勝となった。2日目に開かれた柔道競技個人戦では、富樫選手が見事優勝を飾った。



第4回全国高専体育大会 (1969年8月20～22日、於仙台市)



第4回全国高専体育大会

15/100 1971 (昭和46)年 仙台電波工業高等専門学校開校



1962 (昭和37)年、国立高専一期校12校が設置された。これを受け、仙台電波高校において、同校を高等専門学校へ昇格させようという機運が盛り上がった。さらに電波科学の進展に伴う教育内容の拡充を主たる目的として、1965年1月30日、PTA・同窓会を中心として仙台電波高専昇格推進期成会が結成された。以後、1971年の仙台電波高専開校に至るまで、同期会および仙台電波高等学校高専昇格推進協議会などを中心にして6年間に及ぶ熱心な昇格推進運動が展開された。

このような熱意と努力が実り、仙台電波高等学校は高専に昇格、1971

年4月1日、仙台電波工業高等専門学校(仙台電波高専)が発足した。設置学科は2学級定員80名の電波通信学科であり、電波通信技術者を養成することを目的とする単科高専として出発した。初代校長には電波通信大学教授の角川正が就任、4月10日、79名を迎えて第1回入学式が行われた。

さらに5月15日には、八木山校舎の講堂において開校記念式典が盛大に挙行された。角川校長の式辞に続いて、期成会会長の上野喜七による高専昇格運動の経過報告が行われた。文部大臣代理として東北大学工学部長河上房義教授の祝辞代読、来賓の

大槻七郎副知事、古内広雄・鈴木力衆議院議員、鈴木廉三九宮城高専校長らの祝辞が花を添えた。また、上野喜七期成会会長と桜井勤前期会会長に感謝状を贈って式典を終えた。

角川校長は式辞において、「仙台電波高専における専門教育は、単に高校教育と短期大学教育とを重ねたようなものではなく、5年間の一貫した高等職業教育であって、一般基礎教育と専門教育とを並行させ、専門教育では特に実験実習を通して総合的な思考力と人間形成を図ることにある。」(『創立二十年記念誌』より)と建学の目的を述べた。

一方、仙台電波高等学校本科は、1970年度の第23期入学生を最後に募集停止となった。続いて1971年度3月31日に第一別科、翌年度第二別科の募集を停止し、専攻科も1973年度をもって生徒の募集を停止した。最後の専攻科生を送り出した1974年3月、仙台電波高等学校は25年の歴史に幕を閉じた。無線電信講習所時代を含め5,094名の卒業生を送り出した。法的には、国立学校設置法一部改正による法律第81号の施行により、1974年6月7日、仙台電波高等学校廃校となった。



開校記念式 校長式辞



開校当時の教職員



校旗

16/100 1972 (昭和47)年 宮城高専、電子計算機室設置、NEAC-3200 モデル 50 導入



宮城高専では、1971 (昭和46)年度予算において計算機の導入が認められた。機種選定委員会を設置し慎重に検討審議した結果、同年6月、日本電気株式会社製のNEAC-3200 シリーズのモデル50を導入機種に選定、同社とTSS (タイムシェアリングシステム) を共同開発した。1972年4月1日より試運転を開始、5月8日より本運転となった。並行して計算機室運営委員会が発足、計算機室の運営と情報処理教育全般にわたって審議することになった。本運転開始後は、各学科の情報処理実習、工学実験、卒業研究など学生の教育実習に幅広く利用された。

計算機の導入に当たって電子計算

機室を新設、1972年3月8日、鉄筋コンクリート造り平屋建て303.4㎡が竣工した。電子計算機室では、文部省より電子計算機室基幹スタッ



電子計算機室

フ研修の委嘱を受けて、各高専より教官研修生を引き受け、1972年7月より1974年11月まで延べ13名の研修を行った。



電子計算機室

17/100 1973 (昭和48)年 宮城高専、図書館竣工



図書館

宮城高専では、愛島の新校舎に移転した1964 (昭和39)年、管理棟の2階に図書室が設けられた。校舎

の中心的な場所にあり、学生数・教職員の増加とともに、利用者数も蔵書数も増加していった。1968年の

金属工学科の増設とその学年進行につれて利用度が高まり、独立した図書館の建設が必要となってきた。

1972年、待望久しかった図書館の建設が認められ、同年9月4日に着工、翌年3月30日に鉄筋コンクリート造り2階建て1,600㎡の図書館が完成した。学習センターとして多目的機能をもつように工夫され、1階には視聴覚室・ゼミナール室・カウンセラー室・談話ホールなどを設置、2階には閲覧室・書庫・図書事務室・複写室などが配された。

学生自らが進んで来館し、図書などの資料を有効利用できるように、気軽な利用を誘う雰囲気づくりや資料の多様化・電算化などに努めた。

18/100 1973 (昭和48)年 宮城高専、視聴覚室設置

Change of 

1973 (昭和48)年に竣工した図書館の1階に設置された視聴覚室は、180席を有し、当時の最新式の機器・設備を備えた。AVR・VTRを備えたコントロールルームを付設した。この視聴覚室の設置に関しては、1972年2月に教職員に対して行った図書館建設の要望アンケートの結果がほぼ活かされた。正課はもちろん課外活動にも大いに利用され、教職員を対象とした視聴覚講習会もたびたび催された。



視聴覚教室

また1976年には、各教室にOHPスクリーンを設けると同時に、各階および必要な箇所にOHPを備え付けるなど、機器・設備の充実を図った。

1990 (平成2)年、多目的に視聴覚室を利用するためにビデオプロ

ジェクターを中心とする総合システムを導入して教育研究の場として大きな効果を上げた。

19/100 1973 (昭和48)年 仙台電波高専、第1回仙台電波高専祭

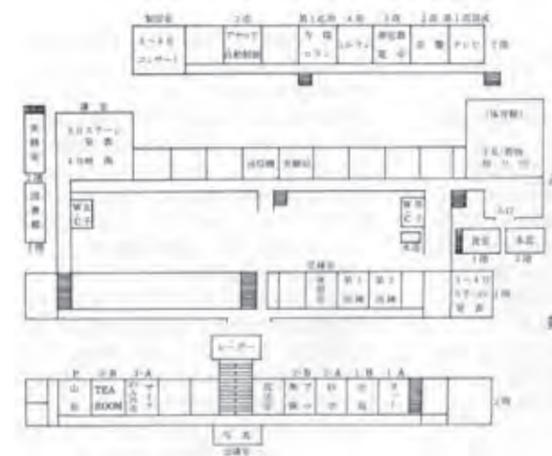
Change of 

仙台電波高専では、最後の高校生が卒業した1973 (昭和48)年3月、それまでの生徒会を学生会と改め、高専の3年生を中心に運営されることになった。

にわたり、学生会の初めての大きな行事、第1回仙台電波高専祭が開催された。1971年・1972年は高専への移行という特殊事情により文化祭が開かれなかったため、文化祭としては3年ぶりの開催となった。全学

生一丸となって準備に力を注ぎ、高専祭前の2週間は「全校一致団結校内清掃期間」として、校内のすみずみまで清掃を行った。また、学生会予算が10万円しかなかったため、一人300円のカンパを行い、高専祭の運営に充てた。

11月2日の開会式と記念講演に続き、3日午前9時より一般公開を行った。保護者や一般の人々に交じって、アマチュア無線家や電電公社などの無線関係者が多数来場するなど、電波高専への関心の高さが窺われた。ステージ発表や各クラブの研究発表とともに電波高校時代からの伝統である機器公開と展示を実施した。



第1回高専祭のプログラムのより1973年11月3日、4日に開催された。教室、実習室、実験室の配置の概略と、参加クラブや機器公開の様子がわかる。

第1回高専祭の教室の配置・参加クラブ等を示した図 (プログラムより)

20/100 1973 (昭和48)年 宮城高専、創立10周年記念式典、『創立十周年記念誌』発行

Change of 

1973 (昭和48)年、宮城高専は創立10周年を迎え、10月6日、体育館において記念式典を挙行了。式典は在校生・教職員を中心とする午前の部と午後の部との2部構成で行われた。

午前の部では、在校生・教職員全員出席の下、同窓生代表が記念講演を行った。また、午後からは文部省関係者ほか来賓多数を得て、後援会会員・同窓会会員・旧職員らと在校生代表が出席して記念式典を開催し

た。式典では、鈴木廉三九校長の式辞に続いて、来賓と山内菊雄後援会会長・引地恵一同窓会 (萩朋会) 会長より祝辞があった。10年勤続者表彰が行われ、後援会および同窓会からは校旗が寄贈された。

式典終了後、来賓・後援会会員・同窓会会員に校内を自由に参観してもらい、その後再び体育館において祝賀会を開催した。

この記念式典に合わせて、1973年10月6日、『宮城高専創立十周年記念誌』を発行した。同誌は、B5判116ページ、学校の全般にわたる10年間の記録を基調にして編集された。



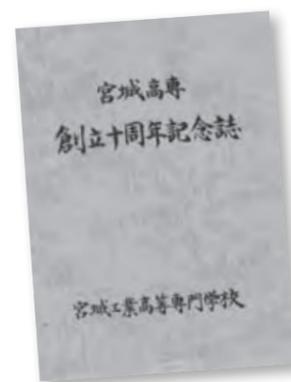
創立10周年記念式典



創立10周年記念式典 祝賀会



校旗



『宮城高専 創立十周年記念誌』

時代を読む

第一次石油危機

1973年、OPECは第四次中東戦争をきっかけに原油価格を大幅に上げ、資源価格は上昇。これにより、高度経済成長の時代は終わった。

日本では昭和47年に田中角栄首相が打ち出した「日本列島改造論」によって物価が上昇していたが、原油価格の上昇はこれに追い打ちをかけ、狂乱物価と物不足が生まれた。トイレットペーパーが店頭から姿を消し、マスコミは犯人を捜した。もちろんそれは、家庭の買いだめによるものであった。

21/100

1974 (昭和49) 年

仙台電波高専、仙台市愛子の新校舎に移転

Change of 

1972 (昭和47) 年、仙台電波高専は、新しい学校用地として宮城県宮城郡宮城町上愛子字北原（現：仙台市青葉区上愛子字北原）の牧場の跡地10万7,000㎡を買収した。これは八木山の校地の3倍の広さであった。将来計画を考慮した総合計画の下に、校地の西側を校舎・学寮用地として使用し、東側を運動場用地とした。1973年5月18日、校舎新築に着工した。

新校舎は研究実験棟・講義棟・管理棟などから成り、図書館・体育館に加えて寄宿舎などの全施設が同時に建設された。そのため、設計の段階から、図書館・体育館の配置が他の校舎と十分関連づけて検討され、教育活動の面からも学生の実際の利用の面から



グラウンドからの風景

も機能的な施設となった。また、図書館・学生食堂・講義棟に囲まれた一角にコミュニケーションゾーンを設置、仙台電波高専のシンボルともいべき無線アンテナ2基は敷地西側の研究実験棟の屋上に聳え、電波高専独特の存在感を示すことになった。

1974年7月2日竣工、夏休み期中の8月に、新校舎に移転した。移転作業は夏休みを返上して行われ、9月から新しい校舎で授業が開始された。

宮城町地区はその後急速に開発と都市化が進められ、1980年代も後半になってJR 仙山線の仙台-愛子間の列車の本数が増加、通学に便利になったが、移転当時は運行本数も少なく、電車やバスを利用しても仙台駅からは

30分以上かかり、不便が強いられた。

1974年11月8日、体育館において13時より新校舎等落成・移転記念式典を開催した。記念式典は、山本壮一郎宮城県知事・白石今朝松宮城町長・加藤陸奥雄東北大学学長・佐藤光国立高等専門学校協会会長・猪俣義郎後援会会長・山田兵衛同窓会会長ら来賓を得て、盛大に行われた。式では、まず角川正校長式辞の後、文部省管理局教育施設部仙台工事事務所長より建設工事経過報告がなされ、来賓の祝辞に続いて多数の祝電が披露された。式典終了後は、校舎・学寮の自由参観を行い、15時から同会場で祝賀会を行った。

校舎新築移転記念として、後援会によって旧校舎からの樹木の移転と広場の整備、桜並木の植樹などの緑化が行われた。また、同窓会より応援団旗が贈られ、贈呈式が行われた。

1975年4月、初めて新校舎での入学式が挙行された。

22/100

1974 (昭和49) 年

仙台電波高専、校歌制定

Change of 

仙台電波高等学校には1951 (昭和26) 年に制定した校歌 (作詞：杉村顕道、作曲：海銚義美) があったが、高専昇格を機に、1974年4月1日、新たに仙台電波工業高等専門学校校歌を制定した。作詞は宮沢章二、作曲は福井文彦による。宮澤は埼玉県出身の詩人・作詞家、多くの校歌や合唱曲、童謡などの作詞を手がけた。また福井は、仙台電波高校に音楽講師として招聘されてお

り、第1応援歌 (作詞：永野為武)・第2応援歌 (作詞：南明) の作曲も行った。5月28日試聴会が行われ、当校に引き渡された。

「学校だより」第4号 (1974年7月19日発行) には、「福井先生の見事な曲がつき、私にとりまして大きな喜びです。学生の皆さんが、今後、こころのうた、魂のうたとして愛唱して下さいを願っております」という宮澤の言葉が紹介されている。



校歌 (作曲者直筆によるギター用楽譜)

23/100

1976 (昭和51) 年

仙台電波高専、第1回卒業式

Change of 

1976 (昭和51) 年3月19日、体育館において仙台電波高等専門学校第1回卒業証書授与式が行われた。加藤陸奥雄東北大学学長、森田章同理学部部長、土居茂樹一関専校長らの来賓を得て、1975年4月に就任した平原榮治第2代校長 (元東北大学理学部教授) より卒業生の一人ひとりに卒業証書が手渡された。



第1回卒業式 校長告辞 (1976年3月19日)

第1期生は初めの3年半を八木山緑町の旧校舎で、残り1年半を愛子の新校舎で送っている。旧校舎では、仙台電波高校の生徒が先輩であり、仙台電波高校の伝統を受け継ぎながらも高専としての新しい伝統を築かなければならないという使命を担っていた。さらに校舎移転は多くの不便と不自由さをもたらした。1971

年入学の電波通信学科第1期生は78名であったが、5年の後に卒業証書を手にしたのは54名に過ぎなかった。仙台電波高専の草創期が多難の連続であったことを物語っている。巣立ちを迎えた1976年、経済界は不況の中にあり、就職も困難を極めた。



第1回卒業式 卒業証書授与

24/100

1976 (昭和51) 年

仙台電波高専、南寮竣工

Change of 

仙台電波高専の愛子移転に伴い定員200名の寄宿舎 (学寮) が新設され、1974 (昭和49) 年8月30日開寮した。寮の名前はそのまま「松韻寮」を継承した。当初は牧場跡地の

北寮のみで、入寮希望者全員を収容することができず、1・2年生と3年生以上は通学・下宿が困難な学生を優先的に入寮させた。

移転後間もなく学寮の増設が認

められ、1975年10月より北寮の南側に北寮と全く同じ内容と構造の寮 (南寮) の建設に取りかかった。3月26日竣工、北寮を本館、南寮を新館と称した。南寮は鉄筋コンクリート造り5階建てで各階4室、渡り廊下で北寮と接続され、さらに80名が入寮できることになった。同月31日には、野球場と陸上競技場も竣工し、新天地愛子での学校環境が整備された。

1977年に電子工学科、1978年に情報工学科が新設されるに及んで寮生も増加、1980年3月には南寮を増築した。



北寮と竣工間もない南寮

25/100 1977(昭和52)年 仙台電波高専、電子工学科設置と電子計算機室竣工 Change of

仙台電波高専は、創設以来優秀な卒業生を送り出し、電波通信界の発展に大きく寄与してきた。高専昇格後の電波通信学科もその流れをくみ、時代に要求される上級無線従事者の養成を目標として発足した。しかし、その後の社会の発展と変革に伴い、船舶通信士の需要が激減し、また通信技術の著しい革新により、通信士に必要な能力にも変革が迫られるようになった。電波通信学科の卒業生のうち船舶通信士として就職したのは、1期生において5名、その後も減少傾向にあった。また1960年代において通信士として最も大切な能力とされていたモールス信号送受信技術は国際的に縮小され、代わって新しい通信機器や通信システムを取り扱う能力が要求されるようになっていた。この

ような社会情勢に基づき、1976(昭和51)年4月、電波通信学科2学級を通信運用系と電子工学系の2コースに分け、カリキュラムの改訂を行った。さらに1977年4月、電波通信学科2学級のうち1学級を改組して電子工学科を創設、電子工学科1期生40名が入学した。翌1978年3月31日、電子工学科研究実験棟が竣工した。鉄筋コンクリート造り2階建て延べ712㎡で、1階には電子工学基礎実験室・デバイス実験室・精密測定実験室・特別実験室・工作室ほか、2階には電子計測工学実験室・電子制御工学実験室・特別実験室などが設けられた。電子工学科が設置されたのと相前後して1977年3月31日には電子計算機室が竣工した。1973年に

OKITAC4300Cの導入に伴って軽電算機室を設置していたが、ここに電算化が本格的に始動したと言える。教育用電算機として汎用コンピュータFACOM230-28システムを導入、OKITACを用いていたプログラミング教育をFACOMに移行した。FACOMは、連日21時まで学生に開放され、多くの人材が育っていった。1979年には、電子計算機室設備を地域社会にも役立ててもらうために、公開講座「情報処理技術公開講座」第1回を開講した。折から、海運不況と通信技術の革新により、電波通信学科が養成する無線通信士の就職先が少なくなり、ソフトウェア業界からの求人が増え始めていた。



電子工学科1期生(1981年度卒業式)



汎用コンピュータFACOM 230-28



電子計算機室外観



第2回情報処理技術公開講座(1981年8月3~8日)

26/100 1978(昭和53)年 仙台電波高専、情報工学科設置、3学科体制に Change of

1978(昭和53)年4月、仙台電波高専は電子工学科に続いて情報工学科を新設、3学科体制となった。高専として発足以来、卒業生の就職先は、電波通信関係が3分の1、電子工学関係が3分の1、残り3分の1は情報工学関係であった。電波通信技術そのものがこれら3学科の内容を包含して進展してきたといえる。1978年4月10日、電波通信学科40名、電子工学科39名に加え、情報工学科40名を迎えて第8回入学式が行われた。情報工学科研究実験棟は、1978年8月に着工、1979年3月15日に竣工した。建物面積は1,699㎡、鉄筋コンクリート造り3階建て一部2階建て。1977年に完成した電子工学科研究実



当時の学校とその周辺

験棟および研究実験棟とは、1階・2階が渡り廊下で接続された。1階にソフトウェア教育施設と講義室5室、2階にはハードウェア教育施設と講義室、3階には教官研究室と大講義実験室が設置された。

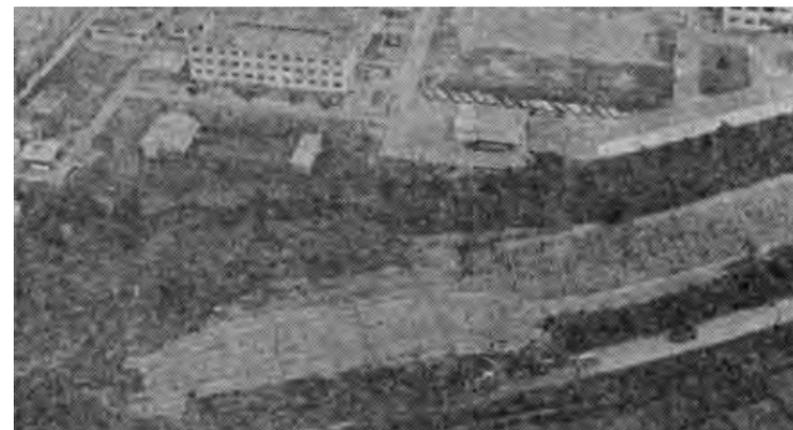


情報工学科1期生(1982年度卒業式)

27/100 1978(昭和53)年 宮城高専、宮城県沖地震で甚大な被害 Change of

1978(昭和53)年6月12日17時14分、宮城県金華山沖の海底でマグニチュード7.4の地震が発生し、仙台市などで震度5(強震)を観測した。老朽化したブロック塀の倒壊、

1960年代に造成された新興住宅街の地盤崩壊など、宮城県内(特に仙台市)を中心に大きな被害が生じた。宮城高専でも、北側石積擁壁の亀裂および膨らみが約50mにわたっ



地震で崩壊した南側法面コンクリート擁壁

て発生、1号館・2号館・3号館や体育館、実習工場などの建物においても壁に亀裂が走り、梁プラスターが剥離するなど甚大な被害を受けた。また、構内アスファルト道路の亀裂1,802㎡、駐車場コンクリート亀裂262㎡に及んだほか、物品破損による損害額も約1,500万円に上った。1978年12月8日、災害復旧工事に着手した。工事内訳は、南側のり面鉄筋コンクリート造り擁壁、地下排水溝工ドレーン伏設、のり面排水U形側溝伏設、北側鉄筋コンクリート造り擁壁、道路復旧など多岐に及んだ。

28/100 1980 (昭和55)年 仙台電波高専、汎用コンピュータ MELCOM COSMO 700S 導入 Change of

仙台電波高専情報工学科において、1978 (昭和 53) 年の学科新設以来着々と設備面の充実が進み、1979 年には、情報処理実習のための電子計算機の新設が認可された。

情報工学科 10 年の将来を左右するものであることから、機種選定に際しては、あらゆる角度から議論と

検討を重ね、1980 年、汎用コンピュータ MELCOM COSMO 700S システムを導入した。これにより、仙台電波高専は、全国の大学・高専においても屈指の情報処理教育設備を誇ることとなった。

MELCOM は電子計算機室の管理とし、電子計算機室は、電子計算機

室棟にある FACOM と情報工学科研究実験棟内に設置された MELCOM、軽電算機室の OKITAC、電波通信学科の設備である HITAC20 とを管理する組織となった。その後、MELCOM には COMPS プログラムを組み込み、1981 年には電波通信学科の HITAC20 システムと通信ケーブルで結ばれた。



汎用コンピュータ MELCOM COSMO 700S



TSS 端末室

29/100 1980 (昭和55)年 宮城高専、入学記念講演会開催 Change of

宮城高専では、1980 (昭和 55) 年度より、入学式直後に記念講演会を開催することとした。新入生がより充実した高専生活を送れるように、また、生涯の記念として心に残るようという趣旨である。

1980 年度の第 1 回記念講演は、日本金属学会附属博物館長の今井勇之進東北大学名誉教授を招き、「社会の欲する人びと」との演題で行われた。以後、塚本哲人東北大学教授 (演題「現代と若者」)、諸岡晃治東北リコー株式会社取締役社長 (演題「これからの技術者への期待」)、加藤陸奥雄宮城県美術館長 (元東北大学学長) (演題「自然と人間」) などを講師に招いた。



入学式後の記念講演会

30/100 1981 (昭和56)年 仙台電波高専、創立 10 周年記念式典、『創立十周年記念誌』発行 Change of

1981 (昭和 56) 年 11 月、6 日・7 日の 2 日間にわたり仙台電波高専の創立 10 周年記念行事が開催された。

前年度の 5 月、学校・同窓会・後援会が一体となって、実行委員会 (委員長: 柴山正男教授) を設置、全校を挙げて周到に準備が進められた。記念事業は、単に仙台電波高専の 10 周年の節目を祝うのみならず、創立の母体となった電波高校、さらには東北無線通信講習所等の時代からの 40 年の歴史を顧み、将来の発展に寄与することを基本方針とした。

記念行事の主なもの、11 月 6 日の広中平祐京都大学数理解析研究所教授による記念講演 (演題「若者の主体的な生き方」) と 7 日の記念式典であった。式典には、多数の来賓のほか、同窓会役員・後援会役員・全



創立 10 周年記念式典 朝の風景 (1981 年 11 月 7 日)



創立 10 周年記念式典 校長式辞

教職員および在校生合わせて 800 余名が出席、続いて祝賀会が行われ、『創立十周年記念誌』と記念品が配布さ



祝賀会 (無線放浪歌斉唱)

れた。式典に先立って同窓会より寄贈された新校旗の樹立式が行われた。

31/100 1982 (昭和57)年 仙台電波高専、全国高専体育大会主管 Change of

1982 (昭和 57) 年 8 月、第 17 回全国高等専門学校体育大会が仙台電波高専の主管で行われた。9 日、東北大学の記念講堂で開会式が行われ、開会宣言とともに吹奏楽部員によるファンファーレが鳴り響くなかで、全

国 62 高専の校旗の入場行進が行われた。引き続いて仙台電波高専の学生たちによる歓迎会が開催された。歓迎会では、学生会長挨拶、郷土紹介のスライド上映、プラスバンド演奏など、学生会の創意と機知に富んだ演出が

全国からの参加者の感動を呼んだ。

競技は 10 日・11 日の両日にわたり、バスケットボール・バレーボール・軟式庭球・卓球・柔道・剣道の 6 種目において熱戦が繰り広げられた。



第 17 回全国高等専門学校体育大会 開会式直前 (東北大学記念講堂前)



選手宣誓

32/100 1982 (昭和57)年 宮城高専、第1回公開講座開催

宮城高専では、地域社会の文化向上に資することを目的として、1982 (昭和57)年より公開講座を開設した。第1回は建築学科が中心となって準備を進め、地元名取市の社会教育課と共同で企画した。市民から要望のあった住まいの問題を取り上げ、特に「住まいと安全」をテーマに講座を開催した。日程は8月24日から27日まで、「住まいと地震」「住まいと公害」「住まいの寿命」「住まいと火災」の4回の講座とした。参加者は建設業や元教員らをはじめとして主婦が多く、次年も続けてほ

しいとの意見が多数寄せられた。翌1983年度は、2回にわたって「パソコン入門講座」を開催、地域住民に喜ばれた。以降もOA化・FA化が押し寄せつつある社会の現状を踏まえ、高度情報化時代の要請



パソコン入門講座

に應えるため、「初心者のためのパソコン教室」や「CADによる機械製図入門講座」などを中心として、教養・スポーツなど幅広い公開講座を実施、回数も増やした。



テニス教室

Change of 

33/100 1983 (昭和58)年 仙台電波高専、女子寮竣工

仙台電波高専は、他の高専と比較して女子学生が多いことが特徴の一つであり、年々微増傾向にあった。1979年(昭和54)4月、初めて3名の女子が入寮、暫定的に北寮1階に入居した。1980年に増築した南

寮の1階東側には4人部屋4室、定員16名の女子寮を設けたが、翌年には入寮希望者全員を受け入れることが難しくなった。

そのため、新たに独立した女子寮を建設することとなり、1983年3

月、4階建て延べ面積900㎡の新女子寮が竣工した。定員50名、和室には華道・茶道の道具一式が置かれ、華道・茶道の教室も開かれた。これにより既設の北寮・南寮と合わせて3寮体制となった。

女子学生増加の傾向は、1989(平成元)年に電波通信学科の名称を情報通信工学科に変更したことで一層著しくなり、専用シャワー室などのハード面での拡充と併せて男女交際の指導など、さまざまな面において対策を迫られることになった。



女子寮内での茶道教室

Change of 



女子寮東側 (1983年3月31日竣工)

34/100 1983 (昭和58)年 国際協力の開始と外国人留学生の受け入れ開始

■ 仙台電波高専、フィリピン留学生受け入れ

1983 (昭和58)年、文部省は東南アジアからの国費留学生を高専に受け入れることを決定した。高専が関わりをもった最初の技術協力プログラムは、マニラにあるフィリピン工科大学総合技術訓練センタープロジェクトである。同センターは、日本政府の無償資金協力により同年に建設され、5年間にわたって専門家の派

遣と研修生の受け入れが行われた。仙台電波高専も、1983年に、短期に専門家を派遣したのをはじめ、延べ4名の長期・短期の専門家とアフケア調査団員を派遣した。専門家は、主にフィリピン工科大学教官に対して、技術教育の一環としての実験指導と学生実験用テキストの作成指導などに当たった。1987年に

は同センターより研修生1名を受け入れた。1986年にはインドネシアの留学生2名を受け入れ、以後は、インドネシア・フィリピンの国費留学生およびマレーシア政府派遣学生を受け入れた。

これら留学生のために、1986年3月、南寮1階の女子寮を留学生寮に模様替えした。



仙台を離れる留学生1期生



留学生2期生

■ 宮城高専、インドネシア留学生受け入れ

宮城高専では、1983 (昭和58)年より、国際協力機構 (JICA) を通じて海外の技術教育への協力が開始された。同年インドネシアから2名の国費留学生を初めて受け入れ、機械工学科3年に編入した。留学生の宿舎には南寮が充てられ、学校での学業のみならず、留学生と寝食を共にすることで、学生の視野も国際的な広がりをもつことが期待された。

翌1984年には、中国・インドネシアから国費留学生2名とマレーシア政府派遣留学生3名を受け入れ、電気工学科・建築学科・金属工学科にそれぞれ編入した。



留学生

宮城高専の積極的な国際交流貢献に対して、1985年5月5日、在日マレーシア大使館教育・研修担当官が視察に訪れた。翌年12月3日にも、

マレーシアのワン・アンソール東方政策委員長を団長とするマレーシア政府高官5名が宮城高専を視察した。

35/100 1983 (昭和58)年 宮城高専、福利施設 (萩工会館) 竣工



宮城高専では、愛島移転後の1967 (昭和42)年3月に、鉄骨造り平屋建ての学校食堂 (167㎡) が完成、売店とともに業者に委託して運営した。学校の発展に伴い、食堂・厨房の狭隘から混雑が甚だしくなり、これを解消するために、1977年には272.16㎡の1棟を新たに建設、食堂・売店が移転した。

1982年、かねて要望していた福

利施設の予算措置が認められ、翌83年3月31日、萩工会館が竣工した。建設場所は、旧学校食堂の南側空き地である。前年の12月に着工、延べ面積844㎡で鉄筋コンクリート造り2階建てであった。1階は食堂・厨房・喫茶室・売店・談話コーナーになっており、2階にはミーティング室・課外教育共用室・保健室・女子更衣室・和室・相談室が設けられ

た。食堂南側は広々としたテラスになっており、天気の良い日は学生や教職員の憩いの場所となった。



福利施設 (萩工会館)

36/100 1983 (昭和58)年 宮城高専、創立20周年記念式典、『創立二十年誌』発行



1983 (昭和58)年、宮城高専は創立20周年を迎え、10月22日、第一体育館において創立20周年記念式典を挙行了。式典は、衆議院議員戸田菊夫・伊藤宗一郎・愛知和夫 (代理人出席) をはじめ、文部省関係者や石田名香雄東北大学学長・高橋正仙台電波高専校長ら国立学校関係者、山本壯一郎宮城県知事、永野為武宮城県教育委員長、石田次夫名取市長ら約100名の来賓を得て盛大に行われた。山口格校長が式辞を述べた後、瀬戸山三男文部大臣 (代読) と来賓の祝辞が続き、20周年を祝った。

式典に続いて、初代校長である黒川利雄財団法人癌研究会付属病院名誉病

院長を招き、記念講演を行った。黒川は、1958年に宮城県対がん協会会長に就任し、胃がんの集団検診を全国に先駆けて開始したことで知られている。1968年文化勲章・文化功労賞、1974年に勲一等旭日大綬章を授与された。胃がん集団検診の普及発展に貢献した黒川らしく、「健康を保つには」と題した記念講演では、「19世紀末 (1897年) に生まれたので三世紀にわたって生きたい」と話し、聴衆を沸かせた。

さらに午後からは第二体育館に会場を移して祝賀会が開催され、一日中祝賀ムードに包まれた。

記念式典・祝賀会に先立って、同年3月26日には、正門近くに記念碑



校歌歌碑 (昭和59年3月30日、創立20周年記念として建立)

を建立した。第1回卒業生丹野伊三郎の寄贈によるもので、論語から「学びて厭わず、誨えて倦まず」という文言を3月に退官する川上房義校長が選んで揮毫したものであった。4月11日、河上前校長と寄贈者の丹野をはじめ、全教職員と学生が参列して除幕式が行われた。翌1984年3月30日には、当校の早坂茂教授の揮毫による創立20周年記念校歌歌碑が建立された。

また、1983年10月20日に「記念誌」の発行、記念式典1週間後の10月22日・23日には創立20周年記念の高専祭が開催された。「復活」という統一テーマの下に、各科の公開展示と催し物が行われた。



創立20周年記念式典



記念碑 (1983年3月26日建立)

37/100 1985 (昭和60)年 仙台電波高専、電子制御工学科設置、4学科体制に



1980年代に入り、産業界を中心とする社会情勢の急激な変化により、メカトロニクス技術の急速な進展に対応できる技術者の養成が急務となった。また、1986 (昭和61)年度以降の18歳人口の急増への対応も必要であった。仙台電波高専では、これに対応し実践的専門技術者を養成するために、電子制御工学科の設置が計画された。文部省大学設置審議会高専分科会の検討を経て、1985年4月、電子制御工学科を設置、4学科体制となった。

電子制御技術すなわちメカトロニクス技術は幅が広く、奥深いものがある。5年間の限られた時間内で、電子制御に必要な基礎科目の修得

を目指し、できるだけ実験・実習を通して体験できる教育内容を充実させることとした。技術教科において4学科に共通でコアとなる部門が多

く、施設・設備の有効利用が可能であった。さらに新しい時代に対応した教育環境の整備・充実に一層取り組んでいった。



電子制御工学科1期生 (1990年度卒業式)

38/100 1986 (昭和61)年 仙台電波高専、厚生会館完成



1980年代は、仙台電波高専においては施設の拡充が進んだ。1984 (昭和59)年1月、第二体育館が竣工、1986年3月には学生待望の厚生会館が完成した。2階建てで、食堂・保健室・和室・売店・共用室・学生談話室などを備えた。厚生会館は、全体に窓を大きく取り、クリーム色の

外装を施したモダンで明るい建物であった。特に広い食堂は、明るく清潔で多数の教職員・学生を収容でき、昼食時の社交の場として親しまれた。

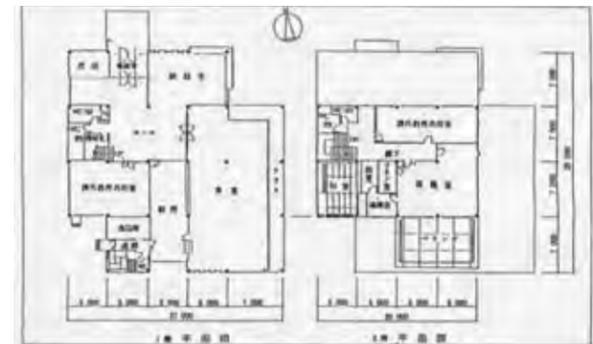
厚生会館の完成に伴って、これまでの食堂を改装し、新たに学生会室・応援団室・吹奏楽部室などとして使われ、学生の活動の場として大いに

利用されることになった。

その後も、事務局や施設委員会、後援会などの尽力により、管理棟から厚生会館への渡り廊下の敷設、陸上競技場フィールド表面の整備、ハンドボールコートの増設、武道館の改修、シャワー室の設置など、さまざまなハード面での充実がなされた。



ハード面が拡充された校舎 (1986年頃)



厚生会館平面図 (1986年竣工)

39/100 1986 (昭和61)年 仙台電波高専、全国高専サッカー選手権大会主管

1986 (昭和 61) 年、第 19 回全国高等専門学校サッカー選手権大会が仙台電波高専主管で行われた。高専体育協会と日本サッカー協会の主催により、仙台の県営サッカー場を主会場として、8月19日より5日間にわたる大会であった。

大会の運営については、1984年から校内実行委員会を中心に準備を進め、宮城県サッカー協会とのチームワークにより成功を取めた。特に開会式では、夏休みを返上して吹奏楽部と学生会が準備を進めた。学生達は大会中もグラウンド整備や来仙校の出迎え、練習場や宿舍の案内などに裏方として大いに活躍した。

仙台電波高専サッカー部は、1回



第 19 回全国高等専門学校サッカー選手権大会 開会式

戦では苦小牧高専と対戦、苦戦しながらも 2 - 1 で初出場初勝利を飾った。2回戦では、準優勝校の大分高専を相手に善戦したものの敗北した。

40/100 1986 (昭和61)年 宮城高専、金属工学科を材料工学科に改組

宮城高専の金属工学科は、設置が他学科に5年遅れたこともあって一般社会や企業への周知度が不十分であった。設置当初から入学志願者数が少なく、定員割れが慢性化する傾向にあった。また、オイルショックによって金属工業界の活力が低下したことなども重なって、金属関連種からの求人数も低迷していた。その

ため、企業や中学校へのPRに努め、カリキュラムの見直しなどの改善を重ねた。特に1980 (昭和 55) 年度・1881 年度には、「金属工学科将来の在り方を踏まえた教育内容・方法の改善」プロジェクトに取り組み、大幅なカリキュラムの再検討を行った。その結果、機械工学・電気工学の素養をもった金属技術者の養成をすべ

きであるとの結論を得、教育内容の改善が行われた。

一方、産業構造の変化が著しく、金属材料のみならず広範な材料を理解できる材料技術者養成の必要性が高まっていた。文部省大学設置審議会高等専門学校分科会でも、より幅広い材料工学関係の学科への改組を強く希望していた。

金属工学科の現状と材料工学の将来像を展望し、社会の要請に十分に應えるために、1986年、宮城高専は金属工学科を材料工学科に改組した。材料工学科では、実験・実習や演習に重点を置き、豊かな基礎学力を有し、多様化する材料に柔軟に対応できる技術者の養成を目指した。



電子顕微鏡室の 200kv 透過型電子顕微鏡



電子材料実験室のスパッタ装置

41/100 1987 (昭和62)年 仙台電波高専、電子制御工学科研究実験棟竣工

1987 (昭和 62) 年 3 月、仙台電波高専では電子制御工学科研究実験棟が竣工した。電子工学科は 1985 年に新設されていたが、新校舎の建設が間に合わず、当初は大講義室を仕切って 2 クラス分の教室にしたり、ゼミ室を教室に利用したりするなど、しばらくの間は不自由な状態が続いた。

学科設置より 2 年遅れての完成となった研究実験棟は、4 階建てで総面積 2,850m²、電子制御工学科と情報工学科全クラス分の教室のほか、研究室・実験室などがある。情報工学科の教室が新棟に移転したことにより、情報工学科の教室として使用していたところは、研究室・実験室に転用した。



電子制御棟竣工後の学校全景

42/100 1988 (昭和63)年 宮城高専、女子寮新築

女子学生の増加に伴い女子寮不足の解消のため、1988 (昭和 63) 年 3 月、女子寮が新築された。個室 18 室、2 人部屋 9 室が設けられた。寮内の自治を尊重しながら、お互いを磨く人間形成にも寮の存在は大きな役割を果たした。

翌 1989 (平成元) 年には、男子寮も改築され、個室と 2 人部屋のみとなった。



新築された女子寮 (個室 18 室、2 人部屋 9 室)

寮の年度別定員・現員一覧

年度	学年	1	2	3	4	5	現員合計	定員
昭和59年度		73	33	47	33	30	216	263
60		56	48	31	39	31	205	〃
61		40	27	41	27	30	165	〃
62		45	29	25	38	25	162	〃
63		40	23	29	28	40	160	196
平成元年度		45	30	24	27	26	152	〃
2		50	36	30	24	30	170	〃
3		50	38	32	25	23	168	〃
4		44	40	33	30	24	171	〃
5		46	37	38	29	22	172	〃

時代を読む

昭和の終焉。平成へ改元

前年より療養を続けられていた昭和天皇は、1989年1月7日崩御、直ちに皇太子明仁親王が即位し、平成と改元された。昭和天皇は現人神から象徴天皇として激動の昭和を生き、歴代天皇の最長在位を記録した。2月24日大喪の礼が執り行われた。

43/100 1988 (昭和63) 年 宮城高専、創立 25 周年記念式典挙行



1988 (昭和 63) 年、10 月 19 日、宮城高専は第 1 体育館において創立 25 周年記念式典を挙行了。式典では、開式のことばに続いて国歌斉唱があり、山口格校長が式辞を述べた。その後、卒業生 4 名による記念講演が行われた。演題と講演者は右のとおりであった。

記念講演の後、校歌を斉唱し閉式となった。

- 演題「今、犯罪社会的技術屋が面白い」
講演者：機械工学科第 2 回卒業生
高橋久幸 (いすゞ自動車株式会社大型車設計部)
- 演題「日本の電気通信と ISDN」
講演者：電気工学科第 1 回卒業生
高橋進一 (NTT 関東総支社設備企画部局外設備課長)
- 演題「東京ドームにおける新技術・新工法」
講演者：建築学科第 5 回卒業生
丹野吉雄 (株式会社竹中工務店東京本店設計部構造課長)
- 演題「社会人 14 年生」
講演者：金属工学科第 3 回卒業生
三浦忠喜 (株式会社トーキン金属材料事業部製鋼課)

44/100 1988 (昭和63) 年 ギター部ジョイント・リサイタル



1989 (平成元) 年 1 月 14 日、宮城高専・仙台電波高専ギター部ジョイント・リサイタルが、仙台市内の 141 ビル 6 階スタジオホールで開催された。

宮城高専ギター部は毎年定期的にコンサートを開いていたが、1988 (昭和 63) 年度は仙台電波高専への呼びかけにより同高専ギター部が参加、初のジョイント・リサイタルとして行われた。これまでになかったイベントに向けて両高専の学生会とギター部が協力し合って実現、当日は聴衆 1,000 名が詰めかけ、大成功を収めた。

以後、両高専のギター部のジョイント・リサイタルは恒例の行事となった。



ギター部の第 1 回ジョイント・リサイタル

時代を読む

青函トンネルの開業

1988 年 3 月 13 日、世界最長の海底トンネル「青函トンネル」を通る鉄道 (津軽海峡線) の営業が始まった。青函トンネルは、昭

和 14 ~ 15 年に構想が計画され、昭和 39 年 5 月に北海道側吉岡調査斜坑が着工。その後、昭和 60 年 3 月に本坑が全開通した。総延長 53.85 キロ、海面下 240 メートルの青函トンネルの建設は、6,890 億円を投じ「正規の大事業」と呼ばれた。

45/100 1989 (平成元) 年 仙台電波高専、電波通信学科を情報通信工学科に改称



1989 (平成元) 年、仙台電波高専では、電波通信学科を情報通信工学科と改称した。背景には、高度情報化社会の急速な発展がある。1980 年代、モールス通信は陸上や航空関係の移動体通信から姿を消した。船舶無線通信においても、モールス無線通信に代えて 1992 年に全世界的な海上遭難安全システム (GMDSS) が導入され、1999 年 2 月に完全実施されることにより、完全に消え去ることになった。

仙台電波高専では、1984 (昭和 59) 年から、電波通信学科改善検討委員会を設け、新しい時代の通信技術者の育成について検討を重ねた。



情報通信工学科 1 期生 (1993 年度卒業式)

その結果、従来のカリキュラムを抜本的に改訂し、学科名称も情報通信工学科と変更して発足することになった。情報通信工学科は、電波通

信学科の流れを引き継ぎ、基礎学力をしっかりと身に付け、高度情報化に柔軟に対応できる国際的な人材を育成することを目的とした。

46/100 1990 (平成2) 年 仙台電波高専、全国高専ロボット・コンテスト優勝



「アイデア対決 全国高専ロボット・コンテスト」は、経費や重量など一定の条件の下にロボットを作り、毎年違ったルールに基づいて競うコンテストである。NHK が主催し、第 1 回は 1988 (昭和 63) 年に開催された。

1990 (平成 2) 年 8 月 22 日、代々木体育館で行われた「第 3 回全国高専ロボット・コンテスト」において、仙台電波高専の 5 年生が中心となって制作した「テト坊」が初優勝を遂げた。「テト坊」とは、4 つのボールを抱えることからラテン語で 4 を意味する「tetra」に「ball」を合わせた「tetra-ball」に由来する。斬新なアイデアで順調に勝ち上がり、決勝では久留米高専の「スットンピノビ号」と対戦、やり直しの末の再試

合となる白熱した競技を繰り広げ、見事優勝を勝ち得た。

「テト坊」の活躍は、後日テレビを通じて全国に放映された。また、みやぎ工業フェスティバルにも出品され、その後は長く学生談話室に展示された。



テト坊



全国高専ロボットコンテスト (代々木体育館)

47/100

1991 (平成3) 年

仙台電波高専創立 20 周年記念式典、『創立二十周年記念誌』発行

Change of 

仙台電波高専は1学科ずつ増設を行いながら常に発展を続け、1991 (平成3) 年、創立 20 周年を迎えた。これを記念して、さまざまな記念事業を開催した。記念事業の主なもの、記念式典と講演会、記念誌の発行であった。

創立 20 周年記念式典は、10 月 9 日、第一体育館において、1,170 名余りが出席して盛大に行われた。山田竹實校長の式辞と浅野榮後援会会長・桐原武彦同窓会会長の祝辞に続いて、元校長の平原榮治・高橋正 (当日は欠席) と梅津英彦・中川一郎名誉教授に特別功労者表彰状が贈呈された。

式典に引き続いて、1989 年の文化勲章を受章した西澤潤一東北大学学長を招き、記念講演会を開催した。講演は「日本の電波研究」と題して日本の技術開発について紹介、「一生懸命でことに当れば、何でもできる」「才能ではない。夢中になって努力することが大切です」と訴えた西澤教授の言葉は、教職員・学生に大きな感銘を与えた。

午後は、仙台市広瀬市民センターに会場を移して記念祝賀会を開催した。記念式典に先立って、同日午前



創立 20 周年記念式典

9 時より学園広場において記念植樹と記念碑の除幕式が行われた。1889 年度・1990 年度の卒業生より寄贈されたギンモクセイ 3 本を、山田校長と両年度の卒業生代表が学園広場の武道館横に植樹した。続いて、同窓会より寄贈されたモニュメント「空へ」の除幕式が行われた。タイムカプセルを内蔵したモニュメントは、彫刻家であり国際的金属造形作家である小田襄が制作した。小田はステンレスを使った作品で知られ、「空へ」も、仙台電波高専の限りない発展と開かれる未来、時空を超える永遠を、ステンレス・スチールを用いて表したものである。

記念式典が行われた 10 月 9 日に合

わせて、『創立二十周年記念誌』を発行した。『創立二十周年記念誌』は、渡辺英夫教務主事を編集委員長とする編集委員会が中心となって編集に取り組み、特に近 10 年の歴史・資料を丹念に整理し、先の『創立十周年記念誌』と規格・体裁をそろえた。また、創立 20 周年記念品として、テレフォンカードを作製、在校生と教職員全員に配布した。

変化の波にさらされながらの 20 年であったが、常に発展を続けて清新さを失わない高専、つまりは“発展途上高専”として、さらなる発展に向けて歩むことを誓う記念の年となった。



創立 20 周年記念講演会



モニュメント「空へ」除幕式



『創立二十周年記念誌』

48/100

1991 (平成3) 年

宮城高専、二専門履修コース設置

Change of 

産業界の期待により応えられる技術者養成のあり方を検討し、異なる 2 つの専門分野を履修した卒業生を輩出するコースを二専門履修コースとして設置し、高専本科の卒業生を受け入れた。

第 1 回生は機械、電気、建築、材料の各学科から 10 名が、異なった分野へ進学し、卒業後は職業に必要な 2 つの専門を修めた技術者として、特に地域の企業から高い評価を受けている。専攻科発足まで学生の募集が行われ、養成する技術者像の理念は専攻科に受け継がれている。

留学生・編入学者・二専門学生数一覧

年次	留学生数 (括弧内女性)					工業高校編入者数				二専門履修コース学生数						
	インドネシア	マレーシア	フィリピン	タイ	中国	計	機械工学科	電気工学科	建築学科	材料工学科	計	機械工学科	電気工学科	建築学科	材料工学科	計
1983		2				2					0					
1984	1	3			1	5					0					
1985		3				3					0					
1986		2			1	3	1				1					
1987	1	2(2)				3		2			2					
1988		1			1(1)	2		2			2					
1989	1		1	1		3	1	2			3					
1990	1	1(1)				2		2			2					
1991		2				2		2			2	4	3	2	1	10
1992	1(1)	1				2	2	2		1	5	3	2	3	1	9
1993		1				1	2	2			4	4	2	2	3	11
計	5	18	1	1	3	28	6	14	0	1	21	11	7	7	5	30

49/100

1991 (平成3) 年

宮城高専、海外校との学術交流協定締結

Change of 

宮城高専では、1991 (平成3) 年 10 月 29 日、大韓民国・仁荷工業専門大学の閔庚和学長ら一行が来校し、同大学と学術交流協定を締結した。1993 年には、金文喆学生部長ほか教官 1 名と学生 2 名が来校、学術交流に加えて学生交流を行った。この学生交流は後に短期留学生交換

事業に発展することになる。

1998 年 10 月にはフィンランドのヘルシンキ・ポリテクからアルト・ハーバニエミ教授ら 2 名が、学術交流協定締結の打ち合わせのためにフィンランド大使館員と共に来校した。ヘルシンキ・ポリテクとの打ち合わせは 3 度に及び、2002 年

3 月 26 日に学術交流協定の締結に至った。

また、ドイツ・FFB (Felix-Fechenbach-Berufskolleg) 校とも学術交流協定の話を進め、2003 年 3 月 18 日同大学と学術交流協定を締結した。

50/100

1992 (平成4) 年

宮城高専、自己評価委員会発足

Change of 

1991 (平成3) 年、「高等専門学校設置基準」が改正され、新たに「自己点検・評価活動」が加えられた。宮城高専ではこれを積極的に受け止め、1992 年 1 月宮城工業高等専門学校自己評価委員会を発足させた。同年 5 月、教職員が丸一となって「第 1 回自己点検・評価報告書 (宮城高

専の現状と未来)」をまとめたのをはじめとして、自己点検・評価関連の報告書を刊行した。1996 年度には初めて学生による授業評価アンケートを実施、1997 年度からは、自己点検・評価報告書に含めることとした。

1999 年、前年に発足した専攻科を含めた新たな高等専門教育機関とし

ての外部評価を実施した。さらに、一般社団法人日本技術者教育認定機構 (JABEE) による 2001 年の試行審査、2002 年度の本審査を通して、評価から改善への動きを確かなものにするために、2003 年度より、自己評価委員会を評価・改善企画委員会と名称を改めた。

51/100 1992 (平成4)年 仙台電波高専、1日科学館実施



1992 (平成4)年9月12日より、公立の小・中学校と高等学校では学校週5日制が始まった。文部省 (現: 文部科学省) は、「9・12 サタデープラン」の呼称の下、官公庁や教育機関、民間団体などに対して土曜休日の受け皿づくりの協力を求め、これを受けた都道府県市町村教育委員会もそれぞれのイベントを行った。

仙台電波高専では、9.12 サタデープラン参加イベントの一つとして、同日午後、「仙台電波高専・科学館」を

開催した。この科学館では、普段学生が学習しているものから、誰が見ても驚くような楽しくて不思議な科学現象をいくつかピックアップして参加者に体験してもらった。テーマは、「電車が走る、曲がる」「真空の世界一空



1日科学館開催、手回し発電の原理、腕力テスト

気が無くなる?」「超音波による液体霧化作用の観察」「高温超伝導体」などの14に及んだ。当日は、県外からの参加者も含めて小・中学生を中心に126名が集まり、科学の不思議に大きな歓声を上げていた。



高温超伝導の展示

52/100 1993 (平成5)年 仙台電波高専、専攻科設置と専攻科研究実験棟竣工



科学技術の進展によりエンジニアリングの内容もより高度化し、実践的技術者の育成も高専の5年間の課程では覆いきれないものとなってきた。また、高専卒業生の進学意欲も強く、それに応えるために専攻科の設置や大学院への進学ルートの新設、大学への編入学枠を拡大しようとする動きも浮上してきた。これらのことを背景に、1991 (平成3)年4月、学校教育法の一部改正により高等専門学校においても専攻科の設置が認められた。これにより修了生は学位授与機構の審査を経て学士号を取得できることになった。

1993年4月、仙台電波高専においても専攻科を設置した。東北地区の高専で専攻科の設置が認可されたのは唯一仙台電波高専のみであった。

仙台電波高専の本科は、電子・情報系の4学科で構成されていることから、専攻科には、電子システム工学

専攻と情報システム工学専攻の2専攻を置いた。電子・情報エンジニアリング教育課程の体系的教育を行い、高専の実践的技術を駆使した研究開発能力・創造能力の育成を目指した。

1993年9月22日、専攻科の設置を記念し、ホテル仙台ガーデンパレスにおいて記念講演会と祝賀会を開催した。講演会は、三浦宏文東京大学工学部教授を招き、「知能ロボットのゆくえ」と題して行われた。その後記念祝賀会に移り、専攻科の充実と発展を期した。

専攻科発足3年目の1996年1月、専攻科研究実験棟が竣工、同年4月より本格的に使用を開始し

た。場所は電子制御棟の西側で、鉄筋コンクリート造り3階建てで、総面積は938.64㎡である。1階と3階は空調付きの実験室・演習室、2階は教員室3部屋と講義室2部屋で、少人数用のセミナー室も3階に配置されている。講義室の一つにはAV機器を備え、放送大学の授業も含めて専攻科の授業は全てこの実験棟で行えるようになった。1階は電子システム工学専攻用に電子工学科・電子制御工学科の装置の一部を配し、3階には情報システム工学専攻のためにワークステーションを中心とした研究・教育施設が情報通信工学科と情報工学科から移った。



専攻科1期生入学式



記念講演会



記念祝賀会

53/100 1993 (平成5)年 宮城高専、情報デザイン学科設置と情報デザイン学科棟竣工



1993 (平成5)年4月、宮城高専では情報デザイン学科を新設、機械工学科・電気工学科・建築学科・材料工学科・情報デザイン学科の5学科体制となった。情報デザイン学科は、感性の時代とも言われる21紀を目前にして、変わりつつある現代に対応できる実践的デザイナーの養成を目的とした。同年4月8日、入学式を挙げる、新設の情報デザイン学科には1期生42名 (男子11名・女子31名) が入学した。

情報デザイン学科は、情報・感性・環境をキーワードとして、①デザインマインド、②デザイン技術者としての基礎的資質、③スペシャリスト・デザイナーとしての素養、④ジェネラリスト・デザイナー、の4点を目標に設定、幅広い分野で活躍できる新しいタイプの技術者の育成を目指した。発足後も、社会のニーズに応えるべく継続的にカリキュラムの改訂を行った。

「情報デザイン」または「デザイン情報」という名称の学科は高専では唯一のものであり、大学を含めても数えるほどしかなかった。情報デザイン学科の設置は、「情報科学をパイナダーとした芸術と工学の統合」をキャッチフレーズに、未来を先取りして生まれ変わりつつある宮城高専



情報デザイン学科の新入生

を象徴するものであった。

1995年2月15日、情報デザイン学科棟が竣工、3月23日に竣工披露式を挙げる、新設の情報デザイン学科棟は宮城高専初の4階建てで、その後の宮城高専キャンパスの建物整備計画の基本モデルとなった。タイル張りの外壁が目をはく建物である。



造形基礎の実習



情報デザイン棟竣工

時代を読む

市販車世界初の楕円ピストン・エンジン搭載車を発売

1992年5月25日、本田技研工業 (株) が市販車として世界初の楕円ピストン・エンジンを搭載したロードスポーツバイク「ホンダNR」を520万円で発売した。楕円ピストン・エンジンは、水冷・

4サイクル・DOHC・V型4気筒で、1気筒当たり吸気と排気バルブを各4本計8バルブを配し、チタンコンロッドと点火プラグを各2本装備している。また、炭素繊維強化樹脂 (CFRP) やチタン、マグネシウムなどの軽量素材を採用するなど最先端技術を集結した次世代ロードスポーツバイクとなっている。

54/100

1993 (平成5) 年

宮城高専、創立 30 周年記念式典、『創立 30 周年記念誌』発行

Change of 

1993 (平成5) 年、宮城高専は創立 30 周年を迎えた。創立 30 周年を迎えるに当たって、前年 11 月 16 日に第 1 回記念事業実行委員会を開催し、記念式典をはじめとするさまざまな記念事業を決定した。

同年 10 月 8 日、名取市民体育館を会場として、宮城高専創立 30 周年・情報デザイン学科設置記念式典を挙行了。全学生と教職員約 1,000 名に加えて元職員も参加、100 名以上の来賓を得て盛大に行われた。式典は、同年に設置された情報デザイン学科設置をも合わせて祝うものとした。式典では、矢澤彬校長の式辞に続いて、赤松良子文部大臣(代読・西坂昇文部省高等教育局専門教育課リフレッシュ教育企画官)と春山志郎国立専門学校協会会長・西澤潤一東北大学長が祝辞を述べた。その後、各科の卒業生 4 名(三浦隆利東北大学工学部教授・平田富夫名古屋大学助教授・住友軽金属工業株式会社アーバン事業部設計技術部課長鈴木稔・東北大学大学院工学研究科博士課程後期 1 年佐藤弘孝)による記念講演が行われた。

午後からは、ホテルメトロポリタン仙台に会場を移して、記念祝賀会が開催された。校長挨拶に続いて、高橋博之同窓会(萩明会)会長が乾杯の音頭を取った。和やかな歓談が続く中で石川次夫名取市長と第 3 代校長河上房義の祝辞とテーブルスピーチが行われ、引地稔後援会会長の万歳三唱で締めくくられた。

また、記念事業の一つとして記念誌を発行した。宮城高専では創立 20



周年に際して集大成となる『宮城高等専門学校二十年誌』(B5 判・380 ページ)が発行されていたが、改めてその歴史を顧み、将来を展望することを意図した。内容については、20 周年の後の 10 年間の出来事を扱い、現在の姿に焦点を当て、記録に関する内容をできるだけ表やグラフなどで簡潔に表現すること、写真を可能な限り多く掲載し読みやすい誌面を心がけた。1993 年 10 月 8 日、『宮城工業高等専門学校創立 30 周年記念誌あゆみ』の発行を見た。



創立 30 周年・情報デザイン学科設置記念式典



『宮城工業高等専門学校創立 30 周年記念誌 あゆみ』



創立 30 周年祝賀会

55/100

1993 (平成5) 年

仙台電波高専、外国人受託研修員集団研修コース開設

Change of 

仙台電波高専では、開発途上国からの研修員を受け入れ、技術教育の研修を行っていたが、1993 (平成5) 年、新たに外国人受託研修員集団研修コース「マイクロコンピュータインタフェース技術」を開設した。集団研修コースは、受け入れ側で研修内容を決め、研修員を募集する方式である。集団研修コースの設置が認められたのは、高専としては初めてであった。同集団研修コースは、マイクロコンピュータの制御面での活用やトラブルシューティング能力を高め、各国の技術教育を反映させることを目的とした。

1993 年度は、モンゴル・フィリピン・マレーシア・インドネシアの 4 カ国から大学講師や研究者を研修員とし

て迎え、10 月 13 日から 12 月 16 日までの日程で行われた。仙台電波高専の国際交流主幹を中心に各学科の教官と講師が講義と実習を担当した。研修員は、いずれも知識・技術のレベルが高く、有意義な研修となった。



外国人受託研修員



集団研修コース開講式

56/100

1994 (平成6) 年

仙台電波高専、技術開発研究センター竣工

Change of 

1994 (平成6) 年 12 月 12 日、仙台電波高専技術開発研究センターが竣工した。技術開発研究センター設置の目的は、民間等の外部機関との共同研究を推進することにより教育と研究の進展を図ることと、民間企業との技術交流の場として地域社会における技術開発の振興に寄与することにあった。特に社会ニーズの多様性に応えるために、①技術相談の窓口、②リフレッシュ教育の場、③プロジェクト研究の場、④高度技術解析の場、の 4 つの機能をもつものとした。1 階には技術相談室と高度技術解析室、2 階にはリフレッシュ教育関係とプロジェクト教育関係の

部屋が設置された。広さは十分とはいえないものであったが、技術協力の「場」としての機能を果たすことが期待された。

1995 年 6 月 15 日、技術開発研究センターにおいて、同センター竣工披露式を行った。2005 (平成 17) 年地域連携テクノセンターと改称した。



技術開発研究センター



外国人受託研修員

57/100

1996 (平成8) 年

宮城高専・仙台電波高専、校内 LAN 完成

Change of 

文部省では、学術情報センターを中心とする全国的・総合的な学術情報システムの整備を積極的に推進し、その基盤的通信網である学術情報ネットワークの高度化・高速化、国際接続の拡充を進めた。また、情報化の進展に対応して、学内の各種コンピュータを高速データ通信網で接続

するキャンパス情報ネットワーク（校内 LAN）の整備を進めた。国立大学・大学共同利用機関については、1994（平成6）年度までに整備を行い、国立高等専門学校についても95年度中に校内 LAN を整備することとした。

宮城高専・仙台電波高専ではいずれも1996年3月によりやく校内 LAN

が完成、専用線で常時外部と接続されるようになり、校内のほぼ全ての教室・実験室・研究室・事務室等からインターネット接続が可能になった。高度化するネットワークの利用に対応しつつ安定した運用のために、数回の機器類・システム類の増強と更新を経て現在に至っている。

58/100

1997 (平成9) 年

仙台電波高専、中学生のための公開講座開始

Change of 

仙台電波高専では、1979（昭和54）年より一般社会人を対象として情報処理技術などに関する公開講座を開催していた。情報化社会の進展や生涯学習に対する意識の高まりとともに公開講座の需要が高まり、1995（平成7）年には一般社会人と

動支援のためのインターネット入門講座」を開催、好評を博した。

さらに、1997年には中学生のための公開講座として、夏休み中の2日～3日間、「楽しい電子工学入門」「中学生のためのマルチメディア入門 I・II」を開催した。募集人員は、それぞれ16名・12名であったが、応募

者が殺到するほどの人気を集めた。そのため、翌年には中学生のための公開講座の数を増やし、「楽しい電子工学入門」「中学生のためのマルチメディア入門 I・II」に加えて「楽しい情報工学入門」「英語速読入門講座」「手作り部品によるラジオの実験」の6講座を開講した。



公開講座「中学生のための手作り部品によるラジオの実験」



時代を読む

明石海峡大橋の供用開始

1998年4月5日、兵庫県神戸市と淡路島との明石海峡に架かる、橋長3,911メートル、中央支間長1,991メートルの世界最大の吊橋である「明石海峡大橋」の供用が開始された。明石海峡

大橋は、本州と四国を、道路と鉄道で繋ぐ本州四国連絡架橋事業の一環として建設されたもので、1988年5月に現地工事に着工し、およそ10年の歳月をかけて完成した。建設費用は約5,000億円。

59/100

1997 (平成9) 年

宮城高専、わくわく体験教室開催

Change of 

1997（平成9）年より、宮城高専では理数科の教員が中心となって講師を務める「わくわく実験・科学教室」を開催した。中学生を対象としたもので、夏休み中の8月19日・20日の2日間にわたって開催、「わくわく物理教室」「わくわく化学教室」「わくわくコンピュータ」の3つのテーマで、実験を中心として科学への興味を喚起する内容とした。

「わくわく実験・科学教室」は以後毎年続けられ、2002年度には規模を拡大して実施、「わくわく実験・科学



わくわく実験・科学教室

教室」（7月29日・30日）に加えて、親子を対象とした「親子で作ろう手作りラジオ」（7月27日・28日）と、「マジカルマテリアル」（10月5日・19日）を開催した。「マジカルマテリ



親子で作ろう手作りラジオ

アル」は、「液晶温度計の作製」「わたあめの科学と作製」「身の回りの高分子」「金属材料の生まれと育ち」「光のペンダント」などの9つのテーマで開催した。

60/100

1998 (平成10) 年

宮城高専、専攻科設置と専攻科棟竣工

Change of 

宮城高専の専攻科は、1993（平成5）年新設の情報デザイン学科の完成に伴い、特に地域社会・企業・同窓会・後援会・保護者・在校生などの要請によって、1998年に設置された。

専攻科は、機械工学科・電気工学科・材料工学科を基礎とする生産システム工学専攻（定員12名）と、建築学科と情報デザイン学科を基礎とする建築・情報デザイン学専攻（定員8名）の2専攻より成る。専門性に加えて、学際的領域に関する素養と国際化・情報化に対応できる能力を身に付けた質の高い実践的技術者を育成することを目的とした。1998年4月10日、専攻科1期生（生産システム工学専攻15名、建築・情報デザイン学専攻8名）が入学した。

1999年6月30日、情報デザイン学科棟とデザイン・ポリシーを同一とした鉄筋コンクリート4階建ての、実験室、講義室、教員スペースを備えた専攻科棟が竣工、9月1日専攻科の設置および専攻科棟竣工記念式典を挙



専攻科棟



専攻科設置および専攻科棟竣工記念式典

61/100 1999 (平成11)年 仙台電波高専、全国高専プログラミングコンテスト優勝



全国高専プログラミングコンテストは、全国の高等専門学校の学生が独自のソフトウェアを開発し、そのアイデアと実現力を競う大会である。1989（平成元）年に初めて開催され、成功を収めた。以後、回を重ねるごとに規模も大きくなり内容も充実、1999年は第10回記念大会として、広島県呉市において10月9日・10日に開催された。

その記念すべき第10回大会におい

て、仙台電波高専は競技部門で見事初優勝を遂げた。コンテストは課題部門・コンテンツ部門・競技部門の3部門に分かれて行われた。仙台電波高専は、電子工学科の4年生2名と5年生1名のチームが競技部門に出場、「ピースでpeace」と題するゲームに挑んだ。競技は、45チームで予選、12チームで準決勝、5チームで決勝が行われる予定であったが、予選時間内にパズルが解けたのは、仙台電



第10回プログラミングコンテスト競技部門優勝
波高専を含む6チームだけであった。準決勝、決勝と難度が高くなるなかで、決勝選では最初にパズルの解を見つけることができ、優勝となった。

62/100 1999 (平成11)年 宮城高専、ロボット・コンテスト'99 全国大会で初優勝



宮城高専は、1990（平成2）年の第3回大会より「アイデア対決 全国高専ロボット・コンテスト」に学生を主体に積極的に参加、1991年には宮城高専を会場として地区予選が行われた。全国大会にも何度か出場を果たしたが、優勝するまでには至らなかった。

1999年、マシン「Quarter」が地区優勝と（財）省エネルギーセンター賞受賞をひきあげて全国大会に出場、見事念願の優勝を果たした。この年のテーマは、「ジャンプ・トゥー・ザ・フューチャー」、競技フィールドのスタートゾーンに置かれたマシンは、脇に置かれた台の上の箱を、何らかの方法でジャンプゾーンの向こうのフューチャーゾーンに送り込み、その箱を、送り込まれた「子機」によってポイントゾーンに置くというルールであり、ロボコン史上初めて「空を飛ぶ」ことが課題となった。全国大会は11月28日、両国の国技館で



親機

開催され、全国の高専から24チームが参加した。

宮城高専のマシン「Quarter」の子機「アルマジロ」は、箱を抱えて親機から飛び出し、ジャンプゾーンの飛び越え、ゴールに素早く近づき箱を載せるということ、規定時間の



子機

4分の1=Quarterで成し遂げるものであり、初戦から圧倒的な強さで勝ち上がった。決勝では強豪の石川高専の「TURBO」と対決、最後はゴール上でのマシンの力勝負を競り勝ち、優勝を手にした。



優勝チーム

63/100 2000 (平成12)年 仙台電波高専、第1回産学交流フォーラム参加



仙台電波高専は、地域と企業に開かれた教育・研究の場を目指し、企業および県や市などの公共機関と連携しながら、さまざまな事業を行ってきた。2000（平成12）年11月22日には、仙台市と宮城県がそれぞれ主催する産学交流会に参加した。

同日午前中は、21世紀プラザ研究センターにおいて仙台市主催の「産



第1回産学交流フォーラム

学交流見学会」、午後からは宮城県産業技術総合センターで宮城県主催の「産学交流発表会」が開催された。仙台電波高専はいずれにも参加、仙台市主催の「産学交流見学会」では、技術開発研究センターを中心とする産学連携の取り組みについて発表した。また、午後からの宮城県主催の「産学交流発表会」においては、「身近な



宮城県主催産学交流発表会出展「身近なアイデアをLSIに」



第1回東北地区高専留学生フォーラム

アイデアをLSIに」をテーマに、ポスターセッション形式による出展を行った。

このフォーラムは、仙台市と宮城県が中心となって県内の企業に呼びかけて実施された。当日の見学者からは発表や出展の内容について熱心な質問があり、大成功を収めた。

64/100 2000 (平成12)年 宮城高専、総合科学教育棟新築



2000（平成12）年3月30日、総合科学教育棟が竣工、6月15日、建物の1階を会場として厳かに竣工記念式典を挙行了した。

総合科学系の教育が高専の専門を学び理解するために重要であることから、自然科学の基礎と、社会で生きていくための表現能力や知識を支える英語、国語、人文社会科学を学ぶ場として新設されたもの。一般棟（3階建て）で授業を進めながら、中庭部分にエレベータ完備の5階建ての総合科学教育棟が建設された。新規格で広がった1年生から3年生までの教室と物理・応物と化学の実験室、一般科目教官室および学生課が配置された。



総合科学教育棟

時代を読む

携帯電話が若者の必須アイテムに

1994年、それまでレンタル制だった携帯電話機の売り切り制が開始され、大幅に端末価格や通信料金が下がった。これによって普通の個人が携帯電話を持つ時代が訪れた。1993年には213万件だった契約数は2年後には1,020万件に増加している。

2000年には契約数が6,000万件を超え、この頃から若者にとって「ケータイ」が必須アイテムとなる。若者のコミュニケー

ションは大きく変化した。多くの若者は常に携帯電話でメールをやりとりするようになり、誰かと話している中でもメールがくれば躊躇せずに返事をする。また近年、携帯メールや掲示板・ブログなどのインターネットを使った「いじめ」などが社会問題となっている。

なお、2001年、ヤフー株式会社がADSL事業に参入。価格破壊が進み、インターネットのブロードバンド接続が急速に拡大したのもこのころである。

65/100 2000 (平成12)年 宮城高専、地域共同テクノセンター設置



地域共同テクノセンターは、基礎的研究をさらに発展させ、地域の特性に密着した工業技術の研究開発を推進する共同研究施設である。研究成果を通して先駆的・独創的かつ幅広い視野に立脚した実践的技術者を養成するとともに、産官学交流の拠点として、また、地域企業との共同研究等の場を通して地域への技術的貢献を積極的に行い、地域社会の発展に寄与することを目的としている。

宮城高専では、産官学連携の地域活性化事業をさらに積極的に進めるために、2000 (平成12) 年5月、地域共同テクノセンターを設置した。また、多様な産学連携を推進することを目的として宮城高専産業技術振興会も2000年5月に発足、地域共同テクノセンターと密接な関係を持ちながら活動している。

地域共同テクノセンターは、発足

以来産学連携の母体づくりに努め、会員企業や社会人に対して、公開講座、基礎技術講座、イブニング技術サロンなどの多彩な発信を行っている。さらに、教官の発明になる基礎技術を近い将来事業化するための基盤づくりとして、教官数名と企業集団から構成される研究会活動も行っている。テクノセンターの地道ながらも活発な活動は、産業界からも次第に認知されて、発足当初は法人会員54社、個人会員8名であった産業技術振興会の会員数も順調に増加し続け、3年後の2003年8月には法人



地域共同テクノセンター棟

会員80社、個人会員20名に至った。

2001 (平成13) 年1月15日、1～2階部分を地域共同テクノセンター、3～4階部分を本科4、5学年教室とする専門教育・地域共同テクノセンター棟が竣工、同年5月15日に竣工記念式典を挙行了した。



産業技術振興会総会



総合技術懇談会でのパネル展示

66/100 2001 (平成13)年 宮城高専ラグビー部、全国大会3連覇達成



宮城高専は、創立以来柔道部や野球部などの部活動も盛んに行われ、全国大会にもたびたび出場し優勝などの好成績を取っていた。

2001 (平成13) 年1月9日、ラグビー部は全国高専ラグビーフットボール大会全国大会決勝戦で、久留米高専を36-9の大差で下し、チーム初の3連覇で史上最多となる7度目の優勝を飾った。

宮城高専のラグビー部は1967 (昭和42) 年に同好会として発足、1968年に正式な部となり、1979年には全

国大会に初出場した。以来、2001年の大会で12年連続21回目の出場を重ねた。その間の1987年に初優勝、翌年にも優勝し2連覇を達成したが、次年での3連覇はならなかつ



3連覇達成した宮城高専フィフティーン

た。2000年の2連覇後も慢心せず、ウェイトトレーニングを強化して結束力とパワーを高め、全員ラグビーを貫いたことが3連覇という快挙につながった。



日刊スポーツ (2001年1月10日)

67/100 2001 (平成13)年 宮城高専、全国高専プログラミングコンテスト優勝



全国高等専門学校プログラミングコンテストは、情報処理技術における全国の高専学生の優れたアイデアと実現力を競うものである。その発想の柔軟性とレベルの高さは関係業界においても高く評価されている。宮城高専は、1994 (平成6) 年の第5回大会から毎年出場し、優秀賞3回と審査員特別賞、敢闘賞を受賞し

ている。

2001年には、鶴岡市で開催された第12回大会の競技部門に出場した「ヘルシー Zion41号」が見事優勝を成し遂げた。

競技課題は「孫孫積み木のお片づけ」というもので、探索問題をいかに効率よく素早く解くが鍵であったが、プログラミング技術と実践に合

わせた判断の最適化が功を奏し、初優勝の栄冠を飾った。



全国高専プログラミングコンテスト競技部門優勝

68/100 2002 (平成14)年 仙台電波高専、エコラン1位・2位独占



東北電気自動車懇談会 (TEV) は、毎年夏に、スポーツランドSUGOで電気自動車エコランレースを開催している。2002 (平成14) 年度より電気自動車エコラン実行委員会が主催し、8月25日に開催されたレースには全国から44台が参加した。

仙台電波高専からは、CFRPで桐材をサンドイッチして成形したボディのSEV-KO2と大会中最軽量を目指したアルミパイプフレームのSEV-UO2の2台が出場、見事優勝、準優勝を果たした。UO2は、電池容量にかなりの余裕を残したままでレースを終え、ジュニアクラスで優勝、オープンクラスの自動車・自動車部品メーカーチームに並ぶ性能を発揮した。また、KO2も、重量マシ



E.V. Ecorun in SUGOで1位、2位独占

んでありながら、ベテランドライバーの健闘により準優勝となった。2台は、

いずれも電子制御工学科の卒業研究として開発された。

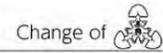
時代を読む

ノーベル賞W受賞

2001年末に皇太子ご夫妻に敬宮愛子さまがご誕生、翌年5月にはサッカーの世界カップが日韓共催で開催され、暗い世相に明るい話題をもたらした。2002年10月、日本人2人のノー

ベル賞受賞の報が届いた。物理学賞に小柴昌俊東大名誉教授、化学賞に島津製作所の田中耕一さんが決定した。博士号も持たず、普通のサラリーマンの田中さんは、その謙虚な人柄が癒し系と人気を呼んだ。

69 2003 (平成15)年 宮城高専、教育研究技術支援室設置



2003 (平成15)年4月、宮城高専に教育研究技術支援室が設置された。もともとは学生課に技術協力室として存在していたが、技術職員の待遇改善や業務の効率化を図ることを目的として、新たに教育研究技術支援室として、設置当初は2班体制でスタートした。

教育研究技術支援室のメンバーは、室長を含めた13名で、2006年4月から実習工場5名の第1班、生産システ

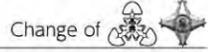
ム系(機械・材料・化学)3名の第2班、情報システム系(電気・情報・電算・建築)4名の第3班という3つの班に分かれた。業務内容は、学生の実験と実習の指導や準備を主とし、教員研究・卒業研究・特別研究・学内のものづくり、リカレンジャーなどへの支援も行う。その他、機械・器具等の保守・管理ならびに災害事故防止に関することや自己研鑽を目的とした技術研修、技術発表会、技術講演会

などを企画、実施している。学生の目線に立って実験・実習やものづくりの相談に乗り、チャレンジし成長する技術支援室は、信頼される技術職員



教育研究支援室 企画の体験教室 講師を招いての技術発表会

70 2003 (平成15)年 宮城高専・仙台電波高専の専攻科、高専として初めて JABEE 認定



1999 (平成11)年11月19日、一般社団法人日本技術者教育認定機構(JABEE)が設立された。JABEE 設立の目的は、技術者教育の国際的な同等性を確保するとともに技術者教育の振興、国際的に通用する技術者の育成を通じて社会と産業の発展に寄与することである。

第三者機関として、大学や高専等の高等教育機関で実施されている技術者育成の教育プログラムが社会の要求水準を満たしているかどうかを、国際的な同等性を有する認定基準に基づいて審査・認定する。教育プログラムの自主性を尊重するとともに、審査を通じて教育の改善を図る。JABEE の認定を受けたプログラムは高専4・5年生および専攻科の教育レベルが大学と同等レベルであることが国際的水準で保証されるとともに、プログラム修了生は、国家資格である技術士補の資格が与えられる。

制度は2001年度から始まり、2001

年度は3大学が認定を受けた。2003年4月15日、宮城高専専攻科と仙台電波高専専攻科は全国の高専専攻科では最初に JABEE の認定審査(2002年度 JABEE 認定)を受けた。同年に JABEE 対応プログラムとして認定されたのは23大学・高専専攻科の32プログラムであり、高等専門学校では、仙台電波高専と宮城高専以外に1校(高知工業高専建設工学専攻のプログラム)が認定されたのみであった。これにより、両高専専攻科の教育システム・卒業生の能力が国際的水準で大学と同等であることが認められた。

宮城高専が JABEE の認定を受けたのは、工学(融合複合・新領域)分野

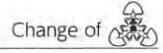
の専攻科「生産システムデザイン工学プログラム」である。創造的な技術者の輩出を掲げる宮城高専専攻科の教育プログラムが国際的に通用するという高い評価を受けることができた。2003年5月3日、JABEE プログラム修了生に対する修了認定証が授与された。

仙台電波高専では、専攻科の「電子情報システム工学プログラム」が電気・電子・情報通信分野で JABEE 対応プログラムの認定を受けた。専攻科を設置して10年目という節目の年に JABEE 認定を得たことは仙台電波高専にとっても有意義であった。2003年6月6日、2002年度 JABEE 認定プログラムの修了証授与式を実施した。



JABEE による審査 JABEE 認定証(生産システムデザイン工学) JABEE 認定証(電子情報システム工学プログラム)

71 2003 (平成15)年 仙台電波高専、第1回外部評価委員会開催



仙台電波高専では、年1回近隣中学校校長との懇談を行い、また、JABEE の認定審査を受けたりするなど、外部の意見を取り入れ、積極的に学校運営に活かしている。さらに、学校の運営および研究活動の状況について、学外の有識者による評価や提言を受け、教育・研究と学校運営の一層の発展に資することを目的に外部評価委員会を設置した。

2003 (平成15)年7月17日、第1回外部評価委員会を開催した。当日は、宮城光信委員長(東北大学大学

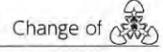
院工学研究科長)から、「外部評価委員は、評価および提言を行うだけでなく、仙台電波高専のサポート役になりましょう」という挨拶があり、

学校から外部への情報発信や学生へのサービスについて活発な意見交換がなされた。その後12月に第2回外部評価委員会が開催された。



第1回外部評価委員会

72 2003 (平成15)年 仙台電波高専、長期インターンシップ制導入



仙台電波高専では、4年生の希望者に対して、1週間~2週間程度、企業で実習する「インターンシップ」を行っていた。企業での就業体験を通じて職業観を豊かにし、将来の就業意欲を高めることができることから、毎年多くの学生が参加していた。

2003 (平成15)年度から、専攻科に進学が内定している5年生に限り、後期に5カ月間(10月~2月)、企業あるいは学術交流協定を結んでいる海外の大学等での実習を認め、卒業研究7単位、課題研究14単位を認定する「長期インターンシップ」制

度を設けた。長期の実習により、企業や海外の大学でまとめた成果を上げて自分の能力に自信をもち、また、社会や産業界の現実と異文化を見聞し、技術者としてより深い自覚を得ることが期待された。

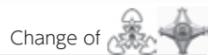
さらに2007年度から、専攻科1年生に3週間~6週間のインターンシップを導入した。企業研修からはじめたインターンシップの形態は、その後大学院の研究室や海外協定大学での研修と多様化し、現在に至っている。



学生が企業の方と打ち合わせをする風景

時代を読む 小惑星探査機「はやぶさ」内之浦の宇宙空間観測所から打ち上げ
2003年5月9日、内之浦の鹿児島宇宙空間観測所から工学実験探査機 MUSES-C 「はやぶさ」を搭載した M-V-5 号機が打ち上げられた。順調な飛行により、発射後350秒には第4段をスピンで所定の向きに安定化しうえて分離した。打上げ23分後、NASA ゴールドストーン局は MUSES-C からの電波を受信し、DSN(深宇宙通信網)を通じて送られてきたデータから、第4段切り離し後のシーケンスが予定どおり実行され、探査機が所定の惑星間軌道に投入されたこと及び探査機の機能が正常であることが確認された。

73/100 2003 (平成15) 年 仙台電波高専、創立60周年記念式典、『創立六十周年記念誌』発行



2003 (平成15) 年、仙台電波高専は記念すべき創立60周年を迎え、さまざまな記念行事が行われた。

10月3日、仙台サンプラザホテルにおいて創立60周年記念式典・講演会を開催した。式典では、渡辺英夫校長の式辞に続いて、河村建夫文部科学大臣 (代読: 文部科学省高等教育局専門教育課長島昌樹課長補佐)、浅野史郎宮城県知事 (代読: 宮城県産業経済部部長宍戸郁郎)、四ツ柳隆夫国立高等専門学校協会会長が祝辞を述べた。続いて、高橋勤同窓会会長より記念事業目録の贈呈が行われ、祝電披露と校歌演奏の後閉式となった。

記念式典に続いて、第19回卒業生でマイクロバイオ株式会社の小川廣幸代表取締役社長を講師として記念講演会が開催された。小川は、アメリカの企業に勤務した経験を活かしてICチップ検査などに使う数値計測手法を応用すれば高精度の検査機器が開発できるとひらめき独立した。講演では、「母校と歩んだ起業への道」と題して、起業のバックボーンとして

の母校の存在と卒業生のネットワークについて後輩に語りかけ、今後の仙台電波高専への期待を述べた。

記念式典・記念講演会は、いずれも情報システム工学専攻の学生によって、インターネット中継された。

記念講演会の後、サンプラザホテルの3階に会場を移して祝賀会を開催した。校長挨拶に続いて、藤井黎仙台市長・吉本高志東北大学長・高橋同窓会会長が祝辞を述べ、丹野正春前後援会会長が祝杯の音頭を取った。祝宴とスピーチが続くなか、余興として「奥州柴田一番太鼓」の太鼓演奏があり、平井重三郎同窓会参与の万歳三唱をもって閉会となった。



創立60周年記念式典

10月3日の記念式典に合わせて、『創立六十周年記念誌』を発行した。60年という節目の年を記念するものとして、従来の体裁にはとらわれず、A4サイズのカラーグラビアを主体とする構成とした。さらに、見返し部分には本校南側上空からの校舎全景写真 (2003年4月28日撮影、同窓会提供) と厚生会館前学園広場での集合写真 (2003年6月17日撮影) を配した。

また、創立60周年記念として、同窓会より桜 (ソメイヨシノ) の苗木11本が贈られた。ソメイヨシノの寄贈は、仙台電波高専が向山にあった当時の桜並木にちなみ、愛子の地にも桜並木との願いによるものであった。



『創立六十周年記念誌』

74/100 2003 (平成15) 年 宮城高専、40周年記念事業挙行、『創立40周年記念誌』発行

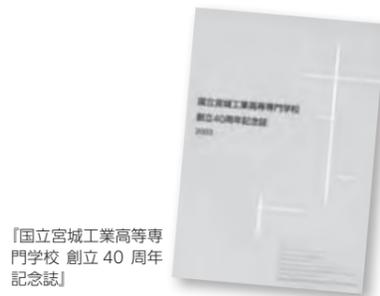


宮城高専が1963 (昭和38) 年に創設されてから40年が経過、2003 (平成15) 年に40周年を迎えた。開校当初は3学科であったが、1968年には金属工学科を増設、1986年には金属工学科を材料工学科に改組、1993年には情報デザイン学科を増設、1998年には専攻科課程を新設した。時代の要請に応え、地域に根差した

高等教育機関として発展した。その間、教育目標に沿った人材育成に努め、有能な卒業生を輩出してきた。

記念事業の一つとして、10月1日、『国立宮城工業高等専門学校創立40周年記念誌』を発行した。30周年記念誌が発刊された1993年以降の10年間のトピックスを取り上げ、見やすく読みやすい誌面にするために、

文章はできるだけ少なくし、表やグラフ、写真を中心として構成している。



『国立宮城工業高等専門学校 創立40周年記念誌』

75/100 2003 (平成15) 年 宮城高専、短期留学生交換事業実施



宮城高専は韓国・ドイツ・フィンランドの3つの教育機関と国際交流協定を結んでいる。その国際交流の一環として、大韓民国・仁荷工業専門大学との間で短期の留学生交換事業

を実施している。両国間の学生の交流と異文化理解が目的である。

2003年度は、3月24日から28日にかけて宮城高専を代表して教職員2名と学生10名が仁荷工業専門大学

を訪問し、6月30日から7月4日に仁荷工業専門大学の教職員2名と学生10名が宮城高専を訪問した。仁荷工業専門大学は広大な敷地に多数の校舎を有し、日本語での授業が行われている学科もあり、日本語が堪能な学生も少なくない。宮城高専では入念な事前研修を行い、韓国の学生の積極的な姿勢に圧倒されながらも、英語と日本語で活発な交流を繰り返した。



仁荷工業専門大学訪問



仁荷工業専門大学での学生交流

76/100 2004 (平成16) 年 仙台電波高専、創造教育棟竣工



仙台電波高専では、自主性を伸ばし創造性豊かな人材を育成するための新しい教育システムを推進することを目的として、創造教育棟を建設した。工事は、2003 (平成15) 年6月から開始され、翌年2月に竣工した。

創造教育棟では、①学生の自主性を伸ばす「ものづくり」教育の充実、②LSI設計教育の充実、③マルチメディアを活用する教育の強化、などを推進していくこととした。

建物は3階建てで、1階は創造教育工房と創造設計室、創造プロジェクト室、管理室を配している。2階はコンピュータ演習室やLSI (大規模集積回路)、設計・評価室 (LSI開発・設計の指導や回路設計に関わる技術指導、セミナーなどを行う)。3階はSCS・



創造教育棟

ITメディア室 (SCSの端末を設置) やメディア教材作成室とスタジオである。また、各階に明るく開放的なリフレッシュスペースを設け、学生の新鮮な創造力を刺激することに資した。

2004年5月21日、竣工披露式および祝賀会を開催した。



創造教育工房

77 2004 (平成16)年 独立行政法人国立高等専門学校機構発足



2002 (平成14)年、文部科学省内に「今後の国立高等専門学校の在り方に関する検討会」が発足、高専の法人化について検討されることになった。その結果、高専の予算や学生数などの規模から見て、国立大学のように1大学1法人ではなく、全国55高専を一つにまとめた「独立行政法人国立高等専門学校機構」を設置するという結論に至った。各高専の規模や

分野等の共通性を考えた場合、55高専それぞれが法人になり諸課題に取り組むには、人的・物的資源に制約があり、各高専が連合して諸課題に取り組んだ方が、技術者教育の発展が期待できると判断したからであった。55高専が1法人にまとまることにより、スケールメリットを十分に発揮し、組織・人事・財務等における資源の重点的配分・再配分や教育内容・方法

の充実など、各高専の充実と高等専門学校全体としての将来的発展につながる事が期待された。

2003年7月、国立大学法人法等関係6法が成立(10月施行)、翌年4月、国立大学の法人化と併せて、創造力のある人材の育成と日本の高等教育の水準の向上と均衡ある発展を目的として、独立行政法人国立高等専門学校機構が発足した。

78 2004 (平成16)年 東北大学工学部・宮城高専・仙台電波高専、単位互換協定締結



2002 (平成14)年度末、高等専門学校と大学との単位互換について文部科学省の了承が得られ、地域によっては同年から実施に踏み切った。宮城県内では、2004年度になって、宮城高専・仙台電波高専と東北大学工学部との単位互換協定を締結した。東北大学工学部で開設されている全ての科目について、その科目の担当教員が受け入れを許可し、高専の学科主任および校長が受講・単位取得

科目としてふさわしいと認められれば、受講と単位修得が可能となった。

また、学都仙台単位互換ネットワークを締結、この制度に参加する大学・短期大学、高等専門学校に在籍する学生が他の参加校の授業科目を履修し、そこで取得した単位を在籍する大学等の単位として認定することとした。各大学から提示された「単位互換可能科目一覧」に載っている科目を対象とした。2005年4月現在、



単位互換協定調印

大学14校・短期大学4校・高等専門学校2校の計20校が参加し、各大学等の開講科目の一部を単位互換ネットワークの科目として提供している。

79 2004 (平成16)年 宮城高専、ドイツFFB校訪問



宮城高専では、2004 (平成16)年より、ドイツ・FFB (Felix-Fechenbach-Berufskolleg)校を訪問した。日程は5月13日から25日までで、学生10名が参加、教員2名が引率しドイツの家庭にホームステイして交流を深めた。訪問に当たっては同年2月に選考を行い、ドイツの歴史や文化、生活習慣、英会話やドイツ語会話を

について、30回以上の研修を重ねた。

FFB校は、韓国の仁荷工業専門学校やフィンランドのヘルシンキ・ポリテク校と同様、宮城高専の海外教育協力校の一つである。2003年に協力校として学術交流協定を締結、2004年に第1回の学生派遣となった。同年9月には、FFB校の学

生・教職員19名が宮城高専を訪問、その後も交流事業を継続している。



ドイツFFB校訪問

80 2004 (平成16)年 宮城高専、移動科学実験車リカレンジャーの活動開始



2004 (平成16)年、宮城高専では、文部科学省の科学研究費に応募して採択されたことを契機として移動科学実験車リカレンジャーの活動を開始した。「リカレンジャー」とは、もともと移動実験車として購入した中古の4tトラックの名称であったが、やがて体験教室の活動全体を表す呼び名となった。専攻科2年生の大竹清華がデザインしたイメージキャラクターを、Tシャツやシール、トラックの荷台など

に使用したことが、リカレンジャーの人気を高めるきっかけになった。

当初は中学生を主な対象と考えていたが、中学校からの依頼は全くなく、リカレンジャーの初めての活動は、2004年度の高専祭であった。リカレンジャーのサイエンスショーを直接見た保護者を中心として、口コミなどから次第に依頼が増え、2005年度は11件、2006年度は16件出動

し、子供達や保護者に喜ばれた。

特に、2006年6月に行われた広瀬小学校での体験教室は教職員6名とアシスタント学生20名が協力した大がかりなもので、その模様はNHKテレビ・東日本放送・宮城テレビで放映され、読売新聞にも大きな記事が掲載された。以後はリカレンジャーの活躍がたびたび地元のテレビや新聞に取り上げられることになった。



リカレンジャーのキャラクター



広瀬小学校での体験教室



移動科学実験車リカレンジャーの活動

81 2006 (平成18)年 仙台電波高専、タイ王国モンクット王ラカバン工科大学等との学術交流協定締結



2006 (平成18)年3月10日、仙台電波高専は、タイ国のモンクット王ラカバン工科大学 (KMITL: King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang) と学術交流協定を締結した。仙台電波高専にとっては、初めての国際交流協定であった。モンクット王ラカバン工科大学は、タイでは先進的な工科大学として広く知られている。学術交流協定締結は、①教職員および学生の相互交換、②教育情報および研究成果の交換、③両校の合意に基づく共同研究や共同教育活動等の促進、を目的とした。

調印式典は、バンコク市内にある同大学において開催され、仙台電波高専の宮城光信校長・加藤靖副校長

はじめ多数の関係者が出席した。また学生交流と教職員の国際的視野を広げるために、専攻科生2名と事務職員1名が調印式に出席し、専攻科生による研究発表も行われた。

その後も学術・教育の発展を目的として相互理解と親睦を深めるため、海外の他の大学との提携を拡充、2006年9月11日にはヘルシンキ・ポ

リテクと、2008年6月13日にはフランス共和国のルールA技術短期大学と、2009年1月20日には同トゥルク応用科学大学の Telecommunication and e-Business 学部との学術交流協定を締結し、締結校と学生の相互受け入れを行うなど、積極的に交流を行った。



タイ王国モンクット王ラカバン工科大学と協定締結



ヘルシンキ応用科学大学と協定締結

82/100

2006 (平成18) 年

宮城高専・仙台電波高専、高等専門学校機関別認証評価認定

Change of



学校教育法の改正により、2004（平成16）年度から7年以内ごとに、大学（短期大学を含む）および高等専門学校は、文部科学大臣の認証を受けた評価機関による機関別認証評価を受けることが法的に義務付けられ

た。高等専門学校への機関別認証評価は、2005年度から、独立行政法人大学評価・学位授与機構を認証評価機関として開始された。宮城高専・仙台電波高専の両高専は、全国の高等専門学校の先陣を切って、2005年

度認証評価を受け、「大学評価・学位授与機構が定める高等専門学校評価基準を満たしている」と判定された。特に優れた点として、それぞれ次の点が高く評価された。

2006 (平成18) 年 ■ 宮城高専

○教員による自己評価や学生・教員の投票等によって、教育功労者表彰やティーチャー・オブ・ザ・イヤール等の独自の教員表彰制度が実施されている。特に、ティーチャー・オブ・ザ・イヤールの受賞者についてはネームプレートが校内に掲示されており、教育意欲の向上と活性化への効果が得られて

いる。
○教員の採用については、書類選考や面接審査のほか、実際に学生に対して模擬授業を行うことにより、教育上の能力を十分に考慮・評価するプロセスを含んだ採用が行われ、学校の目的に沿った教育能力の評価が行われている。



ティーチャー・オブ・ザ・イヤール受賞者のネームプレート

2006 (平成18) 年 ■ 仙台電波高専

○創造教育棟の1階にある創造教育工房は、広くて天井の高い創造空間が用意され、大型の創造物の製作ができるように、また、3階にあるITメディア室は、CDやDVDを利用したマルチメディア教材の作成やマルチメディア教育のためのビデオ収録ができるようにそれぞれ整備されており、教育の目的を達成するうえで有効なも



創造教育工房

のとなっている。

○教員談話室を整備し、そこに各教員のメールアドレスを置くことに



ITメディア室

より、非常勤講師を含め教員間の連携が日常的に図られている。

時代を読む

「きぼう」を国際宇宙ステーションに設置することに成功

2008年3月14日、「きぼう」日本実験棟船内保管室を国際宇宙ステーション（ISS）に設置することに成功した。土井隆雄宇宙飛行士がスペースシャトルのロボットアームを操作

し、ISSの「ハーモニー」（第2結合部）天頂側の共通結合機構へ船内保管室を取り付けた。翌3月15日に、「きぼう」のハッチが開けられ、その後、土井宇宙飛行士らクルーが船内保管室へ入室し、日本が開発した最初の有人宇宙施設に日本人が初めて乗り込む、歴史的瞬間となった。

83/100

2007 (平成19) 年

宮城高専・仙台電波高専、高等専門学校機関別認証評価認定

Change of



国立高等専門学校機構では、宮城県、富山県、香川県、熊本県の各県に設置されている2高専の事務部を統合し、事務機能の効率化を図った。宮城県では宮城高専と仙台電波高専の事務部を独立行政法人国立高等専門学校宮城地区事務部として統合した。2005（平成17）年11月に機構本

部から、事務部一元化の可能性についての検討依頼があり、両高専の事務部長が検討、2006年2月に「事務部一元化構想」の案を作成した。事務部の一元化は2007年4月から実施され、それに伴う定員の削減は、3年間の年次計画で行うこととされた。事務職員の採用などは宮城地区事務

部として行い、業務の効率化や内部事務組織の見直しを進めた。



事務部

84/100

2007 (平成19) 年

仙台電波高専、タイ研修旅行開始

Change of



2007（平成19）年、仙台電波高専初の海外での研修が、提携校であるタイのモンクット王ラカバン工科大学の協力によって実現した。

4年生の研修旅行の1コースとして設定したものである。男子21名・女子3名が参加、教員3名が引率して、11月6日から10日までの4泊5日の日程で、大学訪問、企業訪問、アユタヤとバンコクの観光を行った。

学生達はラカバン工科大学の学寮に宿泊、学食で朝食をとるという貴重な体験をした。大学では、まず交流式典とそれぞれの大学・高専の紹介を行い、その後、4グループに分かれてラカバン工科大学の学生たちにキャンパスを案内してもらった。ラカバン工科大学は規模も大きく、設備のすばらしさに圧倒されていたが、



歓迎レセプション



日系企業訪問

タイの学生達と英語でコミュニケーションをとり交流を深めた。3日目の午後と4日目は、アユタヤとバンコクの観光を行い、深夜の便で帰国、有意義な研修旅行となった。



KMITL 学生寮

85/100 2007 (平成19)年 宮城高専、創造教育センター(実習・材料工場から改名)創設 Change of

2007(平成19)年、宮城高専の実習工場・材料工場として親しまれていた2つの施設は、全面改修を施したうえで、両施設を統合した「創造教育センター」と改称した。背景には、従来の工作実習や材料実習などの基礎的なものづくり教育のほかに、学科の壁を超えた自由で総合的なものづくりができ、さらに多くの未開拓分野の技能開発ができる環境を備えたものづくりセンターとしての「創造教育・開発センター」の新設を要望していたという経緯があった。さらに、近年の度重なる地震や被害の発生か



創造教育センター

ら建物の耐震診断を実施、両工場の耐震補強と当初計画のセンター案を含めて全面改修工事に至った。

従来の建屋を活かすという前提で、ゆとりある空間を確保し、明るい雰囲気なかで作業ができること、eラーニングもできる自学自習スペースの



高周波誘導溶解炉

確保、トイレや空調設備のある男女別更衣室の確保などの要望を満たした施設に変貌した。設備面においても更新、最新鋭のマシニングセンターや高周波誘導溶解炉、安全装置付き精密旋盤2台などを導入した。

86/100 2007 (平成19)年 宮城高専、野田山プロジェクトスタート Change of

2007(平成19)年、文部科学省は、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」を選定した。学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成するため、各大学・短期大学、高等専門学校における、入学から卒業までを通じた組織的かつ総合的な学生支援のプログラムのうち、学生の視点に立った独自の工夫や努力に

より特段の効果が期待される取り組みを含む優れたプログラムを選定し、広く社会に情報提供するとともに財政支援を行うことで、各大学等における学生支援機能の充実を図ることを目的としている。

初年度は70件のプログラムが選定された。その一つが、宮城高専の「学生の社会力を形成する野田山プロ

ジェクトー地域に開かれた総合的な学生支援システム」であった。「自立支援プログラム」「教育実践プログラム」「地域貢献プログラム」を3本の柱とした学生支援システムである。所在地の名称から「野田山プロジェクト」と称し、学生支援の充実を図ることを目的とした。

87/100 2007 (平成19)年 宮城高専、宮城県立がんセンターと協定 Change of

2007(平成19)年、宮城高専は隣接する宮城県立がんセンターと協定を結んだ。災害時の協力体制の整備などを基調としたものであり、2011の3.11東日本大震災では名取キャンパスの有志学生による地震直後のがんセンター復旧の手伝い、また避難

所となっていた名取キャンパスへのがんセンター医師派遣など、協定が十二分に活かされている。

毎年、宮城高専ギター部の学生が同センターのロビーコンサートに出演するなどの交流を重ねている。



がんセンターでのボランティア活動に対する表彰(2008年)

88/100 2007 (平成19)年 仙台電波高専、タイへの長期インターンシップ開始 Change of

2007(平成19)年、タイのキングモンクット工科大学ラカバン校で仙台電波高専の海外長期インターンシップが開始された。期間は同年10月11日から2月14日までの約4か月間に及んだ。長期インターンシップ履修学生は、情報工学科2名で情報システム工学専攻科への進学予定者だった。

キングモンクット工科大学はタイ

の工学系トップの大学である。学生数が多く、キャンパスも広い。大学の敷地内に駅があり、スタジアムもあるほどで、全国規模で学生が集まっている。

インターンシップでは、情報通信技術研究センターにおいて、システム開発の研究活動を行った。言語の違いによる困難を乗り越え、日本と異なる社会や文化を肌で感じ、研究

活動のみならず国際社会と日本の関係についても視野を広めた。

2007年にはフィンランドのヘルシンキメトロポリア応用科学大学でのインターンシップにも7名が参加した。海外長期インターンシップはその後、専攻科進学予定者を中心に活発化して今日に及んでいる。



タイへの長期インターンシップ



フィンランドへの長期インターンシップ

89/100 2008 (平成20)年 宮城高専・仙台電波高専、JAXAとの宇宙教育活動に関する協定締結 Change of

宮城高専・仙台電波高専と独立行政法人宇宙航空研究開発機構(JAXA)は、2008(平成20)年9月19日、JAXA相模原キャンパスにて宇宙教育活動に関する協定の締結調印式を行った。宇宙教育活動における総合的な連携協力を行い、「宇宙」を素材とした教育を実施することによって、広い見識を身に付けた心豊かな青少年の育成を目指すとともに、それを協働して推進する指導者の啓発を目的とした連携協力協定を締結することに合意したものである。

この連携協力協定の締結により、地域での宇宙教育活動が活発に行わ

れるとともに、全国に先駆けて高専を拠点とした宇宙教育活動推進のための新たな協力関係を構築することとした。JAXA宇宙教育センターとの宇宙教育活動に関する協定は、地域の青少年の健全な育成と宇宙教育指導者の育成など、次世代を担う青少年のための教育活動を推進し、宮

城県や東北各県、ひいては日本の教育の活性化や宇宙航空研究開発をはじめとした科学技術の発展に大きく貢献するものと期待された。

その後毎年、宮城高専・名取キャンパスおよび仙台電波高専・広瀬キャンパスにおいてJAXA研究者による宇宙講演会が開催されている。



JAXAと宇宙教育活動に関する協定締結

時代を読む

改正道路交通法施行

2008年6月1日から改正道路交通法が施行。改正点は後部座席のシートベルトの着用義務化、高齢運転者標識(もみじマーク)の表示義務、自転車の歩道通行の要件緩和など。

独立行政法人国立高等専門学校機構（高専機構）は、当初55の国立高等専門学校をまとめて一つの法人として発足、魅力ある高専づくりを進めてきた。その成果として、高専の高度化再編を計画した。高専の高度化再編計画は、日本の高度経済成長時代を支える中堅技術者の育成を目的に設立された高専を、時代の要請と産業界の要請に沿った新たな高専として再生することである。その第一弾として、宮城・富山・香川・熊本の各県に設置されていたそれぞれ2校の高専を1校に統合、1県1校2キャンパスの新モデルのスーパー高専を設置する。新モデルのスーパー高専は、15歳人口の減少にも対応し学科数を減らしたうえで地域社会のニーズに沿った学科構成とした。一方で、専攻科拡充や共同利用型センターの設置などを柱として、教育の質の向上・高度化、地域社会との関係機能の強化、広域連携の核となることを目指すこととした。

2009（平成21）年10月1日、宮城・富山・香川・熊本の4県において、スーパー高専が誕生した。各スーパー高専は、それぞれ東北地区、東海北陸地区、四国地区、九州・沖縄地区の拠点校となっており、新規に設置されたセンター等において地区全体に対する活動を行っていく。

宮城県では、宮城高専と仙台電波高専が統合、2工学系7学科と2専攻の専攻科および3センターに再編され、スーパー高専「仙台高等専門学校（仙台高専）」が発足した。旧宮城工業高等専門学校は仙台高等専門

学校「名取キャンパス」に、旧仙台電波工業高等専門学校は仙台高等専門学校「広瀬キャンパス」となった。

宮城高専と仙台電波高専は、教育・研究の専門分野が異なるものの、これまでに、専攻科の合同授業や学生会・寮生会の交流、教職員の人事交流など、相互交流を進めながら、持続可能な社会を創造する技術者を連携して養成することに向けて検討を重ねてきた。高度化再編はその流れの具体的な一歩とも言えた。

新高専の学科構成は、生産システムデザイン工学系が機械システム工学科・電気システム工学科・マテリアル環境工学科・建築デザイン学科

の4学科、情報電子システム工学系が知能エレクトロニクス工学科・情報システム工学科・情報ネットワーク工学科の3学科である。生産システムデザイン工学系の4学科が名取キャンパスに、そして情報電子システム工学系の3学科が広瀬キャンパスに設置された。また、専攻科は2専攻4コースで、名取キャンパスに生産システムデザイン工学専攻の生産システム工学コース・建築デザイン学コース・情報デザイン学コースが、広瀬キャンパスには情報電子システム工学専攻の情報電子システム工学コースがそれぞれ設置された。



名取キャンパス



広瀬キャンパス

仙台高等専門学校開校記念式典は、2009（平成21）年10月1日午後3時より、仙台エクセルホテル東急において行われた。式典に引き続き、記念祝賀会が同ホテルにて開催され、スーパー高専仙台高等専門学校の誕生を祝した。式典の前には、来賓として来日したフランスを除く海外協定校7大学の代表13名が出席して調印式を行い、今後国際交流を一層深めていくことを確認した。

仙台高専の校長には宮城高専と仙台電波高専の校長を兼任していた宮城光信が就任、名取キャンパス総務担当副校長に丹野顕が、広瀬キャンパス総務担当副校長には加藤靖がそれぞれ就任した。2010年4月4日、新入生209名を迎えて仙台高専第1期生の入学式が行われた。

仙台高専は、新モデルの高専として、①準学士課程教育の充実、②専攻科の拡充、③地域連携の強化、の3つをキーワードとして、準学士課程教育を見直し、社会の期待に応えられる人材育成に向けてより強化した新教育課程に移行した。専攻科については、多くの学生の進学に対する要望の高まりに応じて入学定員をほぼ倍増し、社会から強く望まれている高度な技術革新を担う人材の育成とその体制の創出に努めた。グローバルな人材育成と共に、地域の発展を支える学校として、さらには地元企業への就職の機会拡大に繋がる地域の製造業の活性化に向けて、新しい取り組みを強化していった。



開校記念式典



祝賀会



第1回入学式（2010年4月4日）

三 高き理想と 鍛えし技で
宮城を要に 花咲く文化
新たな息吹 頬にうけ
豊かな創造 時代を拓く
友よ学ばん 希望に燃えて
ああ 仙台高専 輝く未来

二 名取・広瀬の ふたつの川も
ひとつになりて 大海原へ
友愛を奏でる 波の音
溢れる情熱は 世界をめぐる
友よ語らん 我らの使命
ああ 仙台高専 漲る力

一 仰ぐ秀麗 蔵王の峰よ
萌ゆる若葉に 心も躍る
自治の旗風 あざやかに
たゆまぬ努力で 叡智を磨く
友よ究めん 科学の真理
ああ 仙台高専 夢呼ぶ我ら

仙台高等専門学校校歌
作詞 保岡 直樹

新しく仙台高専として発足するに当たり、校歌の歌詞と校章のデザインは公募により決定し、2009 (平成21)年4月3日、新高専設置準備協議会(2009年4月設置)において承認された。

そのうち校歌の歌詞は、170点の応募作品から予備審査員による審査と2009年3月6日の選考委員会を経て選ばれた。作詞の保岡直樹は東京都在住、「新たな時代を切り開く高専の夢と意気込み、そして未来へ躍進する姿を明るく、力強く、格調高く表現した」という。仙台市出身の作曲家兼ピアニストである江村玲子が曲を付けた。

また、校章のデザインは344点の応募作品から、展示会と学生・教職員によるアンケートを経て選考委員会において選ばれた。入選した齋明日美は、宮城高専・情報デザイン学科の2009年度の卒業生である。「心のある技術者、そして、心に訴えるモノづくりができる人材を育ててほしいという思いを込めて『心』を図案化」したものである。



作詞：保岡氏、作曲：江村氏、校章：齋氏

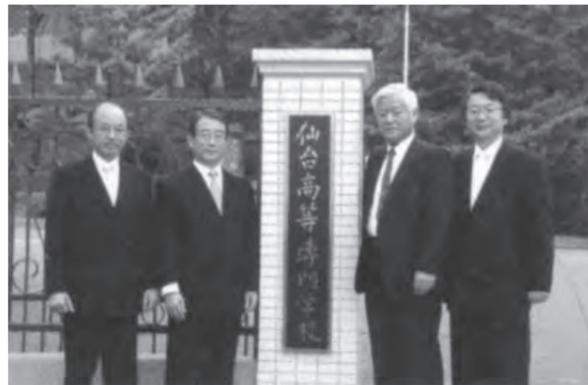
仙台高等専門学校校歌 作詞 保岡 直樹
作曲 江村 玲子

名取キャンパスにおいて、記念式典に先立って、2009 (平成21)年10月1日、新校名の銘板の除幕式が執り行われた。また、2009年度・2010年度(第1期・第2期)の卒業生より卒業記念品として校歌銘板が寄贈さ

れた。情報デザイン学科の酒井聡助教が設計を担当し、2011年10月25日、名取キャンパス総合科学教育棟2階の大教室前に設置した。

広瀬キャンパスにおいても、10月5日、新校名の銘板除幕式が執り行

われた。銘板は、日展理事の津金孝邦の書によるもので、新校名が書かれたプレートの幕が外され、開校を祝った。



名板除幕式名取キャンパス



名板除幕式広瀬キャンパス

2010 (平成22)年3月20日、仙台高専としての初の卒業生339名・修了生62名を送り出した。第1回卒業証書・修了証書授与式は仙台国際センターにおいて行われた。



会場の仙台国際センター



第1回卒業証書・修了証書授与式(2010年3月20日)

時代を読む

中国漁船衝突事件

2010年9月7日、尖閣諸島沖で違法操業する中国漁船が日本の海上保安庁巡視船2隻に体当たりした。同行は中国人船長

を公務執行妨害で逮捕したが、那覇地検は処分保留のまま釈放し、国内世論の非難を浴びた。また民主党政権は中国への配慮から映像の公開を拒否、インターネット動画サイトでこの映像が流れ、流出させた海上保安官が名乗り出た。

95/100 2011 (平成23)年 東日本大震災

2011年(平成23)年3月11日14時46分、東北地方の太平洋沖を震源とする地震が発生した。マグニチュードは9.0、日本周辺における観測史上最大の地震であった。この地震により巨大津波が発生し、太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらした。震災による死者・行方不明者は1万8000人超、各種ライフラインが寸断され、東日本大震災と呼ばれる未曾有の大災害となった。

名取キャンパスでは、イノベーションセンター棟・材料加工工場・二つの体育館と武道館が損壊、グラウンド・校舎周りの法面も地滑りや地割れなどの大きな被害を受け、在校生1名と入学予定者1名が津波で亡く

なった。広瀬キャンパスでは立ち入り禁止となる建物もなかったものの、校舎及び寄宿舎の内・外壁に亀裂、ガラス破損の被害を受け、卒業式および4月5日に予定していた入学式も中止し、学生の立ち入りを禁止して復旧を急いだ。約1カ月遅れの5月9日、地震の傷跡があちこちに見られるなか、名



法面の地滑り・地割れ

取・広瀬の両キャンパスに合計376名(準学士課程292名、専攻科84名)の新入生を迎え、復興に向けて新年度をスタートさせた。



図書落下



地盤沈下



地割れ



帰宅困難者を保護



構内での炊き出し

時代を読む

地上デジタルテレビ放送に移行

2011年7月24日、日本のテレビ放送は、東日本大震災で被災地、岩手・福島・宮城を除く44都道府県で地上デジタル

テレビ放送に全面移行、アナログBS放送も停波した。アナログ放送の約60年の歴史を閉じることに。

被災3県は、8カ月遅れとなる翌年3月31日まで延期の処置がなされた。

96/100 2011 (平成23)年 ホームカミングデー開催

2011(平成23)年10月22日、高専祭の開催と合わせて、名取・広瀬の両キャンパスでホームカミングデーを開催した。本校の卒業生・修了生、さらには地域の方々と在校生・教職員との相互交流を図り、関係をより深めることを目的とした。初めての開催であり、次年度に計画している高専制度創設50周年記念行事のプレカミングデーと位置付けた。

両キャンパスでは、それぞれホームカミングルームを設置し、旧宮城高専と旧仙台電波高専の当時を懐かしむ写真や出版物、現在の仙台高専の紹介パネルを展示した。当日は、高専祭でキャンパス全体に活気があふれるなか、保護者や同窓生、地域の

住民など780名以上が来室した。特に同窓会と後援会の全面的な支援を受け、同窓生との絆を深める第一歩

として、その名にふさわしい催しとなった。



名取キャンパス展示



広瀬キャンパス展示

97/100 2011 (平成23)年 2010 年度卒業会・修了会開催



2011 (平成22) 年3月19日に予定されていた2010年度の卒業証書・修了証書授与式は、同日11日に発生した東日本大震災により、場所の確保が困難なため中止を余儀なくされた。卒業証書・修了証書は郵送され、卒業生・修了生は、心残りのまま母校を巣立っていった。

2011年10月22日、ホームカミングデーのメインイベントとして、2010年度卒業会・修了会を実施した。会場の仙台市の江陽グランドホテルには、両キャンパス合わせて208名の卒業生・修了生が出席し、内田龍男校長と木谷雅人高専機構理事、山川周平卒業生代表と高橋良平修了生代

表が挨拶した。続いて佐々木勇仙台高専同窓会会長、大山洋一仙台高専後援会会長が祝辞を、新山敏彦と大江章がそれぞれ名取と広瀬の学生OBとして激励の言葉を述べた。引き続き各キャンパスの同窓会や懇親会が開催され、同窓生や教職員との懇親を深めることができた。



2010年度卒業会・修了会 (2011年10月22日)



98/100 2011 (平成23)年 ロボコンでダブル受賞



2011 (平成23) 年11月20日、東京の両国国技館において、アイデア対決全国高等専門学校ロボット・コンテスト (通称ロボコン) 全国大会が開催された。

2011年のテーマは「ロボ・ボウル」。二足歩行のオフenseロボットが、ディフェンス・ロボットをかいくぐって学生から受け取ったボールを、チー

ムメイトの学生にタッチダウンパス、そのタイムを競う。仙台高専名取キャンパスのロボット「OR (オーアール)」は準々決勝を大会最速記録の8秒で勝利、準決勝では強豪北九州高専を破った。決勝では福島高専を破って優勝、1回戦から、全てのタッチダウンを10秒以内で決めるという安定した戦いぶりであった。優勝に加え

アイデアと技術力が評価され、最高の栄誉であるロボコン大賞も受賞し、完全制覇を成し遂げた。

名取キャンパスの優勝は、旧宮城高専の時代を含めて12年ぶり2回目、ロボコン大賞は、前年の2010年に引き続き2年連続の受賞であった。優勝とロボコン大賞を同時に受賞したのは、ロボコン史上2校目である。



優勝とロボコン大賞の2冠達成



オフense・ロボットの操作



競技中のメンバー

99/100 2012 (平成24)年-2013 (平成25)年 第2回ISTS2012 in バンコク 第18回高専シンポジウム in 仙台



2012 (平成24) 年度、仙台高専は下記の2つのシンポジウムを幹事校として運営し、全国の高専を牽引した。

■ 第2回ISTS2012 in バンコク

2012 (平成24) 年11月21日から24日まで、高専機構とその協定校であるタイのキングモンクット工科大学ラカバン校の共催により、専攻科学生を対象とした学生主体の国際シンポジウムISTS (International

Symposium on Technology for Sustainability) 2012がタイ・バンコクのホテルSwissotel Le Concorde Bangkokを会場に開催された。第2回目であるISTS2012は長岡技術科学大学および豊橋技術科学大学が共催機

関として参加し、教員等にも門戸が開かれた。約220件の投稿論文のうち約160件が採択され、仙台高専からは専攻科生6名と教員1名が採択され、英語で堂々と発表した。



仙台高専生の発表



内田龍男校長の挨拶

■ 第18回高専シンポジウム in 仙台

2013 (平成25) 年1月26日、第18回高専シンポジウム in 仙台が、仙台高専名取キャンパスを主会場として開催された。高専シンポジウムは、高専の準学士課程・専攻科学生の研究発表と教員相互の連携の場として毎年開催されている。年々分野が拡大し発表件数も増加する傾向にあり、会場もホテルや市民ホールな

どを利用することが多くなっていた。震災の影響や予算の関係で、8年ぶりに準備校の校舎を会場とした。

当日は、一般参加者も含めて542名の参加があり、北海道から沖縄までの国公私立高専47校および長岡技術科学大学・豊橋技術科学大学の学生・教職員による計395件 (口頭発表265件・ポスター発表130件)

の研究発表が行われ、全体として活発な討議が行われ盛大なシンポジウムとなった。



『第18回高専シンポジウム in 仙台』の講演要旨集



口頭発表会場



ポスター発表会場

2013 (平成 25) 年は、仙台高専の前身である旧宮城高専創設 50 周年、旧仙台電波高専創設約 40 周年 (42 周年)、財団法人東北無線講習所設立 (1943 年) からたどると創基 70 周年となり、重要な節目の年にあたるため、これらを取りまとめてさまざまな「高専制度創設 50 周年記念事業」を行うこととした。記念事業は、これらの歴史を振り返るとともに、仙台高専の将来への発展へと繋げることを目的とした。

記念事業の第一弾として、同年 5 月 23 日、仙台サンプラザホールにおいて、仙台高専シンポジウム・記念講演を開催した。本科・専攻科の全学生を対象としたもので、内田龍男校長の開会挨拶の後、市川隆東北大学大学院理学研究科教授 (天文学専攻) による記念講演「南極から夢見る果ての宇宙-ものづくりと天文学と-」が行われた。引き続いて、「仙台高専の将来展望」をテーマとして、パネルディスカッションを開催した。パネリストは、四ツ柳隆夫元宮城高



記念講演

専校長、阿部清人仙台高専参与・元仙台高専後援会会長、仙台高専産学連携振興会副会長である湯澤哲雄株式会社ジーイーエス代表取締役社長、佐々木勇地域支援企業みんなの大川倶楽部株式会社代表 (仙台高専同窓会前会長) と専攻科生産システムデザイン工学専攻 2 年の佐野文香・情報電子システム工学専攻 2 年の遠藤靖典の 6 名である。内海康雄副校長が司会を務め、それぞれの立場と視点から仙台高専の今後を見据え、高専の果たす役割と人材の養成について熱く語った。

その他、高専制度創設 50 周年記念事業として、記念講演・祝賀会 (10 月 11 日)・記念ホームカミングデー (10



市川講師と 3 高専の校旗



講演を聴く全校学生

月 26 日・27 日)・記念誌刊行 (2013 年度刊行予定)・記念コンテストなどを計画している。



仙台高専シンポジウム



第 2 部

仙台高専 Memories
輝かしい軌跡

第1章 旧学科等の歩み

機械工学科

機械工学科は、1963（昭和38）年の宮城工業高等専門学校創立当初より専門学科の一翼を担い、数多くの卒業生を産業界に送り出してきました。その人数は、2009（平成21）年の統合再編までの46年間に卒業生1,594名（2専門履修コース修了生19名を含みます）、統合再編後、仙台高等専門学校の1回生としての卒業生から平成24年度まで160名の合計1,754名を数えます。そして、2013年現在、最後の機械工学科卒業生となる学生諸君が5年生として学んでいるところです。

そのカリキュラムは、創立期から実践的機械技術

者の育成を目指し、実習工場と二人三脚を組んで、実験、実習を多く取り入れて学問と技術の基礎を習得させるというものでした。このようなカリキュラムに対する考え方は基本的に変化していませんが、カリキュラムそのものは数次の改変を経てきます。創立期のカリキュラムは過密であり詰め込みになりがちということから、昭和50年代に逐次ゆとりのある授業内容へと変化しました。昭和60年代からはコンピュータの発達に伴う工業界の変化に対応して、情報処理教育の充実が図られました。1990年にはCADシステムを導入し、学生一人ひとりに各々



第1回生入学記念写真（背景は富沢仮校舎）

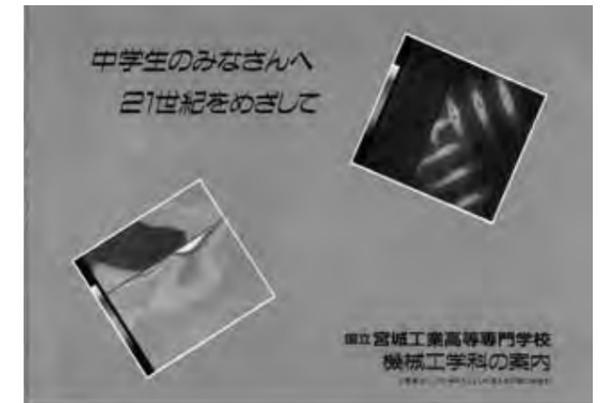


授業中の様子など（第13回生、昭和54年度）

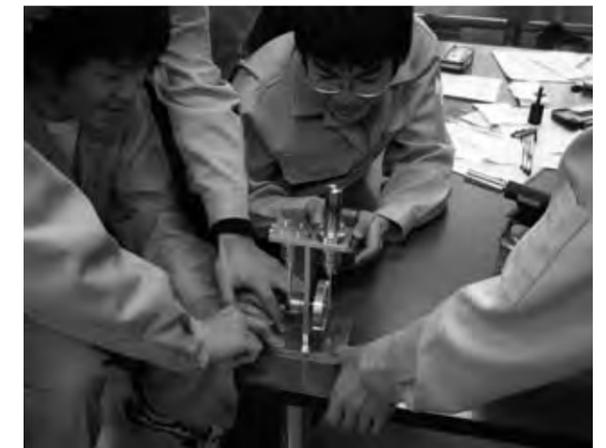
1台のコンピュータを操作させる環境を構築し、製図教育に大きな変革を加えました。

このように情報機器の活用を進めることと並行して、実験、実習科目にも見直しを行い、2002年からは設計製図と工作実習を連携させたスターリングエンジンの設計および製作を実施しています。自分たちで作製したスターリングエンジンが動作した時の笑顔の爆発は機械技術者の喜びの瞬間であり、貴重な経験になっているものと思います。

施設に目を向けると、2001年度には学科棟の改修工事が実施され、外観のリニューアルと共に実験室の整備が行われ、実験室の効率的な利用が可能となりました。また、2007年には実習工場の改修が行われ、同時に創造教育センターとして発展的に生まれ変わりました。マシニングセンタなどコンピュータ制御加工機械が増強され、教育・研究の支援工房としての機能が強化されています。その一方で、旋盤等による実習は今も続けられており、機械技術者としての基礎教育を担い続けています。



機械工学科紹介パンフレット表紙（平成元年頃）



スターリングエンジン製作中（平成20年）

卒業後の進路について見ると、1989年頃には機械工学科卒業生の90%は就職し、10%が進学するという状況でした。高度経済成長期、バブル期など企業の求人意欲の高い時期はもちろん、オイルショック期、バブル崩壊後など就職難と言われた時期にも就職希望者は全て就職先が決定して卒業式を迎えています。その後、1990年代末になってくると、国立大学の高専からの編入受け入れ体制が進んだことや高学歴を目指す学生が増えたことなどから、就職と進学が半々程度となり現在に至っています。

機械工学科は2013年度の卒業生をもって50年の歴史の幕を閉じることとなりますが、その伝統は機械システム工学科に引き継がれ新たな歴史を刻むこととなります。
（学生主事、副校長（学生担当）、
機械工学科 教授 佐藤一志）

電気工学科

電気工学科は、1963（昭和38）年に設置され、電気技術者として幅広い分野で活躍できる実践的技術者の育成を目的とした教育を行ってきました。教育課程では、電気工学の根幹となる電気回路と電磁気学を柱として、電気・電子・通信・情報・制御などの幅広い分野を5年間のくさび型専門教育においてきめ細かく配置されました。授業では講義・演習・実験を有機的に結びつけ、基礎から応用への知識と技術を確実に身に付けられるように教育内容の改善を常に行ってきました。特に、実験は1年生から5年生までに配置され、電氣的現象や法則を理解できるようなテーマを設定し、計測器の使い方やレポートの書き方に至るまで懇切丁寧な指導が行われてきました。4年生からは研究室に配属されて卒業研究を行い、研究の仕方の基礎を身に付けるための教育が行われてきました。また、電気工学科は電気主任技術者認定校としての教育を行い、学生は在学中に電気主任技術者の資格取得や第二種電気工事士試験の筆記試験と実技試験に合格するようになりました。

このようにして、5年間の準学士課程において電気工学分野の幅広い知識と技術を身に付けた卒業生は、産業界のさまざまな分野において活躍しています。電気や機械などの製造業をはじめ運輸・情報通信、電力、サービス業などの多くの企業に実践的技

術者として就職し、その実力は産業界の要求に応じて高い評価を得ています。これまで不況などの影響で就職が厳しい状況もありましたが、就職希望の卒業生は就職率100%を継続しています。

一方、さらに高度な知識と技術を身に付けるために大学に編入学する学生が次第に増えてきました。長岡技術科学大学と豊橋技術科学大学や東北大学、岩手大学などの多くの国立大学に推薦または学力で進学しています。約20年前までは進学する学生の割合は3割程度でしたが、本校に専攻科が設置されると進学する学生も4割から5割近くになりました。

高専制度50年のなかでも特に最近の15年間を振り返ると、産業構造の変化と少子高齢化などの社会的背景により高専教育の改革が進められ、本校では、1998（平成10）年度の専攻科設置以降、JABEE認定、独立行政法人化、機関別認証評価および2009年の高度化再編による仙台高等専門学校の設置など大きく様変わりしました。電気工学科も電気システム工学科に名称が変わり、カリキュラムの変更や教育内容の見直しが常に進められています。しかし、教育の目的は電気工学分野の幅広い知識と技術を身に付けた電気技術者として、社会の要求に応じて産業界のさまざまな分野で活躍する実践的技術者の育成であることは創設以来変わらずに受け継がれてきました。（電気工学科 学科長 中村富雄）



1999年度卒業生（第33回生）分散会



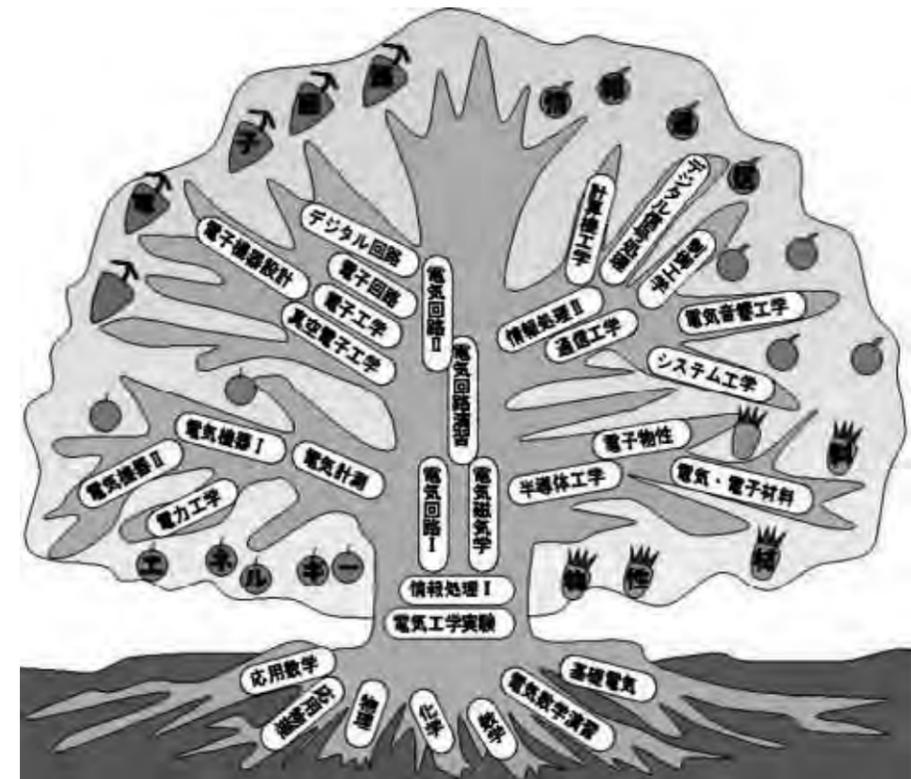
2000年度公開講座「いきなりC言語！」



2010年度第4学年（第45回生）見学旅行（韓国）



2013年度高電圧実験風景



根から幹へ、幹から枝葉へ、そして結実（果実）へ.....大観を成す電樹（電気工学科HPより）

■電気工学科教職員（在任年度）

青海佳三郎	(1963～1968)	唐澤 信司	(1967～2005)	板谷 雄二	(1985～1990)	百瀬 丘	(1993～2004)
有川 忠義	(1964～1988)	渡辺 宏	(1968～1997*)	林 修一	(1986～1994)	佐藤 喜一	(1997～2009)
近藤 務	(1964～1972)	小枝 昌造	(1968～1991)	野角 光治	(1988～現在)	佐々木典彦	(2004～現在)
豊岡 忠義	(1965～2005)	二階堂芳賞	(1973～現在)	石川(渡辺)香	(1989～1991)	櫻庭 弘	(2005～現在)
井上 利男	(1965～1971)	余越 泰三	(1973～1982)	安本 重次	(1989～1992)	小澤 哲也	(2006～2010)
坂水 弘	(1965～1973)	水谷 敏	(1973～1987)	中村 富雄	(1991～現在)	山田 洋	(2008～現在)
佐藤 次男	(1966～2010*)	舛井 和明	(1975～2004)	千葉 胤昭	(1991～1998)	佐藤 拓	(2008～現在)
田中 恒雄	(1966～1975)	八木 正昭	(1978～1992)	古瀬 則夫	(1992～現在)	矢入 聡	(2009～現在)
河野 達夫	(1966～1984)	佐々木愨彦	(1983～2009)	佐藤 隆	(1993～現在)	若生 一広	(2012～現在)

*基礎専門・総合科学系理数科を含む

建築学科

建築学科は、1963（昭和38）年に宮城高専創立とともに設置された。毎年の入学者は約40名であり、2009（平成21）年4月には宮城高専として47回目の1年生が入学し、2013年度は5年生になっている。1期生の学籍番号は3701から始まったが、数年を経て、建築学科学生の学籍番号は「〇〇7××」に定着している。上記の〇〇は西暦の下2桁であり、7が学科番号、××は通し番号を表している。学科番号は機械が1、電気が3であり、第3学科として発足した建築学科ではあるが、高度経済成長のなかで、機械・電気の複クラス化や学科増を見込んだ番号付けであったことが窺える。

1963年に、一般科目85時間、特別教育活動3時間、専門科目105時間、合計193時間として教育課程が定められたが、1977年より一般科目85単位、専門科目96単位、合計181単位に改められ、1992年に週5日制が導入された時には、卒業条件が「一般科目75単位以上、専門科目82単位以上で、これらに何らかの選択科目の単位を加えて167単位以上」となり、現在に至っている。

1963年の教育課程を現在のそれと比べると、以下のことが特徴として挙げられよう。

- ①意匠系では、造形、意匠などの単位が1～3年次で厚く配当されている。設計製図は5年間で25単位にも上る。
- ②計画系では「環境工学」という科目がなく、建築計画が2～5年次で10単位になっている。
- ③構造系では、一般構造に現行の3倍の時間をかけるとともに、各種構造の時間も多し。構造計画、土質・基礎構造が開講されている。
- ④力学系では、構造力学の単位が多だけでなく、応用力学が開講されている。
- ⑤卒業研究は5年次の7単位のみである。
- ⑥応用数学が3年次にあり、単位数も2倍であることに加え、機械と電気の概論が開講されている。

宮城高専建築学科は、2009年3月までに1,539名の卒業生を輩出した。仙台高専において宮城高専の課程を修めて卒業した者は、通算43～46期の152名で、2013年度5年生に41名、4年生に2名が在籍している。



製図室での講評会



卒業設計発表会

国立大学の編入学への門戸開放と専攻科の定員増を受けて、5年生の約10名が大学進学、約10名が専攻科進学、約20名が就職となり、中堅技術者の不足に対応するために設置された学校から様変わりした

ことが明らかである。最後に、宮城高専建築学科で勤務した教職員を表の形で紹介する。（建築学科 学科長 飯藤将之）

常勤推移—建築

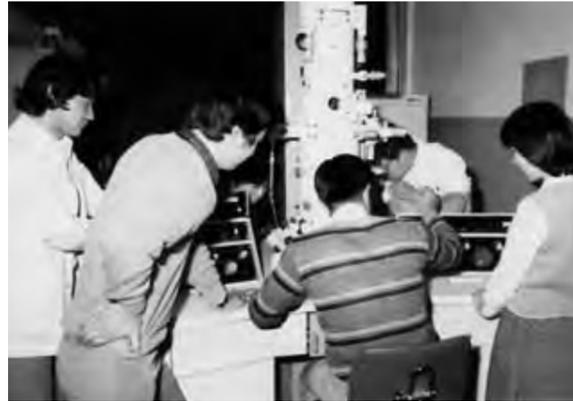
期	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47			
西暦	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71	'72	'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82	'83	'84	'85	'86	'87	'88	'89	'90	'91	'92	'93	'94	'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06	'07	'08	'09			
和暦	S38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	H元	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21			
開校	東京五輪			札幌五輪			宮城県沖地震			二専門コース開始			専攻科設置			学科改修																																		
木文 繁夫																																																		
有川 晋	6																																																	
大和 高一郎																																																		
伊藤 繁巳																																																		
山田 哲男																																																		
長田 隆																																																		
加藤 正一郎											10																																							
千葉 茂男																																																		
杉田 正雄											杉田正雄																																							
伊藤 憲雄											伊藤憲雄																																							
笠松 富二夫											笠松富二夫																																							
森 弘則																					森 弘則																													
本間 敏行																					本間敏行																													
菅原 養助																					菅原養助																													
内海 康雄																					内海康雄																													
遠藤 義男																					遠藤義男																													
飯藤 将之																					飯藤将之																													
青木 恭介																					青木恭介										D D D D D D										学位授与機構									
青木 孝義																					青木孝義																													
小林 仁																					小林 仁																													
佐藤 健																					佐藤 健																													
澁谷 純一																					7 澁谷純一																													
熊谷 広子																					熊谷広子																													
周 志云																					周 志云																													
李 晚在																					李 晚在																													
権代 由範																					権代由範																													

金属工学科／材料工学科

金属工学科は、宮城高専の創設後5年を経た1968（昭和43）年に増設された学科であった。当時の急速な経済発展に伴い、大型製鉄所の拡充や金属材料の重要性の高まりにより、不足する金属技術者育成という社会的要請から設立された。

カリキュラムは金属製錬や加工学を中心に金属材料の生産から加工までを学ぶ科目が組まれた。設置基準における機械系学科としての位置づけから機械系科目も多かった。学生実験では、現在と比較すると非常に多い46の実験テーマが用意され、製錬の基礎、金属の物性、観察・評価、加工など金属学全体を網羅するものであった。その内容には透過電子顕微鏡、電子計算機などが見受けられ、最新技術を導入した実験であったことが推測できる。教員の意気込みとともに学生の能力の高さが垣間見られる。当時の写真には、体育祭や遠足など現在では行われていない行事も記録されており、活発な学生生活の様子がかがえる。

一方、金属工学科は当初より志願者倍率が低いという問題を抱え、度々入学者が定員割れを起こしていた。産業の中核がエレクトロニクスへと変わる時代にあったため求人数も伸び悩む。1979、1980年に



透過電子顕微鏡による観察（宮城高専学校概要1982より）

は文部省の教育方法改善の予算が採択され、改組への取り組みが開始される。他高専材料系学科との情報交換や学外有識者との討議が行われ、新学科への方向づけがなされた。

材料工学科は、1986年4月に金属工学科を改組して誕生した。カリキュラムにおいては、多様な材料科学の基礎に重点を置き、金属やセラミックなどの材料系科目に加え、生産現場や技術開発において必須となる生産工学や制御工学、電気・電子回路、情報処理などの科目を導入した。この分野の拡大により、材料やその製品の生産技術全般の基礎をなす専



改修前の材料工学科棟

門知識と技術を学べる点に特徴を持つ。2000（平成12）年には学科棟が耐震改修とともに実験室構成が整理され、現在に近い配置となった。

産業界の多様化、新素材の開発、世界的な環境保全などの社会的背景により材料工学への関心は高まり、2002年以降は志願者倍率も上昇している。進路先は金属・機械系に加えて化学系企業が増加し、また専攻科設置と大学編入学拡大により進路選択の幅



X線解析装置で実験を行う学生（学科パンフレットより 1986年頃）



金属材料試験を行う池田教官と学生（宮城高専学校概要1982より）



大運動会（金属工学科4回生アルバムより）

は広がっている。

（材料工学科 学科長 浅田 格）

（参考）

- ・金属工学科将来の在り方を踏まえた教育内容方法の改善（1980年）
- ・宮城工業高等専門学校材料工学科概要説明書（1985年）
- ・卒業生アルバム（金属工学科4・10・11回生）



金属の圧延実験（宮城高専学校概要1983より）



松島野外研修（金属工学科10回生アルバムより）



遠足・花見（金属工学科11回生アルバムより）

情報デザイン学科

情報デザインとは、…と始めると大きな議論の始まりになりますが、「情報」も「デザイン」も広く解釈できる学問体系です。そして、宮城高専から仙台高専の歴史を通して、情報デザイン学科は最初で最後の非エンジニアリング系の学科であります。これは、エンジニアを育てないという意味ではなく、エンジニアだけではなく、クリエイター、教育者、公務員等、多様な人材を育てるという意図があります。現に、卒業生の多くもエンジニア以外の分野で多くの力を発揮しております。この情報デザイン学科がエンジニア教育中心の高専の中に存在したことは、宮城高専、仙台高専にとっては意義深いものです。

まず、情報デザイン学科は、学科開設当時から「女子学生数が半数以上」という特長がありました。そして、振り返ると、その女子のパワーは計り知れないものがありました。例えば、混合学級が始まった理由はいろいろありますが、一番大きいのは情報デザイン学科女子の存在でしょう。それまで、古き良き時代の高専とはまるで違った学生が特定のクラスに増え、新しい明るい高専の学生生活へ変わった契機になりました。カリキュラムへ影響はもちろですが、学科の学生の活動も仙台高専のさまざまな文化に大きく貢献しました。

情報デザイン学科（以下D科）1回生は本校の専攻科の1回生でもあります。つまり、本校の専攻科はD科の完成とともに創設されました。D科の2回生が寄付してくれたピアノは、音楽の授業で必要不可欠です。D科3回生が学ランの最後の応援団長で、4回生がチアリーダー最初の応援団長であります。5回生たちは、D科伝統のお化け屋敷を学生からの発案で作上げたり、書道部に多くのD科生が関わり先生方の書を展示したりと、高専祭の基本アイデアをD科から発信しました。また、この頃の情報デザイン学科の課題でシルクスクリーンがあり、5月のスポーツ大会でお揃いのクラスTシャツを作り始めたりします。これは、スポ体の「野田コ

レ」に発展することになりました。6回生たちは、高専祭で初めて組織的に手芸やクッキーを展示・販売し、ハンドメイド部の創設に至りました。

8回生と11回生のD科の姉妹は、石ノ森章太郎記念館でも展示されたリカレンジャーのデザインを手がけました。そして、12回生は、この冊子の表紙にもある、「心」をモチーフにした仙台高専の校章をデザインしました。

我が情報デザイン学科は、我が国最初の「情報デザイン」と名前がつく学科です。つまり、わが国で最も伝統のある情報デザイン学科ですから、卒業生の皆さんはここで学んだことはおおいに誇れることです。また本学科に関わった教員も新しい学科体系に挑んで、さまざまな確執を生みながらも、情報デザイン学科に入学した学生たちに良い将来をという共通の思いをもって、粉骨砕身の思いで教育してきましたと思います。仙台高専情報デザイン学科は遂に終焉を迎えますが、関わった全員が仙台高専の文化を築いたこと、わが国最初の学科に携わったこと、に多いに誇りを持ち、その魂を何らかの形で後世に受け継いで頂くことを切に願っています。

(情報デザイン学科 学科長 本郷 哲)



第1回生入学時花山研修



創設時のハンドメイド愛好会



第13回生卒業記念写真



第14回生5年時冬の一コマ



第17回生研修旅行

◆ 情報デザイン学科の学生がデザインした代表作品 ◆



校章デザイン



リカレンジャーキャラクターデザイン

情報通信工学科

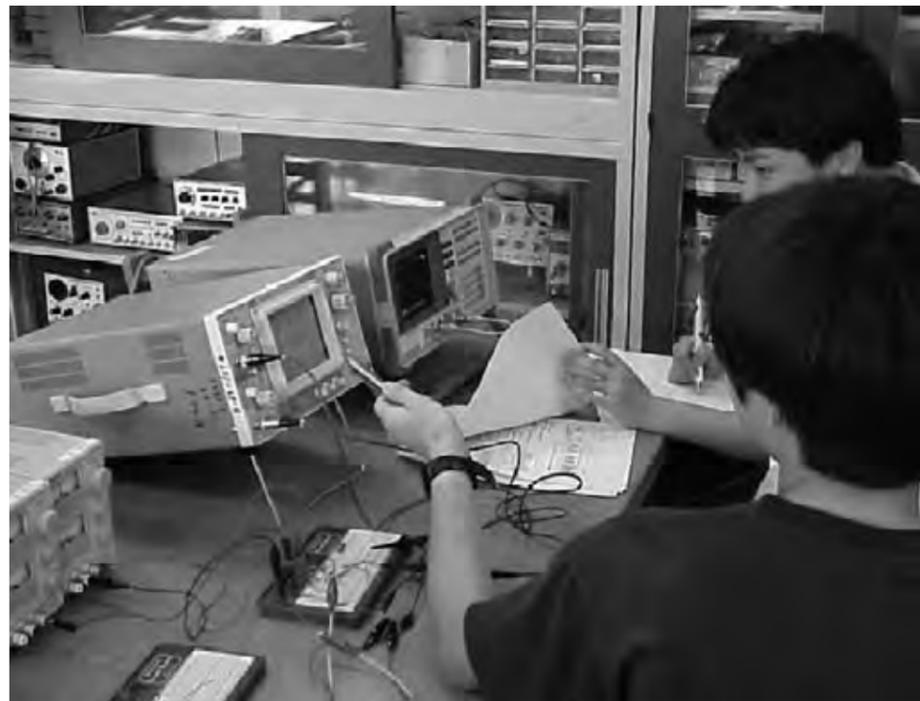
本校情報通信工学科は、1943（昭和18）年設置の無線電信講習所、1949年開校の国立電波高校を経て、1971年に第一級無線通信士の養成確保を目指し設立された国立仙台電波高専電波通信学科以来の教育の流れを受け継いできた。電波通信学科は、モールス無線電信から衛星通信やデジタル通信へと通信技術が替わる中で、常に通信技術の進歩や社会インフラの変化に合わせて教育内容の近代化に努めてきたが、通信業界は自由競争時代に突入し、通信とコンピュータが融合した情報通信ネットワークは社会の構造基盤としてグローバル化、インテリジェント化が進んでいった。このような社会的背景を受けて、カリキュラム改正に関する三電波高専校長会議を経て、1989（平成元）年に電波通信学科は情報通信工学科へ移行することとなった。当時の安田嘉之電波通信学科主任が中心となり検討委員会が発足、通信技術とコンピュータを融合した高度かつ多様化された情報通信システムの開発、設計・構築、管理運用

ができる実践的技術者の養成が教育目標に掲げられた。

当初女子学生の入学率が高く『仙台電波高専20周年記念誌』には、女子学生の数は電波通信学科時代の3倍に上り、また県外出身者は半分に減少したとある。新しい時代の新しい学科の誕生でもあった。

五十嵐隆初代学科長の後を1995年に古谷恒雄教授が引き継ぎ、続いて根岸幸康教授が1997年から学科長を務めた。1999年には三浦幹雄教授、2003年から3年間は野田泰久教授、2007年から藤木が学科長を引き継いだ。

この間、情報通信工学科は、時代の変化や高専の組織改編に合わせてカリキュラムの改正や教育内容の見直しに取り組んできた。しかし、その教育目標は電波通信学科から大きく変わらず、多様な情報通信技術の基本的な機能や原理を理解し、情報処理技術、デジタル・アナログ通信に関する伝送技術、コン



AM変調の実験（4年生）

ピュータネットワーク技術を用いて情報通信の分野で国際社会にも貢献ができる創造的なエンジニアの養成を目指してきた。

1998年には、電波通信学科から受け継いだ無線従事者国家試験の試験科目一部免除や、科目確認校の認定に加えて第一級陸上特殊無線技士の長期養成課程の学校認定を受けた。2004年度には、情報通信分野におけるネットワーク技術者の需要の社会的高まりを受けシスコネットワークアカデミー（CCNA）を取り入れ、卒業までにCCNA4まで取得できる選択的カリキュラムを組んだ。また、大学等編入学希望者の増加に伴い入試対策演習コースを設けるなど、学生の多様な進路に合わせて教育内容の改革が度々行われてきた。

一方、入試志願倍率が徐々に低下する中で、倍率を向上させ優秀な中学生を多く獲得すべく中学生向け公開講座等開催へ学科を挙げての取り組みが始まった。2005年には、学科志願倍率増を目指して、野田学科長の発案で若手教員を中心としたワーキンググループが立ち上げられ、学科のカラー、ロゴ、



アンテナ特性の測定実験（4年生）



2005年に作られた情報通信工学科のロゴ

イメージパンフや紹介ビデオの作成等々、学科一丸となって取り組んだ。揃いのロゴ入りジャケットは当時の“ちょっと熱いR学科”の懐かしい思い出である。

2009年高度化再編により仙台電波高専は廃校となり、無線従事者資格関連の学校認定は全て再申請が必要となった。仙台電波高専情報通信工学科から仙台高専情報通信工学科への移行に伴い、旧体制で教育された学生への廃校処置による不利益が生じないよう東北総合通信局へ何度も足を運び、総務省で活躍するOBの協力も得ながら奔走した記憶は新しい。

これまで情報通信工学科はほぼ恒常的に通信業界から安定した求人を確保し、就職率も比較的高く推移してきた。景気に大きく左右されることなく様々な通信業界へ人材を輩出してこられたのは、電波通信学科の時代から情報通信業界を支える中堅技術者の養成を目指した教育を諸先輩の先生方が脈々と受け継ぎ実践してきたこと、そしてOBの方々の約70年間にわたる通信業界での活躍の賜物であると思う。（情報通信工学科 学科長 藤木なほみ）



2011年に新設移転された電波無響室

電子工学科

1977（昭和52）年4月、従来の電波通信学科のみの2学級から、電波通信学科と電子工学科の2学科へ改組。同年、それぞれ40名の新生を迎えました。電子工学科としては、1981年度に第1期生29名を送り出して以来、現5年生36名の卒業によって、総勢1,165名の卒業生を輩出することとなります。

発足当時の1977年は、世界的にはスペースシャトルが大気圏内の自由飛行を初めて成功させた年。日本国内では、あたくも電子工学科の誕生を祝うかのごとく王貞治選手がホームランの世界最多記録を達成。経済面では、オイルショック後の不況から景気回復への転換期であり、日本製品が国際競争力を付けて円相場が急騰した時期でした。

さて、電子工学科は、ものづくりの精神を重視し、「電子回路設計・集積回路設計技術」「マイクロコンピュータ・プログラミング技術」「電子材料・電子

デバイス技術」を3本柱として、教育に取り組んできました。また、2000（平成12）年度の第4学年から導入された「創造製作」は、学科の歴史では後半に属しますが、教育カリキュラムでは重要な位置にありました。「創造製作」は、センサ技術と電子回路設計に立脚した装置製作を題材とし、「何らかの物理量を測定して表示させる装置」の製作を行います。装置の企画立案から、設計・製作さらにデバッグまで、1年間かけてじっくり行います。これは従来の体験型の学習と異なり、学んできた要素技術を実践的に応用する、いわゆるPBL（Project Based Learning）型の学習です。作品の中には、「音の到達時間差を検知して音源の方向を表示する装置」や「口笛の周波数を計測して音階で表示する装置」など各種の面白いものがありました。

電子工学科の学生は、学業以外ではロボコン等に



電子工学科1期生と担任の熊谷正純教官



2000年度ロボコン東北大会にて技術賞を獲得した4Eチーム



創造製作に取り組む4E学生（風向・風速計を製作中）

も積極的に関わってきました。1990年の第3回全国高専ロボットコンテストでは、本校の「テト坊」が優勝しましたが、これは電子工学科5年生有志が中心となって結成したチームの偉業です。その後も、学科独自のチームを結成あるいは科学部チームの一員として、ロボコンに参加し続けて大活躍しています。

末筆となりますが、来る2014年3月末を以て電子工学科は37年間の歴史に幕を降ろします。卒業生の

ますますの活躍と健勝を心から祈願するとともに、長年にわたって電子工学科を支えて下さった後援会ならびに関係教職員各位の貢献に深謝申し上げます。（電子工学科 学科長 那須潜思）

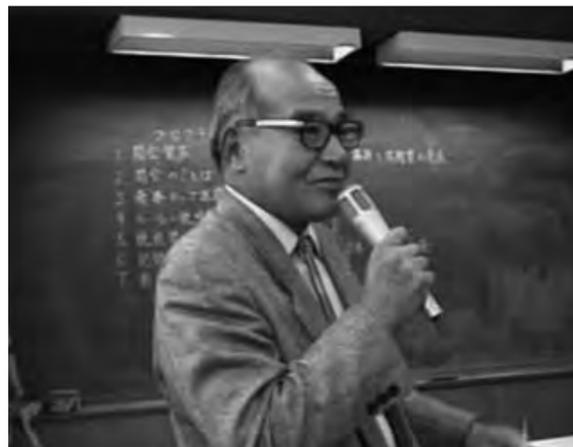


校内スポーツ大会でも元気な5E学生（2013年度総合2位）

電子制御工学科

高専50周年の今年度、約30年の電子制御工学科の歩みが終わろうとしています。電子制御工学科は、「機器の目的毎に専用のマイクロコンピュータを組み込んで制御する時代」を予見した中川一郎先生の構想で、コンピュータと外部被制御機器をつなぐインタフェース技術、マイコン利用技術（昨今の組み込み技術）を専門とする技術者を養成する学科として、世界に先駆けて1984（昭和59）年度に申請・認可され、1985年4月に第1期生が入学しました。そして、2013（平成25）年度に最後のクラス、第25期生が卒業を迎えます。その間、およそ千名の卒業生を世に出すこととなります。時代とともにマイコンの能力が飛躍的に向上し、あらゆるものにマイコンが組み込まれ、中川先生が構想したインタフェース技術者、組み込み技術者が一層不可欠な時代になっている今、電子制御工学科の幕を引くことは誠にもって残念であります。

電子制御工学科のカリキュラム設計を担当し、初代学科主任を務められた中川先生（写真下）は、1年生の講義で、デジタル回路やコンピュータの基礎概念を解説しながら、産業界での経験を基に、電子制御技術の重要性を熱く語り、この分野を学ぶことの素晴らしさと、この分野で活躍する夢の醸成に努めました。この中川先生の努力のお陰で、第1期



1993年中川杯ロボットコンテストで講評する中川一郎先生

生は学科教材開発に積極的に関わって、電子制御工学科のカリキュラム形成に大いに貢献してくれました（写真右上）。

特に、第1期生は第5学年時に「これまで学んできたことを駆使して自立型ロボットを開発する演習をさせてほしい」との要望を出し、昨今注目されているPBL教育の典型とも言える「中川杯ロボットコンテスト」、後の「ロボテクコンテスト」が学科のカリキュラムに組み入れられました（写真右下）。学科内では「ハンダ付け職人を育てるわけじゃない。もっと数学や物理を勉強させるべき」との意見も出ましたが、中川先生と服部正行先生の強力なサポートで実現しました。コンテスト前夜、ロボットの制御プログラム完成を目指し、デバッグでステップ動作させるために、半分気を失いかげながら夜通しスペースバーを押し続ける女子学生の姿に、科目担当者の一人として迷いを感じながらも、逞しい技術者に育つための荒行の一つとして、学科をあげて続けてきました。

盆や正月に挨拶に来てくれるOBへ、「大変そうだね」と声がけると「大丈夫ですよ、電子制御を卒業したんですから」と返されたことが度々あります。頑張っ期待に届いてくれた学生たち、逞しく成長してくれた学生たちに、ただただ感謝です。世に先駆けたこのPBL教育の長期実践は各界から高く評価され、1997年に文部省（現：文部科学省）の「創造教育の実践事例集」に取り上げられ、2005年に日本工学教育協会業績賞、2006年には日本機械学会教育賞を受賞しました。

電子制御工学科では、新人教員は必ず中川先生の「デジタル回路」講義実験の指導補助に入り、中川先生の創造的モノづくりDNAを受け継ぐ努力をしてきました。1993年に採用された與那嶺尚広先生も中川流デジタル回路・マイコン教育を担当しました。2001年に電子制御工学科から電子工学科へ移籍された後も與那嶺尚弘先生は組み込み技術教育に努力し、独自のe-Learningシステム「K-skill」を構



2004年の電子制御工学科4年の制御工学実験風景



ロボテクコンテスト

築されて2011年第8回日本e-Learning大賞奨励賞を受賞しました。今や、このe-Learningシステムは、「K（組み込み）-skill」から「K（高専）-skill」へ発展しようとしています。高度化再編後、電子制御工学科の教員は、3つの新学科へばらばらに移籍し、電子制御工学科はなくなります。しかしこのことによって、中川先生のモノづくりDNAが仙台高専全

体へ受け継がれて発展していくことを期待しています。もちろん、中川先生の指導を直接受けた卒業生ならびに中川先生からDNAを受け継いだ教員達に指導された卒業生諸氏が、今、産業界にあって、モノづくりDNAによる創造的活動を一層豊かに発現させていかれることを願ってやみません。

（電子制御工学科 学科長 大泉哲哉）

情報工学科

情報工学科は、仙台電波高専の3つ目の学科として1978(昭和53)年4月に創設されました。当時は、国立大学工学部でも情報工学科は数少なく、高専では徳山高専と八代高専に情報電子工学科があるだけで、我々が高専で最初の情報工学科となりました。以後32期の学生を迎え入れ、今日に至っています。

創設期の情報工学科の教育目標は、「コンピュータに関するハードウェア、ソフトウェアの基本的な事項の理解のもとに、コンピュータとその応用システムの設計、開発の業務に従事できる能力を育成する」というものでした。教員陣の創意工夫と試行錯誤、それに応えてくれた学生たちの熱意と努力により確立されていった情報処理教育とデジタル技術教育の流れは、情報工学科のみに留まらず、仙台電波高専のすべての学科に浸透、展開されていきました。その代表が、座学と実習を一つにまとめ、自作→実

験・実習→講義を循環させるスパイラル型の授業方式です。デジタル技術の教育課程で発案されたこの授業方式は、情報工学科でのハードウェア、ソフトウェア、ネットワークのすべての分野の専門教育で採用され、学生たちの技術力の向上に大きく寄与しました。また、スパイラル型授業とともに取り入れられた自由課題による製作実習は、構想から設計、製作、文書化に至るまでをすべて学生が自力で行うもので、今日大学等で盛んに行われるようになったPBL(Project Based Learning)の手法を先取りしたものでした。このような真に実践的な技術教育で鍛えられた学生たちは、卒業後も情報系の様々な分野で自らの能力を最大限に発揮し活躍しています。

情報工学科の教育目標や教育手法は創設期以来今日まで引き継がれてきていますが、その間、コンピュータ関連技術の技術革新や社会の変化は目覚ま



PLDによるマイクロプロセッサの実現とアセンブラの作成実習



ルータ実機を用いたネットワーク構築実習

しいものがありました。なかでもインターネットに代表されるネットワーク技術の急速な発展は情報工学科の教育・研究に大きな影響を与えました。情報工学科では平成12年よりシスコシステムズ社の教育プログラムCisco Networking Academy Programを取り入れた先進的なネットワーキング教育を開始します。以後、情報工学科はこれまでのハードウェア、ソフトウェアにネットワークを加えた3つの技術分野を教育の柱とし、これら情報技術を駆使して社会に役立つシステムを創造できるコンピュータプロフェッショナルの育成を目指して、教員・学生が一

体となって努力し発展してきました。

宮城高専との高度化再編から4年が過ぎ、情報工学科はその歴史を閉じようとしています。情報工学科の遺伝子は新学科へと引き継がれ、他の旧学科や旧宮城高専で育まれてきた遺伝子と融合し、さらなる進化を遂げるものと確信しています。末筆ながら、これまで情報工学科の発展にご尽力いただいた方々に感謝申し上げますとともに、情報工学科卒業生諸氏の益々のご活躍を祈念いたします。

(情報工学科学科長 脇山俊一郎)



ソフトウェア教育の基盤となる教育用UNIXシステム



情報工学科のスローガン「目指せ! コンピュータ プロフェッショナル」

生産システム工学専攻・建築・情報デザイン学専攻

専攻科設置に至る旧宮城高専教職員の方々のご尽力により、1998（平成10）年4月、記念すべき1期生が専攻科に入学しました。当時は、機械工学科、電気工学科、材料工学科系のための生産システム学専攻と建築学科、情報デザイン学科系のための建築・情報デザイン学専攻の2専攻でスタートしました。その1期生は教職員の期待によく応え、日頃の勉学に励むとともに、学会で発表を行うなど研究にも熱心に取り組みました。これが旧専攻科の黎明期でした。

それでは、当時の専攻科課程における教育に関する先駆的な取り組みなどを紹介しましょう。

まず、専攻科設立とほぼ時を同じくした1999年11月、学問を教える工学教育から技術者を育てる技術者教育への転換を実現し、かつ日本の技術水準を国際水準に整合させる目的で、日本技術者教育認定機構（JABEE）が設立され、2001年度からJABEEによる認定制度が開始されました。

こうした社会の要請に対して、2003年、宮城高専は「工学(融合複合・新領域)分野」において、「生産

システムデザイン工学」教育プログラムで、東北の大学や全国の高専専攻科の中では最初に認定を受けることができました。また、専攻科は「最も自信のある専門領域の基本的素養を持ち、しかも複眼的視野と複合領域へのデザイン対応力を持つエンジニア」の養成を目的としていましたので、「技術者倫理」「創造工学演習」「特別研究（現在の専攻研究）」「長期インターンシップ」などは、両専攻共通の必修科目でした。

次に、上記の長期インターンシップがあります。

大学では「学問の創造」や研究者の育成が目的であるのに対し、旧宮城高専の専攻科は「技術者教育」の方針を明確に打ち出していましたので、2002年度から、専攻科1年生の夏休み期間中、1カ月以上の企業インターンシップを開始しました。その頃、宮城県も学生のインターンシップによる人材育成事業を展開しており、「宮城県長期インターンシッププログラムモデル事業研究会」の支援と担当教員の尽力で、長期間にわたる実習を受け入れる企業を確保しました。その結果、夏休み期間中にも関わらず、



専攻科1期生の修了記念写真



「生産システムデザイン工学」教育プログラムの概念

2カ月の実習に励み大なる成果を上げた学生もいました。専攻科修了時には、「あのインターンシップはためになりました」との感想もあり好評でした。

最後に、PBL（Project Based Learning）型授業の「創造工学演習」が挙げられます。

学生たちは出身学科の偏りがないようにグルーピングされ、そのグループワークが主でした。学生たちは、身の周りのモノ・システムの問題点を発見したり、学外でのニーズ調査、討議を行い、開発・改良するモノを設定します。そして、開発・改良案を検討して、設計、製作および評価までを行いました。さらに、進捗状況と成果についての発表・質疑応答も課せられました。毎年、開講される後期は、学生にとっては厳しく大変でしたが、修了後、企業に就

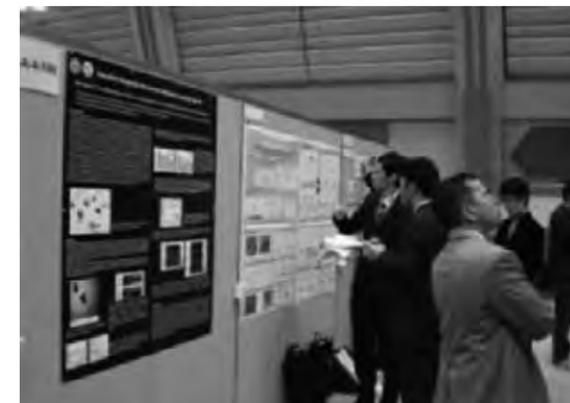
職してから、その重要性が理解できたなど「就職後に役立つ」授業でした。

一方、専攻科進学志望の学生が学力選抜試験で不合格となり、止むなく他大学や他高専の専攻科に進学することもありました。また、当時、専攻科への求人倍率は高く、専攻科担当の教員が就職活動の世話に多大な労力をかけずとも、多くの学生がかなり早くに、志望企業から内々定を得ていました。

最後に、生産システム工学専攻と建築・情報デザイン学専攻の修了生皆さんの健勝と活躍を祈念しております。

（文部科学省産学連携コーディネーター 庄司 彰）

（CO-OP教育センター長 櫻井 宏）



国際会議での研究発表



創造工学演習の発表会

電子システム工学専攻・情報システム工学専攻

専攻科は、学科5年間の教育課程の後に設けられた2年間の課程で、大学の3、4年に相当します。ここでは、主に専攻科制度の設置前後の流れと設置当時の状況を紹介します。

1991(平成3)年6月、高等専門学校設置基準(文部省令)を改正し、専攻科設置が可能となりました。仙台電波高専では、あらかじめ準備していたので速やかに専攻科設置申請書を提出しましたが、採択されませんでした。このときは、新居浜、奈良の2校のみが設置を認められています。

1992年、「電子系」と「情報系」の2専攻(定員各8名:専攻科の定員は学科の10%とされていました)として、専攻科設置申請書を再び提出しました。

8月末、仙台電波高専への専攻科設置が認められました。これは関東、東北、北海道で最初であり、富山、鈴鹿、久留米の3高専が同時に設置を認められています。設置が認められるにあたり、文部省から専攻名変更案が示されました。「電子工学専攻、情報工学専攻」→「電子科学専攻、情報科学専攻」→「電子専攻、情報専攻」を経て、「電子システム工学専攻」と「情報システム工学専攻」と決まりました。

1993年4月、正式に専攻科が発足しました。入学試験は、設置後に行われるので、この年の専攻科の入学式は、学科の入学式(4月9日)より1週間遅れて16日に行われました。このときの入学者は、電子システム工学専攻10名、情報システム工学専攻9

名でした。

専攻科設置のための条件として、博士の学位を有する先生が3分の1以上必要で、その頃の高専にとっては厳しい条件でした。そのため、専攻科設置の申請は、どの高専でも提出できるものではありませんでした。大学院重点化政策により、博士課程修了者の先生採用が多くなったのは2000年頃からです。

さて、専攻科はできましたが、当初は大学編入の滑り止めでした。1994年(95年度入試)、1995年(96年度入試)の2年連続、入学確約者が定員割れで、2次募集を行いました。2000年を過ぎた頃からは、専攻科第1志望学生が多くなり、結果として専攻科不合格でも地方国立大学には合格というケースが見られ始めました。当時から、大学編入と専攻科入学の2年間の学費の差は、約80万円ほどです。それに

加えて、他地域の大学へ行くとアパート代など必要になるので、それらを合わせると、2年間で200万円くらいの差になります。そこで、「専攻科へ行き、2年間の差額で大学院進学を」とPRしてきました。その効果のためか、その後は安定して20~30名の優秀な学生が入学するようになりました。これが、統合に伴う定員の増加(30名)のための礎となったと思います。

1999年、日本の高等教育の水準を保証するため、JABEE(日本技術者教育認定機構)が設立されました。本専攻科は、2002年に認定を受けましたが、これは東北の大学および全国の高専専攻科で最も早いものです。これにより、本専攻科の教育システム・卒業生の能力が大学と同等であることが国際的に認められたことを意味し、それが現在も継続しています。

(情報電子システム工学専攻 専攻長 白根 崇)



見学旅行 東北電力原町火力発電所 中央制御室にて(2008年10月)



見学旅行 日立エンジニアリングアンドサービス 大沼工場 風力発電設備見学(2007年10月)



宮城高専の高等教育機関としての高度化の思い出

第7代宮城工業高等専門学校校長
四ツ柳隆夫

新世紀は時代の節目でした。同世代の上位者を集める高専には、従来の中級技術者育成の任務を超えて、イノベーションを担う創造力を持つ人材の育成が求められています。

知識は教えられますが、創造力の基盤となる知恵は教えられません。知恵は、知識を使う体験から獲得しなければならないからです。高専が実験・実習を重視する所以です。本科の準学士課程では早期創造性教育を導入した伝統の楔形科目配置で、大学4年生水準の専門学力を身に付けた技術者の育成を目指しました。専攻科ではそれらを使いこなして創造力に磨きをかけ、通常では修士課程で体験する実践的学習により即戦力を持つ国際水準の学士技術者を目指しました。

この目標実現のために、学生と教職員がプライドを持って教育活動を行える体制を創る必要があります。国際的な技術者資格認証制度（JABEE）への参加と運営、大学評価・学位授与機構の評価基準策定、国立高専協会会長として高専独法化の制度設計、文科省中教審専門委員（学修単位、新しい高専教育体制）に参画しました。高等教育機関であることの法的根拠は、法人化の際、国立高専機構法第3条にその教育目的として明記し、その水準は、大学評価・学位授与機構による学士審査と、JABEEによって明確化しました（「工学教育」, 61-1, pp.25-29, 2013参照）。その際、校長として下記の事業を通して先生方の情熱ある支援を受け実践可能な法制の創設に提言することができました。

混合学級や花山合宿等の新入生導入教育（千葉正昭・鯨井千佐登・飯田清志・飯藤将之）、学寮運営（笠松富二夫）、低学年の創造工学演習の創案と実践

（石山純一）、新しい方式の英語教育（千葉元信・武田淳・岡崎久美子）、高学年から専攻科の体験学習に直結する産学連携と後援会の設立と運営（丹野浩一・内海康雄）、技術者倫理や技術経営科目を強化した複合融合型の専攻科の運営と高専初のJABEE認定（庄司彰・桜井宏）、ドイツ他の海外協定校開設と交流（池田千里）、CO-OP海外調査と実践（鈴木勝彦）、地域への理科教育啓蒙のリカレンジャー（松浦眞）、専門教育棟廊下の教育設備工夫、文科省現代GP（伊藤昌彦）、両高専の統合による本科と専攻科の充実と高度化の企画と実行（宮城光信）など、新たな教育モデルを企画し実践して宮城高専は最先端の技術者教育機関に成長しました。そして、高専電算化の要を務めた電算機室長（丹野顕）、実験実習において長期間無事故を継続した実習工場長（赤澤真）をはじめとする技術系教職員の方々のご尽力がありました。さらに、非常勤講師の方々との交流、ラグビー部の全国3連覇（柴田尚都・岡田将彦）等の課外活動で、多くの面で成果を上げてきました。高専教育は、事務部長をはじめとする情熱ある事務職員の協力なしには成り立ちません。JABEE審査にはこの実績評価が含まれます。教職員、学生の方々のご協力に対し深く謝意を表します（敬称略）。



思い出すこと

第5代仙台電波工業高等専門学校校長
渡辺 英夫

私が仙台電波高専にきたのは1980（昭和55）年です。それから2005（平成17）年まで、いろいろな仕事をさせてもらいました。4・5年のクラス担任、図書館主事（いまは図書館長）、学科主任（学科長）、専攻科主任（専攻科長）、教務主事（教務担当副校長、役職名はずいぶん偉そうになりましたね）、そして最後は校長など。皆さん方、特に事務の方々の助けを受けて、なんとか勤めることができました。

そのうちで特に印象に残っているのは、中学生向けのPR誌を持参しての中学校訪問です。高橋校長（当時）から、「他の高専さんは中学生向けのPR誌を持っている、やはり必要なので君、作ってくれよ」と頼まれました。高橋先生は大学時代の指導教授ですから、私には頼みやすいのです。他にも学校紹介のビデオの作成とか、いろいろ頼まれました。他の高専のPR誌を参考にして案を作り、クラスの学生に見せたところ、「先生こんなの駄目ですよ、もっと都会っポイ雰囲気であれば」と言われてしまいました。愛子駅を下りたところでコスモスが揺れている風景では、駄目だということです。当時の愛子に都会っポイ風景は無理ですが（今でもそうか）、なんとか明るい雰囲気にしてみました。

私の担当した中学校訪問は、教務主事の時および校長の時を通して15年間です。学生課の方、運転手の高橋（啓悟）さんと合わせて3名で、はじめは県南あるいは県北の諸中学校を1～2日で、のちには山形県の村山地方および宮城県の海岸線に沿って松島から気仙沼まで、それぞれ2泊3日の日程です。私が訪ねた海岸線のコースは、まさに2011年に大被害を受けた場所に一致します。大抵の中学校の校舎は海岸から少し離れた高台にあるのですが（志津川

中など）、完全にやられてしまった所（雄勝中など）も少なくなく、今でも大変なご苦勞をされています。

中学校訪問では宮城高専さんとニアミスということもあり、やはりライバル校でした。それでも、先生方は仲が良かったですね。有川さん（建築科）とか八木さん（電気科）など、お酒の好きな先生双方合わせて十数人で、居酒屋で年に1度、お喋りを楽しみました。

両キャンパスの先生方、ときには居酒屋での情報交換なども良いかと思います。その時は、校長には遠慮願ったほうがよいでしょう。



あの日の記憶

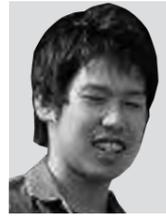
機械工学科 2012年3月卒業
豊田 俊一

仙台高専としてスタートして2年目の春、あの大地震が起きました。当時私は5年生で、地震直前まで部活動を行っていました。来る14時46分、すさまじい地響きと共に揺れが始まり、部屋に残っていた私はあわてて校庭へと避難しました。春休みだったこともあり、学校にいた職員、学生は普段の半分もいませんでしたが、地割れしたグラウンドや亀裂が入った体育館など、学校全体へのダメージは計り知れないものでした。

寮の食堂を生徒や地域住民への避難場所として開放し、私も自宅へ戻れなかったため、学校に留まりました。震災後1週間は電気が通らなかったため、夜になると真っ暗になった校舎の不気味さを今でも覚えています。しかし、隣のがんセンターや広瀬キャンパスとの連携、高専機構本部や全国の高専からの支援物資など、さまざまな人々の力を借りて、あの大地震を乗り切ることができました。

あれから2年が経ち、グラウンドや道場は直され、校舎に入ったヒビも消えました。しかし、あの体験は決して忘れることはできないですし、またその経験を活かして、次に同じようなことがあった際にどう対処するのがいいかを、伝えていく必要があると思います。

最後に、施設や設備は新しくりましたが、悔しかったことが一つだけ。それは名取キャンパスの春の名物であった、あの桜並木が消えてしまったこと。授業の合間をぬって花見をしたあの美しい桜たちを、後輩たちへと見せたかったです。



部活動での情熱を誇りに

電気工学科 2011年3月卒業
伊藤 友樹

私は2010（平成22）年度に仙台高専を卒業し、現在は東北大学大学院の修士1年生です。高専での学生生活で最も印象に残っていることは部活動です。私は野球部に所属し、チームの目標は高専大会で全国優勝することでした。日が暮れるまで毎日練習し、野球漬けの日々を送りました。5年生になると、就活や受験勉強でそれぞれ忙しくなり、全員そろって練習することは少なくなりましたが、無事、東北大会を勝ち抜き全国大会進出を決めました。

後日、組み合わせが決まり、日程を確認すると、初戦が私の受験日の翌日でした。部活動を優先するべきか、受験を優先するべきか、かなり迷いましたが、どちらも諦めたくなかったので、受験日までは自主練習をして、受験終了後に全国大会に行くことに決めました。大会前の全体練習に参加することができず、チームに迷惑をかけてしまいました。監督とチームメイトは私を信頼してスタメンで起用してくれました。そして、その期待に応え、初戦で先制打を打つことができました。2塁ベース上でガッツポーズをしたことは、今でも忘れられません。

チームは決勝で敗れ、悔し涙を流しましたが、5年間ともに練習してきたチームメイトと最後まで野球ができたことに満足でき、すがすがしい気持ちで引退することができました。その後、東北大学の合格も決まり、今は野球に向けていた熱意を勉学に向け、精進しています。



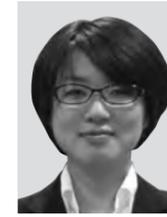
高専から社会へ

建築学科 2000年3月卒業
師岡麻理子（旧姓宮本）

創立50周年まことにおめでとうございます。恩師からの寄稿依頼を受け、在学当時の高専生活を思い出してみました。思い出すことといえば、若かったなあ、馬鹿だったなあと思うことばかり。夜に製図室で歌ったり、階段の踊り場でクラスメートとたわいのない話をしたり、部活では夏にプールで遊んだり、といった具合です。

学業では授業を受けてテスト前に勉強をしましたが、授業で学んだ内容が社会でどのように役に立つのかが分からず、ただ授業を受けていただけのように思います。しかし、社会人となった今、高専で学んだ知識が役に立っていることを実感しています。現在、快適な環境や省エネルギーを提供するために建築設備の自動制御・中央監視の設計を行っていますが、高専で学んだ環境工学・建築設備の知識が設計の基礎となっています。私の机には高専の授業で使用した「環境工学」と「建築設備」の教科書が置いてあり、設計中に疑問点があると教科書を開いて確認をします。時には後輩の技術指導にも使用するくらいです。

宮城高専の理念は「優れた技術者を養成し社会に送り出す」ことです。技術者の素質・基礎を持つたまごを社会に送り出すことで、社会で一気に孵化し世の中に貢献してきました。社会の流れが変わっても、卒業生の一人としてこのことだけは変わらないでほしいと思っています。これから先、100周年を迎えても優れた技術者を社会に送り出す高専であり続けることを祈念しています。



高専の思い出

材料工学科 2012年3月卒業
佐野 絢香

私が材料工学科3年時の2009（平成21）年に宮城高専は学科の再編により、材料工学科はマテリアル環境工学科として生まれ変わり、環境系の科目が増えました。今では金属材料だけではなく、より多くの材料について学べるようになっていました。また最近では実験設備が新調されたり、新たに導入されたりし実験設備が非常に充実しています。このようなさまざまな装置を使える大変恵まれた環境で研究できることに感謝しており、そしてこの経験は将来就職した後も役に立つと感じています。

統合してからカリキュラム等の変化はありましたが、学生の性質はまだ宮城高専のままであると感じます。勉強だけでなく課外活動や高専祭などの行事活動が盛んで活動的な宮城高専らしい学生は変わりません。私も本科の5年間は女子バスケットボール部で活動していました。当時は勉強と部活動の両立が大変でしたが、振り返ってみると仲間と充実した日々を過ごすことができ、素晴らしい経験となったと思います。また部活動だけではなく高専祭でクラス出店の準備、ミスコンに出場した友人の応援、そしてステージでのライブを聴いたりしたのは、統合前と変わらず非常に楽しい思い出となりました。

まだまだ書きたいことはありますが、長くなりますのでここで筆をおくことにします。それではこれからの仙台高専のますますの発展をお祈りします。



自慢の母校は仙台大専

情報デザイン学科 2011年3月卒業
生産システムデザイン工学専攻
(情報デザイン学コース) 2013年3月修了
西井上優希

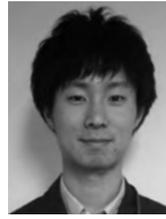
今でも忘れない15歳の春。桜もまだ咲かない春の東北の地を踏んだのは、それが初めてのことだった。福岡県に生まれ生活するなか、ただ普通に過ごすことが嫌で、飛び出したい気持ち一つで、母の故郷である宮城県に来ることを決めたのは中学校3年の時。何か大きいことをしたい、そのような単純な気持ちでこの地に来た。

それから7年、この春小学校よりも長い期間お世話になった高専を卒業し、社会人として新しい生活をスタートさせた。

今改めて思い出すと、私の青春はこの高専に全てあるように感じる。5年間の寮生活、クラスの仲間との日々、数々の学校行事、課題に追われた日々。思い出とともに連想されるのは、仲間やお世話になった教員の方々の顔ばかり。周りの人々の支えがあったからこそその日々だったのだと、改めて強く思う。

宮城に来たことを後悔したことは数えきれないほどある。何度も帰りたと思った。しかしそれ以上に、宮城に来てよかったと思うことが数えきれないほどある。そう思えることこそ、高専で過ごした日々が私自身にとってかけがえのないものであったという、何よりの証拠だ。選んだ道が間違っていたのかと悩んでいた私に伝えたい。選んだ道は決して間違っていなかったと。

これから長く続く人生、迷った時や壁に屈してしまいそうになった時も、きっと乗り越えられると確信している。そう思えるのは、高専で過ごした日々があるからこそ。仙台大専は、私の自慢の母校だ。



松韻寮で培われた精神力

情報通信工学科 2012年3月卒業
伊東 恭聖

「おはようございます！おはようございます！」なんていう具合に、松韻寮の先輩方に頭をブンブン揺らしながら挨拶していたのは、まだ1年生の頃です。あれからもう7年になります。時の流れは速いですね、いやあ怖いものです。

朝掃除や雪かき、日直当番、指導や説教など、当時の松韻寮は本当に理不尽で辛かったです。部屋の隅っこで泣いていました。私。ですが辛かった分、寮の仲間との絆は家族同然に深まったとも感じます。当時のことは同級生と呑むときは最高の酒のつまみになっていますから。

実は今回、回想文を引き受けたのはいいものの、情報通信工学科で受けた専門の授業や卒業研究のことがなかなか思い浮かばず…松韻寮での思い出ばかり出てきてしまいます。もちろん、授業も卒研も部活も精一杯やりきりました。ですが、それでも松韻寮の存在が一番大きいということは、私の充実した学生生活5年間は、同じ釜の飯を食らい、辛い時はともに泣き、嬉しい時はともに笑い合える素晴らしい仲間とともにあったということだと感じております。

私は現在、仙台市内のNTT系列の会社に勤務しており、交換機のメンテナンス等の業務を行っております。今後とも、我が母校で培った技術と寮生活で培った精神を自らの軸とし、人間性豊かなエンジニアとして通信の第一線で活躍していきたいと思っております。



私の人生を決めた高専での5年間

電子工学科 2011年3月卒業
鈴木 尚之

私が高専に入った一番の理由は、通学時間がわずか2分という単純な理由からであった。特にエンジニアになりたいとか、工学に興味を持っていた訳でもない。それにも拘わらず、想像以上に充実した5年間を送ることができた。

入学当初は、勉強についていけるか不安で仕方がなかった。しかし、真剣に授業に取り組めば理解できることも多くなった。やがて、マイコンや電気回路等の専門科目を勉強していくうちに工学に興味を持ち始め、5年間を通して幅広い知識を身に付けることができた。私はさらに工学を勉強したいという気持ちが強くなり、大学へ進学した。現在は東北大学大学院工学研究科電子工学専攻の川又・阿部（正）研究室でデジタル信号処理に関する研究をしている。

私は高専時代を勉強だけで終わらせたくはなかったので、中学と同じ陸上競技部へ入部した。長距離種目の3,000m障害という種目に出合い、この種目を専門として活動した。不思議と授業の疲れも忘れ、ほとんど毎日練習に没頭した。部長という責任を負いながらの充実感、5年間出場した高専大会は良い思い出である。

私は高専を卒業して大学に編入した年に病気で3カ月入院したが、高専時代の研究室の先生や友人、陸上部の顧問の先生や後輩が何度も見舞いに来てくれ、とても励まされた。単純な理由で高専に入学したが、高専での5年間は勉学も含め自分の人生においてとても大切で充実したものであったことを痛感している。



国際交流のすゝめ

電子制御工学科 2012年3月卒業
石川 力

高専が目指すべき所は時代に応じて変化していきます。先の50周年シンポジウムのパネルディスカッションにおいて素晴らしい議論が飛び交いましたが、そのなかで強く思ったのは、これからの社会には確実に国際理解があり柔軟な対応のできる人間・エンジニアが必要ではないかということです。

50年前は高度経済成長期を支える重要な働き手・即戦力となる人材の育成が急務でしたが、時代は変わり人件費が高く、ある程度の基準を満たした国内ではなく、技術のない国を支援する、新たな技術を提供する立場として、日本で学んだエンジニアが世界に羽ばたいて働いていく時代だと私は思います。

私は、本科在籍時にフィンランド・トゥルク応用科学大学で5カ月の長期インターンシップ、専攻科1年次にタイ・キングモンクット工科大学でインターンシップを行ってきました。どちらのインターンシップでも異文化で母国語ではない言語である英語でコミュニケーションを取らなければいけない環境であり、いかにして意思表示をするか、物事を伝えるかということを考える良い経験になりました。

この経験はおそらく高専であったからできたのだと思います。学内の留学の募集要項をみると多くは3年生までが対象です。実力のつき始めた4年生、5年生という社会に触れ始めた時に、国外で研修ができたことは非常に大きな出来事でした。

今後多くの学生が国際交流を通じて多くのことを学んでいけたらと思います。



高専生活を振り返って

情報工学科 2011年3月卒業
情報電子システム工学専攻
2013年3月修了

熊坂 萌絵

振り返ってみると、専攻科を含めた7年間の高専生活は、言葉で言い尽くせないほど素晴らしく充実し、かけがえのない時間でした。入学したばかりの頃は、今までの学習とはかけ離れた新しい内容に戸惑い、つまづくこともありました。しかし、優秀な仲間達と互いに協力し合うことによって“諦めることなくチームで目標を達成する力”を身に付けることができました。その力は、他大学出身の人たちと堂々と肩を並べられるものだと社会人になった今、強く実感しています。

また、在学中はフランスでの約半年間の長期インターンシップ、中国、インドネシアでの研究発表と、多くの国際経験を積む機会を頂きました。特に印象に残っているのは、フランスで異なる文化や言語の壁と今までに経験したことのない課題にぶつかったことです。しかし、自ら一步踏み出し、拙い英語でも自分の気持ちを伝えたい、相手の気持ちを理解したいと思う気持ちさえあれば分かり合えることを体感しました。グローバル化が重要とされる今、国籍に関わらず信頼関係を築き人脈を広げた経験は、今後の社会人生活の中で私の強みになると思います。

最後になりましたが、在学中、さまざまなことにチャレンジする機会を与えてくださり、熱心なご指導を賜った先生方、そしてクラスメイトにはとても感謝しています。楽しく、時には苦しい時間を共に過ごした一生の友を得たことは、今後の私にとって何にも代え難い財産になるでしょう。



専攻科での2年を振り返って

建築学科 2010年3月卒業
生産システムデザイン工学専攻 2012年3月修了
松本 若菜

生産システムデザイン工学での2年間は私にとってとても充実した時間でした。そのなかでも印象深かった思い出は、研究室での生活と他高専生との交流です。

専攻科時代は主に研究室を中心に生活をしていました。研究のことはもちろん、普段の生活面のことで色々と学生と話をし、研究室はとてもアットホームな雰囲気でした。専攻科在籍中には震災があり、研究室に立ち入り禁止となる等慌ただしいときもありましたが、それでも振り返ってみて楽しい思い出ばかり思い出せるのは、いつも研究室の学生と一緒に前向きに頑張ってきたからだと思います。またいつか皆で集まり、色々と思い出話をしたいです。

それから他高専生との交流は私にとって大きな転機だったように思います。専攻科に進んでから、他の高専の学生と知り合える機会が一気に増えました。それらの活動を通し感じたことは、学生のモチベーションの高さです。全国の高専の学生はとても積極性が強く、それまで5年以上同じ環境でのんびり生活していた私にとってはとても衝撃的であり、自分を見つめなおす契機となりました。今尚多方面で活躍している友人の姿は同じ高専出身者としてとても誇りに思いますし良い刺激です。

専攻科では他学科の学問を学べたり、諸先生に話を聞いたり、とても密度の濃い生活を送れ、今の生活の糧になっています。これから専攻科が世間一般に知れ渡るように私達卒業生が社会で活躍していたらと思います。



ネットワーク

情報工学科 2009年3月卒業
情報システム工学専攻 2011年3月修了
加藤 匠

高専が紹介されるとき、学生の技術力が高い、専門的な知識が豊富であるという内容をよく目にする。就職率が良いという点から注目されることも多い。そしてこれらの成功の理由として語られるのが、充実した授業であるとか、日々の課題の多さ、そんなところか。実は、これらは高専のほんの一面しか捉えていない。卒業生の目から見て、真の高専らしさは「ネットワーク」であると僕は思う。

僕は、学科と専攻科を合わせて、仙台高専に7年間通わせて頂いた。7年もの長い間、毎日のように同じ教室で授業を受けてきた友人が多くいる。感覚として、もはや彼らは友人よりも家族に近い。さらに、海外長期インターンシップでの人的交流に始まり、専攻科の授業では企業の方々と交流させてもらう機会も多かった。国際会議での発表のために、7カ国ほど回らせてもらったこともあった。そのなかで、本当に多くの方々に世話になり、育ててもらった。感謝しても、感謝しきれない。

卒業して2年たった今、高専時代に知り合った友人・恩師は世界中に散らばっている。僕らはその広域なネットワークの中で、夢を語り合い、時に励まし合いながら、切磋琢磨を続けている。このネットワークこそ、僕らの最大の財産であり、強みであると僕は確信している。

高専から受けた恩は、高専に返そうと思う。僕はこれから、このネットワークの一端を担うものとして、卒業生として社会で結果を示し、後輩の未来を拓いていきたい。



高専制度50周年を迎えて

宮城工業高等専門学校
機械工学科 1972年3月卒業
湯澤 哲雄

私は、1967（昭和42）年に5回生として入学、全学年が揃った年でありました。言い換えれば私たちの入学をもって高専制度が完成した年でもありません。初めて見る大先輩、20歳の相貌を目の当たりにし、中学出たての私たちは競争率17～18倍の難関を乗り越えて入学してきた異才の集団を前に畏怖の思いを持って眺めたに違いありません。

当時は、学生にも教師にも大学には負けないぞと言う気負いがありました。厳しいカリキュラムをこなしながらも一方では授業に無い分野で才能を発揮する先輩も数多くおりました。5年間の一貫教育は、優秀な技術者育成に大いに役立つと同時に多感期を大学受験で消耗することなく自由に勉学に励む機会を提供してくれたと思います。さらに古今の高校教育では望めない部活動を通した人間教育にも大いにその特性を発揮したのであります。そして高専卒業生への高い評価は、社会に存在感を示してきた諸先輩のお陰であり私たちの生きていく心の支えとなってきました

幸運にも息子が私の歩んだ道を選択し私は学生或いは卒業生としての関わりに加え父兄として関わることも出来ました。学校に行けば昔の懐かしい先生達がいままでいてくれることは地域の学校であるが故のことです。親子二代でお世話になった高専はまさに心の故郷であり、自身のアイデンティティがそこにあるといっても過言ではありません。

高専が存続発展するためには多面的な評価が欠かせませんがその為にも我々卒業生が学生や教師と関わりながら社会に広く発信していかなければなりません。50周年を迎えるにあたり、放流された稚魚が再び母なる川に回帰するように多くの卒業生がこの地で集うことを願って止みません。



母校の思い出、そして、 今後への期待

宮城工業高等専門学校
電気工学科 1968年3月卒業
大沼 定美

高専制度50周年を迎えることを知り、我々1期生が、仙台市三神峰の東北大旧校舎を間借りしてスタートを切ってから半世紀も経過したのですね……。自分の年齢にも納得しました。

現在、幾分認知症気味の頭であっても、最初の三神峰では、劣等生のために授業に四苦八苦したこと、時々“公園”で気分転換を図ったこと、創設した野球部で汗を流したこと等が、そして翌年には、名取市愛島の新校舎に移転。腰を据えて勉学に励み、課外には野球等に没頭する傍ら、時には、仲間と人生論を闘わせたこと等々を懐かしく思い出すことができます。

未熟であるが故に、真剣に悩み抜いて考えたその時の“人生哲学”？は、これ迄の自分の生き方に少なからず影響を与えてきたことに気づかされています。

尚、卒業後はNHKに就職して、「高専ロボコン」の番組制作、「高専プログラミングコンテスト」の審査委員に加えて、高専生の採用人事にも関わる等、少なからず、高専との繋がりを持ってきたことも幸せに感じています。

さて現在は、グローバル化時代に突入中で、“変革に対応出来る人材”が最も囑望されています。言い換えれば、若いのが故に、“固定化した人生観を持たずに柔軟性の有る”高専生にとって、大きく飛躍出来るビッグチャンスな時代が到来したということです。

50周年という節目を機に、時代に適合した“イノベーションを核とした新たな道標”を早急に確立し、専門技術力のみならず、時代の変化に柔軟に適応出来る学生の育成強化に、より一層取り組まれることを期待し、寄稿文とさせていただきます。

改めて、高専制度50周年おめでとうございます!!



高専に入り今に至る

宮城工業高等専門学校
金属工学科 1976年3月卒業
木皿 正志

私は、41年前の1971（昭和46）年、宮城高専としては9回生、金属工学科としては4回生として入学しました。鈴木廉三九校長、学科主任は中村三郎先生でした。鈴木校長は2代目校長ですが、初代黒川校長は在任1日ということで実質初代校長であったと思います。マラソン大会では学生に交じって走ったり大変フレンドリーな先生であったと記憶しています。中村先生は、昭和の三太郎と言われた本多光太郎博士の薫陶を受けた教育者ですが、記憶にあるのは授業中にローレライをドイツ語で歌ったり、琵琶湖周航の歌を歌ったりしたことです。♪イッヒバイス・ニヒトバス♪♪～今でも最初の歌い出しは覚えています。授業と歌は結び付かないながら、中村教官からはドイツ語を勉強した学生が多かった戦前のバンカラな学生像が浮かんでくるような感じがしたものです。

学校ができて14年が過ぎたところで社会人となり、OBの数も少なく高校でも大学でもない何か特殊な学校のような感覚がありましたが、今では卒業生が各界で活躍するようになりました。現在情報システム開発の仕事をしていますが、同窓生と出会うことも増えてきて今後もますますそういう機会が増えれば良いなと思っています。40年前から現在まで大きく変わりましたが、これからの50年はどう変わっていくのだろうかと思う時、出来るだけ長く母校のことも見ていきたいと思っています。



寮生活の思い出

仙台電波工業高等専門学校
電波通信学科 1993年3月卒業
佐々木正明

学び舎そして我が家だった仙台電波高専を卒業し、早20年が経ちました。松韻寮に入って、部屋回りという厳しい挨拶から始まり、寂しさを覚えつつ荷物をまとめた卒業まで、今でも鮮明に当時が思い出されます。

私が寮生活で一番楽しみだったのは、夏休み前の夏祭りでした。1年生では盆踊りの練習に一生懸命になり、寮から学校までの通路に食堂のテーブルを並べてステージを準備。そのステージで楽しそうに女子寮生とカラオケを歌い、ユーロビートで踊る先輩たちを見て「上級生になったら俺も！」とっていました。2、3年生では、先輩のカラオケの振り付けと一緒に考えるのが私の仕事でした。

さて、自分が上級生になった時というと、先輩たちと同じように司会やら、カラオケやら、今では死語になったディスコタイムのDJのまねごとで先輩・後輩を楽しませることができ、満足したのを覚えています。

教員として戻った時は、球技大会がメインとなって様変わりしていましたが、寮生数が少なくなったこともあり、その時代にあった変化だったのだと思います。

挨拶の仕方から、料理そして人付き合いと、学校の勉強とは違った実生活で大事なこと学ぶ場であった松韻寮。苦楽を共にした同級生、厳しくも優しく教えてくれた先輩、わがままを聞いてくれた後輩、肉親のように接してくれた寮務係の皆様、悪さをしてでも許してくれた寮務主事・主事補の先生方に感謝いたします。



継承

仙台電波工業高等専門学校
電子工学科 1984年3月卒業
三方 雅仁

「心猛くも鬼神ならず」、「蔵王の峰」を聞きながら、私は「誇りの仙台電波」で育ち、「友よ究めん科学の真理」に努めてきました。今は日々事業を営む傍ら、今年からは同窓会松韻会の東北支部長を務めております。前述は、先輩方から歌い継がれた無線放浪歌、歴代校歌の一節を拝借したものです。

寮生だった私の在学当時の思い出は、やはり松韻寮です。下級生の時は「説教」と称する先輩方からの恐ろしい“ご指導を賜り”、これは昭和に残された封建制度だと思ったものです。しかし寮での生活を過ごすうち先輩後輩との絆が深まり、卒業後においても諸所の場面でその絆が生きております。もちろん継承とは上だけを見るものではありません。先輩方にもらった恩を少しでも後輩諸君に返そうと思いついて歩んできました。

稚拙な私の人生ですが、それでもここまで踏ん張れたのは、10代の多感な時期から松韻寮で縦社会と規律を学習し、タフネスな人間力を育ててもらったことが大きな力になっているからだと思います。

時代は変わりますので伝え方も変わらなければいけません。世代を超えた先輩から後輩への人間力の継承が続くことを願います。松韻寮は私の故郷であり、私を育ててくれた場所です。快適なマンションでは駄目なのです。

寮だけではありません。卒業して歳を重ねて思うこと、学歴とは母校に誇りを持てるかどうかではないかと感じる今日この頃です。

私は仙台電波高専の卒業生であることを誇りに思っています。



嗚呼、不可思議な ロボコン人生

仙台電波工業高等専門学校
電子工学科 2001年3月卒業
電子システム工学専攻 2003年3月修了
會田 裕矢

私は1995（平成7）年に電波高専の電子工学科へ入学した、21世紀にちょうど20歳を迎えた世代です。この度、高専との繋がりを回想したところ、存外長いつき合いながら、奇跡を感じずにはられませんでした。

入学を決めたのは小学4年時にTVで見た「ロボコン」のテト坊でした。ルールの裏をかく多彩なアイデアに魅了されたのでしょう。そこから6年間勉強に励み見事合格。入学して即、科学部へと入部し、初夏から初冬まで部員の皆と合宿をして同じ炊飯器の飯を食べるのが恒例行事となりました。自分で作ったマシン達は惨敗ばかりでしたが、専攻科1年時に指導した後輩作のマシンが全国2位まで勝ち進んでくれたのは良き思い出です。科学部の繋がりは今も続いており、上下5学年の元部員とは毎年、大会に応援に赴く仲です。今年（2013）は10月13日に一関で行われますので、皆様ぜひ。

あのとき親と一緒に見ていたTVが「ロボコン」でなかったら、男ばかりの学舎など選ばなかったことでしょうか（笑）。出会いとはなんと運命的なことか。

高専とのつき合いはいまだ続いており、就職してから毎夏、「電気自動車エコラン競技大会」にOBチーム（代表：久保敬）として参加しています。思えばこれも、卒論の徹夜明けに休憩に誘った後輩に、逆にSUGOまで連行されなければ参加していなかったことでしょうか。

こんな人生をくれた高専に感謝を。これからの高専に期待を。



野球部、ギター部 そして応援団での 楽しい思い出

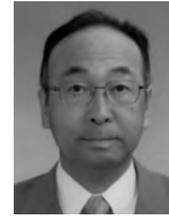
仙台電波工業高等専門学校 名誉教授
宮城 篤

1964（昭和39）年4月に宮城工業高等専門学校に赴任して、いきなり関わったのが硬式野球部でした。のちの秋田大会では八橋球場での対秋田高専戦を接戦でものにできましたが、試合で初めて選手たちにブロック・サインを出しました。得意げになっておりましたが、試合後学生から「先生のサインの動きが小さくて分かりにくかったよ」と言われました。本音でこのようなことを指摘されて本当にうれしかったことを思い出します。

1971年4月から2度目のギター部に顧問として奉公しました。当時はただ単に惰性で楽器をつま弾いているだけの集まりなので、公に部員たちが発表する場を与えてやれば彼らの士気も上がるだろうと、演奏会を催すことになりました。1984年まで8年間続けました。そのうちに、セミプロ級の方々が加わり年々素晴らしい演奏会となり大発展を遂げました。

次の年、仙台電波高等専門学校に移り、応援団の顧問として迎えられ、東北各地をドサまわりして各高専で氣勢を上げて、顧問の身分も忘れるほどに、ギャーギャー騒いで楽しく過ごしました。各地を大会ごとに団員と寝泊まりし、団員と情報交換をし、授業では得られない彼らとの親密さを保ちつつ楽しい5年間を過ごしました。もう二度とこのような楽しくて愉快的な思い出は巡ってこないだろうと思います。

最後に、電波高専でもギター部を持ちギンギラギンのロック・バンド演奏会で定年時まで楽しく過ごさせてもらいました。



思い出

名誉教授
千葉 正昭

赴任した年の初めての避難訓練のことです。実際に油で火災を再現、そこに登場した校長先生、見事消火器で炎を消し止めました。すると上級生の方から拍手が湧き、次第に下級生の方にも広まっていったのです。上級生の良い振る舞いが下級生に伝わり、下級生の態度を変えていく、そんな学校だと私はその時思いました。

サッカークラブ顧問としての8年間でも、高専ならではの卒業生と在校生あるいは在校生同士の結びつきの深さを実感しました。卒業生の方々が毎年1月3日にグラウンドに集まり、在校生と試合をします。試合の後は食事会。社会人となった先輩たちは、母校の後輩たちのために寄付を惜しみません。部活動は、物心両面で卒業生の方々によって支えられているのです。寮が閉鎖される春休み期間中アパートを借りて共同生活をし、日中の練習に参加する学生たちもいました。高専の学生たちは人間関係を深めていく機会に恵まれる一方で、学生みずからも努力していると思ったのです。

退職して3年。勉強に文化活動に寮の行事にクラブにと一生懸命だった学生たちのことを、思い出します。今この時も、それぞれの場所で自分の役割を果たそうと頑張っていることと思います。



山岳部と私

名誉教授
高村 潔

20年間世話になった仙台電波高専で、私は山岳部顧問でした。大東岳、二口山塊、面白山周辺、船形や蔵王、飯豊・朝日連峰や焼石連峰などを部員たちと歩きました。偵察山行によって活動域を広げ、部員増には学年山行で対応し、高専祭では焼鳥屋を出店、冬には面白山にテントを張ったスキー合宿も実施しました。また、男性部員以上に活躍した複数の女性部員の存在も忘れられません。危険な状況に陥ったことはあるものの、何とか無事故でした。素人だった私を顧問に育ててくれたのは部員たちだったと、しみじみ思います。

1993（平成5）年には個人的に宮城県の低山を歩いた記録をまとめて自費出版しました。それを契機として丸森町の広報誌に丸森町の山々を紹介するコラムを書くようになり、2007年まで続けました。丸森町「高齢者大学」で丸森町の自然について講演したこともあります。これらはすべて山岳部の顧問になったことによってできたことです。

1995年に移った宮城高専では、数学教員として分かり易い授業を心がけ、大学編入学・専攻科進学への指導に力を注ぎました。

2013年3月、仙台電波高専、宮城高専そして仙台高専と、優秀な学生と寛容な同僚教員に恵まれた38年間の高専教員一筋の生活を終えることができました。



教育・校務・研究 関連事歴

前副校長（広瀬キャンパス教務担当）
名誉教授
逢坂 雄美

1981（昭和56）年度仙台電波高専情報工学科赴任から2012（平成24）年度退職に至るまでの表題関連事項を箇条書でまとめます。当該業務を個別に処理していたと思っていましたが、水面下での各業務関連が期待以上の成果達成を誘因したことがよく分かりました。

最初に教育・校務関連です。

- ①赴任直後、学校の教育体系見直し事業で、教育項目重複解消の必要性を指摘し、若干の貢献。
- ②1987年教養系列へ移動。低学年数学指導と卒研指導継続。閉塞した社会状況を反映して増加した勉学困難学生支援の必要性認識。教員の活性化把握にて高度化社会での高専存続に危機意識。
- ③1990年代。高専高度化の要請により教員・事務部門と連携して専攻科設置案（全国専攻科のプロトタイプ）作成・提案。
- ④宮城高専との高度化・再編協議。1990年代より少子化・国の財政逼迫等により一県2高専設置の問題認識。
- ⑤同時期本校の国際化を目指して、海外協定校と連携して留学生の派遣受け入れ推進。
次に、研究関連事項です。
- ⑥高専の多忙さと多様な教員群から見て、専門研究等の着実な推進なしでは社会の進展に取り残されると判断。大学の研究者と物理研究の継続、北大の学生の博士号取得支援。
- ⑦1990年代、学外研究所支援を受け共同で印度哲学文献群の情報処理研究を開始。英国・仏国の研究者・機関と研究推進。高専・日本の特性を考慮して、海外での評価確立を最優先（数百部の語彙索引出版物を国外研究者へ配布）。
- ⑧国内外で40冊近い研究成果出版。継続的に科研費を獲得し、積極的に海外出張・研究者招聘。
- ⑨2013年、新規外部資金を獲得しミャンマープロジェクトを国内外の研究者と推進。



宮城高専から仙台高専へ —高専教育高度化のリレー—

前副校長（名取キャンパス総務担当）
名誉教授
丹野 顯

宮城高専に着任したのは1991（平成3）年4月1日、当時は、高専は近い将来大学になるという噂話がありました。何かの機会に矢沢彬校長にそのことを聞くと、なっても三流の大学でしょうと言われたのを、妙に納得したことを覚えています。その後、2000年に就任したの四ツ柳隆夫校長は高専教育の改革に強い熱意を持ち、JABEE（日本技術者教育認定機構）認定、高専が高等教育機関であることを条文での明示化、国立高専の整備方針の公表等を進め、当時学生主事であった私は高専の将来について、おぼろげながらも大きな希望を持つようになりました。

高専機構での国立高専の整備についての議論と前後して、2005年に宮城高専と仙台電波高専では両校の連携・協力に関する検討会が発足、翌年には統合・再編に向けて動き出しました。2006年度に教務主事（2007年度からは副校長）を仰せつかった私は、この統合再編の検討会の委員として、2013年3月末に定年退職するまで、宮城高専と仙台電波高専の統合・高度化再編と仙台高専の立ち上げに関わることができました。両高専の多くの方々の協力を得ながら具体的な学科構成・専攻科入学定員などを検討し、設置審（大学設置・学校法人審議会）の設置認可と国会審議を経て、2009年10月1日に、宮城高専、仙台電波高専の伝統と歴史を引き継いだ、新しい形の高専・仙台高等専門学校が設置されました。

在任中に新しい高専の形を創っていくことに参加できたのは本当に幸運でした。グローバル化のなか、仙台高等専門学校には日本の国を代表する技術者養成機関として、持続可能な社会を創る人間性豊かな人材を数多く輩出していくことを期待しています。仙台高等専門学校の益々の発展を祈念しております。



仙台高専同窓会は母校の 発展の礎 同窓会とは生涯の交流を！

教育コーディネーター（広瀬キャンパス）
藁科 秀男

仙台高専広瀬キャンパスは2013（平成25）年に創基70周年・高専創立40年を迎える。広瀬キャンパスは1943（昭和18）年1月22日に財団法人東北無線電信講習所として、仙台市木ノ下に開所した。同年11月には通信省所管官立無線講習所となり、無線通信士の教育の第一歩を開始した。技術の進歩と発展を希求する時代の要請により、1949年5月文部省所管国立仙台電波高等学校となり、さらに教育内容の充実のため、1971年4月国立仙台電波工業高等専門学校となった。昇格後は現在の愛子の地に移転した。2009（平成21）年10月1日に高度化再編により宮城工業高等専門学校と統合し、仙台高等専門学校となった。

仙台電波同窓会は1949年に誕生した。統合を機に、仙台高専同窓会広瀬キャンパス総支部「松韻会」とはなったが、60余年の永く輝かしい歴史がある。

松韻会は、常に学校側と綿密に協力してより良い教育環境をつくろうとしてきた。高専としては先輩である高専1期、2期校に追い付け、追い越せとばかりに、母校の発展・充実のために尽力した。具体的には学生会活動、新学科増設への物心両面の支援、高専教育への新しい取り組みにおける学術文化講演会や研究・実験実習指導書の作成資金援助等である。ほかにも、1965年の仙台電波高専昇格推進期成会発足への協力、1974年11月には応援団旗、高専創立10周年を記念して1981年10月には校旗、1986年2月には新築された厚生会館に、フランス人ベルナルド・ビツフェ作絵画「河にかかる橋」を寄贈した。さらに、1991年10月9日には高専創立20周年記念として学園広場にある国際的金属造形彫刻家の小田譲作のモニュメント「空へ」を贈呈、2002年11月12日には、創基60周年、高専創立30周年記念に当たり、母校にサクラをとという同窓会会員からの強い要望により、染井吉野11本を植樹した。

仙台高専同窓会は、2009年10月1日の母校の統合

と同時に、仙台電波高専同窓会と宮城高専同窓会が統合して誕生した。会員総数は17,000名を超える大組織である。2011年2月12日には仙台高専同窓会設立総会が挙行され、毎年6月の総会も本会の年間行事として定着した。2013年1月7日には「仙台高専同窓会会報」を発行することができた。

歴史と運営方針の異なる2つの同窓会の統合ということで紆余曲折もあった。高度化再編で誕生した4高専のなかで唯一の統合した同窓会組織であり、その活動内容について全国同窓会連合では統合の際のモデルとして注視されている。これからも運営に当たっては障壁があると思うが英知により困難を克服して、“仙台高専同窓会は母校の発展の礎、同窓会とは生涯の交流を！”を合言葉に強力な同窓会組織となって発展していくことを祈願する。



仙台高専の未来に 希望を！

宮城工業高等専門学校
事務部長
山崎 良治

宮城高専に赴任した頃（2005年4月）は、大学も法人化となり、公務員の総人件費5%削減の真只中でした。赴任して2カ月過ぎた頃、宮城高専と仙台電波高専の事務部一元化について検討してほしいとの依頼があり、仙台電波高専の天内正光事務部長とともに検討を始めました。

1年後、「国立高専の整備について 新たな飛躍を目指して」が示され、宮城高専と仙台電波高専の統合・再編の協議が開始されました。2006（平成18）年9月13日の統合・再編についての協議を開始する協定調印式と報道発表は、高専の歴史の新たな一歩だったと、今でも忘れることができません。

「統合・再編協議会」（後の「高度化・再編協議会」）が発足し、両高専の特色を結集し、教育の質の向上を図るとともに、地域のニーズに対応し、地域連携強化を充実させることを目指して検討を開始したが、両高専9学科を7学科に再編、新高専の名称、所在地について等々、いろいろ困難があったと記憶しております。両高専の校長先生のリーダーシップ

の下に、教職員、関係各署に丁寧の説明を行い、実現に向かって検討を進めていた頃が懐かしく思い出されます。

少子化が進んでいるなかで、優秀な学生を確保し、育て、名実共に次世代を担う高専になることが仙台高専の目標であり、そのことが実現できるよう祈念するとともに楽しみにしております。



名取と広瀬、二つの川の架け橋に！

前事務部長
及川 洋輝

その日は、午前中に名取キャンパスの進級認定会議を終え、午後は広瀬キャンパスでの事務打ち合わせのため、いつものように移動です。校外で会合がある校長と、おだやかな春の日和などを話しながらの車内でした。卒業、進級、決算、人事異動等に向けた年度末の業務を粛々とこなしている日常に、よもや未曾有の大震災が起こることなど誰が予想したでしょうか。

午後2時46分、突然の轟音、終わることのないような長い長い巨大地震に、ひたすら祈り、耐えるばかりの時間でした。停電と天候急変の雪、寒さと余震の恐怖のさなか、教職員の冷静な判断と懸命な行動、学生たちの協力もあり、非常事態を乗り切ることができました。

その後、建物、運動場等の被害のために卒業式、入学式を中止、授業開始もひと月遅れにせざるを得なくなりました。そして、2011（平成23）年3月11日は高専の歴史上にも忘れることのできない、痛ましく大きな痕跡を残しました。しかしながら、「逆境に負けない精神力、いたわりと優しさ、感謝の心、人との絆」をより強くしてくれたものであり、仙台高専においても、名取、広瀬の二つの川のさらなる架け橋になったものと思われまます！



50周年記念に寄せて

学生課 課長補佐（名取キャンパス）
手代木雅子

学生課職員枠で執筆依頼がありましたが、特筆することもなく、粛々と仕事をしてきたこの身には、話題もなく困ってしまいました。が、考えてみると1976（昭和51）年11月1日付けで宮城高専に採用され、1996（平成8）年4月1日に東北大学に追い出される（当時は、女性が異動するなんて…&子育て中）までの19年5カ月と、2012年4月1日に仙台高専（名取）に異動となり、在職期間は合わせて20年8カ月（6月末現在）になります。事務職員で一番古いかもと再認識、仕方ないかとも思いました。特筆すべきことがないので、しょうもないことを書きたいと思います。

私は、前任者の結婚退職のため、1976年11月1日に急遽採用されました。11月といえばこれから年末調整、公務員合格者名簿から算盤ができる人を選んだとのこと。何が身を助けることになるかわかりませんね。採用されてからのこの三十数年、算盤→電卓→ワープロ計算機能→パソコンと、道具が目まぐるしく変わりました。何とかやってこれた自分はすごいと思っています。うそです。皆様のお陰です。感謝！

採用時の校長は河上房義先生で、直々に辞令をいただきました。河上校長は、意外と若々しい声（すみません）で、「ここは学校です。学生によいと思うことをやってください」という言葉を添えてくださいました。この言葉は、学校職員としての私の座右の銘となりました。

また、河上校長は、ゴルフが大好きで、事務職員とも和気藹々とコースに出ていました。私は薄給の身で（今も？）、ゴルフできる身分ではなかったのですが、学校が購入した男子用クラブを借りて先輩達について回りました。そういえば、ゴルフコース代の半分を河上校長が出してくれました（これは内緒かな。時効だからいいよね）。

そんな風に宮城高専はとても家族的な付き合い

で、秋田から出稼ぎの私にとって、第二の家庭でした。

これからも、学生にとっても職員にとっても、厳しい中にも優しさのある校風であってほしいと思っています。



高専制度50周年記念にあたり—回想—

学務課 課長補佐（広瀬キャンパス）
大川 友子

仙台電波工業高等専門学校の職員採用試験受験のため、岩手の田舎からこの愛子の地に向かったのは、今から三十数年も前のことになります。仙台駅から愛子に向かうバスからの景色は、今とは違って長閑だったような記憶があります。今では、学校の周りには家が建ち並び、コンビニもあり、何と都会的な……。

私が、本校にお世話になることになったのは、高校の時に取った「和文タイピスト」の資格があったからです。私が最初に頂いた辞令は、「邦文タイピストとして採用する」というものでした。

邦文（和文）タイピスト??? 和文タイプライターもタイピストの仕事内容も、今ではご存知の方はごく僅かではないでしょうか。

当時の公文書の起案は手書きで作成し、決裁を経て、タイピストが浄書をし、郵送するという流れでした。その後、ワープロなるものが出てきて、文書の起案者自身がワープロを使って浄書するようになり、タイピストの仕事が少しずつ減っていき、私の仕事もタイピストから一般事務に替わり、庶務・会計・学生課各課を経験し、現在に至っています。今では、ワープロからパソコンに変わり、私自身も、時代の波に乗り（?）、パソコンで文書等の作成をしています。この年齢になるとなかなかパソコンを使いこなせず、四苦八苦の毎日です。

本校に採用されてから現在まで、私の我が儘を聞いていただき、同じ職場で勤めさせていただけたこと、大変感謝しております。あと数年で定年を迎えることとなります。無事卒業できるか、途中でリタイアしてしまうのかわかりませんが、そのときまで

精一杯勤めさせていただきたいと思います。

最後に仙台高等専門学校の益々の発展を祈念いたします。



実習工場での思い出

宮城工業高等専門学校
技術協力室 技術協力第1班 班長
菅野 孝志

高専制度創設50周年記念のお慶びを申し上げます。

私は宮城高専創立2年度から教職員の支援を得て、卒業生諸君と楽しい工作実習指導を40年間できましたことに感謝申し上げます。

創立2年度には実習工場が落成しておらず、木造の小屋にて各種機械を木枠に載せたまま工作実習を開始。土間のため梅雨時分には湿度が高く、冬には隙間風が吹きすさぶ中での実習でしたが1期生は奮闘しました。

創立3年度に実習工場の一部が完成。職員も増員、実習内容も充実して実施することができました。その後、工場の増設に伴い職員も増員、工作実習分科数も追加しさらに充実。後の工作実習基本形態となりました。

危険な機械器具を使用する工作実習のため、安全には細心の注意を払い指導しました。実習を終るとほっとする日々でした。

私達の業務として実習、教材準備のほか実験装置や教官依頼の研究装置の試作など多くの案件について支援してきました。同世代には研究熱心な教官が多く、私達も些細な相談にも出来得る限りの協力を惜しみませんでした。

また、ロボット大会出場マシン製作については実習工場設備を使用することが多く、初期の頃は部品製作支援や工作指導を致しましたが部活制の組織となり、先輩から後輩に技術指導ができる流れができ、自主的に行えるようになりました。マシン完成まで学生達が試行錯誤しての製作、大会までの期日が切迫、工場に泊まりこみ支援をした思い出があります。全国制覇の実績もありさらなる活躍を期待しています。

教職員および卒業生諸君との思い出すべてを誌面

に記載することはできませんが、本誌への掲載に心から御礼申し上げます。

最後に本校教職員、学生諸君、卒業生の今後の活躍とますますの繁栄を祈念いたします。



回想録

教育研究技術支援室
技術長（広瀬キャンパス）

岡 義次

高専制度創設50周年記念に当たり、昔を振り返ってみた。思い返せば本校に世話になったのが、船乗りには憧れ世界中を巡ってみたいと通信士を志したのが始まりであった。「合格の見込みはないよ」と、中学の担任に言われたが一大決心、寝る間を惜しんで猛勉強（と言っても12時には就寝）、当時二高よりも難しいと言われた本校の受験にも無事パスし、担任を驚かせた。

電波高校を卒業、通信士の資格も合格し、いざ船乗りかと思いきや、国際法の改正により、3名の通信士が1名に、また、折悪くオイルショックと続き採用募集がなくなってしまった。当時、占いで今年は運が悪いと出ていたが、まさに当たってしまった。ところが捨てる神あれば拾う神ありで、「学校に残らないか？」と誘ってくれた事務長があり、以来半世紀近くを本校にて過ごしてきた。こんなに長くとささまざまな人に出会うことになるのだが、移り変わりが早くあまり思い出が浮かばない。

強いて思い出すが、高校が高専になった当時の教職員であるが、これがまた良い時代であったのかいい加減な人が多かった。5時には宴会が始まる。さすがに大々的には自粛した。仕事には厳しかったが良い時代だった。あるとき、はじめての書類作成の業務があった。事務部長決裁が必要であり持参したのだが、これがまたきつくて不備を突かれてほとんど書き直しになってしまった（仲人なのにあんまりだ！）。それ以来、業務はまじめに努めてきた（自己満足？）のだが、本校と別れともなると寂しさもあり、また、やっと卒業できると思うと感無量である。長い間世話になり心より感謝するとともに、本

校のますますの発展を祈念する。



保健室の現在まで

宮城工業高等専門学校 看護婦
菅生美季子

1964（昭和39）年に開校1年目の宮城高専に赴任してから50年になろうとしています。名取駅から凹凸の田んぼ道を通って山に登っていくと、野田山に建った白亜の殿堂、そこが私の新しい職場宮城高専です。

辞令を貰って保健室に案内してもらおうと、クラスルームと同じ大きさの室に校医用の立派な机と器械戸棚が一つ、ガラんとした光景にしばし呆然としたものでした。臨床で医師や先輩たちに指導を受けながら働いていた私には、相談する人もいません。

まず手始めに、名取市役所で相談して学校医、学校歯科医、学校薬剤師を紹介してもらいました。仙台一高の保健室を見せてもらって必要なものを揃えること。法規の全集を買ってもらってこれからの仕事の勉強などをしたことで、保健室の体裁がだんだん調ってきました。春の健康診断、寮生の健康管理、救急処置、体育大会の救護等、身体面は調べてきました。

次は災害時の医療費の補償、保険会社との交渉がまとまって一安心しました。

戦後生まれのたくましい第1期生から、昭和の末の少子化時代に一人か二人兄弟で大事に育てられた学生。学生達の心の問題で保健室登校が始まり、カウンセラーの出番となり、保健室は心身の健康管理の場として現在に至っているのです。



20年をふりかえり

学生課 学生寮指導員（名取キャンパス）
松浦美代子

萩花寮の寮母としての喜びの極みは、OB、OGの

寮生が夢に出現したように、突然来校した時です。立派な成人となり、凛とした輝く容姿で挨拶された瞬間は何事にも代えがたい、まるで頭の中に新鮮な空気が入ったような思いです。社会に出て、日々厳しい試練の中で明るく逞しくなったのも、寮生活で培った一粒の種がイキイキと発芽する姿に思われ、深く喜びを感じます。

僅かな俸給から心温まる手土産に、遠路を訪問してくれる萩花OB、OGに嬉しい涙がこぼれます。

OB寮生から十余年にわたり年賀状と暑中見舞いの便りが届いております。埼玉県在住の鈴木君は、失礼いたしました、可愛い子供が三人いる良きパパの鈴木様ですが、いつも笑顔満面の家族揃ってのハッピーな写真を送ってくれます。嬉しい限りです。

某日、出勤すると寮生が息を切らして「S君が大変です」と告げに来ましたので急ぎ部屋を訪ねると、顔からあぶら汗を流している状態でした。まるで仁王の形相でした。すぐ入院しましたが、腹膜炎を起こしていたのです。退院するまで1カ月間も費やしました。元気になり勉学に励んでいる姿に、両親と同じ思いで身体中がさわやかになったことを覚えています。

これを教訓にして毎日各部屋を巡回して身体の調子などに気を遣いながら声掛けを励行しています。寮生の皆さん、萩の花のように、枝はしなやかに花をいっぱい咲かせてください。祈っております。

第 3 部

仙台高専 Future
未来への道標

第1章 新学科等の現在と未来

総合科学系文科・理数科

宮城高専と仙台電波高専の統合により、新学科の学生が2013（平成25）年度で4年次まで進行しているので、2014年度は最終学年の5年生までが新学科の学生となります。総合科学系においては学科名の変更はないものの、カリキュラムの変更が一部でなされ、両キャンパスの共通化が図られ、教員構成や教員数の見直しなども行われました。

総合系の教員も専攻科での講義や専攻科の専攻研究の指導を担っていることから、一部の総合系教員は統合に伴い専攻科所属となるなどの編成が行われました。教科は、総合系科目と専攻科科目を担当し、一部運営にも関わるといふ編成となりました。専門学科は5学科構成から4学科となり、それに伴い1学年約200名から160名となりました。専攻科重点化

の方針の処置です。

本校は技術者養成を目的とする高等教育機関であるので総合系は技術者教育の基礎の養成を旨とすることは言うまでもありません。高等専門学校は、専門学科での5年間一貫教育に続いて、専攻科において2年間のアドバンス的な内容の専門を学ぶ高等教育機関として発展しており、そのユニークさで大きな教育成果が期待されています。そのユニークな教育制度の良さを最大限教育に活かすため、1年次から楔形に専門科目数を増やし専門性を高められるようにカリキュラムが組み立てられ、これまでも何度か改定を行いながら改善を重ねてきています。その改善の努力は総合系において理数系科目だけでなく文系科目においても鋭意行ってきました。



総合科学系「MM教室」



総合科学系（数学の授業風景）

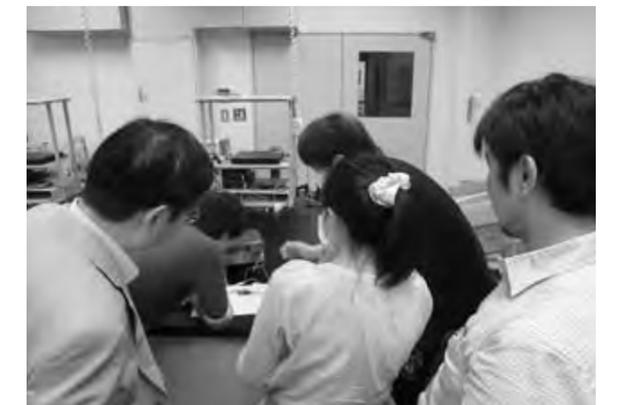
総合科学系の未来について語るとき、統合による学生にとってのメリットを第一に考えることが肝要であると同時に、それを支えるカリキュラム、教員構成について言及する必要があります。統合という名のもとに始業時間の始まりの統一や、総合系科目や時間数などの統一が行われ、統合の姿勢を内外に示す努力がこれまで行われて、ある程度の意識の統合に役に立ったように思います。しかし、これまで

統合前の2つの高専の歴史的な背景や理由により改善されてきたところもあり、5年までの完成年度を契機に、統合の意義を真剣に考えて、教育的効果を優先し、創造的な視点で、仙台高専の未来の姿を考えていくべきだと思います。

（総合科学系 文科長 菅野洋行
理数科長 鈴木勝彦）



総合科学系文科 英語の授業



総合科学系理数科 創造実習で作製した太陽電池の測定風景

総合科学系

「総合科学系」は、前身の「仙台電波高等学校」が、1971（昭和46）年4月国立学校設置法の一部を改正する法律（第23号）の施行により「仙台電波工業高等専門学校」となり、電波通信学科（定員80名、2学級）が設置されたのに伴い、「教養系列」として併設されました。その後、専門学科が4学科で構成されるようになるのに伴い、「総合科学科」と名称を変えました。2009（平成21）年10月、「宮城高等専門学校」との高度再編化により「仙台高等専門学校」が設置されたのに伴い、現在の「総合科学系」となっています。教員数は再編前と変わることなく、現在は以下のような18名の教員で構成されています。

- 理科系：数学科（4名）・物理科（3名）・化学科（1名）・保健体育科（2名）
- 文科系：国語科（2名）・社会科（1名）・英語科（5名）



e-learning

総合科学科の教員は、「学生に、社会人として必要な豊かな知識と教養と専門科目を学ぶに当たり必要な基礎的な学力を身に付けさせたい」ということを目的として、主として、全学年が共通に学ぶ一般科目を担当しています。実際には、時代の変化に伴い、人文社会系科目に視聴覚教材を積極的に取り入れたり、理数系科目では実験・実習を多く取り入れ、中には異なる科目を有機的に総合したユニークな総合科目を設けるなど、楽しく学びながら基礎的な力を養うことができるような工夫もしています。

現在の学問においては、「学際的」・「環学的」という言葉に象徴されるように、自然・社会・人文科学といった分野の垣根が取り外されて研究が進められようとしています。特に本校のような「コンピュータ・サイエンス」に特化した高専においては、コン



化学実験

ピュータに関する専門知識を獲得したうえで、社会・人文科学と密接に関連する研究・職業に携わるという学生が今後ますます増えていくのではないかと考えられます。現に、これまでも、理科系科目担当教員は言うに及ばず、文科系科目担当教員にも、専門学科教員と協力しながら、学生の卒業研究・専攻研究を指導するという事例は散見されており、この傾向には今後ますます拍車が掛かるのではないかと予想されます。

また、「国際化」の波は本校にも押し寄せてきています。現在、本校は、4つの国の大学と提携を結び、学生・教員のレベルでの交流を進めています。こうした学生・教員間のコミュニケーションは英語で行われることを前提としており、その意味で、低学年のうちから「実践的英語コミュニケーション能力」を身に付けさせるような教育を行うことは、我々に課せられた急務となっています。加えて、コミュニケーションを円滑に行うためには、学生に、日本という国がどんな国で、どんな歴史・文化を持っているかという知識を身に付けさせることも欠かすことができません。

このように、これまでとは変わりつつある「学生のニーズ」に応えるべく、総合科学系の果たす役割は大きなものがあります。さらには、今後も変わり続けるであろう「学生のニーズ」に適切に対応すべ



物理実験



創造工学1



創造工学2

く、総合科学系教員一丸となってその職責を果たす必要があると、意を新たにしています。

（総合科学系 系長 福地和則）

機械システム工学科

機械システム工学科は、高専の高度化再編の取り組みとなる仙台高等専門学校の発足に伴い、学科再編の機会を得て2009（平成21）年に設置された。これまでは宮城工業高等専門学校の機械工学科において、社会で活躍できる実践的技術者の養成が行われ、卒業生として歴史的に多くの技術者を排出して高度経済成長期から近年にかけて日本の技術の発展を確実に支えてきた。近年は社会や産業構造の変化により、機械工学の分野は従来の範囲を超えた領域との関わりを必要とされるように変化してきた。機械工学との関わりが深いものづくり技術においても、生産性や経済性だけでなく、安全性や機能性についての配慮など、複合的観点からの改善や向上が必要とされるようになってきた。そのような情勢や将来への展開を見据えて、機械システム工学科の教育は、機械工学に関する確かな基礎力と、未来社会を担う電気・材料分野を融合した“新”機械工学分野

に対する応用力を備えた、エンジニアリングデザイン能力の高い機械系技術者の養成を目的とした。

機械システム工学科における新たなカリキュラムは、ものづくりに必要な「考える力」と「実現する力」を身に付けることを主眼として従来の機械工学に新領域分野を融合した構成となっており、従来の機械設計や加工プロセスはもとより、メカトロニクスやバイオメカニクス、環境工学、工業倫理等に関する講義・実験・体験的学習の拡充により、融合技術に対抗できる技術的・学問的知識を習得することや、科学技術が社会環境に及ぼす影響やその技術への責任を自覚したうえで技術への取り組みができるような、新たな時代に向けた技術者素養の育成を目指した内容となっている。

主要な実験・実習科目としては従来と同様に設計製図や工作実習が核となるが、ものづくり技術の基礎となる設計手法や加工技能の習得を進めるだけで



機械システム工学科棟の外観



自走式スターリングエンジンの作品

なく、将来に向けたものづくり技術のための三次元CADシステムの導入やCAMシステムとの連動による課題への取り組みが進められている。両科目の連携によるスターリングエンジンの設計・製作については、学生自らが工夫してもものづくりのプロセスを構築し技術的・学問的知識を展開できる新たな取り組みとして、2012年度から自走型のスターリングエンジンの設計・製作を課題とする内容に更新されている。

設備面では新たな機械工学教育に向けて充実を図るために、旧式となった主要な学生実験装置の更新を進めており、2012年度には内燃機関実験装置が更新され、2013年度には振動試験装置や三次元測定機の更新や恒温恒湿室の整備等を予定している。また、今後のものづくり技術の革新にも早期に対応すべく、2013年度には三次元プリンターの導入を予定している。



CAD室での製図・演習



工作実習（旋盤加工）様子

2014年度には完成年度を迎えるが、これまで高専卒業生が活躍してきたように、機械システム工学科から送り出す新たな卒業生もその時代の社会の中で貢献ができるよう、機械システム工学科の教育・設備については今後も進展を図っていききたい。

（機械システム工学科 学科長 石川信幸）

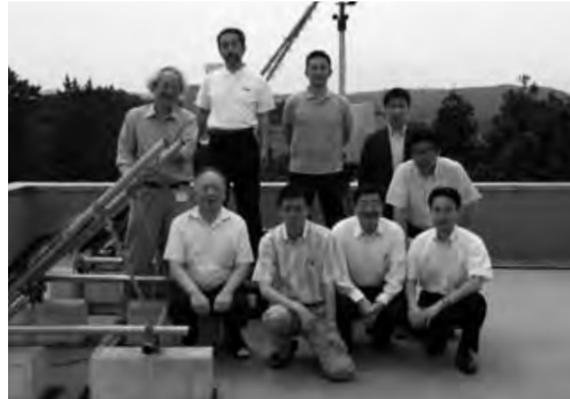


工学実験（オペアンプ特性）の様子

電気システム工学科

2009（平成21）年に高度化再編により仙台高等専門学校が設置され、電気工学科は電気システム工学科に名称を変えて生まれ変わりました。新学科における教育課程の見直しが行われ、電気工学科の開設単位数が必修科目43単位、選択科目53.5単位以上だったのに対し、電気システム工学科では必修科目56単位、選択科目38単位になり、必修科目の割合が大きくなりました。また、2013年度からは3年次に選択科目の「ものづくり実習」が新たに開設されました。さらに、4年次と5年次には、45時間の学修をもって1単位とする学修単位において、15時間の講義と30時間の自学自習が必要となる科目が増えました。この新カリキュラムでは、電気工学の幅広い分野に対して学生が身に付けるべき重要な科目が絞り込まれたものになりました。2013年度第4学年の電気システム工学科の学生から年次進行で新カリキュラムの授業を受けていますが、実験・実習・演習などの授業内容や方法の見直しは常に行われています。高専機構の教育研究調査室員でもある櫻庭弘教授は高専全体のモデルコアカリキュラムの実施に携わるとともに、本学科の授業にK-Skill拡張プロジェクトとしてPCやiPadのアプリケーションを取り入れた新しい試みの授業を展開しています。

電気システム工学科の教育を担うスタッフは、電気システム工学科教員8名、専攻科教員1名、



2013年度電気システム工学科教職員。

CO-OP教育センター教員1名、教育研究技術支援室職員1名が中心となっていますが、2012年度と2013年度はオムロン株式会社との人事交流により2名の講師（共同教育教員）が勤務し、シーケンス制御の実験などを担当して頂いております。また、総合科学系理数科、機械システム工学科、専攻科の教員および非常勤講師が専門教育に協力してもらっています。

電気システム工学科の取り組みとして、2010年から開催されているスマートグリッド展には毎年出展を行い、電気システム工学科の情報発信を行っています。その成果により、トヨタ自動車東日本株式会社と株式会社GSエレクトックとの共同研究が開始されました。また、スマートグリッド展に参加した学



2012年度わくわく体験教室「親子で作ろう手作りラジオ」



スマートコミュニティ Japan 2013 スマートグリッド展



2013年度オープンキャンパス

生の様子などが日刊工業新聞やNHKラジオにも取り上げられ、仙台高専のアピールにも繋がりました。

学科の設備も2012年度補正予算により、「IT機器利用とものづくりが同時にできるマルチプラットフォーム」と「電子回路製作・評価・実証システム」の導入の準備が進められています。また、地域人材育成に貢献するための社会人キャリアアップコースとして、2014年度から実施する「電気工学基礎コー



タブレット端末と双方向協働学習を取り入れた電子回路の授業

ス」の準備も進められています。

これからも科学技術は高度に発展し、産業構造も大きく変化していくと、高専の技術者教育の更なる質的向上が求められ、グローバルに活躍できる創造的実践的技術者の育成が必要となります。このような社会的ニーズに応えるべく、電気システム工学科はこれからも進化し続けていきます。

（電気システム工学科 学科長 中村富雄）



マテリアル環境工学科

産業の高度化・情報化が進展・拡充する一方、環境と調和した循環型社会への転換が強く望まれる社会的背景に伴い、材料系技術者には多様な素材への総合的な知識と技術が要求されるようになる。一方、学内においては2006（平成18）年8月、学校統合・学科再編、後のいわゆる高度化再編に伴う1学科減の基本計画原案が学内で公表された。材料系学科の統廃合も検討されるなか、全教職員を巻き込んだ議論がなされた。

そしてワーキンググループの始動とともに新たな「マテリアル環境工学科」の誕生に向けた準備が開始されることとなる。さらに、2008年度には学科長の強力な統率力の下で新学科の教育研究実現に向けた施設・設備ワーキンググループを学科内に立ち上げ、高専機構等の支援により年度とともに充実した実験・研究設備を配置することとなる（表1）。同時期には、有機化学や環境化学を専門とする教員を新たに迎え、旧学科である材料工学科の講義や実験・研究についても先行して新学科の内容へ徐々に移行することで学生の多様な進路へと繋げている。

そして2010年、マテリアル環境工学科は金属材料、無機・有機材料、電子機能材料など素材分野と環境（化学）分野を融合したマテリアル・環境系総合学科として発足する。全国で4高専のみとなる材料系学科の一つであり、日本の工業製品の根底を支える材料技術者の育成を担う。環境工学に立脚し、社会の持続的発展に資する基礎力のある材料系技術者育成を目的としている。学科名については、環境とカタカナを結合した名称を冠することで、中学生への印象を強めるとともに環境と素材への興味の強い学生入学に繋がり、材料工学科において長年問題と

なっていた志願者数が増加へと好転することとなる。

カリキュラムでは、金属系・電子系・化学系からなるマテリアル専門科目と環境専門科目を学年毎に配置し、学生実験や卒業研究等の専門総合科目により知識と技術を結びつけ、創造力を養う工夫がなされている。

近年、学科の取り組みとして精力的に活動しているのが公開講座や地域イベントでの出展活動である。公開講座「マジカルマテリアル」や名取市祭りでの実験ブース出展などの機会も多数設けている。これらを学生育成の場と位置づけ、学生のリーダーシップ、オーガナイズ能力、アクティビティ等とともに勉学へのモチベーションへ繋げている。

（マテリアル環境工学科 学科長 浅田 格）

表1 マテリアル環境工学科の新規設置設備と設置年度

平成20年度	オートグラフ（精密万能試験機）
	多機能X線回折装置
	UV-vis（可視紫外分光光度計）
平成21年度	ICP（プラズマ発光分析装置）
	AAS（原子吸光装置）
	XRF顕微鏡（X線分析顕微鏡）
	LC-MS（高速液体クロマトグラフィー質量分析装置）
平成22年度	ナノ粒度分布装置
	粒度分布装置
	多元スパッタリング成膜装置
	環境分析装置（電気化学計測、水素吸蔵特性測定装置）
	3D解析デジタル顕微鏡
	高周波真空溶解炉
	微小硬度計
平成23年度	TEM（透過電子顕微鏡）
	FE-SEM（電界放出型走査電子顕微鏡）
	レーザー加工切断機
	VSM（試料振動型磁力計）
	顕微FT-IR（顕微赤外分光装置システム）
	FT-IR（フーリエ変換赤外分光装置システム）
平成24年度	レーザーラマン分光装置
	混練機
	小型万能試験機



マテリアル環境工学科棟



1年授業での上級学生実験見学



2年生マテリアル基礎実験の定性分析実験



2年生マテリアル基礎実験のフィールド環境調査実験



4年生環境分析実験での実験風景



5年生学生実験の走査電子顕微鏡観察



公開講座「マジカルマテリアル」で子供たちに説明する学生



公開講座「市塾まてりある」での実験風景

建築デザイン学科

建築・環境デザイン学科（仮称）を新高専に置くことが決まったのは2006（平成18）年秋のことと記憶している。その後、住環境デザイン学科（仮称）として計画が進められたが、最終的に、住空間・社会環境のプランニング、デザイン&ビルドを行うための基礎知識と基礎技術を身につけた人材の育成を目指し、建築デザイン学科として設置審査を通過することとなった。教育課程は、建築学で取り上げられる使いやすさ、安全性、快適性、意匠、経済性に関する基本的な科目、即ち、設計、計画、環境工学、構造に加えて、デザイン学、人間科学の基礎を加えた編成となっている。

2010年4月に1期生が入学し、専門教育も始まった。法人化以後、高専に個性化・活性化・高度化が求められるなか、新学科の母体である建築学科はその潮流に乗っているわけではなく、旧学科が並存する状況で新しい学科を立ち上げて行くことは容易でなかった。そして、年度末の2011年3月には東北地方太平洋沖地震が発生し、整わない教育体制のなかで、まずは学校機能の回復を果たすことも優先事項

として取り組まなければならない状況に置かれた。

震災の後遺症もさることながら、退職予定者の後任人事、国土交通省の資格問題への対応、造形教育の実施方法、学科減に伴う不本意入学者への対応など、新学科の運営にはさまざまな困難があった。そのようななか、1期生の教育では、建築学科での授業を圧縮し、情報リテラシー教育や簡単なプログラミング、2次元のCAD演習を低学年から実施し、人間工学や3次元のCADとCGの演習を3～4年生に組み入れて、来年度の完成年度を迎えようとしている。

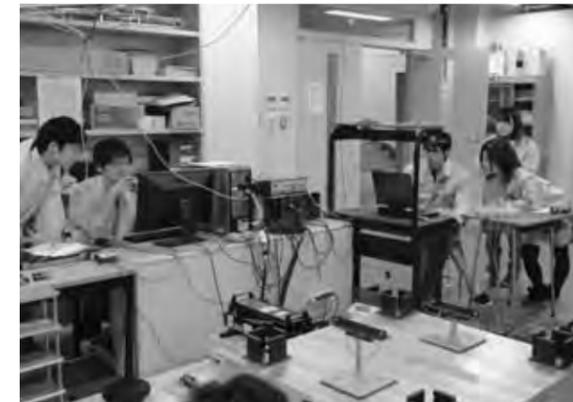
我々の学科の使命は、建築創作の手法を用いて社会システムの創造、特に被災地の再興に寄与することであり、具体的には、

- ①加速する高齢化社会での居住環境の改善
- ②地域社会におけるコミュニティの形成
- ③不良ストックのリノベーション・空間の再生
- ④環境と資源の破壊を最小にする技術の提案
- ⑤巨大災害に対して人命を守る技術と防災力の強化などが挙げられる。

情報化の波でボーダレスが進み、国内では産業の担い手がなくなるなか、高専では、ものづくり・エンジニアリングデザインをキーワードとした教育が展開されている。我々の学科は、その二語を「まちづくり・コミュニティーデザイン」に読み替えることにより、生きがいを感じ持続可能な住空間・社会環境の形成に役立つと考え、アイデンティティの確立にもつながると思っている。

建築は人々の生活を規定し、好き嫌い関係なく建造物は耐用年限中存在し続ける。それゆえハイテクではないが、大切な役割を持つ。人間の手でデザインし仕上げていくことを忘れず、前向きに挑戦する学生達を支援できる学科になるよう努めたい。

（建築デザイン学科 学科長 飯藤将之）



振動実験



模型製作



CAD演習



構造実験



舞台の見学



見学会



見学時の集合写真

知能エレクトロニクス工学科

知能エレクトロニクス工学科は、仙台高専の高度化再編に際し、情報・電子系エンジニアの養成に特化した広瀬キャンパスで、エレクトロニクス分野を担う学科として創設。2010（平成22）年4月に、第1期生42名を迎えました。

学科の目的は、「マイクロコンピュータを中心とするエレクトロニクス技術やその構成要素等について幅広く学修すること。ハードウェアを主体としてソフトウェアも十分に活用でき、さまざまな機器・システムの知能化を通して、地球の環境保全、社会の安全、人類の福祉に貢献できる技術者を養成すること」です。また、①さまざまな機器やシステムの知能化を行うために必要なソフトウェア技術やマイクロコンピュータ技術を身に付けること、②電子回路をはじめとするエレクトロニクス技術の基礎について深い知識を身に付けること、③エレクトロニクス技術を支えるさまざまなデバイス・材料に関する広範な知識を身に付けること、の3点を教育目標として掲げ、将来有為な人材の育成に取り組んでいます。

学生の教育に当たっては、単に専門知識や技能を修得させるだけでなく、自発的に考え、自立的に成長して能力を高めようとする姿勢を持たせること

を重視しています。例えば、第3学年の「電子機器基礎」という科目は、学生一人ひとりが電気・電子関係機器やデバイスなどに関する異なるテーマを選択して、その特徴・構造・仕組み等を調査してクラスで発表するセミナー形式。自ら求めて学ぶ姿勢を身に付けさせるとともに、プレゼンテーション能力を向上させることを目指しています。また、第4学年では、「知能エレクトロニクス製作」と「知能エレクトロニクス実験I」を通して、3名程度のチームを編成して共通の課題を与え、回路・ソフトウェア・メカトロニクス等について融合的に身に付けることができる創造的なものづくりを経験させるPBL型の教育を行っています。2013年度の課題は「金属探知機を搭載し、ライトレースしながら、コース上に置かれた硬貨を検知するパフォーマンスを披露する模型自動車」の製作。10月下旬の高専祭で「埋蔵金を探しあてろ」と題した学科主催のコンテストを実施して競技させることを目標に、製作を進めさせているところです。その他、第2学年以上の実験・実習系の科目を中心に、学生の知性・感性を磨く環境を整えて、学生の能力の自発的な発展を促す取り組みを進めています。

今日、日本の産業構造は大きな転換点を迎えており、良いものを安価に大量生産するだけでは国際競争に勝てない厳しい時代となってきております。日本の未来を担うことができる創造的な能力に優れ、

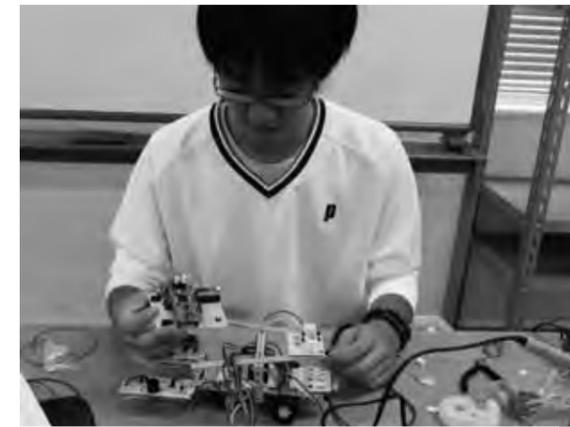
それを正しく地球と人類社会のために発揮できる自立したエレクトロニクス技術者・研究者の養成のため、今後とも学科を挙げて努力して参ります。
(知能エレクトロニクス工学科 学科長 那須潜思)



3Dプリンタで作る造形物の設計の様子（2年プロジェクト実習）



自分で調査した電子機器についてプレゼンテーション（3年電子機器基礎）



金属探知ライトレースカーを製作中の様子



走行デモに向けて最終調整中！（4年知能エレクトロニクス製作）



自転車を漕いで発電し電気二重層コンデンサを充電

そのコンデンサの電力でサーキットコースを何周回れるか!?(1年創造工学)



授業以外でも結束力を発揮するIE学科1期生（校内スポーツ大会）

情報システム工学科

情報システム工学科は、2009（平成21）年10月の高度化再編に伴い広瀬キャンパスに設立されました。広瀬キャンパスは仙台電波工業高等専門学校時代と同じく電子情報系の学科から構成されており、その中で情報システム工学科は、ソフトウェアを中心とする情報システムの基礎から応用までを教授する学科として位置付けられています。

情報システム工学科の教育目標は「コンピュータシステムの基礎から応用技術までを学修し、世界中に広がる情報を人々の生活に活用できる能力を有する技術者の養成を目標とする」です。

設立時の教員は、専属教員11名、専攻科との兼任教員が2名、ICT先端開発センターとの兼任教員が1名の合計14名です。この14名の仙台電波高専時代の所属学科（旧学科として現在も兼任）は、情報通信工学科4名、電子工学科2名、電子制御工学科4名（うち兼任2名）、情報工学科4名（うち兼任1名）です。

高度化再編に伴う校舎改修工事により、情報システム工学科の教員室および研究室は電子制御工学科棟であった8号棟に集約されました。8号棟1階は、実習試作室を7号棟に移し、2010年度に教員室6室と研究室5室に改修されました。8号棟4階は、2012年度に12室あった教員室を減らし教員室5室と研究室5室に改修されました。

カリキュラムの策定に当たっては、情報処理学会の「情報専門学科におけるカリキュラム標準「J07」（2007-2008年度策定）や大学、他高専のカリキュラムを参考にしました。高専の使命である実践的技術者の育成を念頭に、コンピュータサイエンス的な科目を抑え、プログラミング実習やデータベース実習などの実践的な科目を含めるよう工夫をしています。

本学科では、情報システムに関する検定試験を受験することを推奨しています。特に基本情報技術者試験は情報システム系エンジニアとして必要な知識が網羅されているため、各教科で学習した内容を整



情報システム工学科教員（2013年6月）



ホームページ制作（2年プロジェクト実習）



サーバ構築実習（3年情報システム実験Ⅰ）

理・統合して理解するのに役立ち、就職にも有利に働きます。基本情報技術者試験の受験を勧めるために、第4学年前期の情報システム演習Ⅰにおいて、基本情報技術者試験の過去問題を使った演習を実施しています。全学生が卒業までに基本情報技術者試験に合格することを目標としています。

全国高専プログラミングコンテストなどの情報系の各種コンテストへの参加を勧めています。2012年度には、初めて日本情報オリンピックに本学科の2年生4名が参加しました。残念ながら予選通過できませんでしたが、低学年から取り組めるコンテストとして今後とも継続して参加するよう勧めていきたいと考えています。将来的には、学科主催のプログラミングコンテストなども開催できればと考えています。

情報システム工学科はこのような体制で、しっかりと基礎技術を身に付け、日々変化する情報技術に対応できる技術者の育成を目指していきます。

（情報システム工学科 学科長 竹島久志）



パソコン組み立て実習（1年創造工学）



校外研修（2年）でスーパーコンピュータを見学（東北大学サイバーサイエンスセンター）



合宿研修（3年）で「将来を考える」ワークショップ



のぼり旗

情報ネットワーク工学科

インターネット、携帯電話、デジタル放送など、今日の社会活動や私たちの日々の生活にとって、情報ネットワークは必要不可欠な社会基盤となっています。これらの情報ネットワークを構築・運用する技術者には、情報ネットワークの構造や仕組みを幅広い視点から理解しそれを応用できる技術力と、情報通信インフラの担い手としての使命感と高い倫理観が求められます。情報ネットワーク工学科はこのような社会のニーズに応えられる情報通信技術者の育成を目的として設立されました。

情報ネットワーク工学科では、電気通信技術、ネットワーク技術及びネットワークシステム技術の3つの分野を教育の柱とし、電気通信の基礎からインターネットワーキング、ネットワークを利用した情報システムまでをバランスよく系統的に学習でき

る教育課程を編成しています。たとえば低学年次の入門科目である創造工学やプロジェクト実習では、教育の3つの柱に基づいた具体的なエンジニアリング体験をさせることに重きをおき、技術を獲得しそれにより問題解決を図ることの面白さを実感させ、以後の学習へのモチベーションが高まるよう指導しています。また、講義のみ、あるいは実験のみという授業形態はできるだけ避け、講義と実習・演習を組み合わせ、講義で得た知識を次の実習で確認することができるように工夫したスパイラル型の教育手法を積極的に取り入れています。

広瀬キャンパスは財東北無線電信講習所としての創基以来、無線従事者の養成を社会的な使命の一つと捉え、実践的な教育のもと今日まで多くの無線従事者を輩出してきました。情報ネットワーク工学科の教育課程は総務省の長期型無線従事者養成制度の学校認定を受けており、学生は卒業後の申請により第一級陸上特殊無線技士の無線従事者資格が得られます。学生たちにはより上級の無線従事者資格や工事担任者、電気通信主任技術者など情報ネットワーク系の資格取得を奨励しており、そのための学習支援も始まろうとしています。専門的な知識と技能の修得と合わせて、自分の適性を見出し、エンジニアとしての将来を考えるキャリア教育も積極的に展開していく所存です。

20世紀末から21世紀初頭にかけて、携帯電話やインターネットは急速に普及・発展し、社会基盤として定着しました。またテレビ放送も2012年3月に地上波テレビ放送の完全デジタル化が完了するなど、私たちを取り巻く情報ネットワークは大きく変化してきています。電気通信のデジタル化・多重化はますます加速してくるでしょう。またインターネットの通信技術では、通信プロトコルのIPv4からIPv6への移行が始まり、SDN (Software Defined Networking) による仮想的なネットワーク構築技術も注目を集めています。情報ネットワーク工学科



情報ネットワーク工学科の学科紹介ポスター



デジタルテレビ放送電波の計測



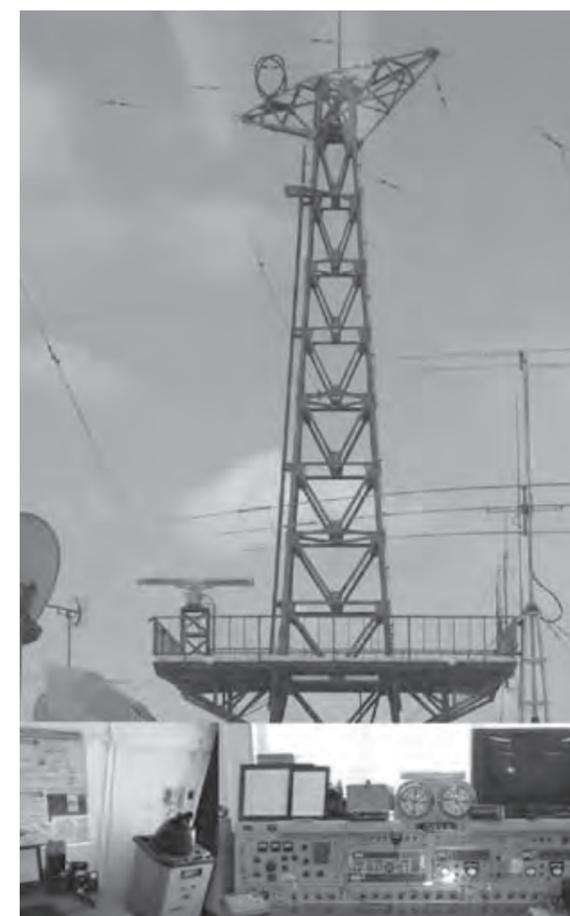
ネットワーク設計構築実習

の教育課程や実験・実習環境もこれらの技術革新に合わせて進化していく必要があります。今日の情報ネットワークを支え、明日の情報ネットワークを創造する。時代とともに成長する情報ネットワーク工学科でありたいと思います。

(情報ネットワーク工学科 学科長 脇山俊一郎)



電波無響室



無線通信実習設備 (実験局JG8XA) とアンテナ



1年「創造工学」でのネットワーク実習

生産システムデザイン工学専攻

■ものづくりの技術革新に貢献できる技術者養成を目指して

仙台高専発足に伴い、宮城高専専攻科は仙台高専専攻科「生産システムデザイン工学専攻」として再編されました。本専攻は生産システム工学、建築デザイン学、情報デザイン学の3コースから構成され、従来20名だった定員が40名に増やされました。

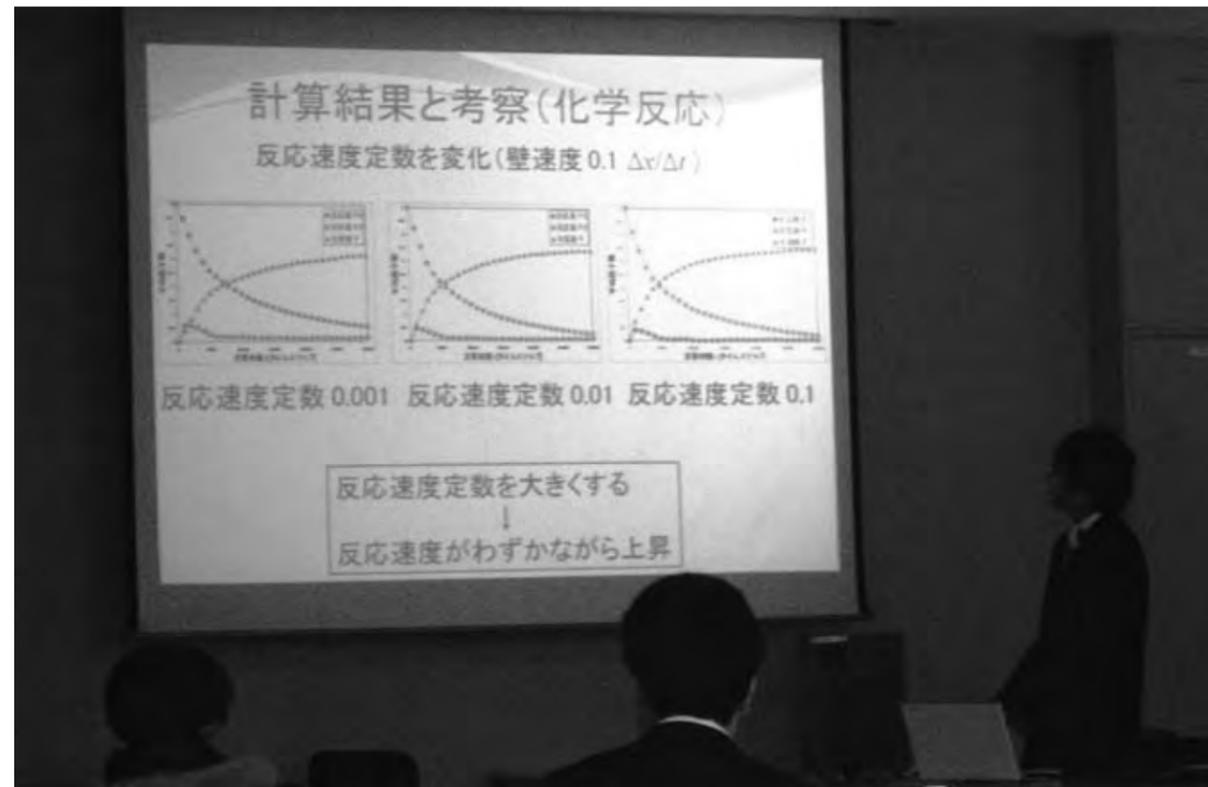
本専攻では、高度な専門技術の学習に加え、エンジニアリングデザイン教育、体験的実務学習などをスパイラルアップに行っていくことにより、「持続可能な社会の実現に資する、分野にとらわれない技術の複合・融合化や、全ての工程を見通した総合的な技術革新に携わることのできる、高度なエンジニアリングデザイン能力を身に付けた、国際的に通用する技術者の養成」を目指しています。

現在、新カリキュラムの検討を行っていますが、

創造工学演習は宮城高専時代から技術の複合・融合化やものづくり工程を学ぶための重要な科目であり、新カリキュラムでもエンジニアリングデザイン教育の中核をなしています。新高専発足後、新たに3次元プリンタ、プリント基板加工機などの機器を導入し、学生のアイデアを活かしたものづくりを行うための環境を整備してきました。今後、新専攻科棟にこれらの機器を集めたエンジニアリングデザインラボを開設していきたいと考えています。

また、グループでのアイデア創成を活性化させるために、ファシリテーション能力の養成にも力を入れていきます。すでに準学士課程4年のエンジニアリングデザイン概論でファシリテーションの基礎を学んでいますが、専攻科でさらに実践的な演習科目を追加する予定です。

体験的実務学習としては、国内外の企業でのイン



専攻研究最終発表



専門科目「地球環境と都市」での英語プレゼンテーション

ターンシップに加え、自治体が実施する技術研修、海外の教育機関と連携したサマースクールなどへの参加を行っています。海外での研修に向けて英語力を向上させるために、専門科目での英語でのプレゼンテーションも行っています。今後はさらに準学士課程学生の指導を通じて専攻科生が自ら学び成長する機会をつくっていきたく考えています。

(生産システムデザイン工学専攻 専攻長 遠藤 昇)



専攻研究中間発表 (ポスターセッション)



創造工学演習でのグループ討論



創造工学演習最終発表

情報電子システム工学専攻

1993（平成5）年、電子システム工学専攻、情報システム工学専攻の2専攻としてスタートした仙台電波高専専攻科は、2009年10月の宮城高専との統合を受け、2010年から2専攻を融合し、定員を16名（各専攻8名）から30名に拡充した仙台高専広瀬キャンパス専攻科情報電子システム工学専攻となりました。教授内容も科目を融合し、専門領域を複合的に学習可能な科目に編成されました。また、正式に専攻科所属教員ができたことにより、サポート体制がさらに強力になりました。これらの改善により、企業の技術者と密接に連携したPBL（Project Based Learning）による実践教育を推進し、学生のコミュニケーション能力および技術者としての長期的キャリアを展望し

て社会貢献できる資質を養成しています。

グローバル化が推進されるなか、英語学習については、国際会議でのプレゼンテーションスキルを養成する授業が外国人教員により行われています。これにはティーチングアシスタントとして数名の東北大の留学生が採用されています。この授業は、2010年度高専改革推進経費プロジェクトの一環として始まり、学内外から高い評価を受けています。プロジェクトの終了により、ティーチングアシスタント採用予算の継続が危ぶまれましたが、現在では、専攻科に必要不可欠な当初予算と認められ、これからも継続されていきます。

高専間交流については、本専攻科では2011年から、



国際会議で発表

東北地区内6つの高等専門学校専攻科学生による合同研究発表会を開催しています。これを通して学生レベルでの高専間交流を促進し、専攻科学生の研究や学修への意識を高め、高専専攻科の研究・教育活動を活性化させることを目的としています。

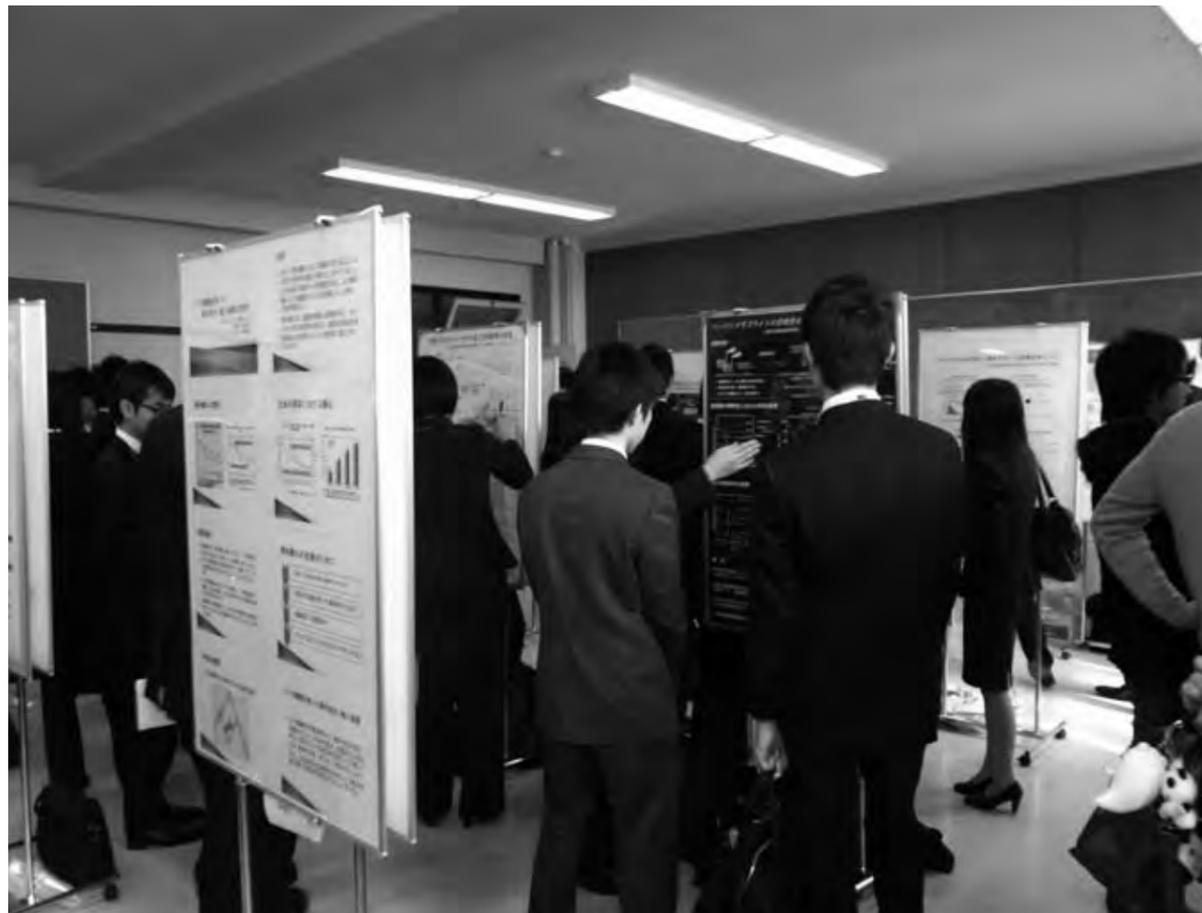
日本の高等教育の水準を保証するJABEE（日本



企業講師による実践的PBL授業

技術者教育認定機構）については、本専攻科は、2002年に東北の大学および全国の高専専攻科で最も早く認定を受けました。その後、継続的に改善を続けながら2007年、2011年に継続審査を受け、現在に至っています。

（情報電子システム工学専攻 専攻長 白根 崇）



2011年度東北地区高専専攻科研究交流会（2011年11月）



2012年度東北地区高専専攻科産学連携シンポジウム（2013年3月）

地域イノベーションセンター

仙台高等専門学校は、高度化再編後も企業および地域に開かれた教育・研究の場を目指しています。地域イノベーションセンターは、2009（平成21）年10月の高度化再編に伴い、前身となる「地域連携テクノセンター」の業務の要である産学連携に重点を置き、名取と広瀬の両キャンパスに設置されました。

広瀬センターは、1995年度に「技術開発研究センター」として設置され、2005年度に「地域連携テクノセンター」に改称し、その目的達成のため、企業および県や市などの公共機関と連携しながら、さまざまな事業を行うとともに地域社会に対して開かれた学校として公開講座や技術研修等を実施してきました。

名取センターは、産学連携の全国的な活動の活発に伴い、名取市を始めとする周辺地域の自治体や企業からの要請に基づいて、2000年度に「地域共同テクノセンター」として設置されました。企業協力会である「産業技術振興会」とともに公開講座や技術講習会を始めとした活動を行ってきました。

広瀬キャンパスではITに特化した教育・研究を進めており、当センターでも電子デバイスの試作、開発を基盤としたセンター運営を進めております。

名取キャンパスでは、機械・電気・マテリアル・建築・デザインなどの幅広い分野を対象としており、広瀬キャンパスのICT分野と連携し、宮城県の産学連携組織である「KCみやぎ」等を通じて、地域のニーズに対応しています。

両センターでは宮城県内の企業を中心に本校の企業協力会として結成された「産学連携振興会」の支援や助言を受け、現在に到っております。

本校の地域イノベーションセンターは東北地域の6高専の基幹校として産学連携、地域防災、震災復興及び知財推進の牽引役として教育・研究に関わる業務を計画・推進し今後も地域の発展に積極的に貢献していきます。

（地域イノベーションセンター センター長 羽賀浩一）

■半導体の試作・開発装置



レーザー直接描画半導体試作装置

■異業種連携研究



LED植物工場



X線光電子分光装置（XPS）



高周波誘導結合プラズマ質量分析装置（ICP-MS）



地域イノベーション広瀬センター外観写真

CO-OP 教育センター

「教室での学習と学生の学問上・職業上の目標に関係する分野での有益な職業体験とを統合する、組織化された教育戦略。学生、大学、企業の連携活動であり、当事者それぞれが固有の義務と責任を持つ」。(National Commission for Cooperative Education (NCCE)、全米コーオペ教育委員会による定義。http://www.npowil.org/overseas/wace.htmlより引用、2013/04/23参照)

冒頭から硬い文章で恐縮です。CO-OP教育を説明する際には、冗談半分で「CO-OPとは生協のことではありません」という前置きから話を始めることがあります。CO-OP教育とはCooperative Educationの略です。1906年に、シンシナティ大学学長のハーマン・シュナイダーによる「理論と実践の反復が教育の質を向上させる」という理念に基づき、北米において始まった教育体系のことで、学生が学内の科目授業と学外の就労体験型学習プログラムを交互に受ける教育システムです。

日本においては、馴染みのない言葉と思います。それもそのはずで、我が国の高等教育機関においては、従前の「産学連携教育」は少なからず行われてきているものの、大学は元より高専においても、真のCO-OP教育が本格的に行われているとは言い難く、その定義すら存在しないのが現状です。あくまで比喩ですが、現在のサッカーJリーグのように、企業だけではなく、地域の住民も一丸となりサポートするような、地域社会全体が教育や若者の人材育

成に参画するような教育体制ではないかと思います。

いつの時代においても、教育の理念や本質は変わりませんが、社会変化に呼応して教育方法が変わるのは至極当然でしょう。

折しも、地球規模での競争やグローバル化が急速に進展する時代となっています。本センターは、グローバルな視点を持ちながらも地域社会に貢献できるエンジニアの育成に向かって、単に欧米の手法を追うのではなく、東北地区の他高専、地域企業、自治体、および住民の方々々と協力して、一步一步着実にCO-OP教育の推進に努力していきたいと考えています。

（CO-OP教育センター センター長 櫻井 宏）



2012年度
東北地区連携CO-OP教育推進会議



高専機構主催の2012年度
海外企業インターンシップ学
内報告会



東北地区高専「学-学連携」コンテスト



Finland訪問 研究シーズ事業化を推進するVantaa
Technology Centreにて技術開発と企業インターン
シップについての視察



ヘルシンキ応用科学大学（学術協定校）
次世代自動車研究開発現場の視察。学生が企業協賛により開発したレース用電気自動車

ICT先端開発センター

ICT (Information and Communication Technology) 先端開発センター (略称: ICTセンター) は2009 (平成21) 年度10月の宮城高専と仙台電波高専の統合を機会として、IT先端開発センターはより幅広い地域貢献を目指してさらなる組織充実を図ったものである。①組み込み系デジタルシステム開発部門 (略称: 組み込み系部門)、②ネットワークスキル開発部門 (略称: ネットワーク部門)、③ITリエゾン教育部門 (略称: リエゾン部門) の3部門がICTセンターには設置されている。現在、組み込み系部門とネットワーク部門においてそれぞれ社会人キャリアアップコース組み込みシステム技術者育成コース (写真1) とネットワーク技術者育成コース (写真2) が一般社会人を対象として実施されている。これらのコースは2010年度から継続して実施されていて、今年度後期からは「安全・省エネルギーコース」が組み込みシステム技術者育成コースと一体化して2コース選択の自由度を受講で



社会人キャリアアップコース・組み込みシステム技術者育成コース2013年度初回講義 (写真1)



同コース・ネットワーク技術者育成コース 2012年度開講式 (写真2)

きるように柔軟な体制をつくった。

また、今年度8月からは社会人キャリアアップコース「製品・材料の試験・技術評価コース (略称: 材料コース)」が開講される予定になっている。来年度からは社会人キャリアアップコースに「機械コース」および「電気コース」も加わり、「材料コース」+「機械コース」かまたは「材料コース」+「電気コース」として120時間の条件を満たすように特別の課程である社会人キャリアアップコースとして拡充させる予定である。

しかし、これらのコースはもはやICTセンターの上記3部門の枠を超えており、実施内容の拡大と変容がICTセンターの位置付けと在り方を変える段階に迫られている状況にある。一方、リエゾン部門では公開講座と出前授業 (写真3) に教育研究技術支援室等が中心となって取り組み、小・中学校向けに理科離れ対策の一環として教育面における地域貢献の充実を目指している。このようなさまざまな活動をICTセンターは行っているが、この50周年を節目に今後さらなる宣伝や地域貢献・人材育成を果たすべくICTセンターの枠組みを明確にする努力が必要である。他方では、ICTの拠点校として東北地区、北海道地区ともICT協力体制を構築して教育・研究面でのデータ共有化を早期に実施することも進行しつつある。

(ICT先端開発センター センター長 菅谷純一)



サイエンスデー・出前授業: テーマ「アウターロータ型ブラシレスDCモータを回して競技用4輪電気自動車に乗ってみよう」 (写真3)

第2章 高専への期待

未来に向かって



長岡技術科学大学学長
新原 皓一

「仙台高等専門学校」は、異なる特徴・強みを有する「宮城工業高等専門学校」と「仙台電波工業高等専門学校」の教育研究資源を結集し、特色を持った新しいモデルの高専として2009 (平成21) 年に創設されました。前身である「宮城工業高等専門学校」と「仙台電波工業高等専門学校」の創設からそれぞれ50年、40年の節目を迎え、また「仙台電波工業高等専門学校」の前身である「(財) 東北無線電信講習所」の創設から70年の節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。

これまで実践的で創造的な技術者として仙台高専の母体である「宮城工業高等専門学校」と「仙台電波工業高等専門学校」が育み、世に送り出してきた有為な人材は我が国の科学技術を支え、技術革新に関与し続けており、内外から高く評価されていることに敬意を表します。

我が国は科学技術創造立国を標榜し、幾多の技術革新に取り組み、世界経済の中で高い地位を築いてきました。しかし、我が国を取り巻く環境は50年前と大きく変動しました。経済活動のグローバル化による製造拠点の海外移転や少子高齢化により、我が国は経済規模の縮小が懸念されています。一方で、世界では人口が爆発的に増加して食糧・エネルギー・環境の問題が顕在化しています。

こうした中で新たなコンセプトの下、設立された「仙台高等専門学校」には、自ら創造しグローバル社会で活躍できる技術者の育成拠点であるとともに、進化し続ける高等教育機関として社会から大きな期待が寄せられており、多くの優秀な技術者を世に送り出し、科学技術の発展並びに地域社会に貢献することが期待されています。

本学は開学から今日まで、「仙台高等専門学校」と強い連携を維持しつつ歩んできました。前身の「宮城工業高等専門学校」と「仙台電波工業高等専門学校」から、多くの卒業生が本学に編入しており、その中には昨年8月に39歳の若さでモンゴル国の教育・科学大臣に就任された方もおられます。卒業生の受け入れ以外にも、連携教育プログラムの実施や多岐にわたる共同研究の実施、教員の人事交流、図書館連携などの幅広い連携・協働活動を積極的に進めており、これからも本学は「仙台高等専門学校」と共にあります。

高等教育機関の使命は、学生と共に未来を視て、10年後、20~30年後の夢を共有し、その実現に向けて努力・挑戦できる環境を整備することにあると思っています。我が国の未来に光を灯す有為な技術者を育て、次の節目である創設100年に向け、共に邁進して行こうではありませんか!



高専の新たな50年への期待：技科大と連携した新しい教育改革プログラム

豊橋技術科学大学学長
榎 佳之

高専制度の開設50周年、この間、仙台高専をはじめ全国の高専が日本社会の大きな浮き沈み乗り越え、再編統合などさまざまな変革を経て今日を迎えられましたこと、心よりお祝い申し上げます。また、仙台高専を含む東北地区の高専におかれては、あの未曾有の3.11東日本大震災に遭われ、校長先生をトップに全校が一丸となって復旧復興に取り組まれましたことに深い敬意を表します。

さて、高専の教育体系は15歳という早期から「技術」の教育・訓練を行い、高度な技術が頭だけでなく体にしみついた優れた人材を育成する、世界でも類を見ないユニークなもの高い評価を得ています。私共、豊橋と長岡の両技科大もそれを更に高度化させる役割を担ってきました。そして高専と技科大は連携して今日まで日本の産業を支える優れた実践的技術者を世に輩出し日本の繁栄を支えてきたと自負しております。しかし、近年IT技術の発展をもとに急速なグローバル化が進展し、中国など新興国の台頭、製造業の海外移転、環境エネルギー問題の深刻化など日本の国際的な立ち位置や産業構造は大きく変化しており、高専や技科大による人材育成にも新しい時代を見据えた「変革」が求められております。その変革に求められるものは、これまでの「実践的」、「高度」に加えて「イノベーション」

と「グローバル」でありましょう。

このような社会的要請を背景に高専機構は第3期中期目標・中期計画の策定を進めておられますが、それと連動して両技科大と約1年間の検討を経て、この度、国立大学改革強化推進事業の一環として3機関連携の新たな教育改革事業を立ち上げました。そこでは、これまでの優れた教育体系を堅持しつつ、海外キャンパスの設置など「イノベーション」「グローバル」「連携強化」をキーワードに、学生達に積極的に国際経験を積ませる仕組み、産業界との連携を一層強化するプログラム、高専教員の海外研修FDなど、これまでにない新しい取り組みが盛り込まれています。この新しい挑戦的なプログラムの下、実践的かつ創造的で国際感覚を持った高度技術者を15歳という早期から育成する技術教育体系が生まれることになり、我が国の産業の国際競争力を一段の強化することに繋がるものと期待されます。

この新しいプログラムは、高専と技科大が協働してこれからの社会に貢献していくのだという我々の姿勢、気持ちを社会に示すものとなりましょう。これらの事業を通して高専・技科大の連携が更に大きく発展し、社会を動かす力となることを祈念しております。



Strengthened Academic Cooperation between KMITL and SNCT

Former Vice President King Mongkut's Institute of Technology Ladkraban
Ruttikorn Varakulsiripunth

On behalf of King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMITL), Thailand, I would like to extend my sincere congratulations to the faculty and staff members of Sendai National College of Technology (SNCT), Japan on the truly special occasion of its 50th anniversary celebration. It is a great honor and a pleasure for me to be a part of this commemorative event. I am especially happy that KMITL has such an esteemed relationship with SNCT in which successful academic programs and activities have prospered since 2006.

The official academic cooperation agreement between KMITL and SNCT was signed on 10th March 2006, when the former president of SNCT, Prof. Dr. Mitsunobu Miyagi visited KMITL. Since then, the students and staff exchange program has been performed effectively and it has become the strong foundation for global academic agreement between KMITL and KOSEN from 2011. I am very pleased that the academic cooperation and collaboration have been able to expand to all KOSENs in Japan since then.

The faculty members and students of KMITL, who visited SNCT for research or exchanges, always informed that SNCT has a wonderful research environment and educational systems. Moreover, the hospitality from the faculty and staff members of SNCT was so kind and friendly. I am extremely grateful for the sisterhood relationship established with SNCT and would like to see the continuous cooperation with various programs for our mutual benefit in the future.

One of the highlight cooperation is the 2nd International Symposium on Technology for

Sustainability (ISTS2012) which was co-organized by KMITL and SNCT in Bangkok, Thailand on 21-24 November 2012. The symposium operated successfully as the general forum for enhancing dialogue and collaboration among students, researchers and faculty members.

The world has been shifting towards the era of "Mutual Benefit Community", in which the mindset of global citizen beyond the nations is respected. In such a world where coexistence with people of different ethnic group, culture and religion is emphasized, the demand to the higher education institution is to lead such international relationships. In this perspective, to contribute to the further development of Thailand and Japan by collaborating with SNCT is the great pleasure for KMITL.

Over the last half a century, SNCT has accomplished great things and his missions in the education and is to be commended on its strategy and vision. KMITL is proud to support and be a part of this historic and momentous occasion, and I wish you all the best as it embarks on the next 50 years of groundbreaking academic achievements.

Finally, I truly hope that KMITL and SNCT will enjoy future prosperity, maintaining our strong partnership in the years to come.



Congratulations to SNCT for the 50 years of Educational Activities in Technology

Principal lecturer, Production Technology Helsinki Metropolia University of Applied Sciences
Arto Haapaniemi

14 years of co-operation with Japanese NCTs

From the year 2000 Helsinki Metropolia University of Applied Sciences (HMUAS) and its forerunners have enjoyed fruitful and widening co-operation with Japanese National Colleges of Technologies - TNCT of Tokyo and SNCT of Sendai as well as other five NCT's of Tohoku region.

First contracts were signed in 2002 between Stadia in Finland and Miyagi NCT and Tokyo NCT in Japan. First five Finnish students went for exchange to Japan in the year 2000. Teacher and staff exchanges became active around 2008.

Some 80 students from Helsinki have already enjoyed the exchange in Japan, about half of them in Tokyo and half in Sendai.

The exchanges of Finnish students from HMUAS to Sendai have lasted from three to six months, from September till March. Students from Japan have stayed in Finland between one and five months. There have been students from several different degree programs. Today the number of students each year is four to Helsinki and four to Sendai.

Japanese students are coming to Helsinki around the 20th of August because most of foreign exchange students arrive at that time. So they can attend the orientation week at end of August and get to know each other. Then they have a chance to enter different study programs from the very beginning - school year starts in the beginning of September.

Mostly the students have been working on projects during their stays in either country. They have concentrated on applied R&D (research and development) project works because of the language barrier as well in Japan as in Finland. Project subjects have been given by the Japanese professors and Finnish professors have been tutoring the students during their stay in Helsinki and the same applies with the Finnish students' stays in Japan.

English can be used as a common language in Helsinki but not yet so much in Sendai. Before going to Japan the Finnish students must study Japanese language, culture and history for a minimum of one year.

Students both in Helsinki and in Sendai have written reports and presented the results of their studies in English at the end of the exchange period.

The teacher and staff exchange has also taken place. During the years there have been several Japanese delegations in Finland and from Helsinki there have been some nine visits (six different professors giving lecturers) in Sendai. Finnish professors have stayed approximately two weeks each in Japan. They have been lecturing on technical topics. The number of the Japanese students attending the lectures has grown during the years.

Future challenges Students

Student exchanges should take place according to the semester schedule of the receiving university. Then it will be possible for the students to better integrate into the studies of the receiving university. It would be good if the

study plans could be agreed mutually already prior to the beginning of the exchange period.

We believe that a good arrangement for the students would be to work in the same project together with students from other countries. However, many times the student's study project has been an independent work not so much related to the work of other students around. So there is a danger to become isolated from the other students. It would also be beneficial for the students to do their internship in the industrial companies during the stay.

The most important question still remains - How to make national students and foreign exchange students really working together during their everyday studies?

Teachers and staff

There are many challenges for staff exchanges, too. We have proposed making a list of interested and motivated members of teachers and staff who are willing to be active between Japan and Finland. From the list the receiving university can choose the ones that they will find interesting.

We prefer annual staff exchanges to both directions. The number of internationally oriented people is still very small and should be increased at least in Helsinki. We need a special program for the internationalization of the teachers and staff.

Now visits abroad will usually last one or two weeks. Only intensive courses can be taught in such a short time. Teaching could also be a part of some common regular courses like English, mathematics, physics, etc. or subjects of technology of different fields. Future will bring longer periods of stay for the teachers and staff.

Common R&D projects between Japanese and Finnish counterparts should be one of the most important goals for the future. It will give better opportunities for applying outside money for instance from EU (European Union) or from national sources.

Surrounding industrial companies should be more closely integrated into the R&D as well as into the study programs and internationalization. Not only the students but also the teachers and staff (together with the students) should have the opportunity for the internship in domestic and foreign industries.

HMUAS is now under a heavy transformation process as are all the other UASs of Finland. There will be new legislation for UASs in power from the beginning of 2014. This will cause many dramatic changes in curriculums and study programs.

Students will have more flexibility in selecting the programs as well as in changing from a selected program to another. New legislation effects in many different ways on the studies as well as on opportunities for demanding and fruitful international co-operation.

How could we successfully teach technology and related subjects in the future? More than 10 years of co-operation between Sendai and Helsinki has shown that we can find the answers and best practices together!

Congratulations for the 50th Anniversary!



高専教育に期待する事

仙台高等専門学校 産学連携振興会 会長
大崎 博之

昨今の日本の置かれた状況を鑑み、「高専では、今後、こういう教育にも重点を置いて頂けると大変有難い」と考えていることを述べます。

弊社の場合、高専を卒業した新卒の従業員が配属される先は、「製造」や「研究開発」は少なく、ほとんどの人が、「製造技術」、「生産技術」、「商品開発～設計」業務に就きます。ここで要求される基礎学力は、機械設計（計算も含む）や回路設計、材料設計、ソフトウェア作成といった実践的なものであり、かつ即戦力となることが期待されています。大学での教育は、学問化された技術に重きが置かれているため、このような実践的な業務は、高専出身の方が得意であることが多く、重宝されてきました。高度成長期からバブルの時代にかけては、日本の工業界では上記のような業務が大半を占め、したがって、高専出身者は、活躍を続けてきました。

しかしながら、韓国や中国の技術が格段に進歩してきており、これまでのように、「精度が良い」「品質が良い」という匠的な考えや技術だけでは、当然、敵わず、やはり先端技術で彼らを引き離していく必要があります。したがって、企業における技術活動は、より「研究開発」側にシフトしていく傾向にあります。そのなかで、高専の卒業生がどうやって、その存在感を高めていくかが課題となります。都合

の良いことを言わせてもらおうと、実践技術における即戦力の力は維持しながら、「研究開発」に携われる“素養”を身に付けて入社して欲しいということです。

私は、これまで、学卒や修士卒の部下と接してきて、「研究開発」における業務遂行能力が高いか低いかを決めているのは、出身大学の偏差値でも、学生時代に身に付けた知識でもなく、むしろ、「どの先生の研究室で、卒論や修論を指導されてきたか」によるところが非常に大きいと感じています。学生時代に、第一線で活躍している教授や准教授の背中を見つつ、厳しい指導を受けながら、研究を遂行して完遂するプロセスを一通り経験することは、極めて重要で、入社後も、常に“必然的に”業務を遂行することができ、「研究開発」業務においても即戦力となります。したがって、最近、高専でもそういう動きがあると聞いていますが、現在よりも、もう少し「卒業研究」に重点を置き、「問題発生時には、次はどう進めれば良いかを自分で考えたうえで、先生に指導してもらい、常に“必然的な”進め方ができるような状態」で入社してもらえることを、時間の関係で難しいとは知りながらも、期待して止みません。



仙台高等専門学校とともに

仙台市立広瀬中学校校長
佐藤 正道

このたびは、高等専門学校制度が創設50周年という記念すべき節目を迎えましたことを、心よりお慶び申し上げます。本校も今年度で開校67周年を迎えますから、仙台高等専門学校とはその前身の仙台電波工業高等専門学校がこの土地に移転されてから40年来のおつきあいとなります。この学区は広瀬川に沿って細長く、南に蕃山、東に青葉山、遠く西に蔵王・船形山の峰々、北に泉ヶ岳を望む風光明媚な地域であり、自然環境に恵まれている地域です。この自然豊かな地域で仙台高等専門学校が日本の科学技術の発展に大きく寄与されてきたことは、科学技術の発展と自然との調和を図っていくうえでも、とても意味深いものがあるものと考えております。

同じ土地に住み、ともに将来の日本を担う若者を教育する立場にあり、これまでも仙台高専とはたくさん交流活動を行ってきました。最近では、本校に仙台高専の教職員を招いて行われる「出前授業」や本校生徒が仙台高専に出向いて専門的な授業を体験するなどの活動を行っております。

中学生の学習では、実際に間近で見て、触れて、

体験するという活動がとても大切であり、生徒の意欲を駆り立てる最善の方法と実感しております。しかしながら理系の分野では施設・設備で難しい面があり、仙台高専と交流が持てる本校は、恵まれている環境と言えます。今後も交流活動を通して、中学校で身に付けた探究心が卒業後の進路でさらに高められ、より豊かな人間形成につながっていくことを願っております。

広瀬中学校は、学校周辺の開発が急ピッチに進み、住宅も多くなり、今年度生徒数が1,000名を超えることになりました。ここしばらくは生徒数は上昇し続ける見込みです。活気あふれるよい学校ですが、生徒数の増加とともにこれまで行ってきた交流活動の実施が難しくなるなど、マイナス面もあります。今後とも両校の連携を深め、交流の方法を工夫していきながら、生徒にとって豊かで貴重な体験・環境を確保していきたいと考えております。

最後になりましたが、仙台高等専門学校が今後ますます発展することを心よりお祈りし、お祝いの言葉といたします。



専門性が輝く仙台高専へ寄せる期待

名取市立第二中学校校長
木島美智子

この度、高専制度創設50周年を迎えられましたこと、心からお慶び申し上げます。「仙台高専」は、2009（平成21）年に「旧宮城高専」と「旧仙台電波高専」の高度化・再編により新しく生まれ変わりました。そして、それぞれの高専がこれまでに培ってきた技術と英知の融合によりさらに高度に複合化した産業界の中で研究開発を担う優れた人材の輩出を行って、現在に至っていることは、すばらしく敬服するところです。

さて、仙台高専は、のどかな水田を隔てて本校の東部に位置しており、本校の卒業生および在校生にとってたいへんに身近にある高専です。また、他の高等学校と同様に活動の様子が見える親近感あふれる高専となっています。そのために、中学校卒業後の進路選択としては、専門性を活かして選択する学校の代表として高専があげられます。毎年、具体的な目標をもって選択をしている生徒が多く、目標実現のためにひたむきに努力をする生徒も多いと感じております。そのような高専制度50年の歴史の中で将来への高い意識と明確な目標をもって進路選択を

する学生の姿とそれを支えるたくさんの教職員の皆様の熱い思いが、巣立って行った教え子も含めて諸先輩たちの社会での輝かしい活躍や研究・実践、貢献へと脈々とつながっているのだと思います。

仙台高専が近年、高専としての理念を太い柱としてしっかり掲げながらも社会環境や教育の置かれている状況に柔軟に対応していることや学生への支援体制が充実していることは、学校説明会や学校案内、「愛島通信」などでも強調されておりました。このことは、広い視野から学生の立場に立って考えられていることであり、次のステップとしての大学進学や将来の職業選択までを見通しており、心強いことです。中学校から目指す進路先としても今まで以上に魅力が広がっています。今後も仙台高専の専門性が光り輝く取り組みや活動に注目・期待しながら学生を送り出す中学校としても十分に連携を図って生徒の進路の実現を目指したいと考えております。

結びとなりますが、仙台高等専門学校のますますの発展を祈念申し上げます。



次世代の技術者に望むこと

第7代宮城工業高等専門学校校長
四ツ柳隆夫

皆さんが生涯を通して技術者として生き甲斐をもって働き、そこに喜びを見出して社会に貢献できる姿こそ、皆さんの希望であり、期待される技術者像です。

そのためには、年を経ても古くならない、自由自在に使いこなせる知的技法の修得が必須です。知っている、分かっている、だけではダメです。「常識が邪魔をする」、「もの知りは、発明することが少ない」という事態を招きます。この頃、しきりにイノベーションという、経済学者シューペンターが資本主義立て直しを目指して提案した考え方が持ち出されます。新しい結合・組み合わせから新しい産業をつくる、別な角度から見ると、従来の常識を打ち破って新しい常識を創り出す方法です。だから既存の常識が抵抗し、邪魔をするわけです。新しい組み合わせを創るには、要素情報の本質が分かっていなければ、それを自由に使えません。この時、すっかり忘れても良いくらいのレベルで知恵としてしっかりと身につける経験を積むことが必須です。これがアンラーニングです。直訳は「学習棄却」ですが、大江健三郎はこれを「学びほぐす」と訳しています。名人に定石なし。定石の心を極めていれば、場面に応じて定石を外し、最善手を打てることをいいます。

複数の要素情報を組み合わせるとき、各要素情報を座標軸と考える方法は有力です。複数の情報は次元の違う世界を生みます。さらに、異分野の仲間と

チームを組む時、3人寄れば文殊の知恵、3時限情報空間を生むことさえ可能です。知恵となった知識の根幹は、分野によりますが、例えば物質とエネルギーと情報が重要な領域では、熱力学、力学、数学などの、いわば確立された大工道具です。

そのうえで、この先に予測される次の三つのステージで、生涯学習を継続し常に最前線にある技術者として、希望の持てる将来展望を準備したいものです。

- ①近未来の国際的な熾烈な大競争時代における人類愛をもった技術者。資源・環境の制約と、少子高齢化問題が迫りつつある状況のなかでのイノベーターとしての活躍。
- ②在校生の皆さん達が社会の中軸となる20～30年後（30代後半からの10年）頃、持続可能な定常化社会を構築するニーズのなかで知恵を持った技術者としての活躍。
- ③さらにその先、人類活動が地球の限界を超えてしまった40年後、各地のローカルな社会において総合的にバランスの取れた暮らしの安定に寄与する技術者。

技術者は、どのような状況においても社会の福祉に貢献する問題を発見しそれを解決するエキスパートであるべきです。ここに技術者として生きる喜びがあります。

パネルディスカッション 「仙台高専のこれまでと将来展望」

パネリスト

四ツ柳隆夫（元宮城高専校長、元国立高等専門学校協会会長）

阿部 清人（仙台高専参与・元仙台高専後援会会長）

湯澤 哲雄（㈱ジー・イー・エス代表取締役社長、仙台高専産学連携振興会副会長）

佐々木 勇（地域支援企業みんなの大川倶楽部㈱代表、仙台高専同窓会前会長）

佐野 文香（専攻科生産システムデザイン工学専攻2年生）

遠藤 靖典（専攻科情報電子システム工学専攻2年生）

司 会

内海 康雄（副校長 名取キャンパス総務担当）





四ツ柳隆夫氏

大きな転換点となった独法化

司会

このパネルディスカッションは高専制度50周年に当たり、過去・現在を卒業生、学生、教員の皆さんで振り返りながら、未来を考えていこうというものです。最初に、設立当初から独立行政法人（独法）化までの様子などをお聞かせください。

湯澤哲雄氏

名取キャンパスのラグビー部の諸君は私のことをよく知っていると思います。利府でオートメーションの機械を設計・製造している会社の代表をしています。50人ぐらいの社員の3分の1が高専の卒業生です。私は5回生で、1回生と1年間一緒に過ごしました。高専が全学年揃った年です。宮城高専は二期校で、1回生は競争率も17～18倍と大変な秀才の集まりでした。20歳の大先輩、今も一緒ですが、わずか16歳の新入生が影響を受けないはずがない。

当時の社会的背景は、我々がベビーブーマーで高度成長期であり、学生運動が非常に盛んで社会が揺れ動いていた時代でした。電卓やワープロ、ましてやパソコンもなく、卒研も手計算でやっていました。CADもないから、T定規でレント紙に描いた時代。

先輩たちが異常に輝いて見えた。



阿部清人氏

5年制一貫教育という初めての試みに選ばれて入った精神の高揚があった。先生たちも高校生とは一線を画する教育をしましたし、5歳も違う学生を扱う戸惑いもあったと思います。中学を出たばかりの子どもが、大人のように扱われた記憶があります。経済的な理由で高専を選んだ学生も多く、地方の優秀な子どもが集まっていた。大学受験の苦勞をしないで5年間学校生活を送れたのは、私にとって非常に大きなアドバンテージになったと思います。

卒業後7年目に独立し今年34年目ですが、それぞれの会社で出会う高専卒業生はみんなすごく優秀だと思います。卒業生同士の連帯感も、5年制一貫教育の特殊性だと思います。

佐々木勇氏

生まれたのは1954（昭和29）年、世界初の原子力潜水艦ノーチラス号が就航した年です。1972年、オイルショックの前年に向山に校舎があった電波高校を22期生として卒業し、当時ユニバックという名前の日本ユニシスにハードウェアのエンジニアとして入りました。30歳で独立し、自動車のアフターマーケット向けのIT企業を創業し、3年前に退任しました。実家が石巻で、現在は震災復興のためのITの人材研修、地元の商材の開拓や岩沼の被災工業団地の再生の研究会を立ち上げています。



湯澤哲雄氏

広瀬キャンパス総支部の同窓会名は松韻寮にちなんで松韻会です。4階建ての立派な寮でした。校舎は女子師範学校などの経緯があり扉が高い木造キャンパスで、楽しく育ちました。私が3年生の時に1年生が高専生として入ってきました。仙台高専同窓会に統合もさせていただき、たいへん楽しく活動させていただいています。

四ツ柳隆夫氏

私が北大時代に非常勤講師として苦小牧高専の1期生を教える機会がありました。北大の3年生よりよくできるんです。秋田高専も皆さん非常に優秀。東北大の時にNASAの研究員が「先生方、よく創造性創造性とおっしゃるけど、大学生になってからじゃ遅い」と言いました。私が高専に来た最大の動機は、創造性教育ができる高専のお手伝いができればということです。準学士課程、その上の専攻科まで一直線に創造性を持ったエンジニアを育てる体系を持つ我が国唯一の学校種であるという利点を、これからも大切にしなければならぬと思います。

学士レベルのエンジニア育成としては日本最強の機関だと思います。ただ当時の大きな問題は、高等教育機関と言われながら法律に明記されてない奇妙な事態でした。そこで独法化の時に高専機構法に高等教育機



佐々木勇氏

関であることを謳うようお願いしました。「職業に必要な実践的かつ専門的な知識及び技術を有する創造的な人材を育成するとともに、我が国の高等教育の水準の向上と均衡ある発展を図ることを目的とする」。これが明記され、皆さま方は名実共に法律上高等教育機関の学生であることが明らかになった。これが独法化の一つの大きな変化です。

45時間の学習で1単位が国際的通念ですが、学習単位が30時間履修で1単位と高校と同じだったため勉強した単位が外国で認められない。これも改正して、両方選り分けて使えるように改正した。これも独法化の大きな変化でした。

法人化されると、三つの評価が表れます。一つは、大学評価学事授与機構による機関別認証評価で、教育組織の健全性と教育活動の質の確保・向上を目的とする、個人でなく学校教育機関としての審査です。JABEE（日本技術者教育認定機構）は技術者教育プログラムの認定評価で、学生個人の資格に反映される利点があり、修習技術者、技術士補の国家資格が手に入る。これは大きな変化でした。三番目は、高専機構への文科省による審査です。

阿部清人氏

湯澤社長さん、3分の1が高専の卒業生ということですが、どういっ



佐野文香氏

た能力を買って卒業生の入社が増えたのでしょうか。

湯澤哲雄氏

高専の卒業生は基礎的なことはきちんとしていて非常に優秀だと思います。

佐野文香氏

湯澤さん、高専生に対して、もっと求めるのであれば教えてください。

湯澤哲雄氏

私どもの技術のトップは東北大の物理出身で、機械のことをほとんど知らなかったんですが基本的な数学や物理は全部知っていた。専門も重要ですが基礎をきっちり身に付けてもらいたい。そのほうが社会で伸びるスピードがずっと速いと思います。

仙台高専発足に伴う後援会の在り方

司会

独法化後、両キャンパスの再編が起きました。そこから現在までの話をお伺いしたいと思います。

阿部清人氏

後援会の活動にご協力頂きまして感謝申し上げます。この50周年は高専制度を振り返り、未来を考えるととても大事な年だと思います。

後援会は学生の学習・文化・スポーツ活動、また教職員の研究・教育活



遠藤靖典氏

動の支援を目的としています。宮城高専と電波高専の再編では、両校の後援会の合併に向けて協議を続けましたが、予算のすり合わせが困難でした。宮城高専はスポーツが盛んで全国大会に団体競技がどんどん行く、仙台電波高専は学会の参加や留学などに力が置かれておりました。難題は会費が倍近く違い、広瀬側が値上げせざるを得ない状況で、後援会費以外で支払っていた保険の費用を後援会から支出するという裏技で、各世帯からの支出は同じということで、承認を取りました。両キャンパスの特徴を尊重して実情に合わせた運営で今日に至っています。

2004（平成26）年度まで1学年40名分の会員が毎年減り、5年間で640万円の予算が減っていますが、学生の数が減っても支出は減らないことに気がきました。大会や学会の参加人数は減らないし留学する学生も減らない、むしろ増える方向でした。基準を見直して運営しています。高専再編という日本で初めての取り組みですから前例に捉われずに適切に対処したいと思います。

遠藤靖典氏

山形県酒田市出身で、支えてくれた学校の仲間たちに恵まれたのが幸せでした。エンジニアを目指す学生が集まる環境だからと感じています。就職も決まり、企業から実力を

評価頂き、有名な大学や大学院の方々と一緒の場で競争できる力をくれた高専に感謝しています。

5年生の後期に海外インターンシップでタイのキングモンクット工科大学に行きました。高専や後援会のお陰で夢を達成でき、大変貴重な経験ができました。両キャンパスの連携を強くして、他キャンパスの授業を受けることができたり、各キャンパスの機械や図書間等を互いに活用できたりすれば、研究活動、部活、ロボコンなどの活性化にも繋がると思います。

四ツ柳隆夫氏

学生さんたちの意欲がありながら実現しない活動に対するバックアップの検討をお願いしたいと思います。

将来への思い

司会

全国の4つのスーパー高専で、仙台高専だけが同窓会が合体しており、同窓会から大きな支援を頂いていることをご紹介したいと思います。

次に「将来への思い」ということでお話いただければと思います。

四ツ柳隆夫氏

日本が元気になって生き延びるために何が必要か、「着想知恵の時代」と書きました。以前に比べて膨大な情報と物質を組み上げるためにいるのが着想です。着想は教えてもらえない。インテリジェンスとセンスが大事だがこれまた教えてもらえない。高専は腕と知能・技法、情報データのトレーニングは十分にやっていますが、着想は、実習とか演習の実体験で何とか身に付けてきた。

この上が、英語ではエデュケー

ション、日本語で「教育」と訳したのが明治の最大の誤訳の一つですけど、これは教えられない。教えられないことを教育するのは矛盾でしょ？ 科学的技と知恵はトレーニングできるが、この上は、やる気と使命感・倫理観で取り組まないとやれない。先生方の背中を見ながら学生が着想トレーニングを受けられる教育体系を組んでいただきたい。

準学士課程では、実は大学と比べると飛び級相当の教育体系が組み込まれている。大学でやることを準学士課程でやっている。専攻科は準学士課程で学んだものを使いこなして技術者の教育をやる。使うことで知識を知恵に変換するから、高専が最も強いエンジニアリングを養成している。かつこれは国家資格、国際資格に繋がるわけです。

私が校長時代、「愛島通信」に「忘れても良いくらいしっかり学べ」と。物知りは知識が邪魔して発明することが少ない。「知識は限られているが想像は世界を駆け巡る」というアインシュタインの言葉があります。知識よりも想像が大事だ。

マネジメントオブテクノロジーは重ね合わせて解を出すのではなく、

複数の選択肢を調べて新たな発見の时限へいくことです。同じ分野の人が集まっても一次元の直線にしかない。違う分野が2人集まれば二次元の面情報に広がり、違う人が3人集まれば三次元の情報空間ができる。2人、3人のなかで、今までにない異次元の空間を見つけることが、イノベーションとか着想の種になると思います。

阿部清人氏

私はアナウンサーです。コミュニティ放送という小さいラジオ局ですが、FMいずみで開局したのが13年前。今は情報伝達環境が変わっています。特に若い世代はメディアから離れて孤立化しています。災害情報で孤立するとまずい。8月から国会で法制化され、今年の夏から、記録的な被害が起きる時に、気象庁から特別警報で自治体に伝える。自治体から市民伝えるのはこれまで努力義務でしたが、義務化される。

自治体は色々な技術、例えば携帯電話、エリアメールで全員に情報（メール）がいくようなものも作っていて、仙台市では昨年からは始まっています。災害に強い情報発信、受信のシステム作りが急務で、エンジ



ニアを目指す皆さんも防災知識を身に付けてもらいたいと思います。

学生の時に研究レポートとか論文を書くと、これからの高齢化社会・国際化社会、高度情報化時代に備えてと必ず入れていた。30年前です。今、その時代が来ています。それに対しての備えは、今思えば十分ではなかったと思います。今までの枠組みでは生きていけない社会になっている。枠組みを外そうというのが国際社会です。国際化社会に対応する能力を身に付けるのは何も海外に行くことだけではない。日本に来る外国人とのコミュニケーションをどうやって図るか。言語だけではなく、背景にある文化も把握しておかないと、とんでもないことになります。

FMいずみで番組をやっているお笑い芸人サンドイッチマンは2人とも仙台出身で、有名になる前からちだけで番組をボランティアでやっていました。お笑いの仕事はなく、伊達さんは工事現場でアルバイト、富沢さんは駐車場でアルバイト。東京に行って9年目、M1グランプリで優勝して時の人になりました。

今日の市川先生の話、「準備をした人にはチャンスがやってくる」と



いう話が非常に印象的です。学生の皆さんも諦めずに将来の夢に向かって歩んで欲しいと思います。

湯澤哲雄氏

私の息子は2007年の卒業生ですが、私が入学を勧めました。中3の時に「親父、大学でないとどうしようもないよ」と言ったので私は息子に「勉強すれば大学以上の実力をつけて2年早く社会にエントリーできる。こんなすごいことはない」と言いました。中学生で進路を決めるのは早過ぎることは、私の時代から言われていました。私は専門の勉強は一夜漬けで、ほとんど本を読んで過ごしました。やりたいことに熱中して5年間を伸び伸びと過ごしているような学問に挑戦することで、画一された技術者ではなくてユニークなエンジニアを生み出せる。専門が赤点でも基礎が分ければ企業でいくらでも勉強できる。

私はラグビー部の創設メンバーです。5年間一貫して部活動を続けた学生は忍耐力や協調性を学んでおり企業は非常に評価する。何よりも大切なことは、5年間友だち作りができることです。

OB会活動は学生諸君に物心両面

で支援する。お金やコーチを出すと同時に、社会教育をすることがOB会の理念です。皆さんも卒業してから在校生の力になって欲しいと思います。

佐々木勇氏

同窓会の統合は、校風が違うので難しい状況でした。私は電波高校ですが、第二次世界大戦前に卒業された大先輩に「おい」と言われる立場です。最終的には「自分たちの後輩を迎え入れたいよね」と決めました。同窓会がそのままの場合、仙台高専の生徒さんを迎え入れられないわけです。未来永劫、学校と同窓会を続けるために統合しました。同窓会も微力ながら学生さん、学校のための支援活動を行っております。

私、石巻出身で現在石巻と岩沼と沿岸の被災跡地の復興支援活動をしています。ソーシャルビジネスを学ぶために東北芸工大で勉強中です。電波高校、仙台高専の卒業生ということにもものすごくメリットを感じます。IT技術、私自身はかなり古い技術ですが、利用する考え方は理解しているつもりです。ソーシャルなビジネスを立ち上げる場合も、やはりITの利活用は重要で、大学でもかなり評価をしてくださっております。

仙台高専へ、企業と地域を活用して頂きたいという提案があります。仙台高専の授業の密度やスキルはまったく素晴らしいと思いますが、もっと実践的な技術や考え方を身に付けること、特に専攻科生の方により社会とか地域と結び付いたビジネスを体験していただければと思います。インターンシップも1、2週間ではなく、半年とか企業体験す



内海康雄氏

る。そして、企業出身の先生方や卒業生をこれまで以上に講師として利用されたらと考えます。特に専攻科の方々には、企業とか地域、それぞれ町内会にでも入り込んで、ビジネスとか地域が求めているものを感じて、地域を豊かにする仕事やビジネス、研究をしていただければ素晴らしいと提案させていただきます。

佐野文香氏

四ツ柳先生や卒業生の方々のお話を伺えまして、歴史ある高専で学べたことを誇りに感じます。ただ、新しい高専としての歴史は浅く、もっと両キャンパスの交流が増えればと思っています。授業や、学生生活、部活動や学園祭、高専祭などで両キャンパスの交流をし、お互いのいいところを学び、新しい高専の歴史・校風を作れば素晴らしいと思います。

高専卒業後に半数は企業に就職し

ます。就職活動中に高専は技術があると高評価をいただきましたが、現在技術者は海外での仕事が求められますので、学生一人ひとりが英語を学んだり、海外の方ともコミュニケーション能力の向上等を自分自身で目指す姿勢も持つべきだと考えています。

遠藤靖典氏

高専は高度経済成長を担う人材を育成する機関としてできたけれど、技術者が海外に行くとか情勢は変わっており、高専をどう変えていくのか考える必要があると思います。

手を動かしてものを創れる高専生の強みを、もっと伸ばせればと思います。専攻科までいくと3年半研究でものを創る、これは大学の学士よりもすごいし、マスターの人と同等の研究をやっているわけで、自信を持てると思います。

一方で、技術以外のことをあまり知らない高専生の弱みはあると思います。5年の海外インターンシップでタイに派遣され、日本の紹介をしようと思った時に、実は日本の文化すら知らない自分に気付きました。だから、学外、ほかの大学での学習ももっと認められるといいと思います。

研究に専念しようと思うと、学位

をとる時の学位授与機能の手続や小論文試験などがあります。もっと研究に専念できるような環境にすればより高専生の強みが活かせると思います。

低学年でもロボコンとかプロコンなどには学内でも、学外でもできるので頑張ればよいと思っています。

特に統合してから後輩を見て、学生に対するルールや基準が厳しくなったと思います。湯澤さんの、5年間のびのび過ごすことが大事だという話がありました。学生が責任意識をもつ必要がありますが、先生方にもご理解をいただければと思います。私もOBの一人として協力したいと思います。

四ツ柳隆夫氏

後援会・同窓会がもう少し強力なバックアップができる体制を実現していただきたい。アメリカの超一流大学が一番誇りに思っているのは同窓会です。ハーバードとかMITは同窓会の強力なバックアップがあるから世界一流の活動ができる。皆さん方が卒業したら、「それなら俺たちが次の世代のために何かしてやろう」という気持ちを持っていただければ、両校の同窓会も強固になり、後輩もより広い活躍の機会を得ると思います。

私がいた東北大学でも、市川先生のように活躍されている研究室もあれば、学生が学会に行く旅費を出しにくい講座もあり、予算が二桁くらい違うのは現実です。大学も激烈な競争で培った何かがあることを頭の隅っこに入れ、今ここにいるメンバーで高専の力を付ける工夫をしていこうと思っていただきたいと思います。

先ほど広瀬と名取で気風と伝統が違うという話が出ましたが、これは私が考えた一番大きなメリットなんです。イノベーションは違うもの同士が集まって初めて達成できる。違いを利点に替える工夫をしてください。

地域の力を発信

遠藤靖典氏

地域との結びつきが大事という佐々木さんの話がありました。ただ、私が進むIT業界は東京に集中している現実があります。社会も、地域に仕事をあげることをしていただけますと、地元で働くことができるようになるので、先輩方の力をお借りしたいと思います。

佐々木勇氏

東北の企業も頑張っていますが、もっと知恵と体力を付けなくてはならない。東北は悪く言えば下請け的企業がまだまだ多い。1990年代以降、自分でものを造って値段を付けて売りに行く時代になってきたので、これから少しずつ良くなるのかな。

司会

地域イノベーションセンターが広瀬と名取にあって、法人会員が127社で東北大を除けば宮城県内で最大です。その会社の方が講師でやってきて水耕栽培実習などをやっており、NHKで紹介されていました。もっと進めていきたいと思っています。

ここで会場からのご意見ご質問等あればどうぞ。

質疑応答（会場）

（省略）

司会

市川先生、コメント等いただければありがたいです。



市川隆教授

（東北大学大学院理学研究科天文学専攻）

学生さんの意識が非常に高く、外国にも目を向けてらっしゃるし、社会にもするどい目を向けてらっしゃる。非常に感心しました。私も実は高専出身の学生を世話しました。高専の生徒さんを積極的に受け入れていますので、ぜひ来てください。

四ツ柳先生の話のなかで、エデュケーションのなかで知性と感性は教えられないという話があって、それは着想を生むわけですが、皆さんにその知性や感性を磨く環境を提供することをすごく意識して大切にしています。

先ほど私、皆さんに目標を持って欲しいと言いました。自分に何が合っているかは、自分の回りにある環境をいろいろ試して欲しい。「先生のところはつまらないから辞める」と言ってもぜんぜん構わない。そう考えますので、皆さんも学校でいろいろなチャンスを活かして欲しいと思います。

司会

そろそろまとめのほうに入りたいと思います。設立当初5年制の新しい学校体制ということで、多感な時

期を過ごされ、社会的にはいろんなことが起きた時期で大変だったと思います。その後専攻科が設置されて、国際的な標準による単位のあり方の整備、学校の認証評価、資格制度としてJABEE、それを経ながら独法化したあと両キャンパスが一緒になったわけです。互いの文化の違いがイノベーションを起こすいい意味で働くとともに、両キャンパスの共通性もやはり必要でしょう。学生の皆さんから、海外に目を向けたりいろんなことをしたいけれど、そういった場所の提供とかの要望をいただきました。

これらのことを踏まえ、授業・クラブ、会場からの質問で進学など、同窓会・後援会、地域と企業などの支援がないとだめなんですね。着想とか創造性について四ツ柳先生からお話をいただきました。自ら考えて努力して、市川先生のお話のように、諦めずにどんどんやっていくと運がチャンスに、そういう話がありました。

50年の節目としては、パネリストの皆さんと会場の皆さまのお陰でたいへんいい話し合いができたと思います。

資料編

1. 歴代役職者名簿

① 宮城工業高等専門学校

1 校長

黒川利雄	昭38.4.1
鈴木廉三九	昭38.4.2～昭51.4.1
河上房義	昭51.4.1～昭58.4.1
山口格	昭58.4.1～平元.331
矢澤彬	平元.4.1～平7.331
斉藤正三郎	平7.4.2～平12.331
四ッ柳隆夫	平12.4.2～平19.331
宮城光信	平19.4.1～平21.930

2 名誉教授

八巻壽亮	昭53.4.1
酒井昇	昭62.4.1
水谷敏	昭63.4.1
山口格	平元.4.1
古市慶一郎	平2.4.1
廣野周一	平2.4.1
小枝昌造	平4.4.1
石井浩	平5.4.1
伊藤繁巳	平5.4.1
斉藤克己	平6.4.1
早坂高則	平6.4.1
山田哲男	平6.4.1
矢澤彬	平7.4.1
早坂茂	平7.4.1
有川晉	平8.4.1
鈴木昭逸	平8.4.1
木村茂	平9.4.1
桑原隆夫	平9.4.1
渡辺宏	平10.4.1
阿部邦利	平12.316
千葉胤昭	平12.327
斉藤正三郎	平12.4.1
岡田将彦	平12.4.1
大泉智壽	平14.4.1
小野堯之	平15.4.1
坂本政祀	平15.4.1
山田哲義	平15.4.1
百瀬丘	平17.4.1
丹野浩一	平17.4.1
庄司彰	平18.4.1
唐澤信司	平18.4.1
四ッ柳隆夫	平19.4.1
松浦眞	平19.4.1
池田千里	平19.4.1
佐々木愨彦	平20.4.1
澁谷純一	平20.4.1
田口收	平20.4.1
吉田光彦	平21.4.1

③ 副校長・主事

・副校長(総務担当)

丹野 顯	平19.4.1～平21.930
------	-----------------

・教務主事

相田良次	昭38.4.2～昭47.331
遊佐周逸	昭47.4.1～昭61.331
有川 晉	昭61.4.1～平4.331
小野堯之	平4.4.1～平8.331
庄司 彰	平8.4.1～平10.331
丹野浩一	平10.4.1～平13.331
池田千里	平13.4.1～平18.331
丹野 顯	平18.4.1～平19.331
石山純一	平19.4.1～平21.930

・学生主事

梅沢伊勢三	昭38.4.1～昭48.331
酒井昇	昭48.4.1～昭60.331
斉藤克己	昭60.4.1～平元.331
池田千里	平元.4.1～平5.331
庄司 彰	平5.4.1～平8.331
丹野浩一	平8.4.1～平10.331
丹野 顯	平10.4.1～平15.331
千葉元信	平15.4.1～平17.331
飯田清志	平17.4.1～平21.331
佐々木典彦	平21.4.1～平21.930

・寮務主事

酒井 昇 (学内発令)	昭40.4.1～昭48.331
古市慶一郎 (学内発令)	昭48.4.1～昭49.410
古市慶一郎	昭49.411～昭57.331
有川 晉	昭57.4.1～昭60.331
山田哲男	昭60.4.1～平2.331
鈴木昭逸	平2.4.1～平6.331
岡田将彦	平6.4.1～平10.331
笠松富二夫	平10.4.1～平14.331
石山純一	平14.4.1～平16.331
千葉正昭	平16.4.1～平18.331
飯藤将之	平18.4.1～平20.331
伊藤昌彦	平20.4.1～平21.930

・副校長(研究・産学連携担当)

丹野浩一	平16.4.1～平17.331
内海康雄	平17.4.1～平21.930

・副校長(企画担当)

庄司 彰	平16.4.1～平18.331
池田千里	平18.4.1～平19.331

・図書館主事

梅沢伊勢三	昭48.4.1～昭51.331
高橋 崇	昭51.4.1～昭56.331
木丈繁夫	昭56.4.1～昭59.331
石井 浩	昭59.4.1～平3.331
早坂高則	平3.4.1～平6.331
桑原孝夫	平6.4.1～平7.331
唐澤信司	平7.4.1～平11.331
松浦 眞	平11.4.1～平12.331

・図書館長

(平成12年4月1日 図書館長に名称変更)

松浦 眞	平12.4.1～平15.331
花熊克友	平15.4.1～平17.331
鯨井千佐登	平17.4.1～平19.331
佐藤安功	平19.4.1～平21.331
丹野 顯	平21.4.1～平21.930

4 学科主任・学科長

・一般科目文科系主任

(平成7年4月1日 総合科学系文科に名称変更)

梅沢伊勢三	昭40.4.1～昭48.331
高橋 崇	昭48.4.1～昭54.331
斉藤克己	昭54.4.1～昭60.331
古市慶一郎	昭60.4.1～昭63.331
早坂高則	昭63.4.1～平3.331
岡田将彦	平3.4.1～平6.331
鈴木昭逸	平6.4.1～平7.331

・総合科学系文科主任

鯨井千佐登	平7.4.1～平9.331
千葉元信	平9.4.1～平13.331
鯨井千佐登	平13.4.1～平15.331
平間哲雄	平15.4.1～平19.331

・総合科学系文科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

千葉正昭	平19.4.1～平21.331
武田 淳	平21.4.1～平21.930

・一般科目理数系主任

(平成7年4月1日 総合科学系理数科に名称変更)

八巻壽亮	昭40.4.1～昭53.331
千葉靖男	昭53.4.1～昭55.331
斎藤貞夫	昭55.4.1～昭59.331
早坂茂	昭59.4.1～平2.331
小野堯之	平2.4.1～平4.331
早坂茂	平4.4.1～平6.331
松浦 眞 (兼務)	平6.4.1～平7.331

・総合科学系理数科主任

松浦 眞	平7.4.1～平10.331
佐藤健太郎	平10.4.1～平12.331
生田信之	平12.4.1～平14.331
高村 潔	平14.4.1～平16.331

石山純一	平16.4.1～平18.331
生田信之	平18.4.1～平19.331

・総合科学系理数科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

生田信之	平19.4.1～平20.331
徳能 康	平20.4.1～平21.930

・基礎専門科目主任

(平成7年4月1日 総合科学系理数科に統合)

渡辺 宏	昭58.4.1～平3.331
松浦 眞	平3.4.1～平7.331

・機械工学科主任

相田良次	昭39.4.1～昭46.331
菅原 昇	昭46.4.1～昭48.331
妻木義彦	昭48.4.1～昭51.331
廣野周一	昭51.4.1～昭54.331
妻木義彦	昭54.4.1～昭56.331
吉田郁郎	昭56.4.1～昭62.331
廣野周一	昭62.4.1～平元.331
庄司 彰	平元.4.1～平5.331
木村 茂	平5.4.1～平7.331
大泉智壽	平7.4.1～平8.331
丹野 顯	平8.4.1～平10.331
松谷 保	平10.4.1～平16.331
丹野 顯	平16.4.1～平18.331
折田寛彦	平18.4.1～平19.331

・機械工学科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

折田寛彦	平19.4.1～平20.331
松谷 保	平20.4.1～平21.930

・電気工学科主任

近藤 務	昭39.4.1～昭47.331
坂水 弘	昭47.4.1～昭49.331
水谷 敏	昭49.4.1～昭59.331
小枝昌造	昭59.4.1～昭63.331
八木正昭	昭63.4.1～平4.331
唐澤信司	平4.4.1～平6.331
千葉胤昭	平6.4.1～平10.331
佐々木愨彦	平10.4.1～平12.331
百瀬 丘	平12.4.1～平17.331
佐々木典彦	平17.4.1～平19.331

・電気工学科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

佐々木典彦	平19.4.1～平21.930
-------	-----------------

・建築学科主任

木丈繁夫	昭39.4.1～昭56.331
千葉茂男	昭56.4.1～平3.331
山田哲男	平3.4.1～平5.331
本間敏行	平5.4.1～平9.331
澁谷純一	平9.4.1～平11.331
内海康雄	平11.4.1～平15.331

青木恭介	平15.4.1～平16.331
伊藤憲雄	平16.4.1～平19.331

・建築学科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

青木恭介	平19.4.1～平20.331
飯藤将之	平20.4.1～平21.930

・材料工学科(金属工学科)主任

昭61.4.1改組

中村三郎	昭43.4.1～昭51.331
阿部照衛	昭51.4.1～昭61.331
坂本政祀	昭61.4.1～昭62.331
桑原孝夫	昭62.4.1～平元.331
坂本政祀	平元.4.1～平3.331
丹野浩一	平3.4.1～平5.331
池田千里	平5.4.1～平7.331
桑原孝夫	平7.4.1～平8.331
田口 收	平8.4.1～平10.331
坂本政祀	平10.4.1～平12.331
吉田光彦	平12.4.1～平14.331
田口 收	平14.4.1～平16.331
吉田光彦	平16.4.1～平18.331
鈴木吉朗	平18.4.1～平19.331

・材料工学科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

鈴木吉朗	平19.4.1～平20.331
柴田公博	平20.4.1～平21.930

・情報デザイン学科主任

有川 晉	平5.4.1～平7.331
青木恭介	平7.4.1～平11.1121
山田哲義	平11.1122～平14.331
櫻井 宏	平14.4.1～平16.331
遠藤 昇	平16.4.1～平18.331
西村正夫	平18.4.1～平19.331

・情報デザイン学科長

(平成19年4月1日 学科長に名称変更)

西村正夫	平19.4.1～平21.331
遠藤 昇	平21.4.1～平21.930

5 専攻科長・専攻主任・専攻長

・専攻科長

庄司 彰	平10.4.1～平16.331
櫻井 宏	平16.4.1～平21.930

・生産システム工学専攻主任

松谷 保	平10.4.1～平15.331
鈴木勝彦	平15.4.1～平17.331
田口 收	平17.4.1～平18.331
鈴木勝彦	平18.4.1～平19.331

生産システム工学専攻長 <p>(平成19年4月1日 専攻長に名称変更)</p>	
鈴木勝彦	平19.4.1～平20.3.31
中村富雄	平20.4.1～

建築・情報デザイン学専攻主任	
内海康雄	平10.4.1～平11.11.21
青木恭介	平11.11.22～平16.3.31
西村正夫	平16.4.1～平17.3.31
鈴木勝彦	平17.4.1～平18.3.31
澁谷純一	平18.4.1～平19.3.31

建築・情報デザイン学専攻長 <p>(平成19年4月1日 専攻長に名称変更)</p>	
澁谷純一	平19.4.1～平20.3.31
鈴木勝彦	平20.4.1～平21.9.30

6 センター・学内施設等長

地域共同テクノセンター長	
丹野浩一	平12.5.10～平17.3.31
内海康雄	平17.4.1～平21.9.30

創造教育センター長 <p>(平成19年4月1日 創造教育センター長に名称変更)</p>	
大久忠義	平19.4.1～

電子計算機室長	
小枝昌造	昭47.4.1～昭59.3.31
渡辺宏	昭59.4.1～昭63.3.31
佐藤次男	昭63.4.1～平6.3.31
丹野顯	平6.4.1～平17.3.31
北島宏之	平17.4.1～平21.9.30

電子顕微鏡室長	
菊田貞雄	昭49.12.25～昭57.3.31
坂本政祀	昭57.4.1～昭60.3.31

(廃止)

教育研究技術支援室長	
丹野顯	平15.4.1～平18.3.31
石山純一	平18.4.1～平19.3.31
吉田光彦	平19.4.1～平21.3.31
石山純一	平21.4.1～平21.9.30

実習工場長	
吉田郁郎	昭55.4.1～昭56.3.31
妻木義彦	昭56.4.1～昭58.3.31
廣野周一	昭58.4.1～昭61.3.31
渡辺敬二郎	昭61.4.1～昭63.3.31
廣野周一	昭63.4.1～平元.3.31
赤澤真	平元.4.1～平3.3.31
木村茂	平3.4.1～平5.3.31
赤澤真	平5.4.1～平15.3.31
大久忠義	平15.4.1～平19.3.31

学生相談室長	
伊狩弘	平7.4.1～平9.3.31
大泉智壽	平9.4.1～平11.3.31
鯨井千佐登	平11.4.1～平19.3.31
松谷保	平19.4.1～平成21.9.30

7 事務長・事務部長

事務長	
柿崎孝司	昭38.4.1～昭41.3.31

事務部長	
(取)柿崎孝司	昭41.4.1～昭42.3.31
菊池萬作	昭42.4.1～昭46.3.31
田城正一	昭46.4.1～昭48.3.31
鈴木信	昭48.4.1～昭51.3.31
杉本敏夫	昭51.4.1～昭54.3.31
今村光男	昭54.4.1～昭56.11.30
遠藤次男	昭56.12.1～昭60.3.31
笹原義雄	昭60.4.1～昭62.3.31
嘉田景藏	昭62.4.1～昭63.11.30
國井和朗	昭63.12.1～平4.3.31
宮澤謙	平4.4.1～平7.3.31
阿部純	平7.4.1～平8.10.15
新田三智也	平8.10.16～平12.9.30
川上四郎	平12.10.1～平15.3.31
下田勝	平15.4.1～平17.3.31
山崎良治	平17.4.1～平19.3.31

② 仙台電波工業高等専門学校

1 校長

角川正	昭46.4.1～昭49.12.21
平原榮治	昭50.4.3～昭58.3.31
高橋正	昭58.4.3～平2.3.31
山田竹實	平2.4.1～平9.3.31
渡辺英夫	平9.4.1～平17.3.31
宮城光信	平17.4.2～平21.9.30

2 名誉教授

高橋正	平2.8.16
梅津英彦	平2.8.16
中川一郎	平3.5.27
横田慎一	平8.4.1
山田竹實	平9.4.1
古谷恒雄	平10.4.1
長島富太郎	平12.4.1
宮城篤	平13.4.1
中林撰	平15.4.1
竹内登志男	平15.4.1
根岸幸康	平16.4.1
三浦幹雄	平16.4.1
渡辺英夫	平17.4.1
細川幸也	平17.4.1
今野眞	平19.4.1
浅見誠治	平19.4.1
服部正行	平19.4.1
福島正忠	平19.4.1
鹿股昭雄	平20.4.1
熊谷正純	平21.4.1

3 副校長・主事

副校長(総務担当)	
加藤靖	平19.4.1～平21.9.30

教務主事	
川村武治	昭46.4.1～昭47.3.31
鈴木省吾	昭47.4.1～昭51.3.31
羽賀三雄	昭51.4.1～昭54.3.31
内海武雄	昭54.4.1～昭55.3.31
大林久人	昭55.4.1～昭60.3.31
山田竹實	昭60.4.1～平2.3.31
渡辺英夫	平2.4.1～平9.3.31
竹内登志男	平9.4.1～平11.3.31
根岸幸康	平11.4.1～平15.3.31
山崎守一	平15.4.1～平16.3.31
今野眞	平16.4.1～平17.3.31
加藤靖	平17.4.1～平19.3.31
逢坂雄美	平19.4.1～平21.9.30

学生主事	
佐藤万亀夫	昭46.4.1～昭47.3.31
川村武治	昭47.4.1～昭48.3.31

横田慎一	昭48.4.1～昭51.3.31
梅津英彦	昭51.4.1～昭54.3.31
村山雅夫	昭54.4.1～昭55.3.31
佐藤万亀夫	昭55.4.1～昭57.3.31
梅津英彦	昭57.4.1～平2.3.31
宮城篤	平2.4.1～平4.3.31
石井孝治	平4.4.1～平7.3.31
細川幸也	平7.4.1～平9.3.31
山崎守一	平9.4.1～平11.3.31
今野眞	平11.4.1～平13.3.31
細川幸也	平13.4.1～平15.3.31
名久井孝義	平15.4.1～平17.3.31
佐藤敏行	平17.4.1～平19.3.31
佐藤公男	平19.4.1～平21.9.30

寮務主事	
柴山正男	昭49.4.1～昭51.3.31
松石安雄	昭51.4.1～昭55.3.31
佐藤勉	昭55.4.1～昭61.3.31
佐藤弘	昭61.4.1～平4.3.31
山川昇	平4.4.1～平6.3.31
三浦幹雄	平6.4.1～平8.3.31
中林撰	平8.4.1～平12.3.31
浅見誠治	平12.4.1～平16.3.31
小野寺重文	平16.4.1～平18.3.31

寮務主事・副校長(寮務担当) <p>(平成17年4月1日)</p>	
高橋薫	平18.4.1～平20.3.31
野田泰久	平20.4.1～平21.9.30

副校長(研究担当)	
服部正行	平17.9.13～平19.3.31
羽賀浩一	平19.4.1～平21.9.30

図書館主事	
嶋原哲	昭49.4.1～昭51.3.31
佐藤万亀雄	昭51.4.1～昭55.3.31
伊藤徹也	昭55.4.1～昭61.3.31
渡辺英夫	昭61.4.1～昭63.3.31
長島富太郎	昭63.4.1～平4.3.31
富田恒司	平4.4.1～平6.3.31
吉田公雄	平6.4.1～平8.3.31
安原富士子	平8.4.1～平10.3.31
福島正忠	平10.4.1～平12.3.31

図書館長 <p>(平成12年4月1日 図書館長に名称変更)</p>	
逢坂雄美	平12.4.1～平14.3.31
佐藤公男	平14.4.1～平16.3.31
馬場一隆	平16.4.1～平18.3.31
今住英子	平18.4.1～平19.3.31
加藤靖	平19.4.1～平21.9.30

4 学科長・学科主任	
教養系列主任	
梅津英彦	昭50.4.1～昭51.3.31
荒武志	昭51.4.1～昭53.3.31
柴山正男	昭53.4.1～昭57.3.31
神館義朗	昭57.4.1～昭61.3.31
横田慎一	昭61.4.1～平8.3.31
西岡嬉尚	平8.4.1～平10.3.31
吉田公雄	平10.4.1～平12.3.31
山川昇	平12.4.1～平16.3.31

総合科学科主任 <p>(平成16年4月1日 総合科学科に名称変更)</p>	
逢坂雄美	平16.4.1～平18.3.31

総合科学科長 <p>(平成18年4月1日 学科長に名称変更)</p>	
逢坂雄美	平18.4.1～平21.9.30

電波通信学科主任 <p>(平成元年4月1日)</p>	
内海武雄	昭50.4.1～昭55.3.31
中川一郎	昭55.4.1～昭59.3.31
安田嘉之	昭59.4.1～平元.3.31

情報通信工学科主任 <p>(平成元年4月1日)</p>	
五十嵐隆	平元.4.1～平7.3.31
古谷恒雄	平7.4.1～平9.3.31
根岸幸康	平9.4.1～平11.3.31
三浦幹雄	平11.4.1～平15.3.31
野田泰久	平15.4.1～平18.3.31

情報通信工学科長 <p>(平成18年4月1日 学科長に名称変更)</p>	
野田泰久	平18.4.1～平19.3.31
藤木なほみ	平19.4.1～平21.9.30

電子工学科主任	
長島富太郎	昭52.4.1～昭63.3.31
渡辺英夫	昭63.4.1～平3.3.31
竹内登志男	平3.4.1～平9.3.31
小野寺重文	平9.4.1～平13.3.31
熊谷正純	平13.4.1～平17.3.31
羽賀浩一	平17.4.1～平18.3.31

電子工学科長 <p>(平成18年4月1日 学科長に名称変更)</p>	
羽賀浩一	平18.4.1～平19.3.31
小野寺重文	平19.4.1～平21.9.30

電子制御工学科主任	
中川一郎	昭60.4.1～平3.3.31
久保田收	平3.4.1～平7.3.31
富田恒司	平7.4.1～平8.3.31
服部正行	平8.4.1～平12.3.31

福島正忠	平12.4.1～平16.3.31
海野啓明	平16.4.1～平18.3.31

電子制御工学科長 <p>(平成18年4月1日 学科長に名称変更)</p>	
海野啓明	平18.4.1～平21.9.30

情報工学科主任	
山田竹實	昭53.4.1～昭60.3.31
大林久人	昭60.4.1～平元.3.31
山田竹實	平元.4.1～平3.3.31
伏見清和	平3.4.1～平9.3.31
鹿股昭雄	平9.4.1～平13.3.31
小畑征二郎	平13.4.1～平15.3.31
加藤靖	平15.4.1～平17.3.31
佐藤公男	平17.4.1～平18.3.31

情報工学科長 <p>(平成18年4月1日 学科長に名称変更)</p>	
佐藤公男	平18.4.1～平19.3.31
脇山俊一郎	平19.4.1～平21.9.30

5 専攻科長・専攻主任・専攻長

専攻科長	
鹿股昭雄	平17.4.1～平18.3.31
熊谷正純	平18.4.1～平20.3.31
竹茂求	平20.4.1～平21.9.30

電子システム工学専攻主任	
渡辺英夫	平5.4.1～平7.3.31
長島富太郎	平7.4.1～平11.3.31
竹内登志男	平11.4.1～平15.3.31
服部正行	平15.4.1～平17.3.31
熊谷正純	平17.4.1～平18.3.31

電子システム工学専攻長 <p>(平成18年4月1日 専攻長に名称変更)</p>	
熊谷正純	平18.4.1～平19.6.1

情報システム工学専攻主任	
渡辺英夫	平5.4.1～平6.3.31
清水芳雄	平6.4.1～平10.3.31
加藤靖	平10.4.1～平14.3.31
鹿股昭雄	平14.4.1～平17.3.31

情報システム工学専攻長 <p>(平成18年4月1日 専攻長に名称変更)</p>	
竹茂求	平18.4.1～平19.6.10

6 センター・学内施設長等

地域テクノセンター長	
服部正行	平17.9.13～平19.3.31
羽賀浩一	平19.4.1～平21.9.30

• 電子計算機室長	
山田竹實	昭52.4.1～平2.331
金森吉成	平2.4.1～平3.331
五十嵐隆	平3.4.1～平8.331
小畑征二郎	平8.4.1～平9.331

• 情報技術室長	
小畑征二郎	平9.4.1～平13.331
野田泰久	平13.4.1～平15.331
高橋薫	平15.4.1～平18.331
脇山俊一郎	平18.4.1～平21.930

• 実験実習試作室長	
久保田　　收	昭63.4.1～平7.331
大泉哲哉	平7.4.1～平13.331
服部正行	平13.4.1～平19.331
大泉哲哉	平19.4.1～平21.930

• 電子デバイス試作室長	
竹内登志男	平3.4.1～平9.331
浅見誠治	平9.4.1～平12.331
工藤正昭	平12.4.1～平15.331
羽賀浩一	平15.4.1～平17.331
浅見誠治	平17.4.1～平19.331
馬場一隆	平19.4.1～平21.930

• 技術開発研究センター長	
竹内登志男	平7.4.1～平9.331
鹿股昭雄	平9.4.1～平13.331
三浦幹雄	平13.4.1～平15.331
福島正忠	平15.4.1～平17.331
服部正行	平17.4.1～平17.912

• 学生相談室長	
今野　　真	平10.4.1～平11.331
安原富士子	平11.4.1～平13.331
山崎守一	平13.4.1～平15.331
藤木なほみ	平15.4.1～平17.331
今野　　真	平17.4.1～平19.331
野田泰久	平19.4.1～平21.930

7 事務長・事務部長

• 事務長	
信岡芳久	昭34.1.10～昭48.4.1
斉藤善次	昭48.4.1～昭49.331

• 事務部長	
斉藤善次	昭49.4.1～昭52.331
井上英世	昭52.4.1～昭55.331
篠岡修治	昭55.4.1～昭58.430
早坂恒造	昭58.5.1～昭60.331
門脇淳三	昭60.4.1～昭63.331
嶋　敏郎	昭63.4.1～平3.331
松坂　弘	平3.4.1～平5.331
増田良一	平5.4.1～平8.331

中島章三	平8.4.1～平11.331
柳田和美	平11.4.1～平13.331
山口洋志	平13.4.1～平15.331
只野孝孝	平15.4.1～平17.331
天内正光	平17.4.1～平19.331

• 宮城地区事務部長	
山崎良治	平19.4.1～平20.331
佐々木和彦	平20.4.1～平21.930

• 調整役	
天内正光	平19.4.1～平20.331

③ 仙台高等専門学校

（平成25年4月1日現在）

1 校長

宮城光信	平21.10.1～平22.331
内田龍男	平22.4.2～

2 名誉教授

宮城光信	平22.4.1
花熊克友	平22.4.1
千葉正昭	平23.4.1
生田信之	平23.4.1
高村　潔	平23.4.1
伊藤憲雄	平23.4.1
青木恭介	平23.4.1
本間敏行	平23.4.1
逢坂雄美	平23.4.1
野田泰久	平23.4.1
加藤　靖	平23.4.1
松谷　保	平24.4.1
柴田公博	平24.4.1
名久井孝義	平24.4.1
小野寺重文	平24.4.1
石山純一	平25.4.1
丹野　　顯	平25.4.1

3 副校長・主事

• 副校長(総務担当) (名取)	
丹野　　顯	平21.10.1～平25.331
内海康雄	平25.4.1～
(広瀬)	
加藤　　靖	平21.10.1～平23.331
竹茂　　求	平23.4.1～

• 教務主事・副校長(教務担当) (名取)	
石山純一	平21.10.1～平25.331
佐々木典彦	平25.4.1～
(広瀬)	
逢坂雄美	平21.10.1～平23.331
佐藤公男	平23.4.1～平25.331
馬場一隆	平25.4.1～

• 学生主事・副校長(学生担当) (名取)	
佐々木典彦	平21.10.1～平25.331
佐藤一志	平25.4.1～
(広瀬)	
佐藤公男	平21.10.1～平23.331
高橋　薫	平23.4.1～平25.331
佐藤公男	平25.4.1～

• 寮務主事・副校長(寮務担当) (名取)	
伊藤昌彦	平21.10.1～平25.331
武田　　淳	平25.4.1～

(広瀬)	
野田泰久	平21.10.1～平23.331
藤木　なほみ	平23.4.1～平25.331
久保田佳克	平25.4.1～

• 副校長(研究・産学連携担当) (名取)	
内海康雄	平21.10.1～平25.331
遠藤智明	平25.4.1～

(広瀬)	
羽賀浩一	平21.10.1～平25.331
林　　忠之	平25.4.1～

4 学科長

学科長 (名取)	
• 総合科学系文科長	
武田　　淳	平21.10.1～平23.331
佐藤安功	平23.4.1～平25.331
菅野洋行	平25.4.1～

• 総合科学系理数科長	
徳能　　康	平21.10.1～平23.331
鈴木勝彦	平23.4.1～

• 機械システム工学科長	
松谷　　保	平21.10.1～平23.331
佐藤一志	平23.4.1～平25.331
石川信幸	平25.4.1～

• 電気システム工学科長	
佐々木典彦	平21.10.1～平22.331
櫻庭　弘	平22.4.1～平25.331
中村富雄	平25.4.1～

• マテリアル環境工学科長	
柴田公博	平21.10.1～平22.331
鈴木吉朗	平22.4.1～平23.331
佐藤友章	平23.4.1～平25.331
浅田　格	平25.4.1～

• 建築デザイン学科長	
飯藤將之	平21.10.1～

(広瀬)	
• 総合科学系長	
逢坂雄美	平21.10.1～平23.331
福地和則	平23.4.1～

• 知能エレクトロニクス工学科長	
馬場一隆	平21.10.1～平25.331
那須潜思	平25.4.1～

• 情報システム工学科長	
高橋　　薫	平21.10.1～平23.331
竹島久志	平23.4.1～

• 情報ネットワーク工学科長	
脇山俊一郎	平21.10.1～

(旧)学科長 (名取)	
• 機械工学科長	
松谷　　保	平21.10.1～平23.331
佐藤一志	平23.4.1～平25.331
石川信幸	平25.4.1～

• 電気工学科長	
佐々木典彦	平21.10.1～平22.331
櫻庭　弘	平22.4.1～平25.331
中村富雄	平25.4.1～

• 建築学科長	
飯藤將之	平21.10.1～

• 材料工学科長	
柴田公博	平21.10.1～平22.331
鈴木吉朗	平22.4.1～平23.331
佐藤友章	平23.4.1～平25.331
浅田　格	平25.4.1～

• 情報デザイン学科長	
遠藤　　昇	平21.10.1～平22.331
本郷　　哲	平22.4.1～

(広瀬)	
• 総合科学科長	
逢坂雄美	平21.10.1～平23.331

• 情報通信工学科長	
藤木　なほみ	平21.10.1～

• 電子工学科長	
小野寺重文	平21.10.1～平23.331
竹島久志	平23.4.1～平24.331
那須潜思	平24.4.1～

• 電子制御工学科長	
海野啓明	平21.10.1～平22.331
大泉哲哉	平22.4.1～

• 情報工学科長	
脇山俊一郎	平21.10.1～

5 専攻科長・専攻長・コース長

• 専攻科長	
加藤　　靖	平21.10.1～平23.331
竹茂　　求	平23.4.1～

(名取)	
• 生産システムデザイン工学専攻長	
遠藤　　昇	平21.10.1～

• 生産システムデザイン工学専攻生産システム工学コース長	
渡邊陽一	平21.10.1～平24.331
石川信幸	平24.4.1～平25.331
武田光博	平25.4.1～

• 生産システムデザイン工学専攻建築デザイン学コース長	
飯藤將之	平21.10.1～平24.331
坂口大洋	平24.4.1～

• 生産システムデザイン工学専攻情報デザイン学コース長	
本郷　　哲	平21.10.1～

(広瀬)	
• 情報電子システム工学専攻長	
竹茂　　求	平21.10.1～平23.331
馬場一隆	平23.4.1～平25.331
白根　　崇	平25.4.1～

• 情報電子システム工学専攻情報電子システム工学コース長	
竹茂　　求	平21.10.1～平23.331
馬場一隆	平23.4.1～平25.331
白根　　崇	平25.4.1～

(旧)専攻科長 (名取)	
• 専攻科長	
櫻井　　宏	平21.10.1～平22.331
遠藤　　昇	平22.4.1～平23.331

• 生産システム工学専攻長	
中村富雄	平21.10.1～平23.331

• 建築・情報デザイン学専攻長	
鈴木勝彦	平21.10.1～平23.331

(広瀬)	
• 専攻科長	
竹茂　　求	平21.10.1～平23.331
馬場一隆	平23.4.1～平25.331
白根　　崇	平25.4.1～

2. 卒業生・修了生の進路状況

(平成20～24年度)

②就職先一覧

【平成20年度】宮城工業高等専門学校・仙台電波工業高等専門学校

就職先	専攻科課程		計
	宮城高専	電波高専	
会津オリバス(株)	1	1	2
(株)アイソリューションズ	1	1	2
曙ブレーキ工業(株)	1	1	2
旭化成(株)	1	2	3
(株)前日工業社	1	1	2
アルパイン技研(株)	1	1	2
アルバックテクノ(株)	1	1	2
アルプス電気(株)	1	2	3
アルプスシステムインテグレーション(株)	1	1	2
イー・アークセス(株)	1	1	2
(株)滝下設計	1	1	2
岩崎ダイカスト工業(株)	1	1	2
(株)JSC	1	1	2
(株)ND東北	1	1	2
NECインフラシステム東北(株)	1	1	2
(株)NEC情報システムズ	1	1	2
NECネットワークスアイ(株)	1	1	2
NECフィールドエンジニアリング(株)	1	1	2
(株)NHKアイテック	1	1	2
(株)NHKメディアテクノロジ	1	1	2
NSSLCサービス(株)	1	1	2
NOK(株)	1	1	2
(株)NTT-ME	1	1	2
NTTコミュニケーションズ(株)	1	1	2
NTTコムウェア東日本(株)	2	1	3
(株)NTTデータ	1	1	2
(株)NTTファシリティーズ	2	1	3
(株)NTTファシリティーズ東北	1	1	2
(株)Mテック	1	1	2
オムロン(株)	1	1	2
オムロンフィールドエンジニアリング(株)	1	1	2
花王(株)	2	1	3
キヤノン(株)	1	1	2
キヤノンシステムアンドサポート(株)	1	1	2
キヤノンマーケティングジャパン(株)	1	1	2
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	1	2
京セラミタ(株)	1	1	2
(株)協和エクシオ	1	1	2
(株)クロステレビ	1	1	2
(株)KDDIテクノロジエンジニアリングサービス	2	1	3
(株)ケー・ビ・エレクトロニクステクノロジ	1	1	2
コカエン지니어リング&テクノロジ(株)	1	1	2
国立印刷局	2	1	3
三菱重工業(株)高砂製作所	2	1	3
三菱重工業(株)名古屋航空宇宙システム製作所	2	1	3
三菱重工業(株)汎用機・特車事業本部	1	1	2
三菱電機ビルテクノサービス(株)	1	1	2
サンリツオートメーション(株)	1	1	2
(株)CRCシステムズ	1	1	2
(株)ジーイー・エス	1	1	2
(株)ジーテック	1	2	3
(株)ジーユーブ	1	1	2
(株)システムレーテ	1	1	2
システムセンセッツ(株)	1	1	2
シャープ(株)	1	1	2
ジャストテックス(株)	1	1	2
(株)JAL航空整備成田	1	1	2
新興プラントック(株)	2	1	3
新日本石油(株)中央技術研究所	1	1	2
住友林業ホームエンジニアリング(株)	1	1	2
セイコーインスツル(株)	1	1	2
積水ハウス(株)	1	1	2
セコム工業(株)	1	1	2
仙台市	1	1	2
(株)仙台ニコ	1	1	2
総合警備保障(株)	2	1	3
ソバル(株)	1	1	2
ソニー・エム・エス 木更津テック(株)	1	1	2
ソニー・エム・エス 東金テック(株)	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	4	2	6
ソニー・白石セミコンダクタ(株)	3	1	4
ソニー・デジタルネットワークアプリケーション(株)	1	1	2
ソニー・ファシリティマネジメント(株)	1	1	2
(株)ソルックス	1	1	2
ダイダン(株)	1	1	2
大日本印刷(株)	1	2	3
大和製菓(株)	1	1	2
(株)竹中工務店	1	1	2
(株)タマテック	1	1	2
(株)中央エンジニアリング	1	1	2
中部電力(株)	1	1	2
(株)TTK	1	1	2
電気興業(株)	1	1	2
東海旅客鉄道(株)	1	1	2

就職先	専攻科課程		計
	宮城高専	電波高専	
(株)東京R&D	1	1	2
東京エレクトロンAT(株)	1	1	2
東京電力(株)	1	1	2
東芝エレベータ(株)	1	2	3
東芝プロセスソフトウェア(株)	1	1	2
東芝三菱電機産業システム(株)	1	1	2
東北インテリジェント通信(株)	1	1	2
東北インフォメーションシステムズ(株)	1	1	2
東北大学電気通信研究所基礎技術センター	1	1	2
東北電力(株)	3	3	6
東北リコー(株)	1	1	2
東洋インキ製造(株)	1	1	2
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	1	2
東レ(株)	1	1	2
凸版印刷(株)	1	1	2
トミー(株)	1	1	2
トヨタ自動車東北(株)	1	1	2
(株)ニコ	1	1	2
日進工具(株)	1	1	2
日清紡績(株)中央研究所	1	1	2
日本海洋振興(株)	1	1	2
日本貨物鉄道(株)東北支社	1	1	2
(株)日本コンピュータコンサルタント	1	1	2
日本信号(株)	1	1	2
日本精工(株)	1	1	2
日本電算機販売(株)	1	1	2
ネクストウェア(株)	1	1	2
ネットワークサービスアンドテクノロジ(株)	1	1	2
ネットワークシステムズ(株)	1	1	2
パイオニアシステムテクノロジ(株)	1	2	3
(株)ハイマックス	1	1	2
パナソニック(株)	1	1	2
パナソニックITS(株)	2	2	4
東日本旅客鉄道(株)	1	1	2
日立アプライアンス(株)	1	1	2
(株)日立カーエンジニアリング	1	1	2
(株)日立製作所	1	1	2
(株)日立ハイテクフィールドエンジニアリング	1	1	2
(株)日立ビルシステム	1	1	2
キヤノン(株)	1	1	2
日野自動車(株)	2	1	3
福島キヤノン(株)	2	1	3
富士通(株)	1	1	2
(株)フジミック	1	1	2
(株)フロードリーフ	1	1	2
北海道旅客鉄道(株)	1	1	2
本田技研工業(株)	2	1	3
松下電産(株)パナソニックAVCネットワークス社	2	1	3
医療法人松田会	1	1	2
国立印刷局	2	1	3
三菱重工業(株)高砂製作所	2	1	3
三菱重工業(株)名古屋航空宇宙システム製作所	2	1	3
三菱重工業(株)汎用機・特車事業本部	1	1	2
三菱電機ビルテクノサービス(株)	1	1	2
サンリツオートメーション(株)	1	1	2
(株)CRCシステムズ	1	1	2
(株)ジーイー・エス	1	1	2
(株)ジーテック	1	2	3
(株)ジーユーブ	1	1	2
(株)システムレーテ	1	1	2
システムセンセッツ(株)	1	1	2
シャープ(株)	1	1	2
ジャストテックス(株)	1	1	2
(株)JAL航空整備成田	1	1	2
新興プラントック(株)	2	1	3
新日本石油(株)中央技術研究所	1	1	2
住友林業ホームエンジニアリング(株)	1	1	2
セイコーインスツル(株)	1	1	2
積水ハウス(株)	1	1	2
セコム工業(株)	1	1	2
仙台市	1	1	2
(株)仙台ニコ	1	1	2
総合警備保障(株)	2	1	3
ソバル(株)	1	1	2
ソニー・エム・エス 木更津テック(株)	1	1	2
ソニー・エム・エス 東金テック(株)	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	4	2	6
ソニー・白石セミコンダクタ(株)	3	1	4
ソニー・デジタルネットワークアプリケーション(株)	1	1	2
ソニー・ファシリティマネジメント(株)	1	1	2
(株)ソルックス	1	1	2
ダイダン(株)	1	1	2
大日本印刷(株)	1	2	3
大和製菓(株)	1	1	2
(株)竹中工務店	1	1	2
(株)タマテック	1	1	2
(株)中央エンジニアリング	1	1	2
中部電力(株)	1	1	2
(株)TTK	1	1	2
電気興業(株)	1	1	2
東海旅客鉄道(株)	1	1	2

【平成21年度】仙台高等専門学校

就職先	専攻科課程		計
	専攻科	専攻科	
(株)アート・システム	1	1	2
(株)H-回転機	1	1	2
(株)あいホーム	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	1	1	2
ソニー・エナジーデバイス(株)	4	2	6
ソニー・白石セミコンダクタ(株)	3	1	4
ソニー・デジタルネットワークアプリケーション(株)	1	1	2
ソニー・ファシリティマネジメント(株)	1	1	2
(株)ソルックス	1	1	2
ダイダン(株)	1	1	2
大日本印刷(株)	1	2	3
大和製菓(株)	1	1	2
(株)竹中工務店	1	1	2
(株)タマテック	1	1	2
(株)中央エンジニアリング	1	1	2
中部電力(株)	1	1	2
(株)TTK	1	1	2
電気興業(株)	1	1	2
東海旅客鉄道(株)	1	1	2

就職先	専攻科課程		計
	専攻科	専攻科	
エヌ・ティ・ティ コミュニケーションズ(株)	1	2	3
NTTコムウェア東日本(株)	1	1	2
(株)NTTデータフロンティア	1	1	2
(株)NTTデータ	1	1	2
(株)NTTファシリティーズ	2	1	3
(株)エフ・エフ・ソル	1	1	2
オークマ(株)	1	1	2
(株)沖電気カスターマドテック	1	1	2
オムロンフィールドエンジニアリング(株)	1	1	2
花王(株)	1	1	2
キヤノン(株)	1	1	2
キヤノン・コンポーネツツ(株)	1	1	2
キヤノンシステムアンドサポート(株)	1	1	2
京セラコミュニケーションシステム(株)	2	1	3
(株)協和エクシオ	1	1	2
(株)きんでん	1	1	2
ケイテック(株)	1	1	2
(株)KDDIテクノロジエンジニアリングサービス	1	1	2
(株)ケーヒン	1	1	2
(株)ケーヒンエレクトロニクステクノロジ	1	1	2
国立印刷局	1	1	2
コニカミノルタビジネスソリューションズ(株)	1	1	2
(株)小松製作所	1	1	2
COM電子開発(株)	1	1	2
五洋建設(株)	1	1	2
富久工業(株)	1	1	2
(株)サイタスマネジメント	1	1	2
佐藤工業(株)	1	1	2
三建設工業(株)	1	1	2
(株)三晃空調	1	1	2
サンリツホールディングス(株)	1	1	2
(株)ハイマックス	1	1	2
J S R(株)	1	1	2
(株)ジェイ・ケイ・ネット	1	1	2
(株)塩見設計	1	1	2
シャープ(株)	1	1	2
(株)ジャストテックス(株)	1	1	2
(株)JALアビテック	1	1	2
ジョンソンコントロールズ(株)	3	1	4
新日本石油精製(株)川崎製造所	1	1	2
シヨウ(株)	1	1	2
住友ベークライト(株)	1	1	2
セコム工業(株)	1	1	2
仙建工業(株)	1	1	2
総合警備保障(株)	1	1	2
ソニー・エム・エス エンジンサービス(株)	4	1	5
(株)ソルクシーズ	1	1	2
(株)ソルクコム	1	1	2
ダイキン工業(株)	1	1	2
ダイダン(株)	1	1	2
大日本印刷(株)	1	1	2
太平電業(株)	1	1	2
大和製菓(株)	1	1	2
高砂熱工業(株)	1	1	2
高研精工(株)	1	1	2
(株)アルファシステムズ	1	1	2
(株)竹中工務店	1	1	2
(株)アルメックス	2	1	3
出光興産(株)	1	1	2
(株)岩手朝日テレビ	1	1	2
(株)ウィッツ	1	1	2
NECネットワークスアイ(株)	1	1	2
NECフィールドエンジニアリング(株)	2	2	4
(株)NHKアイテック	1	1	2
(株)NHKメディアテクノロジ	1	1	2
NOK(株)	1	1	2
(株)NTT-ME	1	2	3
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ(株)	1	1	2
エヌ・ティ・ティ・コムウェア東日本(株)	1	1	2
(株)エンジニアリング&サービス	1	1	2
大同技研(株)	1	1	2
大阪ガス(株)	1	1	2
(株)大林組	1	1	2
オリバス(株)	1	1	2
海上保安学校	2	1	3
開発電子技術(株)	1	1	2
(株)感動ハウス	1	1	2
キヤノン・コンポーネツツ(株)	1	1	2
キヤノンシステムアンドサポート(株)	1	1	2
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	1	2
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	1	2
戸田建設(株)	1	1	2
トヨタ自動車(株)	1	1	2
(株)トヨタプロダクションエンジニアリング	1	1	2
(株)ニコ	1	1	2
日進工具(株)	1	1	2
日信ソフトエンジニアリング(株)	1	1	2
日本物流(株)	1	1	2
日鐵住金建材(株)	1	1	2
(株)NIPPONコーポレーション	1	1	2
日本オーチス・エレベータ(株)	1	1	2
(株)日本システムアプリケーション	1	1	2
日本電算機販売(株)	1	1	2

就職先	専攻科課程		計
	専攻科	専攻科	
日本電子(株)	1	1	2
日本ビゾー(株)	1	1	2
任天堂(株)	1	1	2
ネットワークサービスアンドテクノロジ(株)	1	1	2
(株)ハイマックス	1	1	2
パナソニックコンサルタンツ(株)東北支社	1	1	2
パナソニック(株)AVCネットワークス社	1	1	2
パナソニック(株)	1	1	2
パナソニックEVエナジー(株)	1	1	2
パナソニックEVエナジー(株)	1	1	2
(株)パナソニックモバイル開発研究所	1	1	2
(株)原田伸嗣所	1	1	2
(株)半導体エネルギー研究所	1	1	2
東日本旅客鉄道(株)	1	1	2
日立NSソフトウェア(株)	1	1	2
(株)日立アドバンスデジタル	1	1	2
日立アプライアンス(株)	2	1	3
(株)日立エンジニアリングアンドサービス	1	1	2
日立化成工業(株)	1	1	2
日立交通テクノロジ(株)	1	1	2
(株)日立情報制御ソリューションズ	1	1	2
(株)日立情報通信エンジニアリング	1	1	2
日立ソフトウェアエンジニアリング(株)	1	1	2
(株)日立東日本ソリューションズ	1	1	2
福島県警察事務	1	1	2
富士ゼロックス東京(株)	1	1	2
富士通(株)	1	1	2
(株)富士通エフサス	1	1	2
(株)富士通システムソリューションズ	1	1	2
富士通ネットワークソリューションズ(株)	1	1	2
(株)富士通ビー・エス・シー	1	1	2
(株)富士通ソリューションリテラルシステムズ	1	1	2
フジテック(株)	1	1	2
(株)フューチャテック	1	1	2
(株)放送衛星システム	1	1	2
本田技研工業(株)	1	1	2
マクセルファインテック(株)	2	1	3
松井建設(株)	1	1	2
三菱重工業(株)	1	1	2
三菱重工交通機器エンジニアリング	1	1	2
三菱重工(株)名古屋航空宇宙システム製作所	1	1	2
(有)ムーブ	1	1	2
明治乳業(株)東北工場	1	1	2
森永乳業(株)福島工場	1	1	2
ヤマセ電気(

就職先	専攻科課程			計
	通C	広C	広C	
ソニー白石セミコンダクタ(株)	2			2
ダイキン工業(株)	2	1		3
大日本印刷(株)			1	1
(株)太平エンジニアリング			1	1
有限会社高橋鉄鋼設備	1			1
タカハツプレシジョン(株)	1			1
(株)竹中工務店			1	1
田中土建工業(株)	1			1
チェスト(株)		1		1
中部電力(株)	1	2		3
通研電気工業(株)			1	1
月島食品工業(株)	1			1
(株)椿本チエイン	1	1		2
(株)ティーン・エス・シー	1			1
(株)TTK	1			1
(株)デザインネットワーク	1			1
(株)寺田電機製作所	1			1
電源開発(株)	1			1
東海旅客鉄道(株)	3			3
東京レトロ宮城(株)	1			1
(株)東芝	1			1
東芝ITサービス(株)	1			1
東芝エレベーター(株)	1			1
東豊ゼネラル石油(株)	2			2
東北インテリジェント通信(株)	1	1		2
東北インフォメーションシステムズ(株)			1	1
(株)東北システムズ・サポート	1			1
東北セキスイハイム工業(株)	1			1
東北地区国立大学大学等職員			1	1
東北電機製造(株)		1		1
東北電力(株)	3	2		5
東北リコー(株)			1	1
東洋インキ製造(株)	1			1
ドコモエンジニアリング東北(株)	1			1
戸田建設(株)	1			1
(株)登米村田製作所			1	1
(株)トヨタロダクションエンジニアリング			1	1
日産エンジニアリング(株)	1			1
日進工具(株)	1			1
日清紡ブレーキ(株)	1			1
日鐵住金建材(株)	1			1
日本アトミス加工(株)	1			1
日本海洋事業(株)			1	1
日本貨物鉄道(株)			1	1
(株)日本陸運	1			1
日本信号(株)	1			1
日本電算機販売(株)	1			1
日本電子(株)		1		2
日本電設工業(株)		2		3
日本ハム食品(株)	1			1
日本ビソ(株)	1			1
日本放送協会	1			1
日本リーテック(株)		1		1
ネットワークシステムズ(株)			1	1
バイオアシストシステムテクノロジー(株)	1	1		2
(株)ハイロトコーポレーション	1			1
(株)間組	1			1
パナソニック(株)AVCネットワークス社	1			1
Parasonic System Networks Malaysia Sdn Bhd	1			1
(株)原田伸興所	1			1
(株)PFU	2			2
東日本旅客鉄道(株)	3	1		5
(株)日立アドバンスシステムズ	1			1
(株)日立国際電気サービス	1			1
日立コンシューママーケティング(株)	1			1
(株)日立産機システム	1			1
(株)日立情報システムズ	1			1
日立情報通信エンジニアリング(株)			1	1
(株)日立ハイテクフィニッシング	1			1
(株)日立日本ソリューションズ	1			1
(株)日立ビルシステム	1			1
日立フィールドアンドファンリサービス(株)			1	1
(株)ビッツ	1			1
(株)フォーラムエンジニアリング	1			1
福島工業高等専門学校(技術職員)			1	1
福島製鋼(株)	1	1		2
富士重工業(株)			1	1
富士ダイス(株)	1			1
富士通(株)	1		1	2
(株)富士通マーケティング	1			1
富士電機ホールディングス(株)	1			1
プライムアースEVエナジー(株)	1			1
古河電池(株)	1			1
(株)ポイント	1			1
本田技研工業(株)	1			1
前田道路(株)	1			1
(株)牧機製作所			1	1
マクセルファインテック(株)	2			2
(株)三越伊勢丹ビルマネジメント			1	1
三菱ガス化学(株)	1			1
三菱電機ビルテクノサービス(株)	2	1		3
宮城県	1	1		3
ムラテックCSS(株)	1			1
Meiji Seka ファルマ(株)	1			1
(株)モリタ製作所			1	1
(株)ヤクルト本社福島工場	1			1
矢崎総業(株)	1	1		2
安川エンジニアリング(株)	1	1		2
大和町	1			1
(株)有電社	1			1
横浜市	2			2
(株)リーブルテック			2	2

就職先	専攻科課程			計
	通C	広C	広C	
(株)リコー	1			1
(株)ワンバク	1			1
	95	84	28	24
			24	231

【平成24年度】仙台高等専門学校

就職先	専攻科課程			計
	通C	広C	広C	
(株)IHI	1			1
アイシーコム(株)	1			1
(株)IDCフロンティア	1			1
アイリスオーヤマ(株)	1	1		3
曙ブレーキ工業(株)	1	1		2
曙化成(株)			3	4
(株)アサヒ建築設計事務所	1			1
アップフロンティア(株)	1			1
(株)アドバンテストシステムズ			1	1
(株)アドマックス	1			1
ANAフライトラインテクノクス(株)	1			1
(株)アルウィン	1			1
アルプス電気(株)	1			1
(株)アルメックス	1	1		2
(株)イーテクノ	1			1
イートス(株)	1			1
出光エンジニアリング(株)			1	1
出光興産(株)	5			5
(株)エイアンドティー		1	1	2
NECネットエスアイ(株)		1	1	2
NECフィールディング(株)		1	1	3
(株)NHKアイ・テック			1	1
(株)エヌエスシー		1		1
(株)NSD		1		1
(株)エヌケー製作所		1		1
(株)NTT-ME	4	1		5
NTTコミュニケーションズ(株)	1		1	2
(株)NTTドコモ	1			1
(株)NTTIPCCコミュニケーションズ	1			1
(株)NTTファシリティーズ東北	1	1		2
オークマ(株)	1			1
(株)大林組	1			1
織本構造設計(株)			1	1
花王(株)	3			3
河川ライティングソリューションズ(株)	1			1
川重明石エンジニアリング(株)	1			1
川田工業(株)	1			1
(株)カンセツ	1			1
神田通信機(株)	1	1		2
キャノン(株)	2			2
キャノンシステムアンドサポート(株)	2			2
キャノンファインテック(株)	1			1
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	1		2
京セラシステムソリューションズ(株)	1			1
(株)クラレ鹿島事業所			1	1
ケイテック(株)	1			1
KCCSモバイルエンジニアリング(株)	1			1
KDDIエンジニアリング(株)	1			1
(株)ケーヒン			1	1
(株)ケーヒンエレクトロニクステクノロジー	1			1
国立印刷局	1			1
コスモシステム(株)	1			1
(株)サイエンティア	1			1
サンリツオートメーション(株)	1	1		2
サンワテコム(株)	1			1
(株)ジー・イー・エス			1	1
ジーク(株)	1			1
CTCシステムサービス(株)	1			1
JSR(株)	1			1
JX日鉱日石エネルギー(株)中央技術研究所	1			1
JX日鉱日石金属(株)	1			1
清水建設(株)	1			1
ジャパンケーブルネット(株)	1			1
昭和アルミニウム缶(株)			1	1
ジョンソンコントロールズ(株)			1	1
新日本テクノカーボン(株)	1			1
三菱冷熱工業(株)	1			1
住友電設(株)			1	1
セイコーエプソン(株)	1			1
センコン物流(株)	1			1
千住金属工業(株)	1			1
仙台市			1	1
(株)仙台ニコン			2	2
(株)ソーリンク			1	1
ダイキン工業(株)	2			2
(株)大伴社	2			2
大東建設(株)	1			1
大日本印刷(株)			1	1
大和製鐵(株)			1	1
大和ハウス工業(株)	1			1
仙台市立 寺岡中学校			1	1
(株)竹中工務店	1	1		2
TANAKAホールディングス(株)	1			1
中部電力(株)		3		3
通研電気工業(株)			1	1
(株)椿本チエイン	1			1
(株)TTK	2			2
(株)テクノプロ・エンジニアリング			1	1
(株)テクノマインド	1			1
(株)デジタルトラスト	1			1
(株)テレコム	1			1

就職先	専攻科課程			計
	通C	広C	広C	
(株)デンロコーポレーション	1			1
(株)東栄住宅	1			1
東海旅客鉄道(株)				1
(株)東京R&Dビューズ			1	1
東京エレクトロニック宮城(株)	1			2
東京ネオン電気(株)	1			1
東芝エレベーター(株)	1			1
(株)東芝社会インフラシステムズ	1			1
東芝ディー・エム・エス(株)	1			1
東社シーテック(株)	1			1
東豊化学合同会社			1	1
東豊ゼネラル石油(株)	5			6
東北インテリジェント通信(株)		1		1
(株)東北共立			1	1
東北交通機械(株)	1	2		3
東北大学金属材料研究所			1	1
東北電力(株)	2	1		4
東北リコー(株)			2	2
栗(株)	1			1
TOTOエンジニアリング(株)	1			1
(株)トヨタコミュニケーションシステム	2	1		3
トヨタ自動車東日本(株)	2			2
(株)西島製作所			1	1
日進工具(株)	1	1		2
日信ソフトエンジニアリング(株)	1	1		2
(株)日テレアックスオン	1			1
(株)NPPO	1			1
日本ハム食品(株)	1			1
日本アトミス加工(株)	1	1		2
日本食物鉄道(株)	1			1
日本自動車(株)	1			1
日本車輜製造(株)	1			1
日本精工(株)	1	1		2
日本車球(株)	1			1
日本テクノカルシステム(株)東北営業所	1			1
日本電設工業(株)	1	1		3
日本ビルコン(株)東北支社	1			1
日本放送協会	1			1
日本リーテック(株)	1			1
バイオアシストシステムテクノロジー(株)	1	1		2
(株)パイロットコーポレーション	1			1
(株)間組	1			1
パナソニックシステムネットワークス(株)	1		1	2
パナストライド(株)	1			1
P&Gジャパン(株)高崎工場	1			1
東日本旅客鉄道(株)			1	1
日立建機(株)	1			1
日立情報通信エンジニアリング(株)			1	1
(株)日立東日本ソリューションズ			1	1
(株)日立ビルシステム	2	1		3
(株)ビッツ	1			1
(株)VSN	1			1
福島ゴム(株)	2			2
富士重工業(株)	1	1		3
富士ゼロックス(株)			1	1
富士ダイス(株)	1			1
富士通(株)	1	1		3
富士通ネットワークソリューションズ(株)	1	1		2
(株)富士通システムソリューションズ			1	1
富士電機(株)	1			1
富士フィルムデジタルテクノ(株)	1			1
富士河合E&C(株)	1			1
フジモールド工業(株)	1			1
プラチナゲームズ(株)	1			1
北海道電力(株)	1			1
(株)前川製作所	1	1		2
(株)松田会	1			1
三菱重工環境・化学エンジニアリング(株)	1			1
三菱電機インフォメーションテクノロジー(株)	1			1
三菱電機システムサービス(株)	1			1
三菱電機ビルテクノサービス(株)	2	1		3
三菱電機プラントエンジニアリング(株)	1			1
宮城県	1	1		2
Meiji Seka ファルマ(株)	1			1
(株)明電舎	1	1		2
メタウォーター(株)		2		2
矢崎総業(株)	2			2
(株)ユアテック	1			1
(株)ユーメディア	1			1
(株)横河ブリッジホールディングス	1			1
(株)リーブルテック	1	1		2
(株)レッドパロン			1	1
レンゴ(株)	1			1
浦谷町	1			1
	104	94	31	20
			20	249

3. 入学者数 (中学校別)

地区	出身中学校	仙台高専				
		H22	H23	H24	H25	
仙台市	仙台市立 第一中学校	3	2	1	2	
	仙台市立 第二中学校	2	1	3	1	
	仙台市立 三栄中学校	2	2	2		
	仙台市立 五橋中学校		2	6	5	
	仙台市立 上杉山中学校	2	2	2	1	
	仙台市立 五城中学校	2	3	1	1	
	仙台市立 台原中学校	2	5	6	5	
	仙台市立 北仙台中学校	1	1	1	2	
	仙台市立 桜丘中学校	1	2	2		
	仙台市立 中山中学校	3	3	2	4	
	仙台市立 吉成中学校			1	1	
	仙台市立 南吉成中学校	2	1	1		
	仙台市立 折立中学校	2	1	1	3	
	仙台市立 広瀬中学校	4	6	5	12	
	仙台市立 大沢中学校	4	3	4	2	
	仙台市立 広陵中学校	2			1	
	宮城教育大学附属中学校	3	2	3		
	宮城学院中学校	1	1			
	高綱学院中学校			1		
	青葉区	仙台市立 宮城野中学校	2	1	4	4
		仙台市立 東華中学校	3	1		1
		仙台市立 幸町中学校	3	4	1	2
		仙台市立 東仙台中学校			1	2
		仙台市立 西山中学校			1	2
		仙台市立 鶴谷中学校		2		1
		仙台市立 岩切中学校	2			2
		仙台市立 田子中学校	2		2	1
		仙台市立 中野中学校	7	3	4	6
		仙台市立 高砂中学校	1			1
		若林区	仙台市立 八軒中学校			7
		仙台市立 南小泉中学校		4	5	2
		仙台市立 蒲町中学校	1	4		4
		仙台市立 沖野中学校		4	3	3
		仙台市立 六郷中学校		1	4	2
	仙台市立					

地 区	出身中学校	仙台高専			
		H22	H23	H24	H25
栗原市	栗原市立 栗駒中学校		1		
登米市	登米市立 佐沼中学校	2		1	1
	登米市立 中田中学校	1			
	登米市立 南方中学校			1	
	登米市立 豊里中学校		4	1	
	登米市立 新田中学校	1			
東松島市	東松島市立 矢本第一中学校	2		1	1
	東松島市立 矢本第二中学校		1		1
石巻市・牡鹿郡	石巻市立 石巻中学校	2	1		
	石巻市立 門脇中学校	1		3	
	石巻市立 住吉中学校		1		1
	石巻市立 山下中学校	1	3	1	
	石巻市立 青葉中学校	1			
	石巻市立 蛇田中学校		2	1	
	石巻市立 渡波中学校			1	
	石巻市立 福井中学校			1	
	石巻市立 河北中学校	1	1		1
	石巻市立 大川中学校	1			
	石巻市立 雄勝中学校			1	
	石巻市立 桃生中学校	1		1	1
	女川町立 女川第二中学校	1			
	気仙沼市・本吉郡	南三陸町立 志津川中学校			1
気仙沼市立 鹿折中学校		1			2
気仙沼市立 新月中学校					1
気仙沼市立 津谷中学校			1		1
気仙沼市立 唐桑中学校			1		
福島市	福島市立 福島第一中学校	2			
	福島市立 福島第二中学校	1	1		1
	福島市立 福島第三中学校	1	2	2	1
	福島市立 福島第四中学校			2	
	福島市立 岳陽中学校		1		1
	福島市立 渡利中学校			2	1
	福島市立 清水中学校	2	1	1	1
	福島市立 野田中学校				1
	福島市立 信陵中学校		2	4	2
	福島市立 北信中学校	2	1	3	
	福島市立 信夫中学校	1	1		1
	福島市立 吾妻中学校			4	1
	福島市立 松陵中学校	1	1		
	福島市立 飯野中学校		1		
	福島市立 大鳥中学校			1	
	福島市立 西根中学校	1		1	
	福島大学附属中学校	1	1		2
伊達市・伊達郡	伊達市立 伊達中学校			1	1
	伊達市立 桃陵中学校	1			1
	伊達市立 松陽中学校	1			
	伊達市立 梁川中学校		1	1	
	伊達市立 雲山中学校		1		
桑折町立 藤芳中学校		1	1		
相馬市・相馬郡	新地町立 尚英中学校	2	1	2	
	飯館村立 飯館中学校		1		
	相馬市立 中村第一中学校	4	4	3	2
	相馬市立 中村第二中学校	6			1
	相馬市立 向陽中学校	4	1	5	4
	相馬市立 磯部中学校	1		1	
南相馬市	南相馬市立 原町第一中学校	2	1		
	南相馬市立 原町第二中学校		1		1
	南相馬市立 原町第三中学校	2	4	1	1
	南相馬市立 石神中学校		2	1	
	南相馬市立 鹿島中学校	1	1	1	
	南相馬市立 小高中学校		2		
その他福島県	本宮市立 本宮第二中学校				1
	広野町立 広野中学校	1			
	いわき市立 中央台北中学校	1			
	いわき市立 錦中学校		2		
	いわき市立 四倉中学校				1
	郡山市立 郡山第二中学校				1
	郡山市立 郡山第五中学校			1	
	郡山市立 安積中学校				1
	天栄村立 天栄中学校	1			
山形市	山形市立 第一中学校	1		1	1
	山形市立 第二中学校		2	1	
	山形市立 第三中学校		1		
	山形市立 第四中学校		2		
	山形市立 第五中学校	2	1		
	山形市立 第六中学校			1	1
	山形市立 第七中学校			1	
	山形市立 第八中学校	1			1

地 区	出身中学校	仙台高専			
		H22	H23	H24	H25
山形市	山形市立 第九中学校		1	1	
	山形市立 第十中学校	1		1	
	山形市立 金井中学校	1			1
	山形市立 高橋中学校	1			2
	山形市立 山寺中学校	2		1	
	山形大学附属中学校				2
	日本大学山形中学校			1	
天童市	天童市立 第一中学校		3	2	
	天童市立 第二中学校		1		
	天童市立 第三中学校	1		1	
	天童市立 第四中学校	1		2	
その他村山地域	上山市立 北中学校	1	1		
	上山市立 南中学校	1			1
	寒河江市立 陝西中学校		1		
	河北町立 河北中学校	1		1	
	西川町立 西川中学校				1
	東根市立 第一中学校				1
	東根市立 第三中学校				1
	東根市立 神町中学校			1	
	村山市立 楯岡中学校	1	1		1
	南陽市立 赤湯中学校				1
	南陽市立 中川中学校	1			
その他山形県	長井市立 長井北中学校		1		
	酒田市立 第五中学校	1			
その他	札幌市立 陸陽中学校			1	
	函館市立 北中学校			1	
	青森市立 南中学校				1
	青森市立 沖館中学校	1			
	弘前市立 南中学校				1
	弘前大学教育学部附属中学校		1		
	田舎館村立 田舎館中学校	1			
	盛岡市立 上田中学校	1			
	盛岡市立 北松園中学校				1
	北上市立 上野中学校		1		
	西和賀町立 湯田中学校		1		
	秋田市立 土崎中学校				1
	宇都宮市立 陽北中学校				1
	小山市立 小山第三中学校				1
	柏市立 柏第二中学校	1			
	木更津市立 木更津第二中学校	1			
	藤沢市立 片瀬中学校			1	
平塚市立 神田中学校			1		
新潟市立 鳥屋野中学校			1		
羽島市立 中央中学校	1				
春日井市立 南城中学校			1		
海陽中等教育学校		1			
ホーチミン日本人学校			1		
デュッセルドルフ日本人学校		1			
合 計		292	292	289	293

4. 仙台高専設置の趣旨・必要性を記載した書類

(高度化再編における設置審申請書類から抜粋)

設置の趣旨及び必要性

●教育研究上の理念・目的

同一県内に所在する宮城工業高等専門学校(宮城高専／名取キャンパスと呼ぶ)と仙台電波工業高等専門学校(仙台電波高専／広瀬キャンパスと呼ぶ)は、これまで、工業発展を支える実践的な中堅技術者の養成を目指し、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的」として創設され、それぞれの教育目的に沿って役割を果たすとともに社会に貢献してきた。

しかし、近年においては、社会の変化に伴って高専を取り巻く環境は大きく変化し、高専がそれに対応して自ら変革することが強く求められてきている。即ち、社会環境全体のグローバル化が急速に進展し、科学技術の爆発的な進歩と社会の高度化・複雑化・急激な変化が進む時代において、高専には社会の発展の基盤部分を支えていく上で、「5年一貫の実践的・創造的技術者等の養成という教育目的や、早期からの体験重視型の専門教育等の特色を一層明確にしつつ、今後とも応用力に富んだ実践的・創造的技術者等を養成する教育機関として重要な役割を果たすこと」が期待されている。現在、高専の養成すべき人材としては、「中堅技術者の養成から、幅広い場で活躍する実践的・創造的技術者の養成へ」と変化してきている。

(1) 現状認識・問題(課題)意識

宮城地区では具体的に以下の現状認識・問題(課題)意識を持っている。

(イ) 若年層の理科離れと技術者教育の危機：

最近の若年層の理科離れに対して、理工系の枠組みを広くし、若者が自分の興味・適性に合わせて選択できるよう、教育機関として専門分野の幅を拡げるなど、若年層により分かりやすく、受け入れやすいように、魅力ある理工系の学習環境を創造する必要がある。

(ロ) 高等教育のユニバーサル化と中高一貫校の増加傾向：

特に中高教育一貫校は高専の学生年齢と競合するので、それに対抗できるだけの魅力ある高専組

織の構築が必要である。

(ハ) 科学技術の高度化に伴う高専教育の充実：

従来の学科構成を見直して最新の技術教育の実現とより一層の充実を図る必要がある。高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担う実践的・創造的な能力を有し、新時代のものづくり技術者として国際的にも通用する、人間性豊かな人材の養成を通じて、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する組織構築を必要とする。

(ニ) 地域貢献の充実：

宮城県では「活力とやすらぎの邦づくり」を掲げ、地域経済を力強くけん引するものづくり産業(製造業)の振興を目指している。従来、地域のニーズに応えるために地域連携テクノセンター等を組織しているが、新たな運営方法の模索を必要とする。

(ホ) 時代的な要請としての教育組織の国際化対応と国際交流対応：

従来、両高専では海外の大学との提携推進・留学生受け入れ及び派遣・学生交流及び教員交流を実施している。今後予想される厳しい国際競争の中で、その競争に対応できる能力を有する技術者養成を一層充実させるために、本事業の拡張を図る必要がある。

(ヘ) 多様な教養(一般)科目準備：

社会人としての基礎的な素養を身につけさせることと、社会における諸問題に幅広い視野を持って対応できる深い洞察力を備えた技術者の養成、国際的に活躍できる技術者の養成の観点から、英語等の語学力アップ、等に関連して確実な教養能力の増進を図っていく必要がある。

(ト) 緊急のニーズ対応・将来の新分野への展開：

宮城地区では、最近ハイブリッド車製造に関連して、多数の技術者需要が発生している。これら緊急の技術関連ニーズに迅速に対応することが求められる。また、高専卒業技術者に対する社会の期待が高い状況下において、新分野への展開も準備することが必要である。

(2) 高度化・再編の意義

上記課題に対処するために、両高専は社会のニーズに柔軟に対応し、将来への新たな飛躍を目標とした規模の大きな新しい高専、仙台高等専門学校（以下、「仙台高専」という。）の創設に向けて、生産システムデザイン工学系（名取キャンパス）と情報電子システム工学系（広瀬キャンパス）の2工学系7学科及び専攻科2専攻への高度化・再編を行い、専門分野の枠組みを拡げるとともに、専攻科拡充と地域連携強化を推進する新組織を構築する。

総合的学科構成の宮城高専と情報・電子系学科構成の仙台電波高専を高度化・再編することにより、工学の基礎部門の教育領域と技術革新に機敏に応える教育領域を総合し、特色ある教育と必要な研究を遂行できる新高専を構築する。同時に、地域社会・企業・自治体と連携した教育システム機能を付与する。

名取キャンパスでは、伝統的な工学の4学科（機械工学科、電気工学科、建築学科、材料工学科）と情報デザイン学科からなる5学科体制を、機械システム工学科、電気システム工学科、マテリアル環境工学科、建築デザイン学科からなる生産システムデザイン工学系4学科に、広瀬キャンパスでは、情報と電子に特化した4学科（情報通信工学科、電子工学科、電子制御工学科、情報工学科）体制を、知能エレクトロニクス工学科、情報システム工学科、情報ネットワーク工学科からなる情報電子システム工学系3学科に高度化・再編する。

専攻科は学科の再編に対応しつつ2専攻に大括り化し、ものづくり基盤技術の高度化を支援する生産システムデザイン工学専攻（名取キャンパス）と、新たな高度電子技術産業の創出を促進する情報電子システム工学専攻（広瀬キャンパス）を設置する。

さらに、新高専の多様な学科構成を活用して、地域人材開発本部に所属する地域イノベーションセンター（名取・広瀬キャンパス）、CO-OP教育センター（名取キャンパス）、ICT先端開発センター（広瀬キャンパス）の3センターを設置し、産官学の連携による高度技術産業の集積促進を図り、地域貢献を推進する。

(3) 課題対応について

従来の組織から、2工学系7学科・専攻科2専攻及び3センターへの高度化・再編により以下の課題の解決が期待される。

- (イ) 若年層の理科離れと技術者教育の危機、
- (ロ) 高等教育のユニバーサル化と中高一貫校の増加傾向、
- (ホ) 時代的な要請としての教育組織の国際化対応と国際交流対応：

高度化・再編によって学科構成の枠組みが拡がることにより、7学科入試制度の導入によって、入学時の学科選択の自由度が増える。さらに、専門分野の異なる多数の教員の連携協力により、教養教育及び複合・融合専門教育を充実させる。また、学術交流協定校との交流の広がりによる学生の視野拡大と教育組織の国際化が推進される。このように、これまでの単独高専では設備・費用の面から実現が困難であった多様な教育体系を構築でき、志願者・保護者にとって魅力ある新高専となる。

- (ハ) 科学技術の高度化に伴う高専教育の充実、

- (二) 地域貢献の充実：

教員組織の拡充及び高度化・再編に伴う事務部一元化による事務効率化・支援体制の強化により、専攻科2専攻及び地域人材開発本部3センターにおける教育・研究・地域貢献活動への参加・支援体制を充実させることができ、これらの課題に十分対応できるようになる。

- (ヘ) 多様な教養（一般）科目準備：

高学年（4～5学年）における教養（一般）科目は、両キャンパスを合わせると、従来以上に豊富な科目展開になるので、より多様な教養科目を学生へ提供することができる。この状況を最大限活用できるように、キャンパス間の便利なアクセスを準備する。

- (ト) 緊急のニーズ対応・将来の新分野への展開：

宮城地区のハイブリッド車製造等に関連した多数の技術者需要の発生に対しては、専攻科及び3センターからなる地域人材開発本部での取り組みを進める。この技術者に要請されている技術は、機械、電機、エレクトロニクス、電子材料、制御ソフト、安全装置、居住環境、空調、メンテナンスとリサイクル・リユースを前提としたデザインとシステム設計、製造工程設計、など多くの要素技術と素材の特性を駆使して作りあげる「総合工学」である。この内容は、両キャンパスの連携でカバーしている教育・研究分野であるので、一体的に対応できる。

さらに、将来にわたる社会・学生のニーズの多様化、産業構造の変化、科学技術の高度化の一層の進展等に適切に対応するために、教育内容の高度化・多様化及び新分野への展開を含む教育課程の充実・発展を図る。具体的には、地域の新しいニーズと自治体の施策等を踏まえて、ICTと医学との融合となる医用工学の分野、工業と農林水産林業との複合・融合領域となるバイオテクノロジーの分野等への分野拡大について検討を進めていく。

(4) 教育研究上の理念と学科目標について

現在、社会から高専に期待されている「中堅技術者の養成から、幅広い場で活躍する実践的・創造的技術者の養成へ」に応えるために、2工学系7学科・専攻科2専攻及び3センターから構成される仙台高専の教育研究上の理念を下記のように設定する。

「高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担う実践的・創造的な能力を有し、次世代のものづくり技術者として国際的に通用する、人間性豊かな人材の養成を通じて、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する。」

この教育研究上の理念を実現するために各学科の学科目標を下記のように設定する。

①機械システム工学科

・機械工学に関する確かな基礎力と、未来社会を担う電気・材料分野を融合した新機械工学分野に対する応用力を備えた、エンジニアリングデザイン能力の高い機械系技術者の養成を目標とする。

②電気システム工学科

・電気工学の基礎力と技術力を身につけ、多岐にわたるその応用分野を互いに関連づけながら総合的に支え発展させることができる技術者の養成を目標とする。

③マテリアル環境工学科

・マテリアル・環境の講義・実験を通して、環境に視点を持ち、多様なマテリアル開発や工業製品への応用の素養をもつ技術者の養成を目標とする。

④建築デザイン学科

・建築耐震構造の安全性など災害への対応、高齢化社会及び障害者バリアフリーなど社会環境整備への対応、地方中小都市活性化への対応、環境共生・エネルギー問題への対応など、社会の要求が高度

化している状況の中で、建築学に基礎を置き、住まいから都市に至る住環境・社会環境のプランニング&デザインを行うための基礎知識と基礎技術を身につけた技術者の養成を目標としている。

⑤知能エレクトロニクス工学科

・インテリジェント（知能）化が進むエレクトロニクス機器の動作原理を理解するとともに、それらを開発するために必要とされる各種要素技術について幅広く学修し、ハードウェアを主体としてソフトウェアも十分に活用できる技術者の養成を目標とする。

⑥情報システム工学科

・コンピュータシステムの基礎から応用技術までを学修し、世界中に広がる情報を人々の生活に活用できる能力を有する技術者の養成を目標とする。

⑦情報ネットワーク工学科

・社会活動や人々の生活を支える最先端の情報ネットワークの構造と仕組みを、電気通信技術・ネットワークエンジニアリング技術・ネットワークシステム技術の3つの柱のもとバランスよく学修し、情報ネットワークの設計・構築・運用・応用ができる技術者の養成を目標とする。

(5) 専攻科課程拡充

専攻科についても学科の再編に対応しつつ2専攻に大括り化し、ものづくり基盤技術の高度化を支援する生産システムデザイン工学専攻（名取キャンパス）と、新たな高度情報電子技術産業の創出を促進する情報電子システム工学専攻（広瀬キャンパス）を設置する。より有能な準学士課程の技術者の養成が、必然的に専攻科進学者のレベルの底上げにつながり、専攻科を一層活性化できる。専攻科入学定員を準学士課程定員の25%程度に増員して、現行の36名から70名とし、高度化・再編に伴う専攻科の拡充を行う。

専攻科では、2工学専攻の目標及びコース名を下記のように設定する。生産システムデザイン工学専攻では、主として生産システムデザイン工学系の4学科（上記①～④の4学科）に接続できるように3コースを設定し、情報電子システム工学専攻では主として情報電子システム工学系の3学科（上記⑤～⑦の3学科）に接続される1コースを設定する。準学士課程の卒業生は、出身学科によらず上記4コースから希望のコースを選択できる。

①生産システムデザイン工学専攻

- ・持続可能な社会の実現に資する、分野にとらわれない技術の複合・融合化や、全ての工程を見通した総合的な技術革新に携わることのできる、高度なエンジニアリングデザイン能力を身につけた、国際的に通用する技術者の養成を目標とする。
- ・エンジニアリングデザイン能力の養成を根拠として据え、準学士課程で習得した専門の基礎の上に、高度な専門技術を学ぶとともに、他分野の技術も学習し、複合領域への対応能力を身につける。さらに、産業界や地域社会と連携した実務実習により、準学士課程で身につけた工学的素養を、体験的学習を通して知恵にまで深める。こうして「将来ものづくり分野を革新させる知恵と複眼的視野と複合領域への対応技術を併せ持ち、ものづくり過程の全体を見渡し技術の目利きをすることができる資質」を養成する。

コース名称

- ◎生産システム工学コース
- ◎建築デザイン学コース
- ◎情報デザイン学コース

②情報電子システム工学専攻

- ・最先端の情報・電子製品を構成している情報システム・電子システム及びその融合技術に精通し、人間・社会・環境等に優しい技術開発に関与できる高度なエンジニアリングデザイン能力を身につけた、ものづくり日本の伝統を継承できる国際的に通用する技術者の養成を目標とする。
- ・準学士課程で培った知能エレクトロニクス・情報システム・情報ネットワーク等の工学的素養の上に、より幅広い教養と高度な専門知識、並びに先端的技術開発に結びつく複合的な応用実践力を身につける。また、他専攻や大学等の学生との共同学習により実践的なコミュニケーション能力を養成する。さらに、地域企業と密接に連携したインターンシップ、及び、企業の技術者と学内教員の連携による実践教育により、社会要請を体感し、技術者としての長期的キャリアを展望して社会貢献できる資質を養成する。

コース名称

- ◎情報電子システム工学コース

(6) 地域連携、技術支援の強化

宮城県では「活力とやすらぎの邦づくり」を掲げ、地域経済を力強くけん引するものづくり産業（製造業）の振興を目指している。このような地域社会・産業との連携した教育システム機能の活性化についても、教育活動と類似のシナジー効果を期待できる。地域連携・技術支援活動には、センターによるコーディネートの下、企業との共同研究や技術相談、専攻科での研究指導を通じて、全教員が貢献する。以上のように、有能な人材養成のための教育、地域連携・社会貢献等の高専に期待されている全業務において、各組織の強力なシナジー効果を発揮することにより、高度化・再編の理念・目的が達成できる。また、新高専の多様な学科構成を活用して、地域イノベーションセンター、CO-OP教育センター、ICT先端開発センターを設置し、産官学の連携による高度技術産業の集積促進を図り、地域貢献を推進する。

①地域イノベーションセンターの設置

(名取キャンパス、広瀬キャンパス)

地域企業の発展を促進するために、産官学連携による技術相談・技術支援の体制を整備・強化するとともに、外部資金の獲得、知的財産活用の実施・支援を進める。また、教員への研究支援と地域連携のコーディネーションを推進する。

②CO-OP教育センターの設置(名取キャンパス)

地域社会と協力して継続的なCO-OP教育を実践することにより、新しい発想に基づき、分野にとらわれない技術の複合・融合化や、企画から生産までの全ての工程を見通した総合的な技術革新に携わることのできる技術者を養成する。また、CO-OP教育のカリキュラム、教材等の研究と開発を行い、CO-OP教育の教育手法を確立し、推進する。

③ICT先端開発センターの設置(広瀬キャンパス)

組込み系デジタルシステム開発部門、ネットワークスキル開発部門及びICTリエゾン教育部門を設置し、宮城県地域産業との強力な連携、サービス事業等の具体的貢献を行う。

(7) 学科間連携と教員間連携

各学科における教育目標を達成するために、科目の特徴に応じて学科間連携と教員間連携を活かした指導方法により授業を進める。教員間連携は、実験・実習科目における少人数グループによる授業、演習における複数教

員による指導等で実施される。学科間連携は、複合・融合領域への対応能力の育成や複眼的な視野の育成、あるいは、類似の科目構成を持つ場合に効果的である。以上の方針に基づき、以下のように、学科の教育目標に沿った教員間連携による効果的な授業の実施や、学科間連携による科目展開を推進する。

- ①各学科は、教育目標を実現するように科目展開することを基本としつつも、その範疇の中で類似の科目展開をしている。例えば、知能エレクトロニクス工学科と情報システム工学科では、ハードウェア技術とハードウェア基礎技術、ソフトウェア基礎技術とソフトウェア技術を開講している。ハードウェアに関しては、学科の特性からして知能エレクトロニクス工学科がより本格的科目提供が可能であるのに対し、ソフトウェアに関しては情報システム工学科がより本格的科目提供となる。このようなケースでは、本格的科目提供を行う学科がお互いに指導的立場となって、学科間の連携・情報交換等を進めることにより、効果的な教育が実施できる。このような類似の科目展開がある場合、キャンパス間でも学科間連携を実施していく。

- ②卒業研究については、両キャンパスともに、学生の希望により所属学科にこだわらずに他学科の学生も受け入れて指導を行っている。このことにより、学生に複数の分野にまたがる専門知識・実験技能の獲得の機会を提供している。高度化・再編に伴い、キャンパス間にまたがる卒業研究の選択にも対応していく。さらに、学科間の教員連携による卒業研究の指導においても、化学担当一般科目教員と材料工学専門教員の協働のように、幅広い知識と深い知識を持つ教員の協働による高い内容の指導を進める。

- ③「創造実習」(名取キャンパス2学年)及び「創造工学」(広瀬キャンパス1学年)は、全学科から提供された実験テーマを、学生が所属学科の枠にこだわらずにテーマ選択をして実施する科目である。これらの実験指導は、各学科担当教員の連携・共同作業により行っており、指導の統一・効率化を図っていく。

- ④電気回路関連科目、電磁気学関連科目等は殆ど全学科で展開されているので、実験設備整備・効率的な指導法構築・確認についても、キャンパス間・学科間・教員間連携により指導ノウハウ等の共有を図り、効果的な授業に結びつける。

- ⑤一般科目教員については、従来の交流実績を発展させ、教員間連携による科目内容の質の向上と、一般

科目担当教員の増加による科目の幅の広がりとの相乗効果によって教養科目の充実を図る。

(8) 新旧学科教育課程の移行・教員の移行について

①教育課程の移行

名取キャンパスでは、旧学科で開講していた科目内容を厳選し、新学科で各専門領域のコアとなる事項に絞り込んでいる。それと共に、異なる分野の科目を履修するようになっており、複合領域に対応できる技術者としての基礎的能力を身につけることができる。例えば、機械システム工学科では電気系の単位を増やし、電気システム工学科では機械系の単位を、マテリアル環境工学科では環境及び化学系の単位を、建築デザイン学科ではデザイン関係の単位を増やしている。

一方、広瀬キャンパスでは、旧学科で開講している技術教育を新学科で最新の技術教育に再編している。例えば、(旧)情報通信工学科での電気通信の基礎・プログラミングとネットワーク・通信の仕組み等の教育は、(新)情報システム工学科におけるソフトウェア技術・ハードウェア基礎技術・ネットワーク基礎技術や、情報ネットワーク工学科の電気通信技術・インターネットワーキング・情報セキュリティ・マルチメディア・分散コンピューティング・ネットワークアーキテクチャ等により、現代化・高度化した形で継承されている。

②教員の移行

各旧学科教員は教育課程の移行に沿って、学科間連携による複合融合領域の教育体制強化を図りながら、新学科に移行・再編する。

(9) 学業指導・学生指導の統一的運営、教職員・学生の協働の在り方

①学則・教務便覧で学業指導の統一化

学則の統一化作業を終えている。再編に向けて、キャンパス間での学業指導の統一化のために教務便覧の整備が必須であり、現在その作業を計画的に遂行しており、新高専設置時からその運用を開始する。

②学生データ処理・教務処理の統一化

名取キャンパスでは学生証・図書貸出し管理・各種管理等を1枚のカードで処理できるシステムを

構築している。再編時には広瀬キャンパスでも同じシステムを導入し、同一基準での学生サービスを提供する。

また、統一化された成績処理等の教務処理システムの導入計画を進めており、新高専学生受入時に運用を開始する。現在、学生による授業評価システムについては、広瀬キャンパスで開発したシステムにより、既に共通化を果たしている。

③学生指導基準の統一化

学生活動・寮生活における学生指導基準の統一化検討が終わり、再編時の同一基準での運用に向けて体制整備を行っていく。

④授業概要等の統一化

1～3学年では、一般科目は原則的に必修科目であり、かつ高等学校卒業程度認定試験に準拠した科目を網羅している。両キャンパスで展開されている1～3学年の必修科目構成とその各設定単位数と教授内容を、教育基盤の共通化のために統一した。4～5学年の一般科目は、基本的に選択科目制を採用している。

専門科目についても科目名と授業概要の統一化を図った。これらの整備により、本校学生が他学科の授業を受ける場合の科目選択や、他大学からの受講生が本校科目を選択する場合の分かり易い情報提供となるなど、より開かれた教育組織を構築できる。

⑤クラブ活動関連の協働

両キャンパスの運動部及び文化部で協働活動を推進して、新高専に関する意識の共有化・情報の共有化を次のように企画する。両キャンパスの運動部(野球、ラグビー等)はこれまでも交流試合を実施しており、各活動に関することは勿論のこととして、両キャンパスの類似点・相違点等に関しても、部員間の交流・教員間の意見交換がなされており、再編後の協働体制について共通認識が育っている。また、両キャンパスのそれぞれの吹奏楽部は個別に定期演奏会を開催しているが、高度化・再編後は合同開催にすることや、統一された入学式に協力して賛助演奏に参加することを計画している。クラブ活動の大きなイベントでは、部員だけでは開催できずに一般学生からの協力を必要とする。イベント成功に向けて協力して活動することにより、新高専に対する貢献意識の共有化及び一体化等を促進できる。高度化・再編後は、従来以上に全クラブで上記の趣旨の活動を充実させていく。

⑥教員間の協働

国際提携プログラムの推進・発達障害関連学生支援プログラム等において、両キャンパス間の教員の交流・連携を積極的に行い、これらの事項に対する意識の共有化、統一的な運用を進める。

また、両キャンパスでは協働して「合同サテライトキャンパス設置事業」を推進している。仙台市中心部に合同サテライトキャンパスを設け、両キャンパス学生向けの合同授業実施及び学校情報発信・地域連携情報の発信拠点を整備中である。またこの事業では、サテライトキャンパスと両キャンパス間を結んだ双方向型のビデオカンファレンス環境を構築中である。高度化・再編後も遠隔授業や有識者による特別講演、学内イベント等の相互配信を行うなどして、キャンパス間及び地域との情報交流を促進する。サテライトキャンパス以外にも、適宜各種セミナー、イベント等は、内容や対象者等に合わせて市内の公共施設や貸会議室等を使用し、機動的な運用を行って、情報発信を積極的に行い、併せて教員・学生間の情報・意識の共有化等を図っていく。

(10) 各種行事等・運営等の共通化について

再編後の一体的運営にスムーズに移行するために、再編に先立って共通化して実施可能な行事・事項については、共通の意識・基盤の下で先行実施して、統合意識の涵養を図っている。海外研修についても、共通の国際交流協定校があることから、研修生の受け入れ等を両キャンパスの国際交流委員会が協力して受け入れている実績があり、再編後は国際交流の共通化をすすめる。管理運営に関しては、教務・学生・寮務指導の共通化を図っている。事務部については既に一元化を行い、共通化している。

●人材養成の具体像

斬新な2工学系からなる準学士課程の構築により、高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担い、イノベーションに貢献できる実践的・創造的な人材を養成し、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する。

①複眼的視野と複合領域へのデザイン対応能力を持ち、最も自信のある専門工学領域の基礎的素養をもつ創造的・実践的技術者を養成する。

②高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担い、

イノベーションに貢献できる実践的・創造的な人材を養成し、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する。

③生産システムデザイン工学系では、人に優しい住環境とマテリアル、先進のロボット技術に精通し、独創的な技術を開発でき、その領域に発生する諸問題を発見・解決できる能力を備えた準学士を養成する。

④情報電子システム工学系では、高度情報化社会を支える最先端エレクトロニクス、コンピュータシステム、情報ネットワーク等の仕組みとその融合技術に精通し、人間性豊かで、新時代のものづくり技術者として貢献できる準学士を養成する。

⑤実質的強化となる一般科目担当教員並びに専攻科及び3センターの組織が準学士課程学生の教育に参加することにより、幅広い一般教育／教養科目の開講が可能となり、社会人として共通して求められる素養を身につけた準学士を養成する。

学科の特色

仙台高専の教育研究上の理念「高度に複合化した産業界で技術開発の中核を担う実践的・創造的な能力を有し、次世代のものづくり技術者として国際的に通用する、人間性豊かな人材の養成を通じて、科学技術と人間社会の調和的発展に寄与する。」、及びこの理念を具現化するために学科目標を設定した。再編後の宮城地区7学科は、各技術分野に特化した下記の特徴を有する。

①機械システム工学科

・「材料と機械の力学」、「エネルギーと流れ」、「要素と加工」、「計測と制御」、「設計と生産」に関する知識と応用力を身につける。
・多様な機械の設計・製造・保守に必要な素養と総合力を獲得する。

②電気システム工学科

・電気回路、電磁気学を支柱として、電気工学の諸々の知識と技術を理解し、習得する。
・社会基盤を形成する電気応用分野を支え、またそこでの新しい技術を創生する技術力を総合的に身につける。

③マテリアル環境工学科

・金属、無機、有機材料など様々なマテリアルの物性や構造に関する知識とその作製・評価技術を習得する。

・環境工学に立脚し、社会の持続的発展に資する新しい工業材料を設計、開発、製造する上で必要となる素養を身につける。

④建築デザイン学科

・人間の暮らしに不可欠な衣食住のうち、住に関わる空間を創造するための基礎知識と基礎技術として、空間計画・設計(プランニング&デザイン)、構造計画・設計(プランニング&デザイン)、建築環境計画・設計(プランニング&デザイン)の基礎知識と基礎技術を修得する。

・生活空間計画の基盤である人間工学を基礎として、持続可能な住空間の創造として、建築構造の安全性を確保し、高齢化社会、福祉型社会、環境型社会の創造に寄与できる知識と素養を身につける。

⑤知能エレクトロニクス工学科

・知能化が進む最先端の電子機器類、光・電子デバイス等の原理・機能を理解する。

・ハードウェアとソフトウェアを融合させて活用し、情報化社会を支えるエレクトロニクス機器を開発できる素養を身につける。

⑥情報システム工学科

・最先端の情報システムの仕組みとソフトウェア及び応用を理解する。

・情報システムの専門技術者として、企業や大学で活躍する上で必要な素養を身につける。

⑦情報ネットワーク工学科

・最先端の情報ネットワークの構造と仕組みをバランスよく理解する。

・情報ネットワークの設計・構築・運用・応用に必要な素養を身につける。

《編集後記》

50周年記念誌の刊行は、仙台高等専門学校が実施する高専制度創設50周年記念事業の一環として計画された。

2012（平成24）年1月24日に第1回記念事業準備委員会が開催され、記念誌刊行実施部会を含む各事業毎の実施部会が設置された。記念誌刊行実施部会は記念誌編集の基本方針として、創設からの歴史がキャンパス毎に分かるようにすること、写真を多用してグラビア風にする、特に最近の10年間は詳しくし、将来を展望することを決定し、(株)廣濟堂に編集の企画案を依頼した。提案された案は、誌名や構成等、ほぼ最終案に近いものであった。誌名の「仙台高等専門学校 Change100+Future」は誌のコンセプトと内容を良く表現している。

2013年から、本格的な編集作業が開始された。最初の重要な作業は、創設から今日に至るまでの100のトピックスを選定することであった。写真選定を含むその作業では、近年のトピックスを除けば、宮城高専と仙台電波高専がそれぞれの節目で発刊した全ての記念誌が特に重要な参考になった。並行して、巻頭の挨拶、第1部から第3部への寄稿を依頼する関係者を人選した。カラーの口絵とこれらの寄稿文、載録した高専制度創設50周年記念仙台高専シンポジウムのパネルディスカッションおよび資料編により、仙台高等専門学校の歴史と現在を一望し、将来を展望することに成功していれば幸いである。

最後に、寄稿して頂いた学内外の多くの皆様、資料の整理にご協力頂いた学内の関係者各位に、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

50周年記念誌刊行実施部会

委員 竹茂 求 内海康雄
丹野 顯 伊勢英明
空井伸一 山田純司

仙台高等専門学校 Change100+Future

2013年10月1日 発行

発行 仙台高等専門学校
〒981-1239 宮城県名取市愛島塩手字野田山48番地
TEL:022-381-0253 (代) FAX:022-381-0255

編集 50周年記念誌刊行実施部会

制作・印刷 株式会社廣濟堂・教育ソリューション課仙台営業所
〒984-8518 仙台市若林区舟丁18-2
TEL:022-224-7585 FAX:022-261-6883